（財）長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書12

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書２

―佐久市内その２―

木戸平Ａ・吹付・東林・鶉ヲネ・上中原・干草場
城の口・西林・東祢ぶた・西祢ぶた・大星尻古墳群
丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・東大久保
西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂

本文編

1991

日本道路公団東京第二建設局
長野県教育委員会
財団法人　長野県埋蔵文化財センター

『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書2－佐久市内その2－』　正誤表

本文

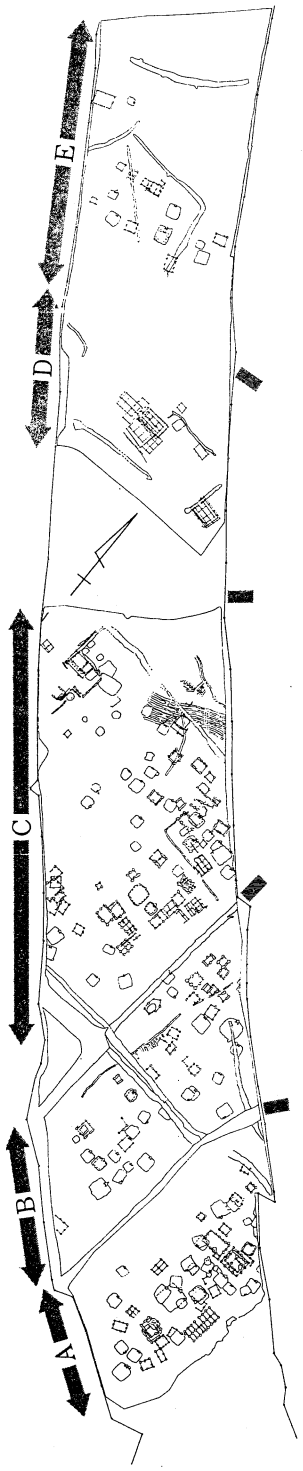
ページ	行	誤	正
巻頭写真	下	（西祢ぶた‥‥・千草場・西林）	（西祢ぶた‥‥・干草場・西林）
例　言		８．立教大学‥‥・同原子内研究所	８．立教大学‥‥・同原子力研究所
3	10	浸食して形成し細	浸食して形成した細
13	11	：円辺に対になる	：縁辺に対になる
57	29	内に埋位されていた土器。	炉内に埋置されていた土器。
84	2	（図40、PL26・40）	（図40、PL40）
120	32	～であり、 382～ 404は特に	～であり、 382・ 404は特に
131	39	打製石斧に２点が認められた	打製石斧に24点が認められた
142	21	ことを示差している。	ことを示唆している。
148	1	102 か光沢痕状を呈するほかは、	102 が光沢痕状を呈するほかは、
150	7	縄文中期未葉から	縄文中期末葉から
151	32	数量的な内分けは、	数量的な内訳は、
152	21	とりわけ42・45はそうした	とりわけ44・45はそうした
〃	27	薄手・堅微なつくりで、	薄手・堅緻なつくりで、
〃	28	「ラッパ状に開く口縁部	「ラッパ」状に開く口縁部
158	19	第１地点	第一地点
171	36	（加層利ＥⅢ～Ⅳ期）	（加曽利ＥⅢ～Ⅳ期）
175	17	(123) が、打ち割られて	(33)が、打ち割られて
〃	17	123 は中央に人為的と	33は中央に人為的と
〃	20	２本の打製石斧（106・107）	２本の打製石斧（16・17）
〃	20	特に 106は、	特に17は、
〃	22	石棒(134) があげられる。	石棒(90)があげられる。
〃	27	、その登上（採用）	、その登場（採用）
177	11	、東祢ぶた遺跡（第２章第９節）	、東祢ぶた遺跡（第３章第９節）
203	25	ら、さら大規模なもの	ら、さらに大規模なもの
232	36	集中するものが多い(114・16)	集中するものが多い(14・16)
236	2	片鉢１(7)、	片口鉢１(7)、
237	20	３・４のように	３・６のように
247	11	外面には墨書が書されるが	外面には墨書が記されるが
249	39	１は外底部から	７は外底部から
261	3	近世墳基	近世墳墓
283	36	安山岩製(39,40,42)	安山岩製(39,41,42)
323	5～6	丸山古墳群の範囲とされていたが、	重複のため削除
401	30	土器（図 6 ・ 7 ・ 1～43、PL127）	土器（図 6 ・ 7 ・ 1～43、PL127・128）
432	24	ア　小型精製‥‥の形成と型式	ア　小型精製‥‥の形式と型式
492	31	ここで産地推定と	ここで産地同定と
551	38	弥生時代の石鏃とも思われる	弥生時代の石斧とも思われる
697	3	46号掘立柱建物址（図 152）	46号掘立柱建物址（図 152、PL180）
738	33	ＩＥ２層が畝間に	ＩＥ下層が畝間に
〃	35	ＩＥ２層を掘り込み面と	ＩＥ下層を掘り込み面と
740	15	ＩＥ１層のあり方、	ＩＥ上層のあり方、
〃	19～20	ＩＥ２層の明褐色土が	ＩＥ下層の明褐色土が
755	1	２号掘立柱建物址（図212）	２号掘立柱建物址（図212、PL187）
758	32	７号掘立柱建物址（図215）	７号掘立柱建物址（図215、PL187）
760	25	18号掘立柱建物址（図216）	18号掘立柱建物址（図216、PL177）
806	29	３は外底部に「十」	３は外底部に「×」
821	2	10はカマド煙道部	８～10はカマド煙道部
〃	15	24号住居址（図35、PL231・251）	24号住居址（図35、PL231・251・253）
834	20	３は猿投産で	13は猿投産で
840	26	７号掘立柱建物址（図55、PL234）	７号掘立柱建物址（図55）
855	1	32号掘立柱建物址（図70、PL238）	32号掘立柱建物址（図70、PL238・252）
942	36	なっていたＢ地点	なっていたＣ地点
1009	30	近藤義尚	近藤尚義
1010	2	第３章第１節	第３章第１節（河西執筆分を除く）
〃	3	第２節（岡村・寺島・執筆分を除く）	第２節（河西・岡村・寺島執筆分を除く）
〃		執筆者追加	河西克造　第３章１節 １・２ 〃　２節１・２

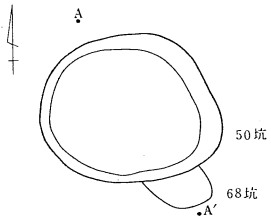
図版

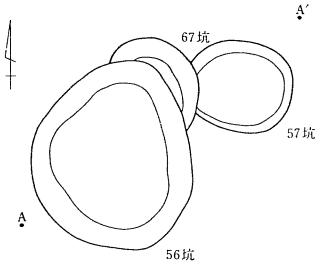
ページ	図版番号	誤	正
96・97・98	49・50・51	50坑・56坑・79坑の土層図	「攪乱」追加　別紙参照
204	4	スケールサイズ　1／40	スケールサイズ　1／60　別紙参照
369	15	6住－10	6住－15
371	16	□土器＿・金属器　●石臼	□土器・金属器　●石臼
〃	〃	●石臼の番号 3・4・5・6・7・8・9	8・9・10・11・12・13・14
555	11	図中の番号1・2	3・4
944～947	1～4	地点範囲欠落	別紙参照
948～949	5・60	地点範囲欠落	別紙参照

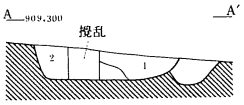
写真

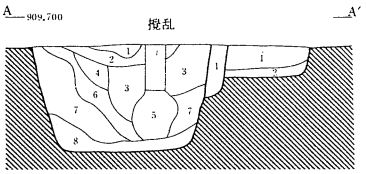
PL	列	誤	正
39		1・2・5・6・8・11・	1～3・5・6・8・11・
115		6－7・6－3・6－9・6－10	6－12・6－8・6－14・6－15
129		左　2号住居址	左　3号住居址
186		左　150号掘立柱建物址	左　151号掘立柱建物址
〃		右　155号掘立柱建物址	右　150号掘立柱建物址
217	右　列	127－8	127－11
221	左　列	148－11	148－9
245	左　列	6－9	6－8
247	右　列	12－13	12－12

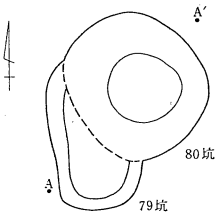


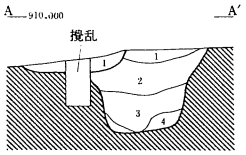




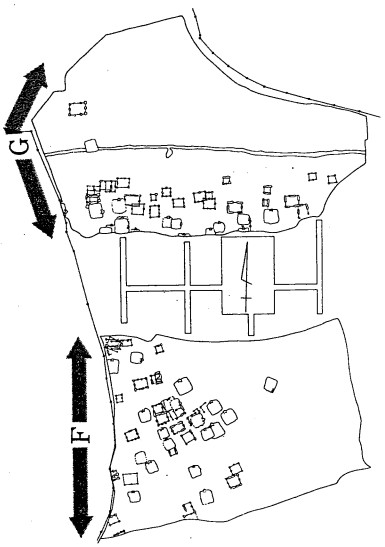








97頁　図50
96頁　図49
98頁　図51
「撹乱」を追加



1　2m

204頁　図4
スケール訂正

第３章第18節　５分析（４）集落変遷の図１～図６へ追加

左　図１～４　「Ａ～Ｅ地点」を追加　(944~947頁)

右　図５・６　「Ｆ・Ｇ地点」を追加　(948·949頁)

（財）長野県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書12

上信越自動車道
埋蔵文化財発掘調査報告書２

―佐久市内その２―

木戸平Ａ・吹付・東林・鶉ヲネ・上中原・干草場
城の口・西林・東祢ぶた・西祢ぶた・大星尻古墳群
丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・東大久保
西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂

本文編

1991

日本道路公団東京第二建設局
長野県教育委員会
財団法人　長野県埋蔵文化財センター

岩村田地区から浅間山を望む（栗毛坂C・西赤座・中久保田・枇杷坂）南より

佐久市東地地区遠景（西祢ぶた・東祢ぶた・城の口・千草場・西林）南より

栗毛坂遺跡群Ａ地区　　（東から）

栗毛坂遺跡群Ｂ地区　　（東から）

栗毛坂遺跡群Ｃ地区　　（東から）

吹付遺跡（９号住居址出土土器）

序

上信越自動車道佐久インターまでの長野県分は、群馬県との県境となる八風山をトンネルで通過し、佐久市北東部の山麓部をほぼ東西に横断し、閼伽流山を抜け佐久平に入り、湯川を渡り佐久インターまでの全長11.9 km にあたります。

昭和61年10月から平成２年にかけて23遺跡が発掘調査されました。発掘面積は255,500 m²、膨大な量の遺構、遺物が検出され、発掘調査に足かけ４年間、冬期の整理作業を含み報告書刊行まで５年間の歳月を要しました。

発掘調査の概要については、既に現地説明会・㈶長野県埋蔵文化財センター年報・埋蔵文化財ニュース・出土遺物展示会等で公開してまいりました。その後の整理作業では、今まであまり調査の手が入っていなかった東地地区から平根地区にかけての縄文時代から平安時代にかけての山間地での集落と、また栗毛坂遺跡群を始めとする平坦地での集落構成の対比が明確となるよう努めてまいりました。佐久市内の各遺跡は、石器製作跡として著名な下茂内遺跡を一冊、その他の22遺跡を一冊として報告するよう計画を立てました。本書は「佐久市内その２」として木戸平Ａ、吹付、上中原、鶉ヲネ、東林、西林、干草場、城ノ口、東称ぶた、西称ぶた、大星尻古墳群、丸山Ⅱ、丸山古墳群、丸山、北山寺、東大久保、西大久保、腰巻、栗毛坂、西赤座、中久保田、枇杷坂の各遺跡についてまとめました。

本書は各遺跡ごとの事実記載を中心としたものとなりましたが、東地地区では、谷間部に展開する縄文時代の集落の一端が検出され、特に吹付遺跡では、縄文時代中期末～後期初頭にかけての敷石住居跡を中心とした集落構成が明らかとなりました。

高速道路がこの地区の各遺跡の上端部を通過することとなり、遺跡の中心部からはずれ、調査された遺構は、土坑、陥し穴等ではありましたが、集落立地の研究上貴重な資料を得ました。

平根地区では、この地方では極めて類例の少ない積石塚古墳の大星尻古墳群、縄文時代前期末から中期初頭の土坑群等が調査された丸山遺跡、平尾富士の西山麓に立地する平安時代～中世にかけての集落・墓址群が検出された北山寺遺跡が注目されました。

佐久平に入っては、栗毛坂遺跡を始め平坦部の集落の調査となりましたが、取り分け湯川右岸低位段丘上に立地する栗毛坂遺跡Ａ地区では、縄文時代早期末から前期にかけての石器製作址が、またＢ・Ｃ地区からは、古墳時代から平安時代にかけての大集落址の調査を行い、この地域での集落構成、佐久平の土器編年等を明らかにすることが出来ました。

本書は、地理的にも、また歴史的環境も異なる遺跡を各論的にまとめましたが、この地域の歴史を解明する上では重要な問題提起をしたものと確信しております。

最後になりましたが、発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで深いご理解とご協力をいただきました日本道路公団東京第二建設局、同佐久市工事事務所、長野県高速道局、同佐久高速道事務所、佐久市、同教育委員会、佐久市農業協同組合、地区地権者会等の関係諸機関、発掘作業や整理作業に従事された多くの皆さん、直接のご指導を賜った長野県教育委員会文化課、研究者の皆さん、発掘調査を実施した㈶長野県埋蔵文化財センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成３年３月20日

㈶長野県埋蔵文化財センター
理事長　　樋口太郎

例　　言

1．本書は関越自動車道上越線（上信越自動車道）建設工事に伴い、昭和61年から平成元年にかけ事前調査された、佐久市内の第８次施行命令区間内23遺跡のうち、下茂内遺跡を除いた22遺跡―木戸平Ａ・吹付・上中原・鶉ヲネ・東林・西林・干草場・城の口・東祢ぶた・西祢ぶた・大星尻古墳群・丸山古墳群・丸山Ⅱ・丸山・北山寺・東大久保・西大久保・腰巻・栗毛坂・西赤座・中久保田・枇杷坂―の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は日本道路公団の委託を受けた長野県教育委員会が、（財団法人）長野県埋蔵文化財センターに委託して実施されたものである。

3．実際の発掘調査および整理事業は、㈶長野県埋蔵文化財センター佐久調査事務所（佐久市大字安原に所在）で担当した。

4．本書で使用した地図は、日本道路公団作成の関越自動車道（下仁田～佐久）平面図（1：1,000），佐久市発行の都市計画図（1：2,500）、建設省国土地理院発行の地形図（1：25,000・1：50,000）をもとに作成および複製した。

5．写真編巻頭、「佐久市香坂東地」・「佐久市岩村田付近」の航空写真は、東洋航空事業株式会社（現　朝日航洋株式会社）が47年８月から９月にかけて撮影したものを使用した。

6．発掘調査・報告書作成にあたり、下記の諸機関、諸氏に御教示、御指導をいただいた。記して謝意を表する次第である。

佐久市教育委員会・佐久市埋蔵文化財課・佐久埋蔵文化調査センター・日本道路公団東京第二建設局・同佐久工事事務所・佐久総合病院・中部電力上田営業所・西沢寿晃（信州大学医学部）・小林達雄（國學院大学）・松沢亜生（奈良国立文化財研究所）・森山公一・吉沢壮夫（望月高等学校）・小口　徹（市立岡谷南部中学校）・森嶋　稔・林　幸彦・高村博文・三石宗一・小山岳夫・羽毛田卓也・竹原　学・須藤隆司・木内　捷・西沢正巳・堤　　隆・花岡　弘・中沢　悟・桜岡正信・綿貫邦男。

7．縄文土器の分類記述に際しては廣瀬昭弘・三上徹也・寺内隆夫（当センター職員）の協力を得た。
縄文小形石器の分類に際しては大竹憲昭（当センター職員）の協力を得た。
輸入磁器に際しては市川隆之（当センター職員）に分類していただいた。

8．立教大学の鈴木正男・同原子内研究所戸村健児・野田市郷土博物館の金山喜昭には黒曜石の水和層年代測定・熱中性子放射化分析をお願いした。

9．委託関係　航空写真は株式会社パスコ、株式会社協同測量社、新日本航業株式会社、中央航業株式会社に依頼した。

10．発掘調査および文責など本書刊行に関する分担は巻末に一括掲載してある。

11．出土遺物は一括して、㈶長野県埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管してある。

（諸機関・諸氏は順不同、敬称略）

凡　　例

1　本書に掲載した実測図・写真の縮尺は、原則として以下のように統一してある。

遺構図

栗毛坂遺跡群……竪穴住居址・掘立柱建物址　1：80　住居址内施設　1：40

北山寺遺跡　　土坑　1：40

その他の遺跡……竪穴住居址・掘立柱建物址　1：60　住居址内施設　1：30～40

土坑　1：40

遺物図

土器・陶磁器　1：4　大形土器　1：6～1：8　土器拓影　1：3　金属製品　1：3

銭貨拓影　2：3　石器・石製品　2：3～1：6

遺物写真

土器坏類・陶磁器　2：5　土器甕類　1：4　金属製品　1：2

その他　実測図と同縮尺

2　遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

縄文土器、石器・石製品……1からの通し番号

その他……各遺構ごとの通し番号

3　重複遺構については、原則として上端のみを実線で表示してある。

4　実測図中のスクリーントーンは以下の事項を表わしている。

ア　遺構図

竪い床の範囲　　焼土・火床　　炭・灰

柱痕　　地山　　カマド構築材（袖土）

イ　遺物

石器

摩耗痕　　敲打痕

古代以降の土器

黒色処理部分　　須恵器以降の日本陶器　　輸入磁器

本　文　編　目　次

巻頭写真
序
例言
凡例
本文編目次

第1章　序　説 …… 1

第1節　調査の契約 …… 1
1　発掘調査委託契約 …… 1
2　埋蔵文化財発掘調査と契約業務の経過 …… 3
第2節　調査の普及公開と体制 …… 4
第3節　調査の方法 …… 5
1　発掘調査の方法 …… 5
2　遺跡・遺構名称と記号 …… 5
3　調査区設定と測量 …… 6
4　報告書編集の方法 …… 11
(1)　編集方針
(2)　遺構の記述
(3)　遺物類の記述

第2章　環　境 …… 14

第1節　佐久地方北部の地形発達 …… 14
第2節　歴史的環境 …… 25

第3章　調　査 …… 33

第1節　木戸平A遺跡 …… 33
1　遺跡の概観 …… 33
2　調査の経過と概要 …… 33
3　基本土層 …… 35
4　遺構と遺物 …… 36
(1)　遺構
(2)　遺構外出土遺物
5　まとめ …… 39

第2節　吹付遺跡 ……40
1　遺跡の概観 ……40
2　調査の経過と概要 ……40
3　基本土層 ……45
4　遺構と遺物 ……46
i　第一地点の調査 ……46
(1)　縄文時代の遺構と遺物
ア　住居址　イ　ピット群　ウ　焼土址　エ　遺物集中箇所　オ　屋外埋甕　カ　土坑
キ　遺構外出土遺物　ク　平安時代以降の遺物
ii　第二地点の調査 ……150
(1)　遺構
ア　焼土址　イ　配石状遺構
(2)　遺構外出土遺物
ア　土器　イ　土製品　ウ　石器　エ　小結
5　まとめ ……160
(1)　縄文時代中期後葉の土器群とその変遷
(2)　縄文時代遺物の時期別出土分布
(3)　石器の分布状況について
(4)　遺跡の形成と消長
(5)　おわりに

第3節　上中原遺跡 ……183
1　遺跡の概観 ……183
2　調査の経過と概要 ……183
3　遺構外出土遺物 ……184
4　まとめ ……184

第4節　鶉ヲネ遺跡 ……185
1　遺跡の概観 ……185
2　調査の経過と概要 ……185
3　基本土層 ……186
4　遺構と遺物 ……186
(1)　縄文時代の遺構と遺物 ……186
ア　土坑　イ　遺構外出土遺物
(2)　時期不明の遺構 ……194
5　まとめ ……194

第5節　東林遺跡 ……195
1　遺跡の概観 ……195
2　調査の経過と概要 ……195

3　遺構外出土遺物 ……196
4　まとめ ……196

第6節　西林遺跡 ……197
1　遺跡の概観 ……197
2　調査の経過と概要 ……198
3　基本土層 ……199
4　出土遺物 ……199
5　まとめ ……199

第7節　干草場遺跡 ……200
1　遺跡の概観 ……200
2　調査の経過と概要 ……200
3　基本土層 ……202
4　遺構と遺物 ……203
ア　1号土坑　イ　遺構外出土遺物　ウ　1号墳墓
5　まとめ ……208

第8節　城の口遺跡 ……209
1　遺跡の概観 ……209
2　調査の経過と概要 ……209
3　出土遺物 ……210
4　まとめ ……211

第9節　東祢ぶた遺跡 ……212
1　遺跡の概観 ……212
2　調査の経過と概要 ……214
3　基本土層 ……215
4　遺構と遺物 ……215
(1)　縄文時代の遺構と遺物 ……215
ア　住居址　イ　屋外埋甕　ウ　焼土址　エ　土坑　オ　遺構外出土遺物
石鏃　スクレイパー　小剝離痕を有する剝片　石核・残核　原石
打製石斧　大形剝片石器　磨製石斧　磨石類
(2)　弥生時代の遺物 ……234
(3)　平安時代の遺構と遺物 ……234
ア　住居址　イ　土坑
5　まとめ ……238

第10節　西祢ぶた遺跡 ……240
1　遺跡の概観 ……240

2　調査の経過と概要 ……241
3　基本土層 ……241
4　遺構と遺物 ……242
　ア　住居址　イ　掘立柱建物址　ウ　土坑　エ　遺構外出土遺物
5　まとめ ……254

第11節　大星尻古墳群 ……256
1　遺跡の概観 ……256
2　調査の経過と概要 ……257
3　基本土層 ……259
4　遺構と遺物 ……261
(1)　縄文時代の遺構と遺物 ……261
　ア　焼土址　イ　土坑　ウ　遺構外遺物
(2)　弥生時代の遺構と遺物 ……289
　ア　遺構　イ　遺構外出土遺物
(3)　大星尻古墳 ……290
(4)　近世の遺構と遺物 ……294
(5)　人骨 ……299
5　まとめ ……301
(1)　縄文時代遺跡としての性格 ……301
(2)　石器群からみた生活基盤の一様相 ……303
(3)　大星尻古墳の諸相 ……304
(4)　１号墓について ……311

第12節　丸山古墳群・丸山Ⅱ遺跡 ……313
1　遺跡の概観 ……313
2　調査の経過と概要 ……313
3　基本土層 ……316
4　遺構と遺物 ……316
　ア　住居址　イ　土坑　ウ　遺構外出土遺物
5　まとめ ……321

第13節　丸山遺跡 ……322
1　遺跡の概観 ……322
2　調査の経過と概要 ……323
3　基本土層 ……324
4　遺構と遺物 ……325

(1)　縄文時代の遺構と遺物 ……326
　ア　住居址　イ　土坑　ウ　遺構外出土遺物

(2) 平安時代の遺構と遺物 ……347
ア 住居址 イ 遺構外出土遺物
5 まとめ ……350

第14節 北山寺遺跡 ……352
1 遺跡の概観 ……352
2 調査の経過と概要 ……352
3 基本土層 ……353
4 遺構と遺物 ……354
(1) 縄文時代の遺物 ……356
(2) 平安時代の遺構と遺物 ……357
ア 住居址 イ 溝址
(3) 中世の遺構と遺物 ……370
ア 住居址 イ 掘立柱建物址 ウ 土坑 エ 遺構外出土遺物
5 まとめ ……384

第15節 東大久保遺跡群 ……387
1 遺跡の概観 ……387
2 調査の経過と概要 ……387
3 基本土層 ……389
4 遺構と遺物 ……389
5 まとめ ……391

第16節 西大久保遺跡群 ……392
1 遺跡の概観 ……392
2 調査の経過と概要 ……392
3 基本土層 ……393
4 遺構と遺物 ……393
5 まとめ ……394

第17節 腰巻遺跡 ……395
1 遺跡の概観 ……395
2 調査の経過と概要 ……396
3 基本土層 ……397
4 遺構と遺物 ……400
(1) 縄文時代の遺構と遺物 ……400
ア 土坑 イ 遺構外出土遺物
(2) 古墳時代前期の遺構と遺物 ……409
ア 住居址 イ 焼土址 ウ 土坑 エ 遺構外出土遺物
(3) 古墳時代後期～平安時代の遺構と遺物 ……420

ア　住居址　　イ　畑址
(4)　中世 ……424
(5)　近世 ……427
ア　溝址　　イ　遺構外出土遺物
5　まとめ ……431
(1)　腰巻遺跡とその周辺 ……431
(2)　古式土師器の検討 ……432

第18節　栗毛坂遺跡群 ……440
1　遺跡の概観 ……440
2　調査の経過と概要 ……440
3　調査の方法 ……443
4　基本土層 ……447
i　A地区 ……450
(1)　概観 ……450
(2)　縄文時代の遺構と遺物 ……454
ア　概要　　イ　土坑　　ウ　礫群　　エ　遺構外出土遺物
(3)　弥生時代後期以降の遺構と遺物 ……529
ア　竪穴住居址　　イ　掘立柱建物址　　ウ　溝址　　エ　遺構外出土遺物
ii　B地区 ……545
(1)　概観 ……545
(2)　縄文時代の遺構と遺物 ……550
(3)　弥生時代の遺構と遺物 ……552
(4)　古墳時代～平安時代の遺構と遺物 ……554
ア　住居址　　イ　掘立柱建物址　　ウ　溝址　　エ　柵址　　オ　土坑　　カ　畑址
キ　特殊遺構　　ク　遺構外出土遺物
(5)　中世以降の遺構と遺物 ……750
ア　住居址　　イ　掘立柱建物址　　ウ　溝址　　エ　柵址　　オ　土坑　　カ　遺構外出土遺物
iii　C地区 ……784
(1)　概観
(2)　遺構と遺物
ア　住居址　　イ　掘立柱建物址　　ウ　柵址　　エ　溝址　　オ　土坑　　カ　遺構外出土遺物
5　分析 ……875
(1)　古墳時代末から平安時代の遺物 ……875
(2)　栗毛坂遺跡群の文字関係資料 ……905
(3)　遺構の分析 ……920
(4)　集落変遷 ……941
6　まとめ ……955

第19節　西赤座遺跡 ……967
1　遺跡の概観 ……967
2　調査の経過と概要 ……967
3　基本土層 ……969
4　遺構と遺物 ……971
(1)　遺構と遺物 ……971
ア　掘立柱建物址　イ　土坑　ウ　溝址　エ　耕地整理址　オ　遺構外出土遺物
5　まとめ ……982

第20節　中久保田遺跡 ……983
1　遺跡の概観 ……983
2　調査の経過と概要 ……983
3　まとめ ……983

第21節　枇杷坂遺跡群 ……984
1　遺跡の概観 ……984
2　調査の経過と概要 ……984
3　基本土層 ……985
4　遺構と遺物 ……985
(1)　遺構と遺物 ……985
ア　住居址　イ　掘立柱建物址　ウ　溝址　エ　土坑　オ　遺構外出土遺物
5　まとめ ……997

第22節　土器・石器類以外の遺物 ……999

第4章　結　語 ……1005

挿　図　目　次

序説
図１　上信越自動車道路線図
図２　調査区設定
図３　大々地区設定１（平根・岩村田地区）
図４　大々地区設定２（香坂東地地区）

環境
図１　地形図
図２　基本土層
図３　沖積段丘形成のモデル
図４　谷型斜面（A）と尾根型斜面（B）における斜面形と表層物質の関係（平野1968より引用）
図５　周辺遺跡（香坂東地地区）
図６　周辺遺跡（平根・岩村田付近）
図７　周辺遺跡（佐久平）

木戸平Ａ遺跡
図１　調査区および周辺遺跡（１：4,000）
図２　遺構配置
図３　基本土層
図４　１・２号土坑
図５　３・４号土坑
図６　５・６号土坑
図７　遺構外出土土器
図８　「陥し穴」の立地と湧水

吹付遺跡
図１　グリッド配置
図２　遺構配置
図３　基本土層
図４　１号住居址
図５　２号住居址（１）
図６　２号住居址（２）
図７　３号住居址
図８　４号住居址遺物分布（１）
図９　４号住居址（２）
図10　４号住居址（３）
図11　４号住居址（４）
図12　４号住居址（５）
図13　４号住居址（６）
図14　４号住居址（７）
図15　５号住居址（１）
図16　５号住居址（２）
図17　５号住居址（３）
図18　５号住居址（４）
図19　５号住居址（５）
図20　５号住居址（６）
図21　５号住居址（７）
図22　６号住居址
図23　７号住居址
図24　８号住居址
図25　９号住居址遺物分布（１）
図26　９号住居址（２）
図27　９号住居址（３）
図28　９号住居址（４）
図29　９号住居址（５）
図30　10号住居址
図31　11号住居址（１）
図32　11号住居址（２）
図33　11号住居址（３）
図34　11号住居址（４）
図35　11号住居址（５）
図36　12号住居址（１）
図37　12号住居址（２）
図38　１号ピット群
図39　焼土址
図40　遺物集中Ⅰ
図41　遺物集中Ⅱ
図42　１号屋外埋甕
図43　土坑の類型別分布
図44　土坑（１）
図45　土坑（２）・１号配石土坑
図46　土坑（３）・２号配石土坑
図47　土坑（４）
図48　土坑（５）
図49　土坑（６）
図50　土坑（７）
図51　土坑（８）
図52　土坑出土遺物（１）
図53　土坑出土遺物（２）
図54　土坑出土遺物（３）
図55　遺構外出土土器（１）

図56　遺構外出土土器（2）
図57　遺構外出土土器（3）
図58　遺構外出土土器（4）
図59　遺構外出土土器（5）
図60　遺構外出土土器（6）
図61　遺構外出土土器（7）
図62　遺構外出土土器（8）
図63　遺構外出土土器（9）
図64　遺構外出土土器（10）
図65　遺構外出土土器（11）
図66　遺構外出土土器（12）
図67　遺構外出土土器（13）
図68　遺構外出土土器（14）
図69　遺構外出土土器（15）
図70　遺構外出土土器（16）
図71　遺構外出土土器（17）
図72　土製品
図73　石器組成・石材組成
図74　遺構外出土石器（1）
図75　遺構外出土石器（2）
図76　遺構外出土石器（3）
図77　遺構外出土石器（4）
図78　遺構外出土石器（5）
図79　打製石斧長幅厚相関
図80　遺構外出土石器（6）
図81　遺構外出土石器（7）
図82　遺構外出土石器（8）
図83　遺構外出土石器（9）
図84　打製石斧摩耗・欠損
図85　遺構外出土石器（10）
図86　遺構外出土石器（11）
図87　遺構外出土石器（12）
図88　遺構外出土石器（13）
図89　遺構外出土石器（14）
図90　遺構外出土石器（15）
図91　遺構外出土石器（16）
図92　遺構外出土石器（17）
図93　遺構外出土石器（18）
図94　古代以降の遺構外出土遺物
図95　基本土層
図96　焼土址
図97　遺構外出土土器（1）
図98　遺構外出土土器（2）
図99　遺構外出土土器（3）
図100　遺構外出土土器（4）
図101　遺構外出土土器（5）
図102　土製品
図103　遺構外出土石器
図104　縄文時代中期後葉の土器変遷
図105　出土土器のグリッド別分布（1）
図106　出土土器のグリッド別分布（2）
図107　出土土器のグリッド別分布（3）
図108　出土土器のグリッド別分布（4）
図109　出土土器のグリッド別分布（5）
図110　出土石器のグリッド別分布（1）
図111　出土石器のグリッド別分布（2）
図112　縄文時代中期後葉の集落変遷（1）
図113　縄文時代中期後葉の集落変遷（2）

上中原遺跡
図1　地形および調査範囲（1：2000）
図2　トレンチ設定・土層柱状図
図3　遺構外出土遺物

鶉ヲネ遺跡
図1　基本土層
図2　トレンチ設定・遺構分布
　・Ⅳ層コンタ（1：400）
図3　4号土坑
図4　土坑（1）
図5　土坑（2）
図6　遺構外出土遺物（1）
図7　遺構外出土遺物（2）
図8　遺構外出土遺物（3）

東林遺跡
図1　調査範囲および土層柱状図
図2　遺構外出土遺物

西林遺跡
図1　地形および調査範囲（1：3,000）
図2　基本土層
図3　遺構外出土遺物

干草場遺跡
図1　地形および調査範囲（1：3,000）
図2　遺構配置図
図3　基本土層
図4　1号土坑
図5　遺構外出土遺物
図6　1号墳墓

城の口遺跡
図１　地形および調査範囲（１：2,000）
図２　出土遺物

東祢ぶた遺跡
図１　地形および調査範囲（１：3,000）
図２　遺構配置
図３　基本土層
図４　１号住居址（１）
図５　１号住居址（２）
図６　２号住居址
図７　１号単独埋甕
図８　１・２号焼土址
図９　１号焼土址出土遺物
図10　３号土坑
図11　遺構外出土遺物分布
図12　遺構外出土土器（１）
図13　遺構外出土土器（２）
図14　遺構外出土土器（３）
図15　遺構外出土土器（４）
図16　遺構外出土土器（５）
図17　遺構外出土土器（６）
図18　遺構外出土石器
図19　弥生時代の石器
図20　３号住居址
図21　４号住居址
図22　１号・２号・４号土坑
図23　縄文時代中期末遺構分布模式図

西祢ぶた遺跡
図１　地形および調査範囲（１：3,000）
図２　基本土層
図３　遺構配置
図４　１号住居址（１）
図５　１号住居址（２）
図６　２号住居址
図７　３号住居址
図８　４号住居址
図９　５号住居址
図10　６号住居址（１）
図11　６号住居址（２）
図12　１号土坑出土遺物
図13　掘立柱建物址・土坑
図14　遺構外出土遺物

大星尻古墳群
図１　地形および調査範囲（１：3,000）
図２　トレンチ配置・グリッド概念図
図３　拡張区遺構分布および基本土層
図４　１号土坑
図５　２．３号土坑
図６　７号・27号・28号土坑
図７　焼土址・土坑（１）
図８　土坑（２）
図９　土坑（３）
図10　焼土址・土坑出土土器
図11　遺構外出土土器（１）
図12　遺構外出土土器（２）
図13　遺構外出土土器（３）
図14　遺構外出土土器（４）
図15　遺構外出土土器（５）
図16　遺構外出土土器（６）
図17　遺構外出土土器（７）
図18　土製品
図19　遺構外出土石器（１）
図20　石鏃の長幅相関・分類別比率
図21　石鏃の鏃身と抉り部・側辺部状況の相関
図22　石錐の第一次剥離打点部
図23　小剥離痕を有する剥片の背面状況
図24　遺構外出土石器（２）
図25　遺構外出土石器（３）
図26　12号土坑
図27　遺構外出土土器
図28　墳丘
図29　石室・出土遺物
図30　１号墓（１）
図31　１号墓墓坑（２）
図32　１号墓（３）
図33　２号墓
図34　丸山遺跡と本遺跡の位置関係
図35　出土石器・石片類分布状況
図36　剥片・砕片・残核法量別数量
図37　築造工程
図38　設計企画
図39　立地環境

丸山古墳群・丸山II遺跡
図１　地形および調査範囲（１：3,000）
図２　遺構配置
図３　基本土層

図４　１号住居址
図５　２号住居址
図６　土坑
図７　遺構外出土遺物

丸山遺跡
図１　地形および調査範囲（１：4,000）
図２　発掘範囲および基本土層
図３　Ｂ・Ｅ区遺構配置
図４　３号住居址（１）
図５　３号住居址（２）
図６　３号住居址（３）
図７　土坑（１）
図８　土坑（２）
図９　土坑（３）
図10　土坑出土遺物（１）
図11　土坑出土遺物（２）
図12　土坑出土遺物（３）
図13　遺構外出土遺物（１）
図14　遺構外出土遺物（２）
図15　遺構外出土遺物（３）
図16　遺構外出土遺物（４）
図17　出土石器類・その他の分布状況
図18　遺構外出土遺物（５）
図19　遺構外出土遺物（６）
図20　ピエス・エスキーユの長幅相関および素材形状
図21　小剝離痕を有する剝片の長幅相関および背面状況
図22　石核・残核の自然面占有率と重量相関
図23　１号住居址
図24　２号住居址
図25　遺構外出土遺物

北山寺遺跡
図１　地形および調査範囲（１：3,000）
図２　基本土層
図３　遺構配置
図４　遺構外出土石器
図５　１号住居址
図６　２号住居址（１）
図７　２号住居址（２）
図８　３号住居址
図９　４号住居址
図10　５号住居址
図11　11号住居址
図12　12号住居址
図13　３号溝出土遺物
図14　１・２号溝址
図15　３号溝址
図16　６号住居址（１）
図17　６号住居址（２）
図18　６号住居址（３）
図19　足金物の彫金工程
図20　７号住居址
図21　８号住居址
図22　９号住居址
図23　10号住居址
図24　13号住居址
図25　１号掘立柱建物址
図26　土坑（１）
図27　土坑（２）
図28　土坑（３）
図29　土坑出土遺物
図30　遺構外出土遺物

東大久保遺跡
図１　東大久保・西大久保遺跡群調査範囲（１：4,000）
図２　東大久保・西大久保遺跡群全体図・土層図
図３　１号土坑
図４　１号溝址
図５　遺構外出土遺物

西大久保遺跡
図１　遺構外出土遺物（１）
図２　遺構外出土遺物（２）

腰巻遺跡
図１　地形および調査範囲（１：4,000）
図２　基本土層
図３　遺構配置
図４　16号土坑
図５　34・45号土坑
図６　遺構外出土遺物（１）
図７　遺構外出土遺物（２）
図８　遺構外出土遺物（３）
図９　遺構外出土遺物（４）
図10　遺構外出土遺物（５）
図11　２号住居址（１）
図12　２号住居址（２）
図13　３号住居址
図14　５号住居址

図15　6号住居址
図16　7号住居址
図17　8号住居址
図18　火床
図19　35・36号土坑
図20　遺構外出土遺物（1）
図21　遺構外出土遺物（2）
図22　1号住居址
図23　4号住居址
図24　畑址
図25　3号溝址（1）
図26　3号溝址（2）
図27　3号溝・白岩城・平尾城
図28　2号溝～1号溝の変遷
図29　1号溝址
図30　2号溝址
図31　4・5号溝址
図32　遺構外出土遺物
図33　「く」字状口縁甕の想定型式変遷
図34　短頸壺の想定型式変遷
図35　小型丸底土器の形式
図36　腰巻遺跡における小型精製土器崩壊後の想定形式群
図37　多段口縁甕集成

栗毛坂遺跡群
図1　地形図および調査区設定（1：10,000）
図2　調査区分図（1：6,000）
図3　全体図
図4　基本土層

A地区
図5　A地区の位置・調査範囲
図6　A地区の地形・遺構配置・基本土層
図7　A地区の地形形成過程と環境の推移
図8　土坑（1）
図9　土坑（2）
図10　4号土坑出土遺物
図11　礫群の分布状況
図12　礫群と石器の出土相関図
図13　1・2号礫群
図14　3・4号礫群
図15　5・6号礫群
図16　7・8・9号礫群
図17　10・11・12・13号礫群
図18　14・15号礫群
図19　石器の分布状況
図20　素材面を残す石鏃の長幅相関・重量別数量
図21　遺構外出土石器（1）
図22　遺構外出土石器（2）
図23　遺構外出土石器（3）
図24　遺構外出土石器（4）
図25　第一次剥離打点部位・分類別数量
図26　鏃身長・抉り部、鏃身長・側辺部の相関
図27　分類別完形・欠損品数量
図28　破損部位の数量・比率
図29　分類別の錐部入射角・摩耗部位
図30　遺構外出土石器（5）
図31　遺構外出土石器（6）
図32　遺構外出土石器（7）
図33　遺構外出土石器（8）
図34　遺構外出土石器（9）
図35　素材の性状・重量相関
図36　刃部の形状・刃部角の相関
図37　分類別の長幅相関・刃部側面形
図38　長幅相関と背面状況
図39　長・幅・厚・重相関（1）
図40　遺構外出土石器（10）
図41　遺構外出土石器（11）
図42　遺構外出土石器（12）
図43　長・幅・厚・重相関（2）
図44　N―15グリッドにおける石片類の重量別数量・剝片の自然面有無
図45　遺構外出土石器（13）
図46　遺構外出土石器（14）
図47　遺構外出土石器（15）
図48　遺構外出土石器（16）
図49　遺構外出土石器（17）
図50　遺構外出土石器（18）
図51　遺構外出土石器（19）
図52　遺構外出土石器（20）
図53　遺構外出土石器（21）
図54　遺構外出土石器（22）
図55　遺構外出土石器（23）
図56　遺構外出土石器（24）
図57　遺構外出土石製品
図58　遺構外出土土器（1）
図59　遺構外出土土器（2）
図60　遺構外出土土器（3）
図61　遺構外出土土器（4）
図62　遺構外出土土器（5）

図63　遺構外出土土器（６）
図64　遺構外出土土器（７）
図65　遺構外出土土器（８）
図66　遺構外出土土器（９）
図67　遺構外出土土器（10）
図68　遺構外出土土器（11）
図69　遺構外出土土器（12）
図70　遺構外出土土器（13）
図71　遺構外出土土器（14）
図72　遺構外出土土器（15）
図73　遺構外出土土器（16）
図74　１号住居址
図75　２号住居址
図76　３号住居址（１）
図77　３号住居址（２）
図78　４号住居址
図79　５号住居址
図80　６号住居址
図81　７号住居址
図82　８号住居址
図83　９号住居址
図84　10号住居址
図85　11号住居址
図86　１号掘立柱建物址
図87　遺構外出土遺物（１）
図88　遺構外出土遺物（２）

Ｂ地区

図１　Ｂ地区の位置・調査範囲
図２　遺構配置(1)
図３　遺構配置(2)
図４　遺構配置(3)
図５　遺構配置(4)
図６　土坑
図７　遺物分布
図８　土器拓影
図９　159号住居址
図10　113号住居址
図11　３号住居址
図12　４号住居址（１）
図13　４号住居址（２）
図14　５号住居址（１）
図15　５号住居址（２）
図16　６号住居址（１）
図17　６号住居址（２）
図18　28号住居址
図19　32号住居址
図20　７号住居址
図21　９号住居址
図22　10号住居址（１）
図23　10号住居址（２）
図24　43号住居址
図25　11号住居址（１）
図26　11号住居址（２）
図27　42号住居址
図28　12号住居址（１）
図29　12号住居址（２）
図30　12号住居址（３）
図31　12号住居址（４）
図32　45号住居址
図33　13号住居址（１）
図34　13号住居址（２）
図35　14号住居址（１）
図36　14号住居址（２）
図37　15号住居址
図38　16号住居址
図39　18号住居址
図40　19号住居址
図41　21号住居址
図42　22号住居址
図43　23号住居址
図44　24号住居址
図45　27号住居址
図46　29号住居址
図47　30号住居址
図48　31号住居址（１）
図49　31号住居址（２）
図50　41号住居址
図51　33号住居址
図52　34号住居址
図53　35号住居址
図54　36号住居址
図55　37号住居址
図56　39号住居址
図57　40号住居址
図58　44号住居址（１）
図59　44号住居址（２）
図60　101号住居址
図61　102号住居址
図62　103号住居址

図63　104号住居址
図64　105号住居址（1）
図65　105号住居址（2）
図66　106号住居址
図67　107号住居址
図68　108号住居址
図69　109号住居址
図70　110号住居址（1）
図71　110号住居址（2）
図72　111号住居址
図73　112号住居址（1）
図74　112号住居址（2）
図75　114号住居址
図76　115号住居址
図77　116号住居址
図78　117号住居址（1）
図79　117号住居址（2）
図80　118号住居址（1）
図81　118号住居址（2）
図82　119・126号住居址
図83　120号住居址（1）
図84　120号住居址（2）
図85　120号住居址（3）
図86　120号住居址（4）
図87　121号住居址
図88　122号住居址
図89　123号住居址
図90　124号住居址
図91　125号住居址（1）
図92　125号住居址（2）
図93　127号住居址
図94　128号住居址（1）
図95　128号住居址（2）
図96　129号住居址
図97　130号住居址（1）
図98　130号住居址（2）
図99　131号住居址
図100　132号住居址（1）
図101　132号住居址（2）
図102　144号住居址
図103　133号住居址（1）
図104　133号住居址（2）
図105　135号住居址
図106　136号住居址（1）
図107　136号住居址（2）
図108　137号住居址（1）
図109　137号住居址（2）
図110　143号住居址
図111　138号住居址
図112　139号住居址
図113　140号住居址
図114　141号住居址
図115　142号住居址
図116　145号住居址（1）
図117　145号住居址（2）
図118　146号住居址
図119　147号住居址
図120　148号住居址（1）
図121　148号住居址（2）
図122　149号住居址（1）
図123　149号住居址（2）
図124　150号住居址（1）
図125　150号住居址（2）
図126　151号住居址
図127　152号住居址
図128　153号住居址
図129　154号住居址
図130　156号住居址
図131　157号住居址（1）
図132　157号住居址（2）
図133　158号住居址
図134　8号掘立柱建物址
図135　9・10号掘立柱建物址
図136　11・12号掘立柱建物址
図137　13・14号掘立柱建物址
図138　15・16号掘立柱建物址
図139　17号掘立柱建物址
図140　20・23号掘立柱建物址
図141　24号掘立柱建物址
図142　25・26号掘立柱建物址
図143　27・28号掘立柱建物址
図144　29・30号掘立柱建物址
図145　31・32号掘立柱建物址
図146　33・34号掘立柱建物址
図147　35・36号掘立柱建物址
図148　37・38号掘立柱建物址
図149　40号掘立柱建物址
図150　41・42号掘立柱建物址
図151　43号掘立柱建物址
図152　44・46号掘立柱建物址

図153　47・48号掘立柱建物址
図154　49・50号掘立柱建物址
図155　52・53号掘立柱建物址
図156　54・55号掘立柱建物址
図157　56・57号掘立柱建物址
図158　58・59号掘立柱建物址
図159　60・61号掘立柱建物址
図160　62・101号掘立柱建物址
図161　102・103号掘立柱建物址
図162　104・105号掘立柱建物址
図163　106号掘立柱建物址
図164　107号掘立柱建物址
図165　108号掘立柱建物址
図166　109・110号掘立柱建物址
図167　111・112・113号掘立柱建物址
図168　115・116号掘立柱建物址
図169　117・118掘立柱建物址
図170　119・120号掘立柱建物址
図171　121・122号掘立柱建物址
図172　123・124号掘立柱建物址
図173　125・126号掘立柱建物址
図174　127・128号掘立柱建物址
図175　129・135号掘立柱建物址
図176　136・138号掘立柱建物址
図177　139・141号掘立柱建物址
図178　142・145号掘立柱建物址
図179　143号掘立柱建物址
図180　144号掘立柱建物址
図181　146号掘立柱建物址
図182　148・149号掘立柱建物址
図183　150・151号掘立柱建物址
図184　152・153号掘立柱建物址
図185　154号掘立柱建物址
図186　柵列
図187　土坑の長短軸深さの相関
図188　土坑（1）
図189　土坑（2）
図190　土坑（3）
図191　土坑（4）
図192　土坑（5）
図193　土坑（6）
図194　土坑（7）
図195　1・2号畑址
図196　3号畑址
図197　特殊遺構1～4
図198　特殊遺構5・6
図199　特殊遺構7
図200　特殊遺構8
図201　遺構外出土遺物（1）
図202　遺構外出土遺物（2）
図203　遺構外出土遺物（3）
図204　1号住居址
図205　2号住居址
図206　8号住居址
図207　17号住居址
図208　38号住居址
図209　160号住居址
図210　1・4号掘立柱建物址
図211　3号掘立柱建物址
図212　2号掘立柱建物址
図213　5号掘立柱建物址
図214　6号掘立柱建物址
図215　7号掘立柱建物址
図216　18号掘立柱建物址
図217　19号掘立柱建物址
図218　21号掘立柱建物址
図219　45号掘立柱建物址
図220　溝址（1）
図221　溝址（2）
図222　溝址（3）
図223　溝址（4）
図224　溝址（5）
図225　溝址（6）
図226　溝址（7）
図227　溝址（8）
図228　溝址出土遺物（1）
図229　溝址出土遺物（2）
図230　1号棚址
図231　2～7号棚址
図232　土坑の長短軸深さの相関
図233　土坑（1）
図234　土坑（2）
図235　土坑（3）
図236　土坑（4）
図237　遺構外出土遺物

C地区

図1　C地区の位置・調査範囲
図2　遺構配置（1）
図3　遺構配置（2）

図４　１号住居址
図５　２号住居址
図６　３号住居址
図７　４号住居址
図８　５号住居址
図９　６号住居址
図10　７号住居址（１）
図11　７号住居址（２）
図12　８号住居址
図13　９号住居址（１）
図14　９号住居址（２）
図15　10号住居址
図16　11号住居址（１）
図17　11号住居址（２）
図18　12号住居址（１）
図19　12号住居址（２）
図20　13号住居址
図21　14号住居址
図22　15号住居址（１）
図23　15号住居址（２）
図24　16号住居址
図25　17号住居址
図26　18号住居址（１）
図27　18号住居址（２）
図28　18号住居址（３）
図29　19号住居址
図30　20号住居址（１）
図31　20号住居址（２）
図32　21・30号住居址
図33　22号住居址
図34　23号住居址
図35　24号住居址
図36　25号住居址
図37　26号住居址
図38　27号住居址（１）
図39　27号住居址（２）
図40　28号住居址
図41　29号住居址
図42　31号住居址
図43　32号住居址
図44　33号住居址
図45　34号住居址
図46　35号住居址
図47　36号住居址
図48　40号住居址（１）
図49　40号住居址（２）
図50　41号住居址
図51　42号住居址
図52　43号住居址
図53　１・２号掘立柱建物址
図54　３・４号掘立柱建物址
図55　５・６・７号掘立柱建物址
図56　８・９号掘立柱建物址
図57　10号掘立柱建物址
図58　11・12号掘立柱建物址
図59　13号掘立柱建物址
図60　14号掘立柱建物址
図61　15・16号掘立柱建物址
図62　17・18号掘立柱建物址
図63　19号掘立柱建物址
図64　20・21号掘立柱建物址
図65　22・23号掘立柱建物址
図66　24・25号掘立柱建物址
図67　26・27・28号掘立柱建物址
図68　29・30号掘立柱建物址
図69　31号掘立柱建物址
図70　32号掘立柱建物址
図71　33・52号掘立柱建物址
図72　34号掘立柱建物址
図73　36・37号掘立柱建物址
図74　38・39号掘立柱建物址
図75　40・41・42号掘立柱建物址
図76　43号掘立柱建物址
図77　44・46号掘立柱建物址
図78　47・48・49号掘立柱建物址
図79　50・51・53号掘立柱建物址
図80　54・55号掘立柱建物址
図81　56号掘立柱建物址
図82　棚址
図83　溝址（１）
図84　溝址（２）
図85　溝址（３）
図86　土坑
図87　土坑の長短軸・深さの相関
図88　遺構外出土遺物（１）
図89　遺構外出土遺物（２）

分析
土器
図１　食器の焼き物別割合
図２　須恵器の法量
図３　黒色処理の食器の法量
図４　黒色処理の器種別割合
図５　ミガキの模式図
図６　食器の分類と変遷
図７　土師質の法量
図８　甕の分類と変遷
図９　ロクロ甕の変遷
図10　羽釜の分類と変遷
図11　１段階
図12　２段階
図13　３段階
図14　４段階
図15　５段階
図16　６段階
図17　７段階
図18　８段階
図19　９段階
図20　10段階
図21　11段階
図22　12段階
図23　13段階
図24　14段階
図25　15段階
図26　16段階
図27　17段階

栗毛坂遺跡群の文字関係資料
図１　墨書が施される器種と部位
図２　墨書の種類
図３　墨書土器出土点数
図４　『男』一覧
図５　『天』一覧
図６　『天』・『男』の時期別分布（１）（１：1,500）
図７　『天』・『男』の時期別分布（２）（１：1,500）

遺構の分析
図１　住居址段階別軒数
図２　住居址規模
図３　住居址段階別規模（Ｂ地区）
図４　住居址段階別規模（Ｃ地区）
図５　住居址段階別面積
図６　住居址主軸
図７　住居址主柱穴
図８　住居址出入口
図９　カマドの位置
図10　掘り方の類型
図11　掘立柱建物址諸形態
図12　住居址と掘立柱建物址の関係
図13　掘立柱建物址主軸
図14　土坑分布と形態別基数

集落変遷
図１　Ｂ地区段階別変遷（１）
図２　Ｂ地区段階別変遷（２）
図３　Ｂ地区段階別変遷（３）
図４　Ｂ地区段階別変遷（４）
図５　Ｃ地区段階別変遷（１）
図６　Ｃ地区段階別変遷（２）
図７　鉄器等の分布
図８　田切り地形と山間部遺跡

西赤座遺跡
図１　地形図（１：3,000）
図２　基本土層
図３　遺構配置
図４　１号掘立柱建物址
図５　ⅡＵ区土坑群
図６　ⅣＢ区土坑群
図７　１～４号溝址
図８　１・３号溝址出土遺物
図９　５号溝址
図10　６～12号溝址
図11　流路群
図12　耕地整理址
図13　遺構外出土遺物

中久保田遺跡
図１　地形および調査範囲（１：3,000）

枇杷坂遺跡群
図１　地形・発掘範囲・遺構配置
図２　１号住居址
図３　２号住居址
図４　３号住居址
図５　１号掘立柱建物址
図６　２号掘立柱建物址

図７　３号掘立柱建物址
図８　４・５号掘立柱建物址
図９　１・２・４号溝址
図10　３号溝址
図11　土坑
図12　石鏃

挿　表　目　次

序説
表１　上信越自動車道（県境～佐久ＩＣ間）
　　発掘調査工程および調査契約一覧表
表２　組織
表３　遺跡記号一覧
表４　大々地区一覧
表５　整理担当

環境
佐久地方北部の地形発達
表１　本地域の地質発達史

歴史的環境
表１　周辺遺跡一覧（１）
表２　周辺遺跡一覧（２）

吹付遺跡
表１　土坑一覧（１）
表２　土坑一覧（２）
表３　土坑一覧（３）
表４　土製品一覧
表５　出土石器一覧

東祢ぶた遺跡
表１　出土石器一覧

大星尻古墳群
表１　土製品一覧
表２　出土石器・石片類一覧

丸山遺跡
表１　出土石器類・石片類一覧

北山寺遺跡
表１　土坑一覧

腰巻遺跡
表１　出土石器・石片類一覧

栗毛坂遺跡群　Ａ地区
表１　石器・石片類の出土数量

栗毛坂遺跡群　分析（１）
表１　ミガキの割合
表２　段階別住居址一覧

栗毛坂遺跡群　分析（２）
表１　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（１）
表２　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（２）
表３　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（３）
表４　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（４）
表５　栗毛坂遺跡群の文字関係資料（５）

付図
表１　竪穴住居址一覧
表２　掘立柱建物址一覧

土器・石器類以外の遺物
表１　骨
表２　種子
表３　炭
表４　木本
表５　草本

第１章　序　説

第１節　調査の契約

１　発掘調査委託契約

本報告書は上信越自動車道（関越自動車道上越線）建設工事に伴い消滅してしまう、長野県佐久市内（群馬県境～佐久インターチェンジ間、約11.9 km）22の埋蔵文化財包蔵地の保護を目的とした発掘調査結果を記録したものである。

上信越自動車道は、首都圏と上信越地方を結ぶ幹線道路として計画され、日本道路公団（以下「公団」）によって建設される。東京都練馬区を起点とし、関越自動車道新潟線との重複間をもち藤岡ジャンクション（以下「Ｊ・Ｃ・Ｔ」）より西に別れ群馬県・長野県を経て新潟県上越市で北陸自動車道と接続する全延長280 km の高速自動車国道である。新潟線藤岡Ｊ・Ｃ・Ｔより藤岡インターチェンジ（以下「Ｉ・Ｃ」）までは既に昭和55年7月より供用されている。今回建設される藤岡Ｉ・Ｃ～佐久Ｉ・Ｃ間は67 km（第８次施行命令区間）で、群馬県約55.1 km、長野県佐久市約11.9 kmである。

基本計画は藤岡市から長野市間が昭和47年に策定され、同54年建設大臣により日本道路公団が第８次区間施行命令を受けている。高速自動車国道用地内に所在する埋蔵文化財については、「日本道路公団の建設事業など工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取り扱いに関する覚書」に準じて実施されている。上信越自動車道用地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いおよび調査経過は次のとおりである。

基本計画発表により長野県教育委員会文化課（以下「県教委」）は、埋蔵文化財保護施策のため昭和49年文化庁文化財保護部の指導と国庫補助を受け、予定建設路線の佐久市～信濃町間総延長約112 km、総面積約500 K m²におよぶ建設予定地域内埋蔵文化財の緊急分布調査を実施した。

昭和56年、群馬県藤岡市から同松井田町、同57年、松井田町から長野県佐久市までの路線発表がされた。昭和57年県教委は第２次公共関連事業に伴い予定地域内埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、13遺跡の範囲を確定した。

昭和58年、中心杭が設置されルート確定。

昭和60年度、県教委は公団と工事工程および発掘調査の調整段階に至り、詳細分布調査の必要性が高まった。

昭和61年度県教委は文化庁の補助金を受け、試掘および踏査による詳細分布調査を財団法人長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」）・佐久市教育委員会の協力を得て実施し26遺跡の範囲を確定した。

昭和61年、県教委と公団東京第二建設局との協議のうえ、路線決定されている第８次施行命令区間内の埋蔵文化財包蔵地を発掘調査の対象とし、県教委が公団より委託を受け、さらに同年10月これを埋文センターに再委託した。

昭和61年10月、埋文センターは佐久調査事務所を佐久市大字安原1367に設置、６名で発足し、10月７日より栗毛坂遺跡群の一部から発掘調査を開始した。以後足かけ４年にわたり県教委と協議を重ねながら埋蔵文化財発掘調査を実施することになった。最終的に発掘調査した遺跡は23遺跡、調査期間は昭和61年10月～平成元年５月まで行い、調査面積は合計255,500 m²におよんだ。

報告書作成に伴う整理作業は、次回刊行の下茂内遺跡を除く22遺跡を、佐久Ｉ・Ｃ以北の先線の発掘調査と並行しながら平成元年４月～平成３年３月までの２年間で行った。

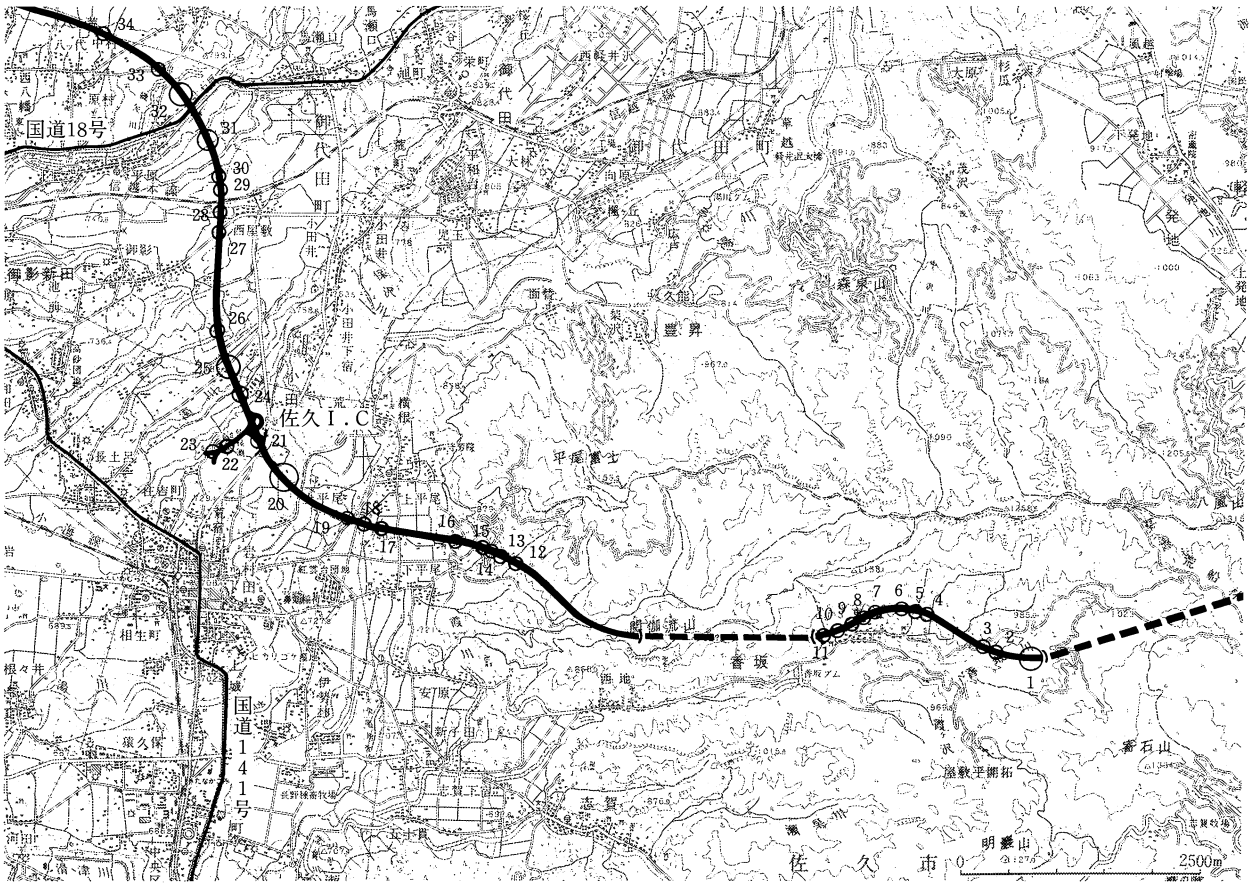
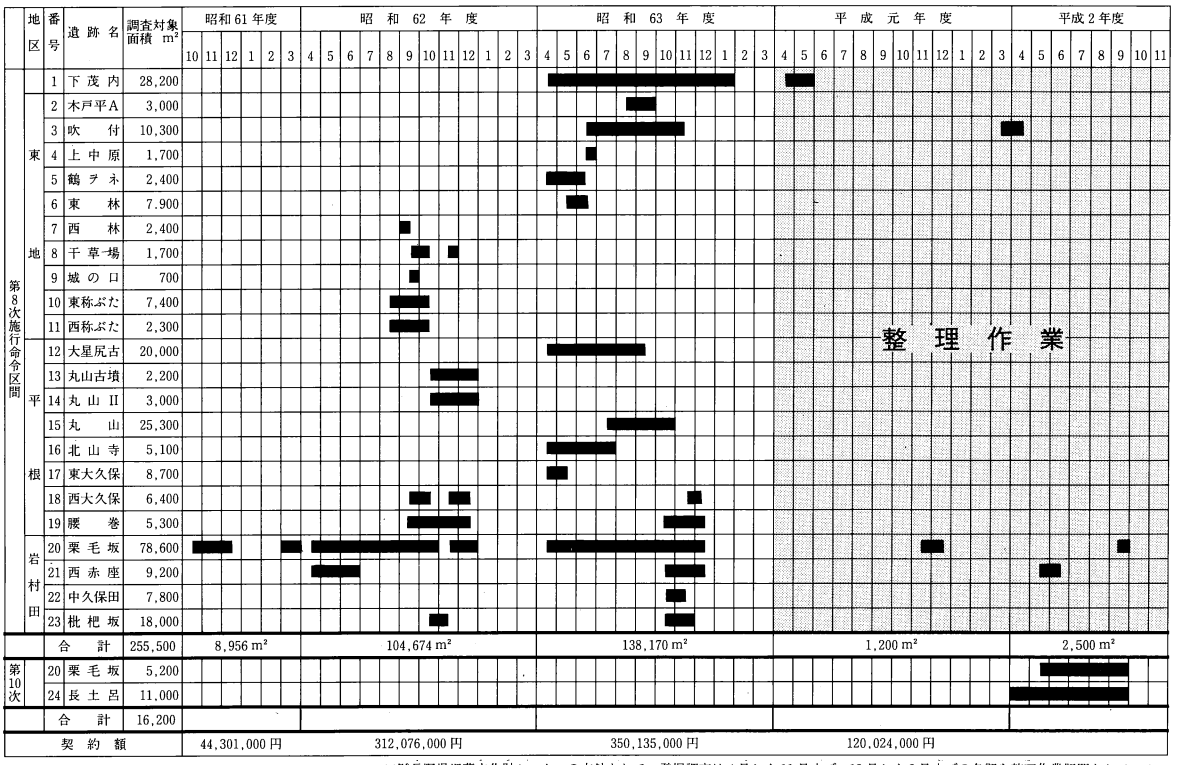


図１　上信越自動車道路線

表１　上信越自動車道（県境～佐久ＩＣ間）発掘調査工程および調査契約一覧



※㈶長野県埋蔵文化財センターの方針として、発掘調査は４月から11月まで，12月から３月までの冬期を整理作業期間としている。

契約の際、取り交される契約書および計画書の書式は、埋文センター刊行の『中央道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書ー岡谷市内ー』に掲載されているのでここでは略す。

2　埋蔵文化財発掘調査の契約業務の経過

上信越自動車道は群馬県藤岡市より同松井田町の松井田Ｉ・Ｃ（仮称）約34.9 km に至る。これより長野県境に横たわる急峻な山地を蛇行しながら高度を増し、碓氷川・国道18号および信越本線を２度横過した後、碓氷バイパス（国道18号）・碓氷Ｉ・Ｃ（仮称）に至る。大山トンネル、県道下仁田・軽井沢線、日暮山トンネルを通過し、群馬と長野の県境となる八風山の南麓（妙義荒船佐久高原国定公園内）をトンネルで通過し、長野県佐久市香坂に出る。

佐久市香坂地域は、関東山地に属する八風山と寄石山を源流とする香坂川と茂内沢が浸食して形成し細長い谷で、川は西に流下し佐久平で千曲川に合流する。上信越自動車道はこの香坂谷の奥、東地地区の北斜面を通過し、北側の閼伽流山をトンネルで抜け、佐久山塊の西端に位置する平尾富士南西麓の平根地区を通過し、佐久平北西部の岩村田地区の仙禄湖近くで佐久Ｉ・Ｃ（仮称）に至る。

遺跡は閼伽流山トンネルを境に、香坂東地地区の山間の谷部と佐久平に面する山麓および台地上部とに２大別することができる。香坂地区では香坂川に向って南へ傾斜する谷部と寄石山麓の尾根上に立地する下茂内遺跡（これのみ南斜面上に立地）～西祢ぶた遺跡の11か所の遺跡（約68,000 m²）が、平根・岩村田地区には平尾富士の南西麓に大星尻古墳群～北山寺遺跡、佐久平台地上には東大久保遺跡群～枇杷坂遺跡群の12か所の遺跡（約187,500 m²）が所在した。

発掘調査の契約は各年度ごとに行われたが、設計変更・用地買収の遅れおよび踏査・発掘調査段階で県教委・公団と協議を重ねながら遺跡数・調査対象面積がしばしば変更された。その間の経緯について簡略に記したい。

昭和61年度に実施された関越自動車道上越線用地内詳細分布調査を基準に調査対象地が決定された。その後昭和61～62年度にかけ鋳物師釜遺跡・鶉ヲネ遺跡（一部）・祢ぶた城址・留場遺跡・大星尻古墳群（一部）・一本松古墳群が県教委・埋文センター・佐久市教育委員会による踏査・試掘および公団の設計変更によって調査対象から外された。

昭和62年度には丸山古墳群の詳細なトレンチ調査が実施されたにもかかわらず古墳が検出されるに至らず、新たに包蔵地として丸山Ⅱ遺跡を確認3,000 m²が調査対象となった。

昭和63年度八風山トンネルの坑口に位置する下茂内遺跡は4,550 m²の契約面積で開始されたが予想をはるかに越える豊富な内容を持つ遺跡であったことが判明し、27,000 m²へと大幅に面積が拡大した。そのため発掘調査は１月末まで続き、標高約1,000 m 地点での厳寒最悪コンディションで調査は難行した。

平成元年度下茂内遺跡は、八風山トンネル坑口部分の設計変更に伴い1,200 m²の面積が追加された。また、佐久Ｉ・Ｃ内に管理用施設の新設計画決定にともない、西赤座遺跡2,500 m²が調査増となった。調査は年内に予定されたが用地買収の問題から翌年度調査に変更された。

平成２年度、公団では平成４年度佐久Ｉ・Ｃ供用開始にむけ、佐久Ｉ・Ｃ先線の工事が急務となり16,200 m²の早急な調査を余儀なくされた。

昭和61年度から平成2年度までの発掘調査・整理作業を顧みると、昭和63年度までの発掘調査は比較的順調に行われた。だが、平成元年度から２年間の予定で開始された報告書作成に伴う整理作業は、その期間中に管理用施設の新設・埋文センター長野調査事務所の調査面積の急増に伴う調査員の応援派遣、あわせて平成４年度佐久Ｉ・Ｃ供用開始に向けての佐久Ｉ・Ｃ先線の発掘調査などにより、大幅に停滞した。

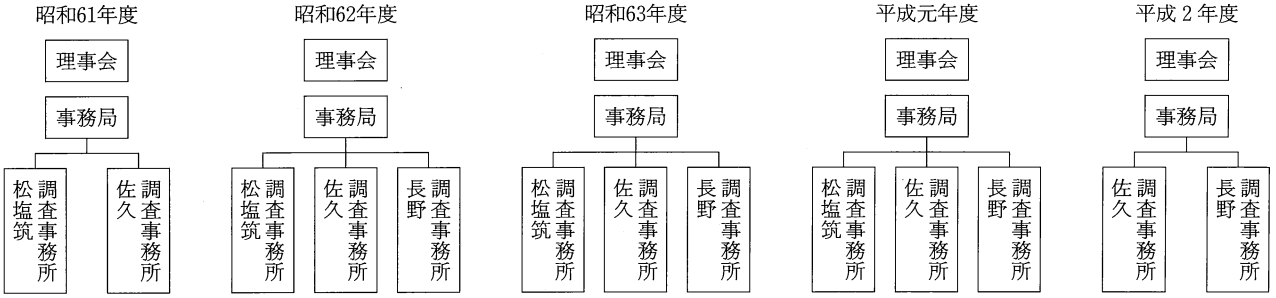
第2節　調査の普及公開と体制

上信越自動車道に関連する埋蔵文化財調査体制は、昭和61年10月１日佐久調査事務所新設によって庶務部２名、調査部５名で実質的なスタートがきられた。県境から佐久Ｉ・Ｃ間の23遺跡、調査対象面積255,500m²の調査にあたり、その主体年度にあたる昭和62年度・63年度においては、所長・調査部長の着任と開所当初の調査研究員５名から24名と大幅増員のもと一班４名の班編成により発掘調査に対応した。設計変更に伴う下茂内遺跡および高速道管理施設用地の西赤座遺跡の追加契約による発掘調査を除き、昭和63年度にはほぼ発掘調査を完了した。平成元年度からは調査研究員８名体制で平成２年度まで整理作業を行い、23遺跡中下茂内遺跡を除く22遺跡を所収した本報告書の刊行に至っている。

各遺跡ごとの経過は前掲の経過一覧表および第３章各節に記述したのでここでは省略するが、調査経過で触れていない埋蔵文化財保護に対する普及公開活動も調査研究と並行して行った。昭和62年８月２日・昭和63年10月16日栗毛坂遺跡群、同年11月21日下茂内遺跡で現地説明会を開いた。出土品展示会は63年３月３日～６日・平成元年３月２日～５日の２回佐久創造館で開催し、パネル展示はもとより吹付遺跡９号敷石住居址の復原展示などを行い、合計2,400名の見学者に好評を博した。

表２　組織

財団法人長野県埋蔵文化財センター組織表



佐久調査事務所組織表

年　　度	昭和61年度	昭和62年度	昭和63年度	平成元年度	平成２年度
所　　長		伊藤万寿雄	伊藤万寿雄（６．１付）事務局へ転任 畑　幹雄（６．１付）	畑　幹雄 （庶務部長兼務）	畑　幹雄 （庶務部長兼務）
庶務部長	畑　幹雄(11．1)着任	畑　幹雄	畑　幹雄(所長兼務)	畑　幹雄	畑　幹雄
庶務部長補佐			中沢　克明		
主　　任			関　次郎	関　次郎	関　次郎
主　　事	六川直利(９．1)着任	六川　直利			
調査部長		丸山敞一郎	丸山敞一郎	欠	欠
調査課長	(平成元年度から設置)			寺島　俊郎（代理）	寺島　俊郎（代理）
調査研究員	臼田武正(９．1)着任 寺島俊郎(10．1)着任 馬場長光(10．1)着任 二木　明(10．1)着任 山上秀樹(10．1)着任 計（７名）	伊藤　隆之　高田　実 井上　城典　寺島　俊郎 臼田　武正　豊田　伸一 宇賀神誠司　中野　亮一 岡村　秀雄　中浜　徹 河西　克造　馬場　長光 木内　行雄　降旗　史敬 黒岩　龍也　二木　明 小林　秀行　百瀬　忠幸 近藤　尚義　山上　秀樹 小平　恵一　吉沢　信幸 新海　節生　和田　文人 計（28名）	伊藤　隆之　新海　節生 井上　城典　下島　章裕 臼田　武正　高田　実 宇賀神誠司　寺島　俊郎 岡村　秀雄　中野　亮一 河西　克造　降旗　史敬 木内　行雄　二木　明 木内　英一　三石　俊司 輿水　太仲　宮脇　正美 小林　秀行　百瀬　忠幸 近藤　尚義　山上　秀樹 小平　恵一　吉沢　信幸 計（28名）	宇賀神誠司 岡村　秀雄 小林　秀行 輿水　太仲 近藤　尚義 新海　節生 百瀬　忠幸 計（10名）	宇賀神誠司 岡村　秀雄 小林　秀行 近藤　尚義 新海　節生 田中正治郎 百瀬　忠幸 輿水　太仲（調査員） 計（11名）

第３節　調査の方法

１　発掘調査の方法

調査に当たっては、毎年度３分の１もの調査研究員の異動などがあるため、一定の調査方針に従い共通した方法を取る必要が生じる。その基準を示すため埋文センターでは「遺跡調査の方針と手順」を作成し、これに準じながら各遺跡ごとに調査方針および計画を立て、発掘調査を行った。

２　遺跡・遺構名称と記号

遺跡名は長野県教育委員会作成の遺跡台帳に記載されている名称とした。また、記録の便をはかるために、大文字アルファベット３文字で表記される遺跡記号を与えた。３文字の１番目は県内を９地区（10地区目は予備）に分けた地区記号、２・３番目は遺跡名の頭文字から採った。例えば、木戸平（ＤＫＤ）は、佐久地区の地区記号Ｄ、ＫＩＤＯＤＡＩＲＡのＫとＤを組み合わせてＤＫＤとした。各種の記録や遺物の注記などはこの記号を用いている。

遺構名称は検出時に決定するため、遺構種類に適合しない場合がある。そのため形状および遺構の特徴から、記録の便をもはかるため記号を用いた。

ＳＢ（竪穴住居址・竪穴状遺構など）、ＳＴ（掘立柱建物址など）、ＳＤ（溝・氾濫原溝）、ＳＫ（土坑・陥し穴など）、ＳＡ（柱列・柵列）、ＳＬ（畑址・水田址）、ＳＭ（古墳・方形周溝墓・墳墓）、ＳＦ（火を焚いた跡が単独かつ面的に広がるもの）、ＳＨ（集石など）、ＳＸ（その他の不明遺構）。

Ａ　北信地区（下水内郡、下高井郡、上高井郡、飯山市、中野市、須坂市）
Ｂ　長野地区（上水内郡、更級郡、埴科郡、長野市、更埴市）
Ｃ　上小地区（小県郡、上田市）
Ｄ　佐久地区（北佐久郡、南佐久郡、小諸市、佐久市）
Ｅ　松本地区（南安曇郡、東筑摩郡、塩尻市、松本市）
Ｆ　大北地区（北安曇郡、大町市）
Ｇ　諏訪地区（諏訪郡、岡谷市、諏訪郡、茅野市）
Ｈ　上伊那地区（上伊那郡、伊那市、駒ケ根市）
Ｉ　飯伊地区（下伊那郡、飯田市）
Ｊ　木曽地区（木曽郡）
Ｋ　予　備

※（長野県広域市町村圏に相当する）

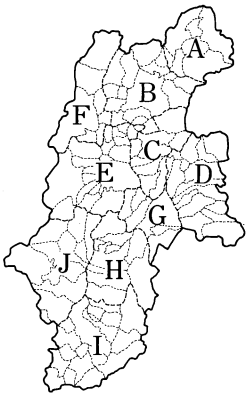


表３　遺跡記号一覧

地区	番号	遺跡名	遺跡記号		地区	番号	遺跡名	遺跡記号	
	1	下茂内	ＤＳＭ	SHIMOMOUTI	平根	13	丸山古墳	ＤＭＹ	MARUYAMA-KOFUNGUN
東地	2	木戸平Ａ	ＤＫＤ	KIDODAIRA-A		14	丸山Ⅱ	ＤＭＹ	MARUYAMA-II
	3	吹付	ＤＦＴ	FUTTUKE		15	丸山	ＤＭＭ	MARUYAMA
	4	上中原	ＤＫＮ	KAMINAKAHARA		16	北山寺	ＤＫＹ	KITAYAMADERA
	5	鶉ヲネ	ＤＵＯ	UZURAONE		17	東大久保	ＤＨＯ	HIGASHIOOKUBO
	6	東林	ＤＨＢ	HIGASHIBAYASHI		18	西大久保	ＤＮＯ	NISHIOOKUBO
	7	西林	ＤＮＢ	NISHIBAYASHI		19	腰巻	ＤＫＭ	KOSHIMAKI
	8	干草場	ＤＨＫ	HIKUSABA	岩村田	20	栗毛坂	ＤＫＧ	KURIGEZAKA
	9	城の口	ＤＪＫ	JOONOKUCHI		21	西赤座	ＤＮＡ	NISHIAKAZA
	10	東祢ぶた	ＤＨＮ	HIGASHINEBUTA		22	中久保田	ＤＮＫ	NAKAKUBOTA
	11	西祢ぶた	ＤＮＮ	NISHINEBUTA		23	枇杷坂	ＤＢＷ	BIWAZAKA
	12	大星尻古	ＤＯＢ	OOBOSHIZIRI-KOFUNGUN					

3 調査区設定と測量

調査区(グリッド)の設定にあたっては、従来の設定方法では、各遺跡ごとに任意の点を基点(NS＝0、WE＝0)とし、一辺50ｍの正方形を大地区として設定していた。この方法を用いると、周囲を調査する市町村の発掘調査結果との図上復元が困難であった。そこで当佐久調査事務所では事務所設立にあたり、今までの調査区の設定方法を改変した方法で設定することにした。その内容は、次のような事項である。(図2)

1．調査区は、国土地理院の平面直角座標系（当事務所では第Ⅷ系 X＝0.000、Y＝0.000）を基点に200ｍの倍数値を200×200ｍの区画に設定し、これを大々地区とした。大々地区は調査範囲を最小限におさえ、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ‥‥のローマ数字をあたえる。

例 栗毛坂遺跡群（DKG）はX＝＋31,800、Y＝－1,400が大々地区設定の起点DKG Ⅰとなる。
X＝＋31,200、Y＝－1,000はDKG Ⅷ（アミ）となる。

2．大々地区を40×40ｍの25区画に分割し大地区とした。大地区は、北西から南東へ順にA→Yのアルファベットをあたえた。

例 DKG Ⅷ（大々地区）を25区画した大地区のアミ部分はDKG ⅧＳと表記される。

3．大地区を８×８ｍの25区画に分割し中地区とした。中地区は、北西から南東へ順に１→25の番号をあたえた。遺構測量の基準とした。

例 DKG ⅧＳ（大地区）を25区画した中地区のアミ部分はDKG ⅧＳ—07と表記される。

4．大地区を２×２ｍに分割しこれを小地区とした。小地区は、大地区の北西隅を起点としX軸上に西から東へA→Tのアルファベットを、Y軸上に北から南へ01→20の数字を記号として与え40区分し、両者を合わせて小地区名とした。小地区は遺構外遺物の取り上げの基準とした。

例 DKG ⅧＳ（大地区）を40区分した小地区のアミ部分はDKG ⅧＳ—E10と表記される。

各地区の呼称は北西隅で表す。そして、近接し合う複数の遺跡では、当然ながら大々地区を共有することになるが、遺跡単位でその地区名は異なる。

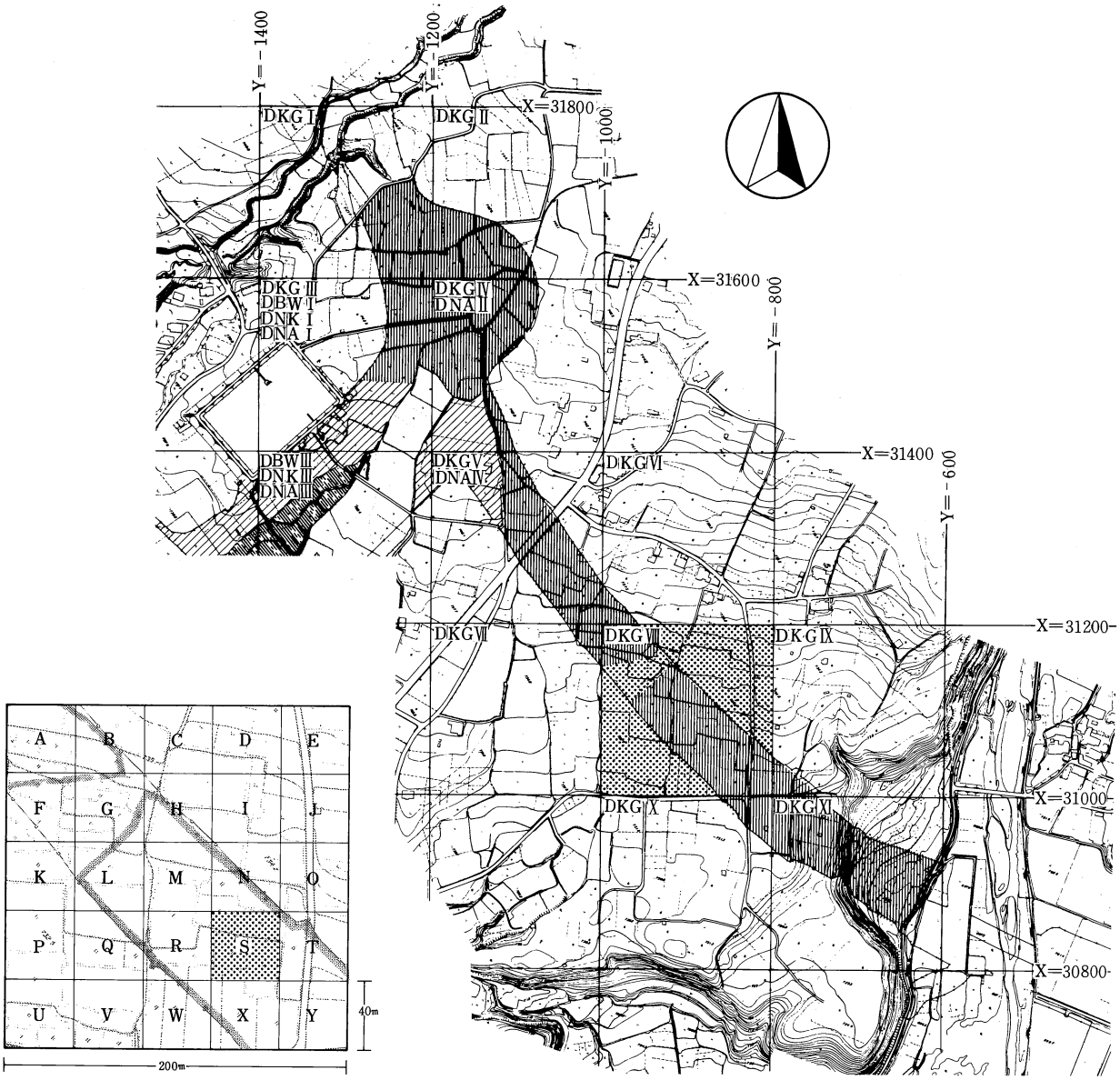
例 DKGⅢは枇杷坂遺跡群（DBWⅠ）・西赤座遺跡（DNAⅠ）・中久保田遺跡（DNKⅠ）と共有する。
各遺跡のグッリド設定は図３・４、表４に記した。

現場による調査区およびベンチマークの設定は、道路公団設置の引照点を利用した。調査区は中地区(８×８ｍ)が基本で、業者委託をして設定したが、一部は調査研究員によって設定した。標高は同様に公団の基準点を利用してベンチマークを設定した。

遺構などの測量は、原則として簡易遣り方法で行った。全体図と遺構実測図については、業者委託の航空写真測量を採用したが、一部では平板測量を実施した。発掘範囲やトレンチの位置、土層のポイントは光波測距儀を用いて計測した。

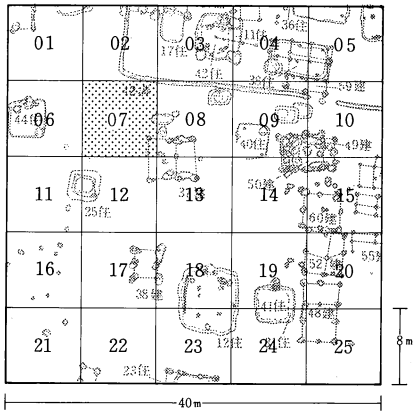
縮尺は、土層および遺構については20分の１、住居址付属施設は10分の１、全体図類は100分の１表記を原則とした。

遺物の取り上げについては、遺構外のものは小地区ごとまたはドットあるいは中地区での取り上げとした。遺構内では、層位別の取り上げとした。竪穴住居址は、層位別はむろん、床面上・カマド内出土などとしたほか、遺存状態の良好な遺物は１点ずつ位置と標高を記録した。

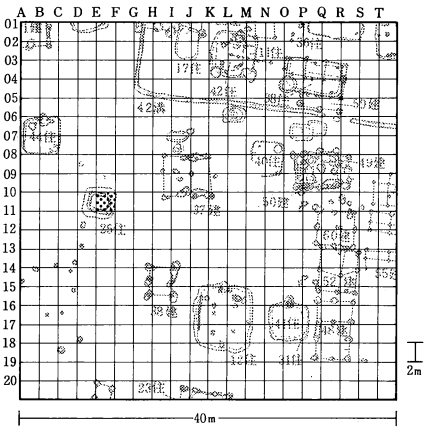


大地区　40×40m（DKG Ⅷ S）

大々地区　200×200 m（DKG Ⅷ）



中地区　8 × 8 m（DKG Ⅷ S-07）



小地区　2 × 2 m（DKG Ⅷ S-E10）

図２　調査区設定

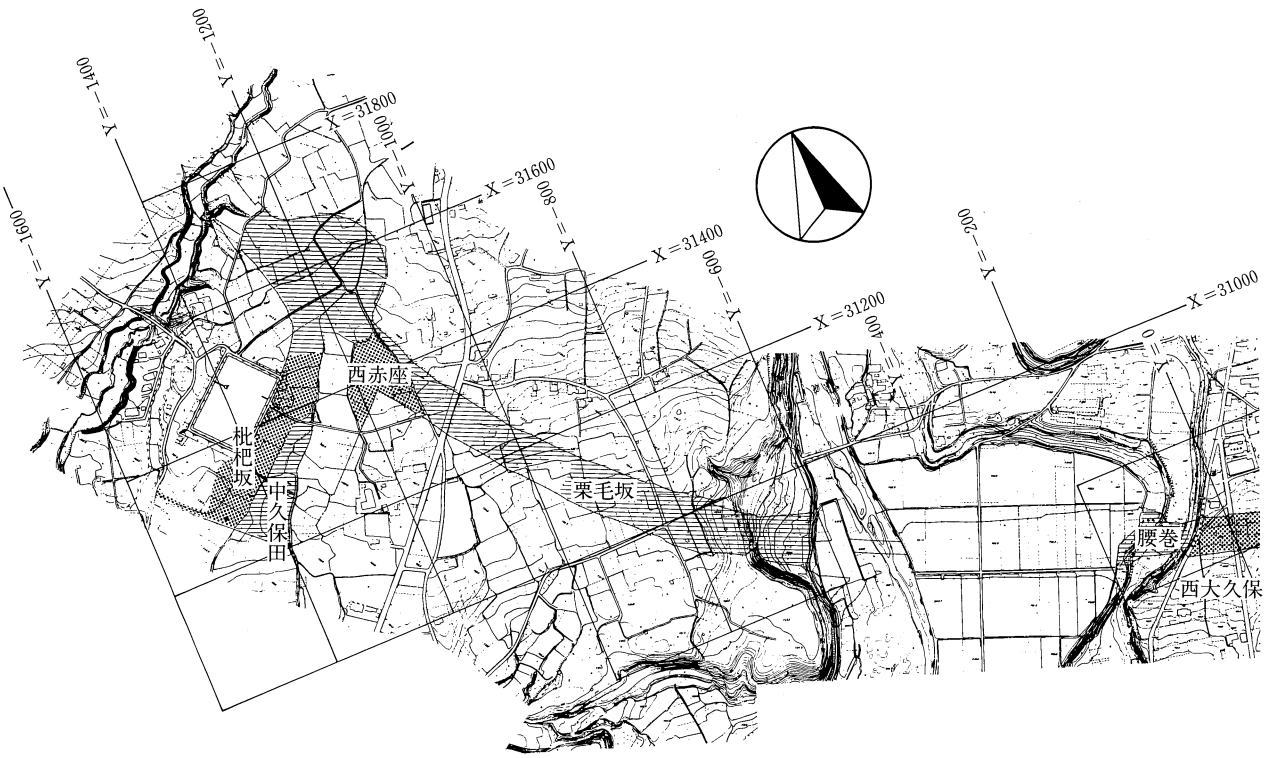


図3　大々地区設定1（平根・岩村田地区）

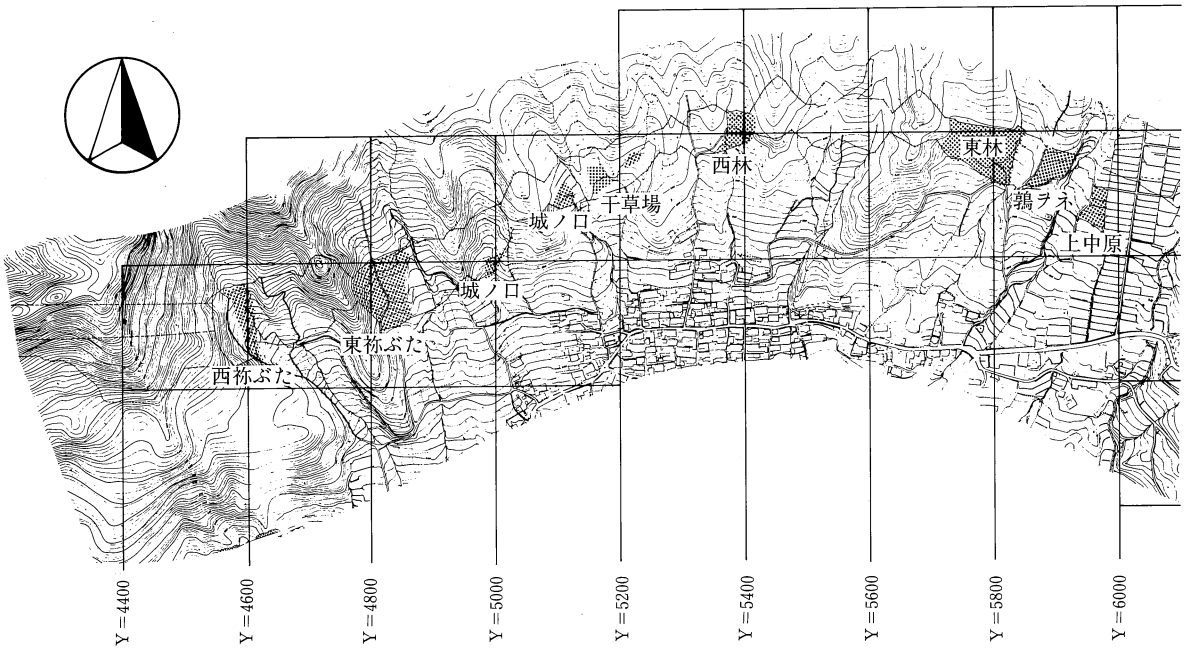
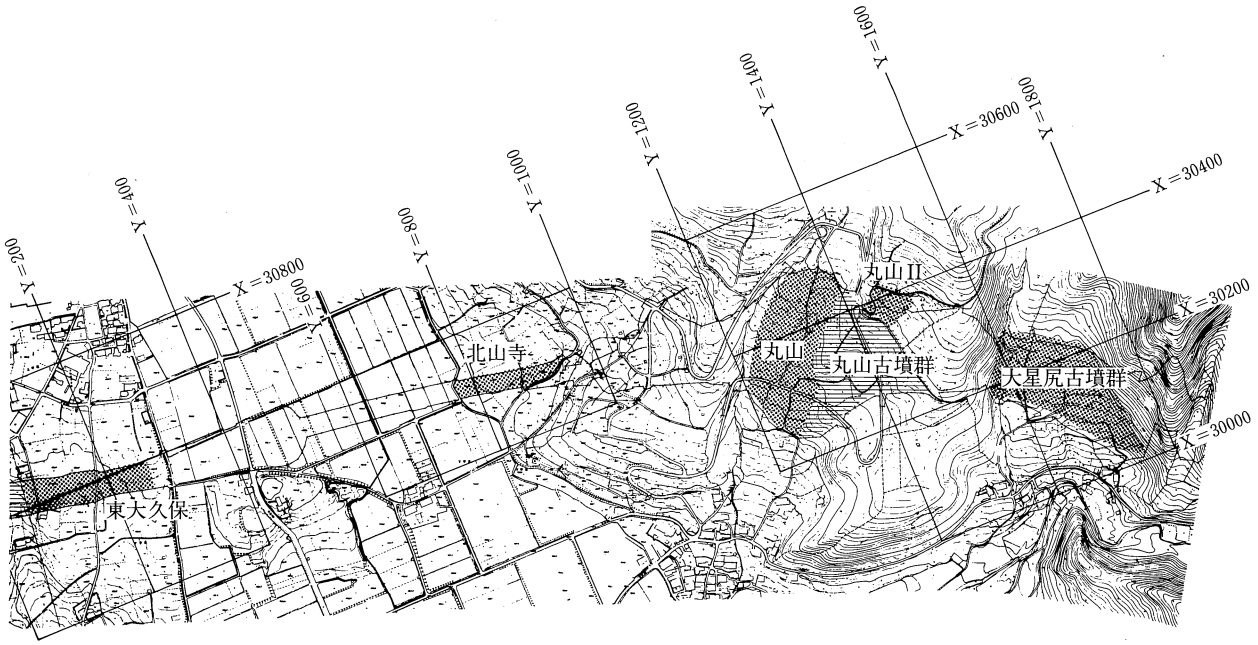


図4　大々地区設定2（香坂東地地区）


Y＝200
Y＝400
Y＝600
Y＝800
Y＝1000
Y＝1200
Y＝1400
Y＝1600
Y＝1800
X＝30800
X＝30600
X＝30400
X＝30200
X＝30000
東大久保
北山寺
丸山
丸山II
丸山古墳群
大星尻古墳群

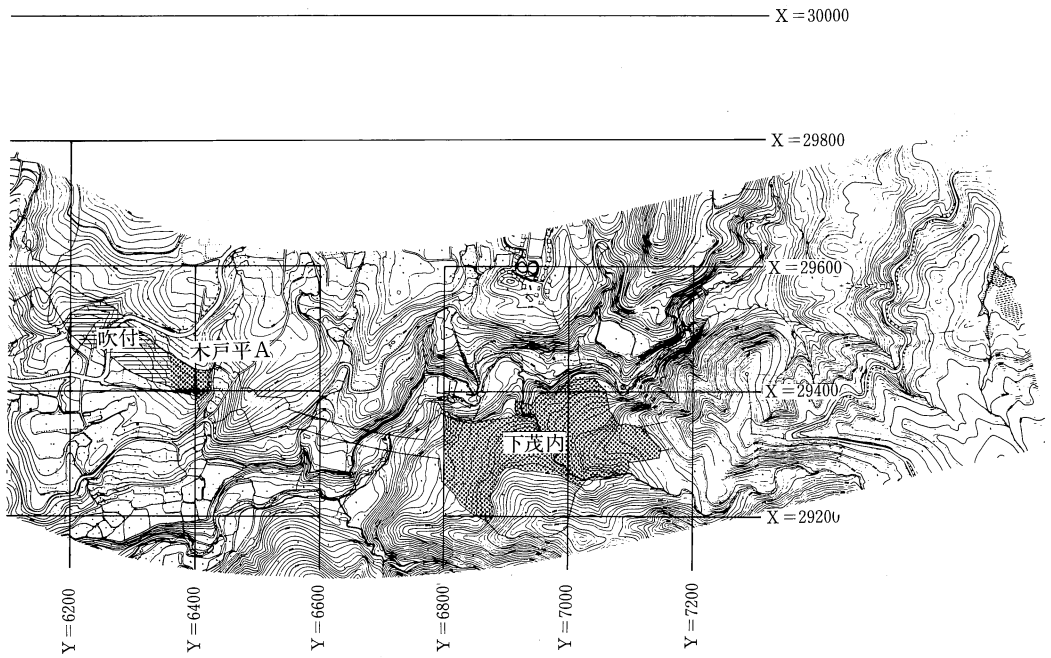

X＝30000
X＝29800
X＝29600
X＝29400
X＝29200
吹付
木戸平A
下茂内
Y＝6200
Y＝6400
Y＝6600
Y＝6800
Y＝7000
Y＝7200

表4　大々地区一覧

地区	番号	遺跡名	調査対象面積 m²	I	II	III	IV	V	VI
	1	下茂内	28,200	X＝＋29,600 Y＝＋ 6,800	X＝＋29,600 Y＝＋ 7,000	X＝＋29,400 Y＝＋ 6,800	X＝＋29,400 Y＝＋ 7,000		
東地	2	木戸平A	3,000	X＝＋29,600 Y＝＋ 6,200	X＝＋29,600 Y＝＋ 6,400	X＝＋29,400 Y＝＋ 6,200	X＝＋29,400 Y＝＋ 6,400		
	3	吹付	10,300	X＝＋29,600 Y＝＋ 6,000	X＝＋29,600 Y＝＋ 6,200				
	4	上中原	1,700	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,800					
	5	鶉ヲネ	2,400	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,800					
	6	東林	7,900	X＝＋30,000 Y＝＋ 5,600	X＝＋30,000 Y＝＋ 5,800	X＝＋29;800 Y＝＋ 5,600	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,800		
	7	西林	2,400	X＝＋30,000 Y＝＋ 5,200	X＝＋30,000 Y＝＋ 5,400	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,200	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,400		
	8	干草場	1,700	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,000	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,200				
	9	城の口	700	X＝＋29,800 Y＝＋ 4,800	X＝＋29,800 Y＝＋ 5,000	X＝＋29,600 Y＝＋ 4,800	X＝＋29,600 Y＝＋ 5,000		
	10	東祢ぶた	7,400	X＝＋29,800 Y＝＋ 4,600	X＝＋29,800 Y＝＋ 4,800	X＝＋29,600 Y＝＋ 4,600	Y＝＋29,600 Y＝＋ 4,800		
	11	西祢ぶた	2,300	X＝＋29,600 Y＝＋ 4,400	X＝＋29,600 Y＝＋ 4,600				
平根	12	大星尻古墳群	20,000	X＝＋30,400 Y＝＋ 1,400	X＝＋30,400 Y＝＋ 1,600	X＝＋30,200 Y＝＋ 1,400	X＝＋30,200 Y＝＋ 1,600		
	13	丸山古墳群	2,200	X＝＋30,600 Y＝＋ 1,200	X＝＋30,600 Y＝＋ 1,400	X＝＋30,400 Y＝＋ 1,200	X＝＋30,400 Y＝＋ 1,400		
	14	丸山II	3,000	X＝＋30,600 Y＝＋ 1,400	X＝＋30,400 Y＝＋ 1,400				
	15	丸山	25,300	X＝＋30,600 Y＝＋ 1,200	X＝＋30,600 Y＝＋ 1,400	X＝＋30,400 Y＝＋ 1,200	X＝＋30,400 Y＝＋ 1,400		
	16	北山寺	5,100	X＝＋30,600 Y＝＋ 600	X＝＋30,600 Y＝＋ 800				
	17	東大久保	8,700	X＝＋30,800 Y＝± 0	X＝＋30,800 Y＝＋ 200	X＝＋30,600 Y＝± 0	X＝＋30,600 Y＝＋ 200		
	18	西大久保	6,400	X＝＋30,800 Y＝－ 200	X＝＋30,800 Y＝± 0	X＝＋30,600 Y＝＋ 0			
	19	腰巻	5,300	X＝＋30,800 Y＝－ 200					
岩村田	20	栗毛坂	78,500	I X＝＋31,800 Y＝－ 1,400	II X＝＋31,800 Y＝－ 1,200	III X＝＋31,600 Y＝－ 1,400	IV X＝＋31,600 Y＝－ 1,200	V X＝＋31,400 Y＝－ 1,200	VI X＝＋31,400 Y＝－ 1,000
				VII X＝＋31,200 Y＝－ 1,200	VIII X＝＋31,200 Y＝－ 1,000	IX X＝＋31,200 Y＝－ 800	X X＝＋31,000 Y＝－ 1,000	XI X＝＋31,000 Y＝－ 800	
	21	西赤座	9,200	X＝＋31,600 Y＝－ 1,400	X＝＋31,600 Y＝－ 1,200	X＝＋31,400 Y＝－ 1,400	X＝－31,400 Y＝－ 1,200		
	22	中久保田	7,800	X＝＋31,600 Y＝－ 1,400	X＝＋31,400 Y＝－ 1,600	X＝＋31,400 Y＝－ 1,400	X＝＋31,200 Y＝－ 1,600	X＝＋31,200 Y＝－ 1,400	
	23	枇杷坂	16,000	X＝＋31,600 Y＝－ 1,400	X＝＋31,400 Y＝－ 1,600	X＝＋31,400 Y＝－ 1,400			

4　報告書編集方法

(1)　編集方針

本報告の対象となる22遺跡はその時期・性格・規模などの点で多様であることから、各遺跡の報告に際しては、事実記載・分析を基本方針とした。このため本報告書は合本的性格を持つが、一方で佐久地区全体が時期的に通観できるような分担体制をとるとともに、冊子としての統一性に心掛けた。なお、各遺跡の評価を下すまでを報告者の責任と考える。

表５　整理担当

地区	番号	遺跡名	遺跡担当	地区	番号	遺跡名	遺跡担当	時代別担当ほか	
	1	下茂内		平根	13	丸山古墳	宇賀神	縄文土器	百瀬・近藤
東地	2	木戸平A	百瀬		14	丸山Ⅱ	宇賀神	縄文小形石器	新海
	3	吹付	百瀬		15	丸山	寺島	縄文大形石器	岡村
	4	上中原	新海		16	北山寺	寺島	弥生～古墳時代土器	宇賀神
	5	鶉ヲネ	新海		17	東大久保	寺島	弥生時代以降の石器	岡村
	6	東林	新海		18	西大久保	寺島	奈良時代以降の土器	寺島
	7	西林	宇賀神		19	腰巻	寺島	自然遺物	輿水
	8	干草場	宇賀神	岩村田	20	栗毛坂	寺島 岡村 宇賀神	保存処理	輿水
	9	城の口	宇賀神					写真撮影～プリント	輿水
	10	東祢ぶた	百瀬		21	西赤座	岡村		
	11	西祢ぶた	岡村		22	中久保田	岡村		
	12	大星尻古墳	百瀬		23	枇杷坂	岡村		

(2)　遺構の記述

ア　竪穴住居址の記述

記載は、原則的に以下の順序で記述してある。位置・立地、検出状況・重複・切り合い、規模・形状・床面積、主軸方位、覆土、遺物の出土状況、床面・壁・周溝、柱穴・ピット、カマド、時期。

なお、事実記載の数量が膨大になる栗毛坂遺跡群は、数値等について表を節末に付し、本文中では記述していない。

床面積の計測にはプラニメーターを用い、３回の計測の平均値を採用した。主軸方位は、カマド設置壁を上として推定・計測した。

イ　掘立柱建物址の記述

記載は、一部を除いて原則的に竪穴住居址と同様である。主軸方位は桁行き方向で推定・計測し、不明なものについては南北棟として推定・計測した。柱間寸法は柱穴の状況により、柱痕・据え方・掘り方の中心部を基準として計測した。面積は、柱列の内側で計測した。

なお、事実記載の数量が膨大になる栗毛坂遺跡群は、数値等について竪穴住居址同様に節末に付した。

(3)　遺物類の記述

ア　縄文土器の整理と記述

縄文土器の整理に際してはまず必要に応じて計量を行いながら遺構内および遺構外それぞれに接合作業

を行った。接合終了後、遺構やグリッドを単位として時期別分類を実施した。分類の単位は草創期から晩期の6期区分を大枠とし、さらに土器型式群ないしは土器様式を単位として設定した。設定項目は以下の15期に区分され、本報告書すべてに共通するものとした。

草創期の土器

早期前葉の土器（押型文系土器・撚糸文系土器・貝殻沈線文系土器）

早期後葉の土器（貝殻条痕文系土器）

早期末葉～前期初頭の土器（絡条体圧痕文系土器・花積下層式土器など）

前期前葉の土器（関山式土器・黒浜式土器など）

前期後葉の土器（諸磯式土器・北白川下層式土器など）

前期末葉～中期初頭の土器（五領ヶ台式土器など）

中期前葉の土器（貉沢式土器・新道式土器・阿玉台式土器など）

中期中葉の土器（藤内式土器・井戸尻式土器）

中期後葉の土器（加曽利E式土器・曽利式土器・佐久系の土器）

後期初頭の土器（称名寺式土器）

後期前葉の土器（堀之内式土器）

後期中葉～後葉の土器（加曽利B式土器など）

晩期の土器

以上のような時期設定のもとに土器群の分類を進め、各分類項目ごとに総数量や分布を記録しつつ、資料化できる個体の抽出を行った。

抽出した土器の記載は上記の時期区分にしたがって行い、必要に応じて細分類を加えた。しかし、この段階で分類項目を記号化して表記することは避け、小見出しの提示にとどめた。また、原則的には従来の編年観・型式観におおむね準拠して記述したが、一部本地域に特徴的な土器については便宜的な名称を用いた。

図版の作成に当たっては時期区分の序列にしたがって掲載したが、個別的には実測図を優先し拓影図をそれに続けた。図版中の個体番号については各遺跡を単位として、遺構内・遺構外をとわず初出のものから通し番号をつけた。

なお、土器の分類記述に際しては、廣瀬昭弘・三上徹也・寺内隆夫（当センター長野調査事務所）の協力を得た。

イ 縄文時代の石器・石片の記述

縄文時代の石器を分類・記述する際に、もっとも一般的に使用される分類言語の範疇は器種分類であろう。この器種分類は外形的特徴などから石器を分類していくが、その分類基準説明言語は各々の石器で異なったもので、統一された同地平で石器を分類したものではない。その要因は外形的特徴からくるイメージが基礎にあるためだ。そのため分類言語それ自体が示す・対応する厳密な石器は存在しない。このことは反面、イメージを説明するための言語枠から外れる石器が存在することでも明らかである。であるから、あるイメージを説明するため、石器が表面的に持っているそれだけの形と、その形が生れた背景を含む「形」とを説明する言語が混在して分類説明を行なうわけである。

以上のような性格を器種分類は持つが、縄文時代の石器研究が伝統的に用いてきたことも事実であり、これに用いられる分類言語によって意志の伝達がはかられてきた。今後の研究方向としては一般的に認識されている分類言語をどう規定してゆくのかが基本的な問題となる。この場合も単なる属性の羅列を越え

た、諸石器の相互の関係性の中でされねばならないと考える。

これらの背景をふまえた上で、本報告では外形的特徴を基にした器種分類によって、原則として、以下の区分・配列に従って記述した。その前提の後、属性等を抽出した。この第一義的な器種分類は、本書の全遺跡を網羅するものである。

各器種の外形的特徴を、以下のように捉えた。

1．尖頭器：鋭利な先端部を作出した石器
2．石鏃：扁平で鋭利な先端部を作出した、三角形状の小形石器
3．石錐：角錐ないし円錐状の尖端部を作出した石器
4．石匙：対照的な抉りを有し、刃部を作出した石器
5．スクレイパー：縁辺部に刃部を作出し、規則的な剥離痕が二段以上重なる石器
6．ピエスエスキーユ：円辺に対になる剥落した痕跡が連続する石器
7．小剥離痕を有する剥片：素材の一部に小剥離痕が連続する石器
8．大形剥片石器：おもに安山岩系の素材剥片の縁辺に刃部を作出した石器
9．打製石斧：礫・大形の剥片を打ち欠いて斧形に整形された石器
10．磨製石斧：礫・大形の剥片を打ち欠いて、さらに研磨して、斧形に整形された石器
11．敲石：てごろな礫の端部に敲打痕が認められる石器
12．磨石類：てごろな礫の面部に磨面・凹みが認められる石器
13．石皿・台石：大形の礫素材の面部に磨面が認められる石器
14．多孔石：大形の礫素材の面部にＶ字状の凹みが認められる石器
15．砥石類：礫素材の面部に研磨作業面を持つ石器
16．礫器：礫素材の一部に粗雑な加工が認められる石器
17．石製品
18．軽石製石
19．その他
　・剥片：主要剥離面を有する石片
　・石核・残核：ネガティブな岩塊、特に砕屑状なものを後者とする
　・原石

ウ　古代の土器

土器の種類および分類、また、時期は３章18節５分析（1）土器の中で行うこととする。各遺構からの出土土器の整理に際しては特に遺構の時期と異なる土器を除き破片を含め遺物の個体数を把握することにつとめたが、整理期間および筆者の能力から各遺構に帰属する遺物を詳細に分別しきれなかった。

図版作成に当たっては、食器・煮沸具・貯蔵具・鉄製品・土製品・石製品の器種順に、その各々は須恵器・土師器・灰釉陶器の順に掲載した。

エ　輸入土器

輸入土器に際しては市川隆之（当センター長野調査事務所）に分類して頂いた。

第2章　環　　境

第1節　佐久地方北部の地形発達

以下の記述は、発掘調査を行った各遺跡の土層を基に、小地域での過程を類推し一般化を試みたものである。使用したデータは各遺跡の土層所見と5000分の1地形図を主とし、地質に関しては『佐久市志自然編』(註1)や『上越線地表踏査報告書』(註2)などに発表されている内容に準拠して記した。

1　地形概観

上越線ルートに伴う地形は、大観して東半が山地、西半が平坦地となっており、東から西へ傾斜していると言える。平面的な位置では、南北に細長い佐久盆地の東北端部に当たり、周辺山地から盆地周縁の緩斜面を上越線ルートが東西に突き抜ける形になっている(図1)。一般に東半の地質は古く、地形も鮮新世後期以来大きな変化はなく、大局的には侵食地域である(註3)。西半は盆地中央(本地域より南方)へ向けて緩く傾斜しており、本地域では特徴的に浅間軽石流堆積物が表層を覆うものの本来は段丘(または扇状地)が発達する地域とみられ、主として南流する湯川等起源とする更新統が卓越するものと考えられる。このことから、西半は完新世以降の侵食地域であり、完新世の堆積地域に当たるいわゆる「沖積低地」は中込以南の千曲川流域の一帯に求めることができる。

以上を背景とするため、今回発掘調査した各遺跡の土層は全般に薄く、土層の広がりの範囲も狭く、堆積量は沖積低地のものと比べものにならない。これに対し、中込以南の沖積低地では堆積量が圧倒的に多いことが予想され、長野盆地や松本盆地と同様、地下の深いところに縄文時代の遺跡が埋没している可能性が高い。

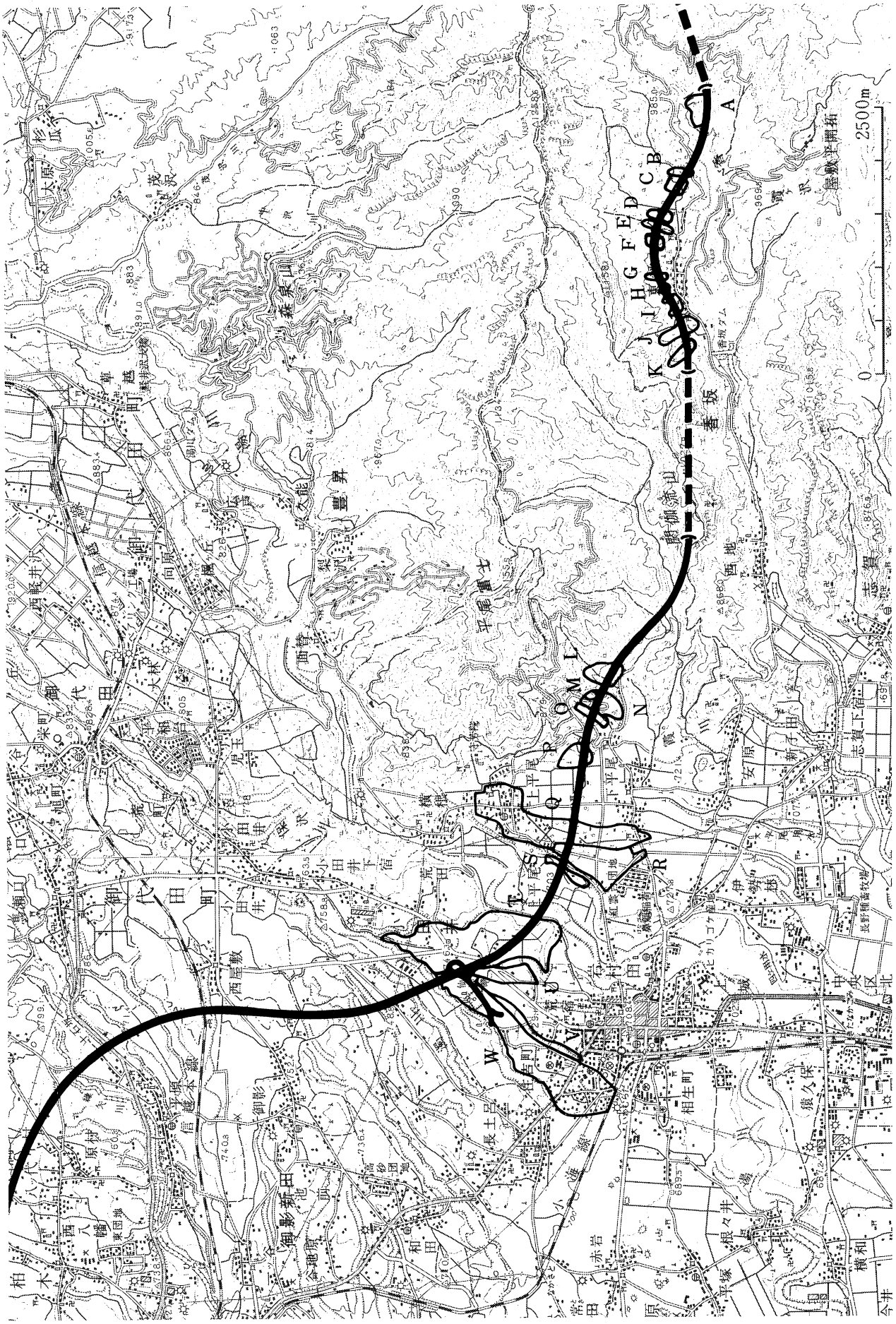
2　基盤地質

東半の周辺山地はグリーン・タフの駒込層・八重久保層、鮮新統の兜岩層および平尾山安山岩類・志賀溶結凝灰岩類・貫入岩類・荒船火山岩類、更新統～完新統の河川堆積物から成り、西半の平坦地は更新統最上部の浅間軽石流堆積物・軽石流二次堆積物、完新統の河川堆積物から成る(註1)。

地史から見ると、地質学のオーダーでの現地形が形成されるまで4回のステージを設定することができる(表1)。ステージ1はフォッサ・マグナ形成期(約2800万年前)～大杭時階の変動期(約400万年前)(註4)で、海の時代である。フォッサ・マグナ形成直後のグリーン・タフ海底火山活動に始まる活発な火成活動や地向斜に流入する多量の土砂によって駒込層や八重久保層が堆積し、その後の地殻変動に伴って兜岩層(註5)や平尾山安山岩を堆積した。フォッサ・マグナ地域に生じた海(地向斜)が発展し変化し、やがて消滅(海退・陸化)していく段階である(註6)。

ステージ2は大杭時階の変動期～六甲変動期(約50万年前)(註7)で、湖と火山の時代である。小諸溶結凝灰岩や志賀溶結凝灰岩の噴出に伴って現佐久盆地からさらに西方の川西地区と呼ばれる地域にかけての一帯が陥没して大きな湖が生じ、陸成層である小諸層群が堆積した。この段階は東半が陸化して現在ほど高くはない程度の山地になっていたと考えられ、貫入岩類や荒船火山岩類など旺盛な火山活動の舞台となっていた。

ステージ3は六甲変動期～更新世末(1万年前)で、川の時代である。佐久盆地や周辺山地、川西地区の丘陵が形成され、現地形の基本が完成された。東半の大型谷である香坂川に沿って、何回かの気候変動に伴



アルファベットは、第１章図１の数字の順の符合する。

図１　地形図

表1　本地域の地質発達史

ステージ	年代	地　層	絶対年代	地史上の事変	火成活動	地　質　環　境
		(西半)　(東半)	(万年前)		浅間火山活動	
ステージ4	完新世			江戸海退	A～H降下軽石・スコリア　前掛山の活動	
				縄文海進	Shテフラ	沖積段丘の形成 扇状地の形成
		扇状地堆積物	1	最終氷期終了	軽石流墳出 AS—YP	
ステージ3	更新世	浅間軽石流　段丘堆積物				
		塚原「泥流」	8		水蒸気爆発	段丘の形成
		扇状地堆積物				
		段丘堆積物	10			
		？？？	50	六甲変動	(八ケ岳火山活動)	ブロック運動 堆積盆が南部へ移動
ステージ2		小諸層群	164		烏帽子火山群火山活動	
		？？？				
	鮮新世	志賀溶結凝灰岩層			塩基性火山活動	東半上昇
		兜岩層	400	大杭時階の変動	酸性火山活動	西半陥没—古小諸湖発生 一帯の平準化
ステージ1	中新世	八重久保層	540			地向斜の消滅—陸化 地向斜が東西に分化
		駒込層	2800	フォッサ・マグナ形成	グリーンタフ 海底火山活動	地向斜発生

う段丘が形成され、河床は上下しながら全体として低下していった。西半は北部の烏帽子火山群～浅間山の形成と堆積盆の南方への移動に伴って南へ緩傾斜する地形となり、多分、南流する湯川の下流域には更新世の扇状地が形成され、また、湯川の下刻により段丘が形成されたと思われる。その後、更新世後期に入って八ケ岳一帯の急激な上昇によって南北の傾斜の向きが逆転し、千曲川が現在のように北へ流れるようになって湯川の下流の流向が北方へJ字形にターンしたと推測される。

この間、本地域は全体に上昇と侵食が進み、山地はますます急峻に、谷部にはますます幅を広げ、だんだん現在見る地形に近付いてきたものと考えられる。こうした中、1万3000～1万年程度前2回にわたって浅間山が大噴火している。大量の軽石流が湯川に沿って流下し、扇状地や段丘を埋めつくした。

ステージ4は1万年前～現在で、地質年代と、周辺山地と盆地周縁斜面という本地域の地形的な位置からみて、地殻変動や河川の動きといったグローバルな見方は必要ない。マスムーブメントによって細部の地形が形作られた時代と言える。完新統または沖積層(註8)が形成される段階であり、地形形成のオーダーは今までの段階に比べて極めて小さく、所々で変化に富んでいる。以下に各遺跡の土層のデータを基に小地域での地形形成過程を考察する。

3　地形区分

上越線が山地から盆地周縁の緩斜面を貫いていることについては既に触れた。ここではまず、遺跡が立地する地形を山地と平地とに大区分する。ただし、盆地地形を周辺の山地と平坦地に分けるとき、平坦地には段丘や扇状地などから成る周縁斜面と沖積層から成る中央部の沖積低地とが含まれる。ここで言う平地は、盆地周縁の斜面を指す。

さらに、各遺跡が営まれていた頃の地形を基に小区分し、山地—河原、山地—谷間、山地—斜面、平地

―台地、平地―沖積段丘の５タイプについて記載する。

4　各タイプ

山地―河原タイプ

下茂内遺跡がこれに当たり、香坂川による沖積段丘上に立地している。

下茂内遺跡の基本土層は(第２図１)、段丘礫層または崖錐堆積物を基盤に、下位より層相の側方変化の激しい黄色砂層＜ⅩⅤ層＞、As―YP 層(浅間―板鼻黄色軽石層)、ラミナを含む黄色砂壌土層＜Ⅶ～Ⅷ層＞、上部が壌土化した(壌土モデルのＡ～Ｃ層)壌土層＜Ⅴ～Ⅶ層＞、Sh 層(下茂内テフラ層)、土壌モデルのA3層相当の土壌層＜ⅣＢ層＞、土壌モデルのＡ～Ｂ層相当の土壌層＜Ⅲ～ⅣＡ層＞、土壌モデルのＡ～Ｂ層相当の砂壌土層＜Ⅰ～Ⅱ層＞である。この内、Ⅶ層、Ⅴ層、ⅣＢ層には軽石片やスコリア質軽石等を少量混入している。また、Ⅶ層上面での検出面の地形は、香坂川の流線に平行して山側より微高地→低地→微高地→低地→沖積段丘段丘崖と、北東―南東方向に細長い微地形が縞状に繰り返す。低地には巨～小礫が密に堆積して、小刻みに蛇行している。

遺物は、As―YP 層の上・下位から縄文草創期の尖頭器が、Sh 層の下位層から縄文前期初頭の土器片が、Sh 層の上位層から縄文中期の土器片が検出されている。なお、As―YP の絶対年代は１万3000～１万4000年前とされており(註８)、遺物のあり方と調和的である。以上から、約１万8000年前とされている最終氷期最盛期に周辺斜面から砕屑物が供給されて谷底に平坦面が形成され、縄文草創期には平坦面上を古い香坂川が幾本かの分流を伴って下茂内遺跡を流れていたと考えられる。分流の存在と小蛇行の状況から、この遺跡の下流のどこかが閉塞されており、氷期の砕屑物によってダムアップされていた可能性がある。いずれにせよ、分流間の微高地(中洲や島)で付近に転がっていた原石を打ち欠いて尖頭器を製作していたものと思われる。こうした中、西方の平地に浅間軽石流が流下するのと同時にこの遺跡に As―YP が降下した。

縄文草創期後の河床低下に伴って遺跡は沖積段丘化(水を被らなくなった)し、谷壁斜面から小規模なマスムーブメントによって壌土層が堆積した。縄文早期初頭～中期頃にはこの壌土層は壌土化しており、草木の生い茂ったテラス状の景観となっていた。Sh 降下後、少なくとも縄文中期をとおして谷壁斜面から極めて緩慢に細粒の砕屑物が供給され続け、ⅣＢ層が堆積した。おそらくこの間、香坂川は下刻が優先し、この遺跡が位置する沖積段丘面と河床との比高はだんだん大きくなっていったと思われる。

縄文中期以降、やや速いスピードで細粒の砕屑物が供給された段階が少なくとも２回(Ⅴ層とⅣＢ層)あり、それぞれの後に砕屑物の供給が長い間ストップしていた時代があったことが考えられる。これはⅢ～ⅣＡ層とⅠ～Ⅱ層とが別々に土壌化していることによる。ただし、詳細な時期は不明である。

山地―谷間タイプ

干草場遺跡、東祢ぶた遺跡、西祢ぶた遺跡、大星尻古墳群がこれに当たり、香坂川の支流がつくった谷中に立地している。

東祢ぶた遺跡の基本土層は(第２図２)、ロームを基盤に下位より基岩の風化礫を含む腐植した砂壌土層＜Ⅵ・Ⅶ層＞、異質物を多く含みやや土壌化した(土壌モデルのＢ層)粘土～壌土層＜Ⅴ層＞、Sh 層、Sh テフラを塊状に含んだ強腐植層＜Ⅳ層＞、風化礫や Sh を含み壌土化した(土壌モデルのＡ～Ｂ層)砂壌土層＜Ⅱ・Ⅲ層＞、および耕土＜Ⅰ層＞で、緩やかな斜面の底部付近に全層厚が最大70 cm ほどで堆積している。全体に細粒物質から成り、基岩の風化礫などの異質物を含み、特に下半の各土層については層全体の土壌化が進んでいる。下半の各土層に異質物を含み、土壌モデルのＢ～Ｃ層を欠くことから、下半の土層は現地で風化・土壌化したのではなく、上方で形成された腐植層がゆっくり匍行してきて堆積したと考えられる。

遺物は、VI層上部から縄文早期末の土器片が、III層中から縄文中期後葉の土器片が検出されている。

Sh層は、浅間火山の前掛山が噴出した発砲不良の安山岩質スコリア質軽石で、山梨文化財研究所の河西氏によると、MK—26～28（前掛山N 0・26～28）テフラに対比される。東祢ぶた遺跡と同様の堆積環境にあった西祢ぶた遺跡や下茂内遺跡でも明瞭に確認されることから、今回の発掘調査で新たに発見された鍵層と言える。

Shテフラの降下時期は、下限について、下茂内遺跡ではSh層直下のV層上部から縄文早期初頭の土器片が検出され、東祢ぶた遺跡では崩積土と思われるV層と下方に小分布するVI層を挟んで、VII層上部から縄文早期末の土器片が検出されている。また、上限について、下茂内遺跡ではSh層直上のIVB層から縄文中期後葉の土器片が検出され、東祢ぶた遺跡では上位層のIII層上部から下茂内遺跡と同タイプの土器片が検出されていることから、縄文前期初頭～中期後葉であろうことが示唆される。

ここで、後述する表層物質の移動を考慮すると、上・下限の範囲が狭まる可能性があるが、移動・堆積

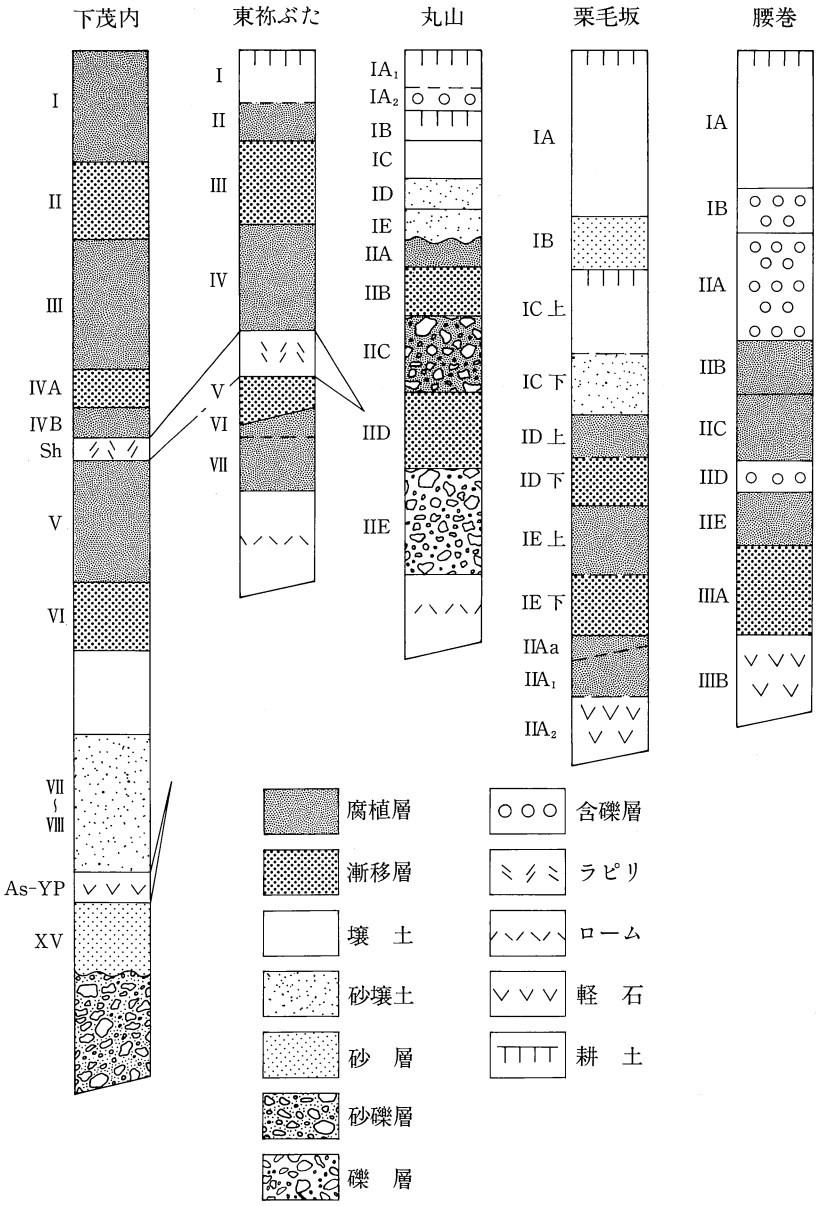


図2　基本土層

に関する実地のデータが現在までのところ明確ではないので、これ以上論を進めることはできない。絶対年代で約4000～6000年前の噴火によるものと理解される。

山地―斜面タイプ

木戸平Ａ遺跡、吹付遺跡、鶉ヲネ遺跡、上中原遺跡、東林遺跡、西林遺跡、城の口遺跡、丸山Ⅱ遺跡、丸山古墳群、丸山遺跡がこれに当たり、中心河川である香坂川に向けて緩傾斜する斜面上に立地している丸山遺跡の基本土層は(図２)、ロームを基盤に、下位より砂質泥をマトリックスとして巨礫を含む淘汰不良の土層＜ⅡＥ層＞、塊状のローム粒や小礫大の風化礫などを多く混入しやや土壌化した泥層＜ⅡＤ層＞、巨礫を混入する部分もあるが全体に均質で腐植している壌土層＜ⅡＣ層＞、土壌モデルのＡ～Ｂ層相当で小礫をわずかに含む壌土層＜ⅡＡ・ⅡＢ層＞、および遺跡内の小谷部を埋積した砂壌土～壌土層＜ⅠA1～ⅠＥ層＞である。丸山遺跡は南西向きに張り出した広い尾根内の凹地部に位置し、凹内のほぼ中心に当たる部分を小谷が南西流していたらしい。小谷を埋積したⅠＡ～ⅠＥ層の土壌化はあまり進行していない。小谷付近ではⅡＡ～ⅡＢ層が削剝され、ⅡＣ層の直上にⅠ層グループが重なっていることから、Ⅰ層グループの何層かはⅠ層グループ堆積以前に人為的に動かされた土である可能性もある。

ⅡＣ層が、縄文前期末～中期初頭の土器片と石器、平安時代の土師器・須恵器を含んでおり、ⅡＣ層を検出面に縄文時代と平安時代の遺構が検出されている。

地形形成を考察する上で注目したいのはⅡＥ層の存在である。礫を多く含み、マトリックスが砂質泥であるということは、比較的短期間に、あまり水の影響のない状態で堆積したことを物語っている。このような堆積物を発生させるメカニズムとして、人為的な埋め立て、崖錐性の崩落、土石流（mud-debris-flow 土質の崩壊物の流体）が予想される。これらの内、人為的な埋め立てはⅡＥ層の規模・堆積時期からみて、当たらない。また、崖錐性の崩落は３つのメカニズムの中で最も時間を要するため、このような堆積物にしばしばラミナ様の縞模様や単層上部に薄い腐植層が見られたり、背後に急斜面を背負っていたりするが、丸山遺跡ではそういった所見はない。したがって、斜面上部が崩壊し、遺跡内の凹地を経由または到達点としてⅡＥ層が堆積したと考えられる。

この時の移動距離は土石流のもつ粘性からみて、それほど長くはなかったと思われる。

また、時期は下位層がローム層で上位層が縄文前期末～縄文中期初頭の遺物包含層となっていることから更新世末期～縄文前期中葉が予想されるが、地形学の成果（註10）から、河川上流部では氷期に堆積が、間氷期には侵食が行われることが広く知られており、最終氷期最盛期（約１万8000年前）または氷期後半の頃（渡部，1991によると氷期後半の方が堆積量が多い）であろうと思われる。

ⅡＥ層の堆積後、崩積土を堆積する時代が続き（ⅡＤ層堆積期）、縄文前期頃から斜面が安定した。その後平安時代まで匍行土が堆積する静かな環境下にあったものと思われる。またこの上位に崩積土を暗示するⅡＡ層とⅡＢ層が堆積していることは、ⅡＢ層とⅡＡ層を堆積した頃の気候が１万年～6000年前のⅡＤ層（崩積土）を堆積した時代と同様にやや寒冷な気候であった可能性を表わしている。

平地―台地タイプ

東大久保遺跡、西大久保遺跡、栗毛坂遺跡群Ｂ・Ｃ地区、西赤座遺跡、中久保田遺跡、枇杷坂遺跡群がこれに当たり、浅間軽石流がつくった平坦な台地上に立地している。

本地域には「田切り」地形が特徴的に発達するが、上記した各遺跡には埋没した古い「田切り」地形をしばしば認めることができる。古い「田切り」地形については、栗毛坂遺跡群が最も資料が豊富で、現地形が形成されるまでの過程を読み取ることができる。

栗毛坂遺跡群の基本土層（図2、L）は、軽石流堆積物を基盤に、下位より基盤の腐植土層＜II Aa・II A1層＞、上部が土壌化した細粒砂と小礫から成る含礫泥層＜ＩＥ上・ＩＥ下層＞、上部が土壌化し異質物を多く含む含礫泥層＜ＩＤ上・ＩＤ下層＞、異質物を若干含みFe・Mnの集積層となっている砂壌土層＜ＩＣ上・ＩＣ下層＞、および水田耕土と集積層＜ＩＡ・ＩＢ層＞で、この内のＩＣ層は全体に一旦グライ化した後の集積と考えられ、ある時期に地下水の通り道になっていた可能性が高い。

Ｉ層グループは台地上の凹地を埋めて堆積し、IE層からIC層へと上位層へ至るほど土層の広がりが大きく、特にIC層は凹地に対して溢れるように分布している。全層厚はＢ地区の東南部が厚く最大で150 cmほどである。土層の広がりと含まれる礫の量、緩傾斜地であることから推測すると、シート状に広がる泥流による堆積物と考えられる。

遺物また遺構は、IIＡ１層から縄文中期以降、および古墳時代末～奈良時代初頭の、ＩＥ層から平安時代の、ＩＣ層から中世のものが検出されている。

基盤面の小地形を見ると、Ｂ地区の北西端部とこれに続くＣ地区が高く、Ｂ地区中央部より南東側は急な落差を伴って約５ｍ低い面が形成されている。地表面の地形は緩く南傾斜しているので、土層は北部で薄く、南部で厚くなっている。低い面の上面は小規模な波状地形をしており、微高地部分の長軸はほぼ南北方向である。この方向は遺跡の東方を蛇行する湯川の流線に調和している。したがって、軽石流堆積後に遺跡の南東部が湯川によって侵食され、その結果落差５ｍの沖積段丘崖が形成され、さらに湯川の河床低下に伴って低位の沖積段丘面が形成されたと解釈される。こうして、古い「田切り」地形が出来上がった。

その後、泥流による埋積過程に至るが、Ｉ層グループの堆積時期に注目したい。発掘所見から得られる資料から、ＩＥ層は奈良時代初頭～平安時代、ＩＤ層は平安時代末～中世初頭、ＩＣ層は中世前半と予想される。松本盆地で筆者が考察した気候との関連と調和するのはＩＤ層とＩＣ層であり、松本盆地との気候の差が大きくない限り、大量の降雨に伴う自然災害（洪水・中小河川の氾濫など）によるものと考えられる。ＩＥ層の堆積時期は、温暖期に向かう気候的には極めて安定した時期と思われ、地域的な気象上の時変があったか、人為的な開発に伴うアクシデントがあったのかも知れない。

平地―沖積段丘タイプ

北山寺遺跡、腰巻遺跡、栗毛坂遺跡群Ａ地区がこれに当たり、沖積段丘崖をすぐ背後に持つ小規模な沖積段丘面上に立地している。

腰巻遺跡は湯川の低位沖積段丘面上にあり、基本土層は（第２図５）軽石流堆積物を基盤に、下位より基盤の腐植土層と漸移層（土壌モデルのＡ～Ｂ層）＜IIＥ・IIIＡ層＞、崩落による含礫泥層＜IIＤ層＞、異質物をあまり含まない２枚の腐植土層＜IIＢ・IIＣ層＞、厚い２枚の崩落による含礫泥層＜ＩＢ・IIＡ層＞、および耕土＜ＩＡ層＞で、崩落による堆積物の分布が上位へいたるほど沖積段丘崖側から河川側へ進出しており、これに伴ってほぼ平坦な沖積段丘面から急斜面へと地形が変化している。

遺物と遺構は、IIＣ層に縄文早期末・後期初頭の土器片・石器が含まれており、IIＢ層から古墳時代前期の住居址と土師器等が検出されている。その他平安時代後期の住居址、中世の溝址、近世の溝址が検出されたが、複雑な土層の堆積状況のために掘り込み面がもう１つ明確でない。

対岸の低位沖積段丘上にある栗毛坂遺跡Ａ地区では、基盤（腐植土層も含む）の上位層から縄文早期末～前期初頭の礫群と土器片が検出されており、腰巻遺跡の立地条件と時期が調和する。湯川と軽石流堆積物の上面との落差は約30ｍあり、１万年前から7000年前の間にこの落差が生じ、遺跡が営まれたことになる。栗毛坂遺跡Ｂ地区の沖積段丘崖（落差５ｍ）を形成した時間、基盤の侵食面上に腐植層が形成される時間

を考慮すれば、落差約30m の段丘崖の形成に費やした時間はさらに短くなることが予想され、湯川の侵食の激しさを物語っている。

また、腰巻遺跡の土層で注目されるのは、上位層へいたるほど粗粒になる傾向にあることで、先に触れた平坦面から急斜面への地形発達が粗粒化に関わっていることが解る。この動因については後に述べる。

5　地形形成のパターン

(1)　沖積段丘の形成

更新世の段丘形成についての詳細な資料は近年富に増加してきている(註10)。それによると、河成段丘の

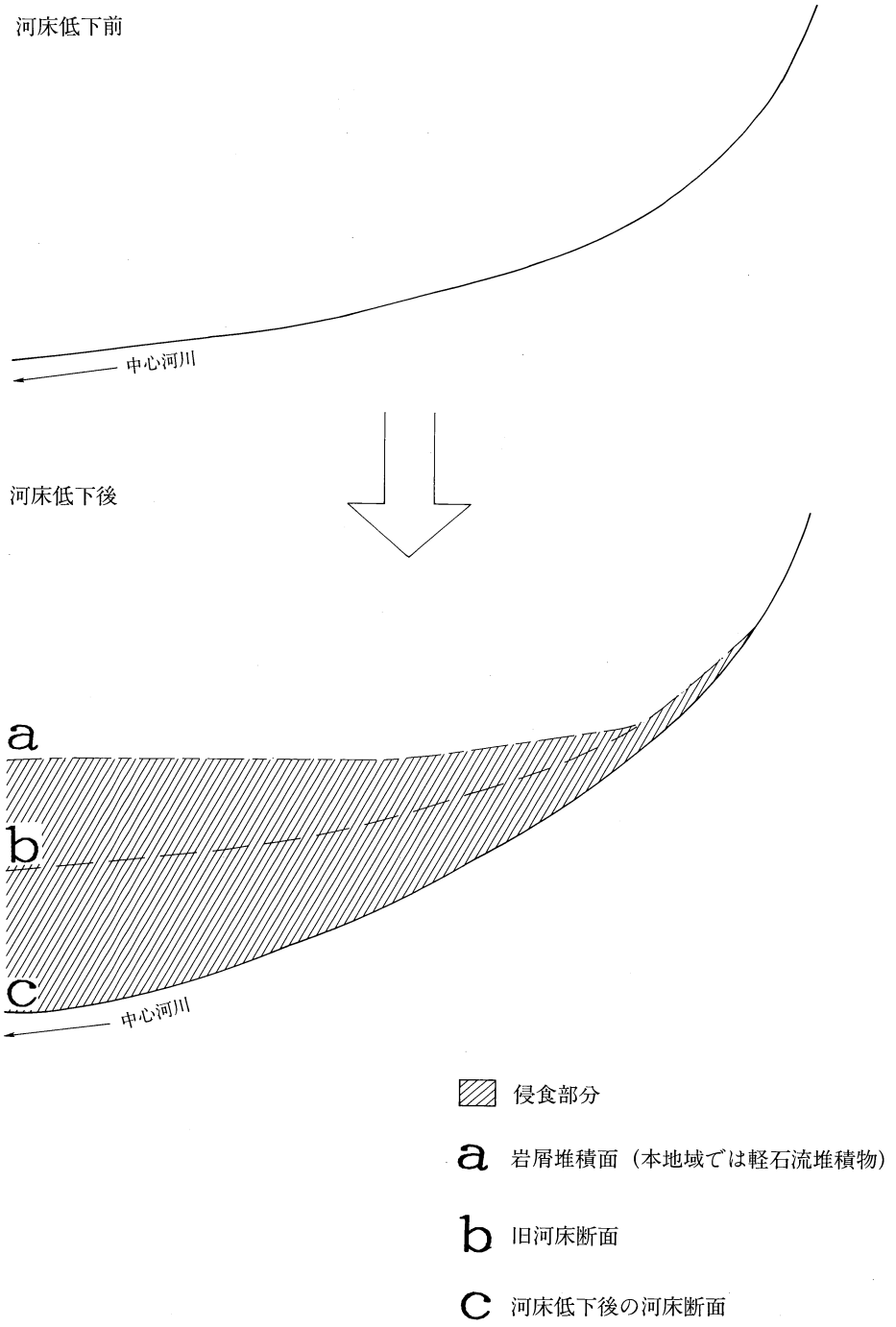


図３　沖積段丘形成のモデル

形成は気候との関連が深く、氷期には河川上流部では斜面崩落物による堆積が、下流部では流量の減少に伴って侵食が行われ、逆に間氷期には上流部で侵食が、下流部で堆積が行われる。したがって、現在谷中に見られる段丘群はかつての気候の変化の痕跡であり、約160万年間の山地の上昇運動を勘案すれば高位にある段丘ほど古く、また侵食を受けており、低位にある段丘ほど新しく原型を保っているということになる。ただし、段丘に関わって使う「高位」や「低位」の語は単に河川からの比高を表すのではなく、離水した時期を表している。

下茂内遺跡は香坂川との比高が約23ｍあるが、遺跡が立地する段丘面より低位には新たな段丘は発見されず、段丘を構成する礫層も断面で分層することはできないので、これが最低位段丘＝沖積段丘であることが判る。つまり、最終氷期の間に側壁から大量の崩落物の供給を受けたが、谷幅が狭い分、厚く谷底を埋積した。そして、最終氷期終了（1万年前）以降連続的に崩落物を下刻し続けた結果、ほぼ一気に比高の大きな沖積段丘が形成されたと考えられる。往々にして遺跡が立地する段丘面と現河床との比高が大きいと、「どうやって生活用水を得たのだろうか」と悩む向きがあるが、河川の下刻を考える必要がある。即ち、その遺跡が営まれた時期の河床の高さは、その遺跡がどの高さ（離水期）の段丘面上に立地するかを考察しないと推定できないのである。

ところで、栗毛坂遺跡群で見られる約30ｍの沖積段丘崖はどのように形成されたのであろうか。河川の河床断面は総じて平衡曲線をなすが、最終的に到達する位置は海面であるという（註11）。ミクロにみて、山間盆地と周辺山地では、盆地内の中心河川との合流点の高度が平衡曲線の最終到達位置に当たる。本地域の場合、香坂川や湯川と千曲川との合流点がそれである。ところが、中心河川の河床自体も下刻が行われているので、平衡曲線の到達位置の高度も下降し続ける。１万年前以降の上昇運動がわずかなものとして考慮にいれなければ、河川の下刻の最大の要因を中心河川の河床低下に求めることができ、この時の侵食量は河川の下流域が大となる（図３）。

以上に加え、最終氷期（約１万年前）には浅間軽石流が湯川の中・下流域に流下して河床を上げている先端は千曲川にまで達し、湯川や千曲川は直ちに元の河床曲線に戻そうと、急速に軽石流堆積物を侵食（下刻＝河床低下）し、結果として落差30ｍの沖積段丘崖が出来上がったものと考えられる。

(2)　マスムーブメントの概要

マスムーブメントは風化した物質が重力によって斜面上を下方へ移動する現象で、移動体の速度や規模は斜面の角度や含水量に多くを支配される。匍行、ソリフラクション、流動、滑動、落下に区分されている。

匍行は最もゆっくりとした動きをするもので、年間の移動距離は数ミリ～数センチメートルといわれている。匍行の特徴は明確なすべり面を示さないことで、表面の物質が微地形を変えずに移動する。

ソリフラクションは主として凍上現象に関わって、霜柱などによって「浮いた土」が溶霜の際に下方へ徐々に移動するものである。

流動は規模が大きく速度も速い。いわゆる「山くずれ」の概念が適当である。含水量や構成物質の粒径によってさらに細分され、岩屑流（debris-avalanche）、土石流、泥流などと呼ばれる。

滑動は明確なすべり面上をその上にある物質がほとんど変形しないで移動するもので、いわゆる「地すべり」の概念が適当である。すべり面は粘土層などの不透水層が担うところが大きい。

落下は岩屑が全部または部分的に空中を団塊となって落下するものである。

以上の内、本地域で確認できたものは匍行と流動による堆積物である。以下に土壌との関係について述べる。

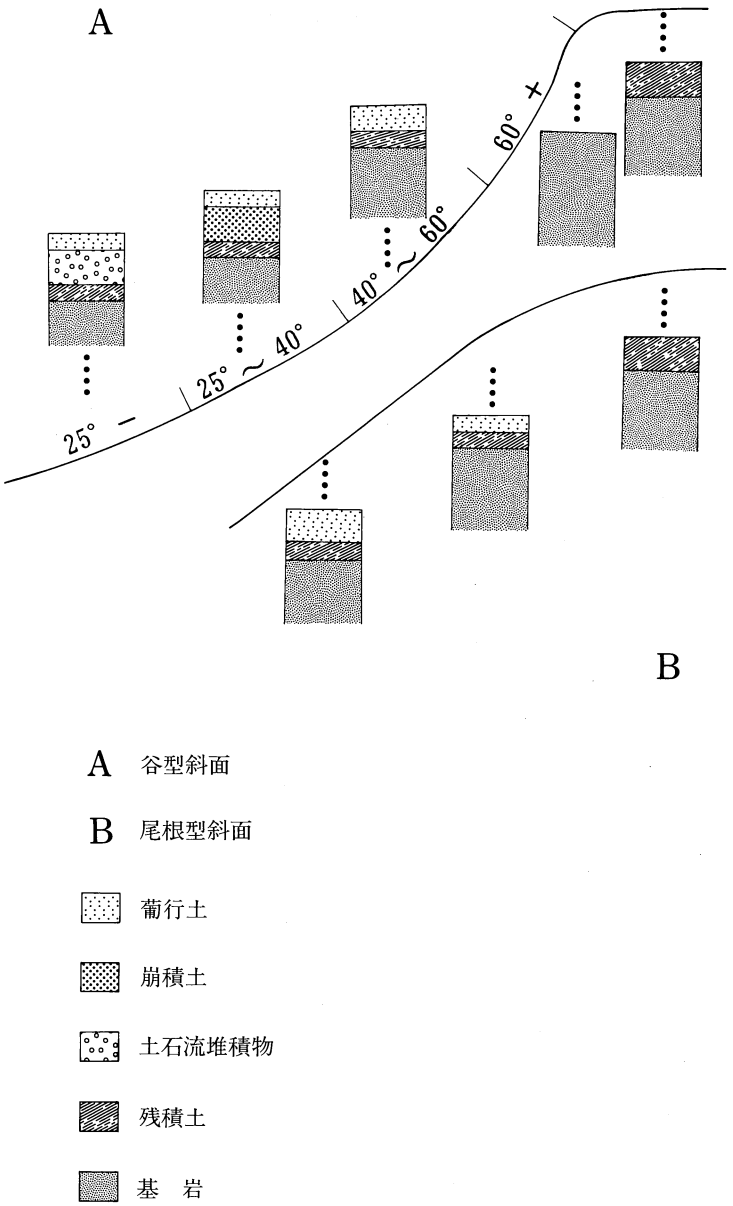


図４　谷型斜面（A）と尾根型斜面（B）における斜面形と表層物質の関係（平野1968より引用）

(3)　斜面での堆積

図４は斜面での土層の堆積をモデル図化した(註12)。ここでいう残積土とは、A～C層の土壌モデルの基本となるもので、基岩の風化物質が移動せずに原位置で土壌化し、堆積モデルでは傾斜角60°以上の急斜面を除いてあらゆる場所で確認できることになっている。土石流堆積物は流動現象によって下方へ移動し、モデルでは残積土上に緩斜面で堆積することになっている。崩積土は移動物質が移動先で土壌化したもので、匍行土より速い動きをする。モデルでは25～40°のやや急斜面で堆積する。匍行土はマスムーブメントによる堆積物としては一般的なもので、動きが極めて緩慢なために移動前・中・後を通して腐植化し、漸移層を伴わないことが多いと考えられる。したがって、急斜面を除くあらゆる斜面上で確認されるはずである。

実際の土層はどうなっているのだろうか。モデルのように基岩―残積土―匍行土の組み合わせは腰巻遺跡で見られるのみで、モデルに近い基岩―残積土の組み合わせは東祢ぶた遺跡と栗毛坂遺跡群に見られる。

全体に匍行土より移動の速い崩積土や土石流による堆積物が多いことに気付く。これは、傾斜角や降水量に異常がなかったとすれば、斜面表層の風化物質を支え続けるような植生が確固としていなかったことを想起させる。

極めて大ざっぱな考察ではあるが、移動の時期を勘案すると興味深い。山地では縄文草創期～早期の間に土石流や崩積土の堆積が行われ、平地では同じ時期に残積土が形成されている。もちろん傾斜角の問題を考慮する必要はあるが、少なくとも腰巻遺跡が立地する地形環境は下茂内遺跡と共通する。異なる点は標高であり、「縄文海進」に向けて温暖化の傾向にあったとは言え、まだ現在の気候より寒冷だったとされており(註8)、山地と平地との植生の差が移動体の速度の差に表れたものと考えられる。続く縄文早期～中期では、山地も平地も匍行土の堆積を主とする穏やかな時期となり、Sh層もよく保存されている。

その後については資料の共通点があまりないために追究できないが、以上のように、気候が及ぼしたマスムーブメントの移動速度への影響を現在ある資料から読み取ることができる。

6　まとめ

(1)　1万年前以降の河床低下は場所によって著しく大きいところがあり、これは1万年前以前の崩落物の厚さと中心河川の下刻の程度に支配される。

(2)　マスムーブメントの移動速度は、移動した時期の気候と標高に左右される可能性が高く、縄文草創期～早期には山地で比較的急速度のマスムーブメントが活動し、平地では緩慢な動きが認められた。縄文前期～中期には全域で緩速度のマスムーブメントが活動した。

註

註1　佐久市志編纂委員会　1988　『佐久市志・自然編』
註2　建設企画コンサルタントほか　1980　『関越自動車道上越線松井田～佐久間地表踏査報告書』
註3　藤田和夫　1983　『日本の山地形成論』
註4　飯島南海夫ほか　1960　「古小諸湖と熔結凝灰岩について」『フォッサ・マグナ綜研紙』
註5　飯島南海夫ほか　1958　「フォッサ・マグナ東部の火山と基盤」『地球科学』37
　　神津俶祐・木崎喜雄　1955　『北佐久郡誌』
　　八木貞助　1931　「信濃荒船火山兜岩産の植物化石と其の周辺地質との関係」『地質学雑誌』43
註6　飯島南海夫　1962　「フォッサ・マグナ北東部の火山層序学的並びに岩石学的研究（その1）」『信州大学教育学部研究紀要』12
註7　藤田和夫　1962　「六甲変動，その発生前後―西南日本の交差構造と第四紀地殻変動―」
　　1968　『第四紀研究』7
註8　井関弘太郎　1983　『沖積平野』
註9　河西学・山梨文化財研究所　1990　『佐久市下茂内遺跡テフラ（報告）』
註10　渡部満久　1991　「北上低地帯における河成段丘面の編年および後期更新世」『第四紀研究』1
　　吉永秀一郎・宮寺正美　1986　「荒川中流域における下位段丘の形成過程」『第四紀研究』
　　伊藤真人・正木智幸　1984　「北アルプス，乳川流域における更新世の岩屑供給期」『地理学評論』57
　　平川一臣・小野有五　1974　「十勝平野の地形発達史」『地理学評論』47
註11　吉川虎雄　1985　『湿潤変動帯の地形学』
註12　平野昌繁　1968　「斜面形と表層物質の関連性についての一考察」『地理学評論』41

第２節　歴史的環境

佐久地方は以前から、地元教育委員会などによる埋蔵文化財調査が進められており、着実にその成果を蓄積してきた。そして、上信越自動車道の建設を契機とした大規模な開発事業に先立つ、埋蔵文化財の調査件数も大幅に増加し、次々と新しい知見を得ている。

東に妙義荒船佐久高原国定公園、西に八ケ岳中信国定公園、北は浅間の峰々に囲まれ、四方に美しい山なみを望む地である。ここを甲武信岳（こぶしだけ）に源を発する千曲川が南北に貫流し、その数多くの支流は人々に水利と潤いとを与え、またそれらによって開析された大小さまざまな河岸段丘上には、数多くの原始・古代の遺跡が知られている。この千曲川に並行して、佐久甲州街道(国道141号線)が南北に走り、交通の動脈となっている。また高速道をはじめとした交通網の整備により首都圏から信州への玄関口として、新たな展開を見せようとしている。古くは古東山道や中仙道が、東海・近畿と関東とを結ぶ政治・経済・文化上の重要路であったように、新たな１ページを綴り始めていると言える。

上信越自動車道は群馬県藤岡市で分岐し、古今交通の難所である碓氷峠を迂回し佐久市に入る。県境の八風山トンネルを抜けた香坂川流域には、縄文時代草創期から後期の遺跡が知られている。すでに五斗代（ごとしろ）Ｂ（5）、兵士山（4）、曲尾（12）、茂内口（2）遺跡などの発掘調査が行われており、それに加え今回の調査によって、次第にその具体像が明らかになりつつある。

さらに自動車道を西下し平尾山麓を通過すると、佐久平に入る。田切り地形沿いの台地上には周防畑（102）、芝宮（62）長土呂（63）、栗毛坂（61）、枇杷坂（66）などの遺跡群がひろがる。ここでは、かつて弥生から平安時代にかけて連綿とした暮らしが営まれていた。以上かけ足で今回の調査の跡をたどったが、周辺の遺跡調査の成果をふまえ、佐久地方の地域性や特色についてふれたい。

一般に、縄文時代の暮らしは移住から定住へ、また山間地から低地へというように捉えられてきたが、香坂川流域の河岸段丘上に広がる、早期から後期にかけての遺跡を見ると、自然環境、特に地形的な要因に影響された居住域のあり方がうかがえる。つまり、許容人口の制約などによる出入りはあったにしろ、時間幅をもちながら香坂谷をひとつの生活単位として、縄文人の暮らしが営まれていたであろうことがうかがえる。また、湯川の低位段丘部に断続的に展開した栗毛坂遺跡群Ａ地区と比較すると、生業などの生活基盤の違いが考えられる。

吹付遺跡（11）出土の中期前葉・後葉の土器からみると、関東土器文化圏、特に群馬の影響を受けつつ、佐久地方独自の土器文化を展開したことが読み取れる。さらに、香坂谷が物的・人的交流の地域的な接点であったとも位置づけられる。

弥生時代についても、概説的にいわれてきた生活基盤とは異なったあり方が指摘ができる。それは、東祢ぶた遺跡（27）や下茂内遺跡（1）などの山間部にも弥生人の足跡が残されていることから、水田経営とは異なった生業を考える端緒となった。

一方、栗毛坂遺跡群Ａ地区や下小平遺跡（74）・腰巻遺跡（52）など、湯川の氾濫原に点在した集落立地の遺跡のあり方には、水田経営を基盤とした、いわば典型的な集落立地の様子がうかがえる。それらは水利という面から包括された、ひとつの遺跡群として捉えられるとともに、土器や住居構造などから、群馬からの文化的な影響が認められる。

こうした湯川流域の占地の在り方は小規模で、単発的な集落立地は古墳時代後期前半頃まで続き、その後は、高位段丘に当たる田切り台地上に大規模な計画村落が営まれるようになる。この集落立地の変遷は、勅使牧の経営など律令体制という行政的な要因や、畑作の広がり・灌漑設備の整備などに伴う水田の拡大

など生産形態の変化によるものと考えられる。

また、西方の御牧原 (113)・八重原台地には須恵器の古窯址群があり、確認されているもので70基余を数え、消滅したものを含めれば100基にのぼるとも考えられる。東北信地方の一大窯業産地であったことから、製鉄に関連した石附(いしづき) (87) の製炭窯などとともに、勅使牧のほか、その供給先である在地勢力の存在が暗示され、また私牧経営や群集墳の被葬者などとの関係にも興味深いものがある。

前期古墳から看取しえる動向として、瀧の峯古墳 (83) の成果は注目される。墳頂出土の土器から東海地方西部とのかかわりや、弘法山古墳がある松本平との結びつきがうかがえる。

また、今回調査した大星尻古墳群(29)では、8世紀中葉の終末期古墳が確認された。同地東方の尾根部に数多く散在する古墳のひとつとして、被葬者と地域とのかかわりや開拓集団との関連など、佐久地方での終末時期を再考する資料となった。

こうした大規模に展開した開拓集落は10世紀に入ると単発的となり、律令体制の崩壊と初期荘園の成立など社会的な動きと軌を一にして、衰退しはじめる。それは分業や流通面の変化・拡大といった社会的な背景が考えられ、次第に小単位の山棲み集落が形成されるようになる。こうした畑作を基盤とした遺跡のあり方が、西祢ぶた遺跡 (28) などに認められたが、しかし長期にわたることなく、一見伝統集落に戻るかのように再吸収された様子が、腰巻遺跡や北山寺遺跡 (38) などに認められた。

以上、佐久地方の地域性や特色についてふれた。今後、上信越自動車道関連の遺跡調査が小諸市や東部町へ展開するにつれて、東信地方の歴史がますます掘り起こされることとなろう。

参考文献

臼田町教育委員会	1989	『原遺跡』
川上村教育委員会	1983	『横尾』
岸野村誌編纂委員会		『岸野村誌』
小諸市教育委員会	1983	『久保田』
小諸市教育委員会	1989	『和田原・鎌田原』
佐久市教育委員会	1980	『周防畑遺跡』
佐久市教育委員会	1981	『五斗代B』
佐久市教育委員会	1982	『舞台場』
佐久市教育委員会	1983	『中村』
佐久市教育委員会	1985	『樋村遺跡』
佐久市教育委員会	1985	『佐久市遺跡詳細分布調査報告書』
佐久市教育委員会	1986	『大井城跡』
佐久市教育委員会	1986	『鋳物師屋遺跡群』
佐久市教育委員会	1986	『瀧の峯古墳群』
佐久市教育委員会	1990	『茂内口』
佐久市教育委員会ほか	1986	西裏・竹田峯
佐久市教育委員会ほか	1987	北西の久保
佐久市教育委員会ほか	1987	淡淵・屋敷前・曲尾Ⅲ・曲尾Ⅰ
佐久市教育委員会	1988	鶉ヲネ
千曲川古代文化研究所	1985	『編年』
戸沢充則		『原始との対話―縄文人は生きている』
長野県史刊行会	1988	『長野県史考古資料編第一巻㈡主要遺跡（北・東信）』
㈶長野県埋蔵文化財センター	1988	『長野県埋蔵文化財センター紀要2』
御代田町教育委員会	1985	『宮平』
御代田町教育委員会	1988	『十二遺跡』
御代田町教育委員会	1987	『前田遺跡』
望月町教育委員会	1989	『平石遺跡』
望月町教育委員会	1982	『金塚遺跡』
八幡一郎	1978復刊	『北佐久郡の考古学的調査』
八幡一郎	1978復刊	『南佐久郡の考古学的調査』

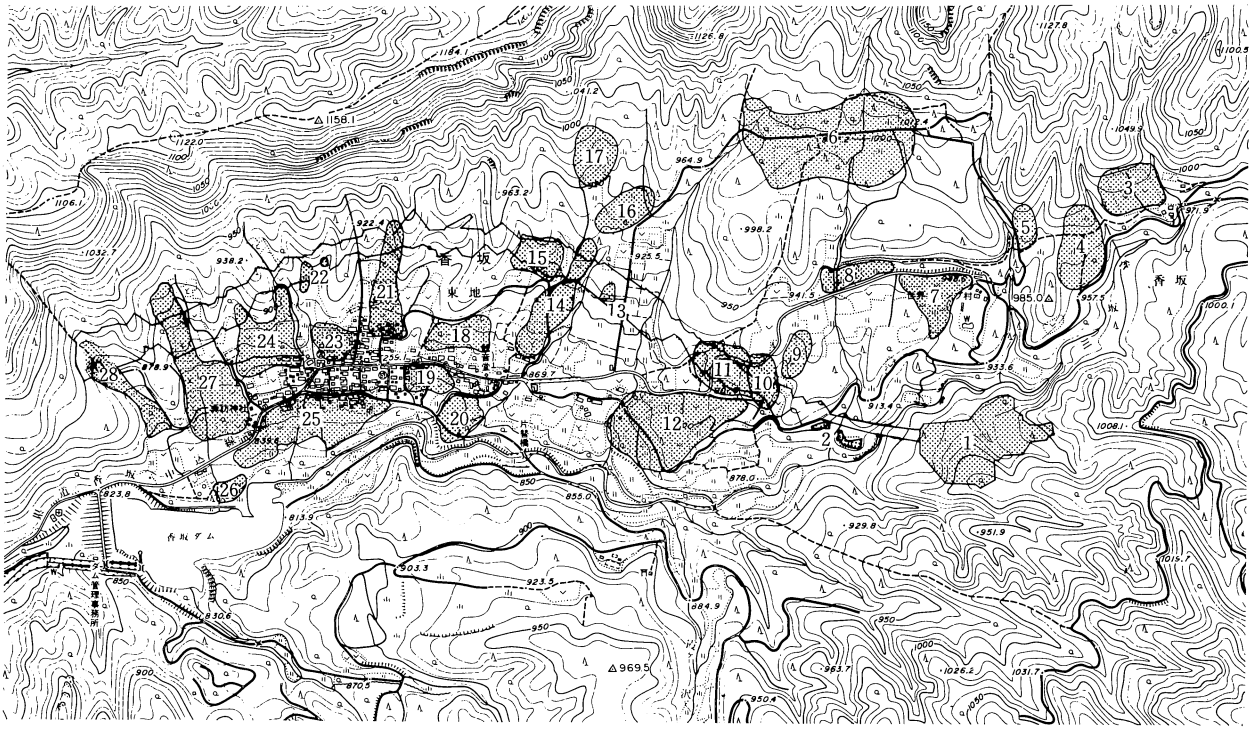


図５　周辺遺跡（香坂東地地区）

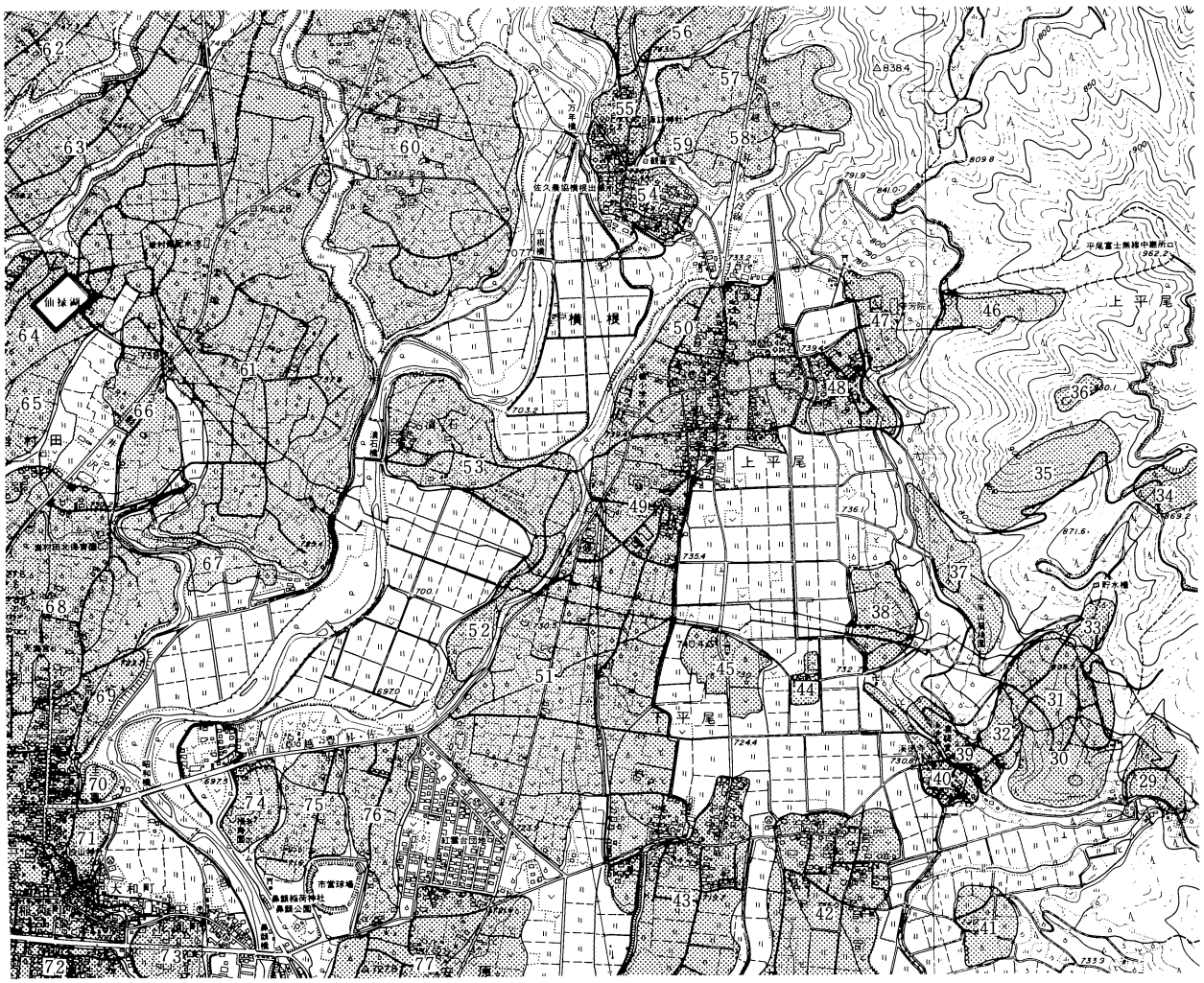


図６　周辺遺跡（平根・岩村田付近）

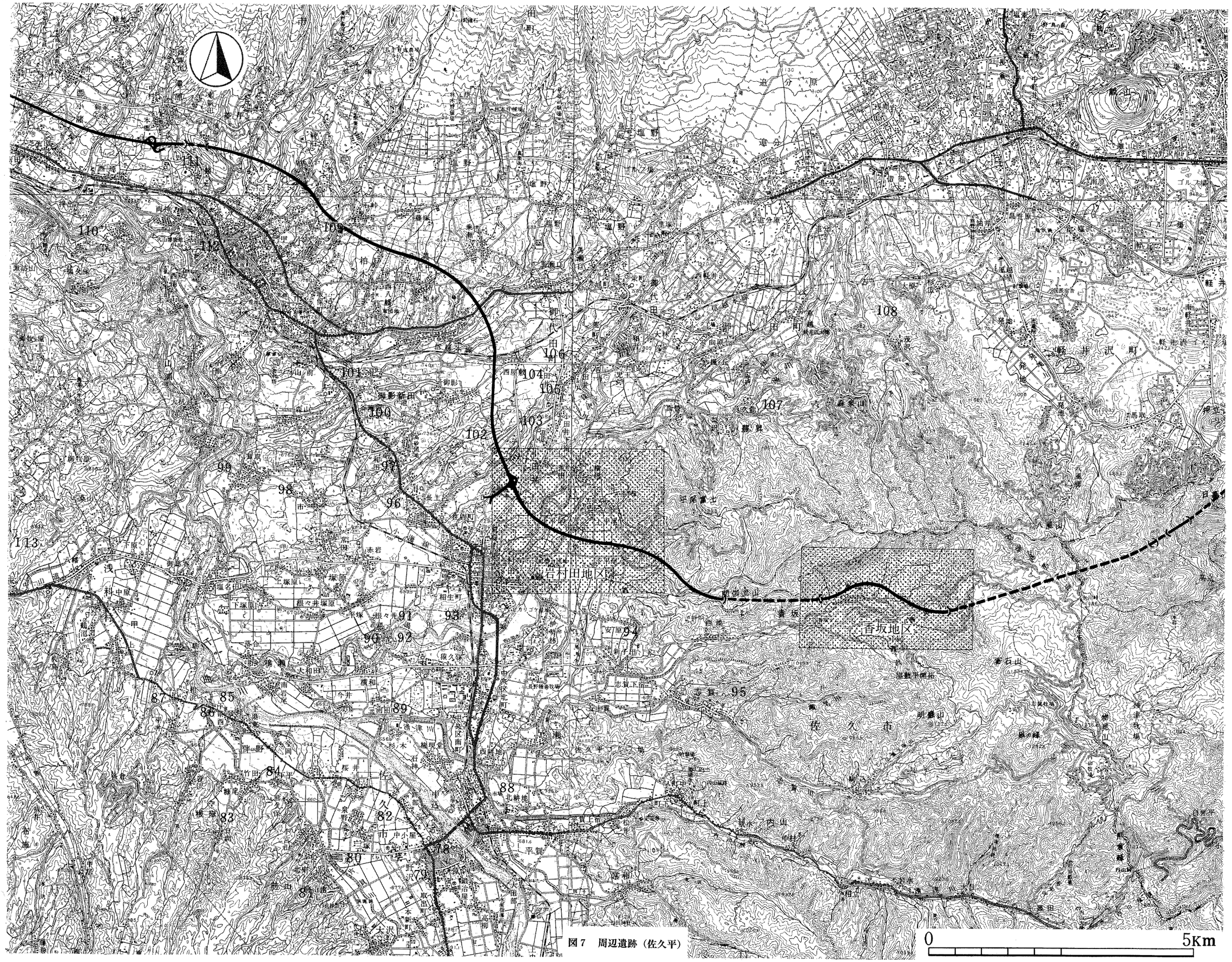


図7　周辺遺跡（佐久平）

表１　周辺遺跡一覧（１）

No	遺跡名	時代	備考
①	下茂内	縄～中世	
2	茂内口	縄・平	昭和61年度発掘調査
3	雨原B	〃	
4	兵士山	〃	昭和54年度発掘調査
5	五斗代B	縄	昭和54・55年度発掘調査
6	五斗代	〃	
7	東木戸平B	縄・平	
8	東木戸平A	〃	
9	木戸平B	縄・弥	
⑩	木戸平A	縄・平	
⑪	吹付	縄・平・中世	
12	曲尾	縄・平	昭和61・62年度発掘調査
⑬	上中原	縄	
⑭	鶉ヲネ	〃	昭和63年度発掘調査
⑮	東林	〃	
16	仙太郎	縄・平	
17	鶉ヲネ北	縄・平	
18	東山神	〃	
19	小屋場	〃	
20	西片替	縄	
㉑	西林	〃	
㉒	干草場	平・近	
23	裏林	縄・平	干草場遺跡
㉔	城の口	縄・平	
25	屋敷前	縄・弥・平	小屋場・屋敷前
26	淡淵		昭和61年度発掘調査
㉗	東祢ぶた	縄・平	
㉘	西祢ぶた	縄・平	
㉙	大星尻古墳	縄・古	
㉚	丸山古墳群	古	
㉛	丸山Ⅱ	縄・古	
㉜	丸山	縄・平	
33	下半助A	平	
34	下半助B	平	
35	城古墳	古	
36	平尾城	中	
37	橋ケ窪	平	
㊳	北山寺	平	昭和63年度発掘調査
39	万助久	平	
40	木田橋	平	
41	大角	弥～平	
42	東村遺跡群	縄～平	下平尾遺跡
43	戸屋敷	平	上谷遺跡
44	宮前	平	
45	宮前	平	
46	矢沢古墳群	古	
47	矢沢	平	
48	十二前	平	
㊾	東大久保遺跡群	縄～平	東大久保遺跡・塚畑遺跡・宿遺跡
50	白岩城	中	昭和63年度発掘調査
㊿	西大久保遺跡群	縄～平	昭和61・62年度発掘調査
52	腰巻	弥～平	昭和62年度発掘調査
53	潰石	弥～平	
54	延寿城遺跡群	平	
55	芋の原遺跡群	縄～平	
56	上長坂遺跡群	縄～平	
57	横根古墳群	古	
58	上の原遺跡群	縄～平	
59	延寿城跡	中	
60	跡坂遺跡群	弥～平	

表2　周辺遺跡一覧（2）

No	遺跡名	時代	備考
⑥1	栗毛坂遺跡群	弥～平	昭和58年度発掘調査
62	芝宮遺跡群	縄～平	昭和54･55･57年度発掘調査
63	長土呂遺跡群	弥～中	
⑥4	枇杷坂遺跡	弥～平	昭和60年度発掘調査
65	琵琶坂	奈・平	昭和63年度発掘調査
66	西赤座	弥～平	
67	上岩子	平	
68	岩村田遺跡群	弥～中	昭和55年度発掘調査
69	石並城跡	弥～中	
70	王城跡	弥～中	
71	黒岩城跡	弥～中	昭和55年度発掘調査
72	上の城遺跡群	縄～平	昭和48･54･58年度発掘調査
73	下信濃石	平	
74	下小平	弥～平	昭和55年度発掘調査
75	上小平	平	
76	棧敷	平	
77	蛇塚A遺跡群	平	昭和57年度古墳範囲確認
78	野沢館跡	中	
79	儘田	古～平	昭和45年度発掘調査
80	中道	奈～平	昭和46年度発掘調査
81	川越石窯址	近	昭和58年度発掘調査
82	市道	古～平	昭和49年度発掘調査
83	瀧峯古墳群	古	富士見塚古墳 昭和61年度発掘調査
84	西裏遺跡群	縄～平～中	昭和61年度発掘調査
85	休石	弥～平	昭和53年度発掘調査
86	舞台場	弥～中	昭和56年度発掘調査
87	石附窯址	古	昭和55・63年度発掘調査
88	樋村	弥～平	昭和57・58年度発掘調査
89	三河田大塚古墳	古	
90	根々井館跡	中	
91	宮の西	弥～中	昭和58年度25Ⅲ地点発掘調査
92	北西久保	弥～中	昭和44・45・57・60年度発掘調査 昭和54年度試掘調査
93	一本柳遺跡群	弥	昭和43・47年度発掘調査
94	安原大塚古墳	古	
95	志賀城跡	中	
96	西近津遺跡群	縄～平	南近津遺跡群 昭和46年度発掘調査
97	和田原遺跡群	縄～平	昭和60・63年度発掘調査
98	五ケ城	弥～平・中	昭和55年度発掘調査
99	久保田	縄～平	昭和58年度発掘調査
100	谷地原遺跡群	縄～平	昭和60年度発掘調査
101	宮ノ反A遺跡群	古～平	昭和59年度発掘調査
102	周防畑遺跡群	縄～平	昭和54･55･58年度発掘調査
103	曽根城跡	縄～平	昭和57年度発掘調査
104	鋳師屋遺跡群	弥～平	昭和59・61年度発掘調査
105	野火付	奈～平	昭和59年度発掘調査
106	前田遺跡群	弥～平	昭和60･61･62年度発掘調査
107	宮平	縄	昭和56年度発掘調査
108	茂沢南石堂	〃	昭和51・54・55年度ほか発掘調査
109	郷戸	〃	昭和36・46年度発掘調査
110	氷	縄・弥	昭和30年度発掘調査
111	清水駅跡	奈～平	
112	小諸城跡	中～近	
113	御牧原古窯址群	古・奈	昭和4年以降の発掘調査

丸付No.は上信越自動車道埋蔵文化財調査にかかわる遺跡

第3章　調　　査

第1節　木戸平（きどだいら）A遺跡

1　遺跡の概観

木戸平A遺跡は、佐久市大字香坂字曲尾（まがりお）312番地を中心とした尾根上に所在する。

香坂地籍は、香坂川のはたらきによって全体が大きな谷地形を形成し、右岸の南向き斜面に多くの遺跡が立地する中で、本遺跡と隣接する吹付（ふっつけ）遺跡は、香坂川の最も上流に位置する。この周辺は、八風山山系南麓から香坂川に向う緩斜面で、川に沿う一帯は香坂川の侵食により断崖状になっている。さらにこの南面する緩斜面は、香坂川に流下する小河川によって幾すじかの尾根がきざまれ、起ふくが著しい。東側の尾根頂部を本遺跡、西側の小さな谷状地を取り囲んだ尾根縁辺部に吹付遺跡が立地する。

2　調査の経過と概要

上信越自動車道は遺跡の中央を東西に横断するため、面積3,000 m²が調査対象地域となった。標高は911～917 m をはかる。調査は、昭和63年8月17日から同年9月30日までの間実働20日を要し、調査研究員4名・作業員延べ125名が当った。表土剝ぎに先行して東西方向にトレンチを設定し、土層堆積状況などを観察した。トレンチでは現在の耕作により下層が攪乱を受けている状況が見られ、特に調査区東側はその度合いがはげしかったが、西側はローム層上面から下は攪乱が及んでいなかった。この他に直交・平行する5本のトレンチを設定してローム層まで掘り下げた結果、土層堆積状況は調査区西側でⅠ～Ⅲ層に分層できたものの、東側は耕作の影響により明確に分層できなかつた。また確認された遺構・遺物では、西側で

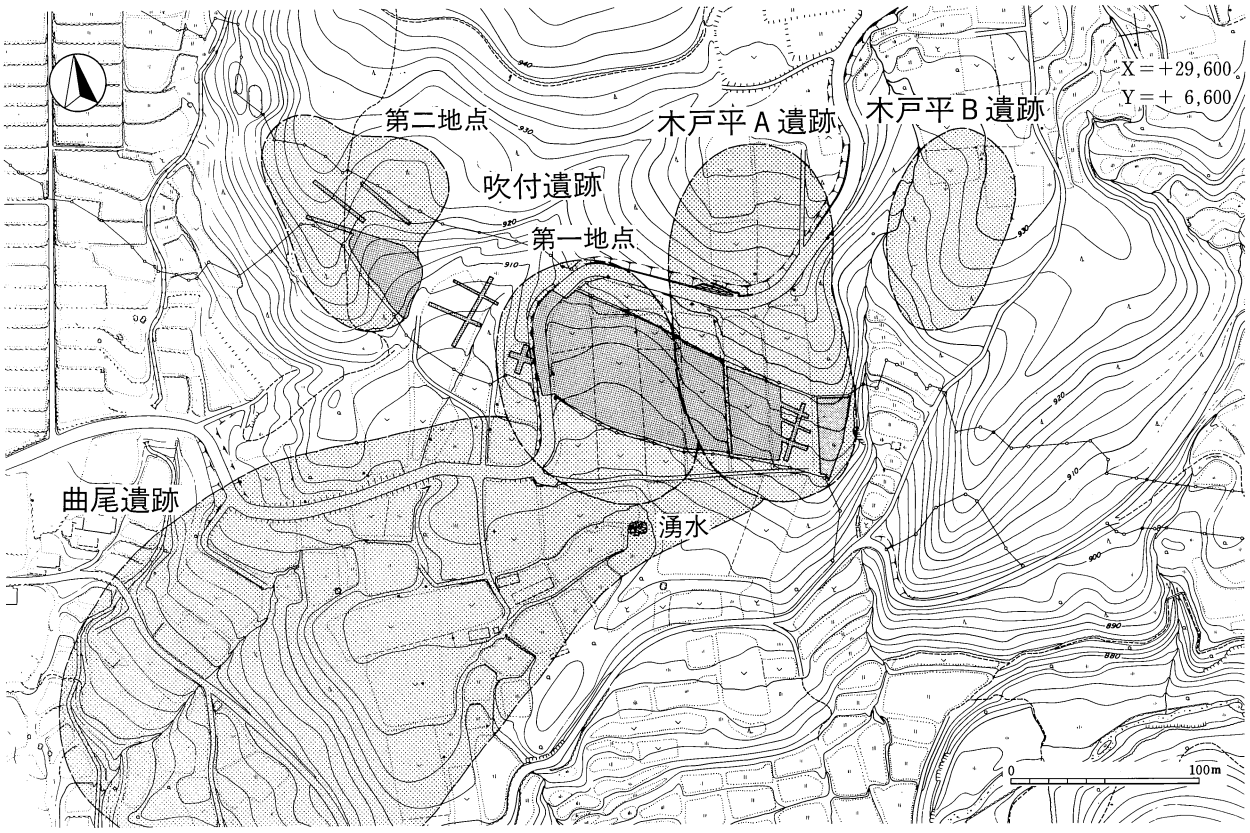


図1　調査区および周辺遺跡（1：4,000）

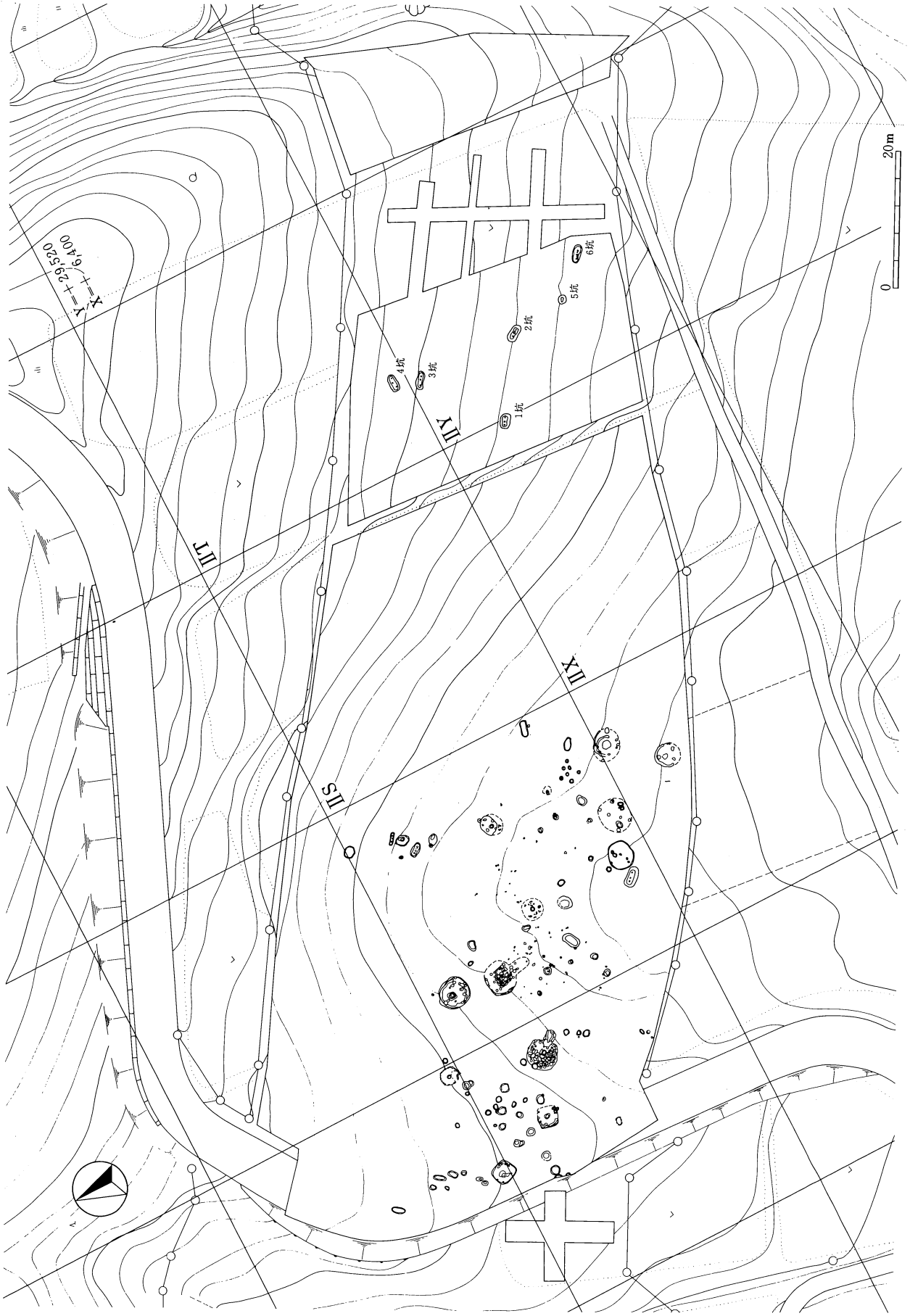


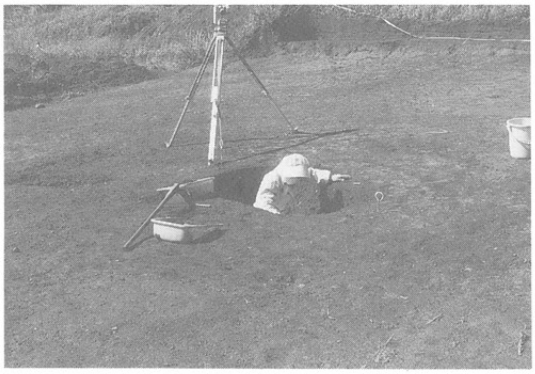
図２　遺構配置

縄文土器片が出土し、トレンチで土坑が認められたため、吹付遺跡に最も近い西側に重点を置いて調査を実施することにした。

第Ⅲ層(ローム層)で遺構検出を実施した結果、調査区西側で土坑6基検出された。時期決定の根拠になる土器がみられなかったため、土坑の帰属時期を明確にできないが、Ⅱ層(スコリア含有)より縄文土器片が出土したことから縄文時代の所産と推定できる。遺構の性格は、土坑底部に一列に並ぶピット状の落ち込みが認められることから、「陥し穴」と推定されよう。遺構精査に並行して土坑の分布範囲を把握する目的で一部表土剝ぎを行った。その結果、遺構分布範囲は西側に限定されることがわかった。遺構の測量にあたっては、検出遺構が調査区西側に限られたため、吹付遺跡で設定した8ｍグリッド杭よりトラバース測量を行い、調査区内に8ｍグリッド杭と方向杭を打った。標高は吹付遺跡より移動して3か所にベンチマークを設定した。空測・空撮を実施し、遺構分布図・コンタ図を写真測量で作成し、また発掘範囲図・トレンチ配置図は測量用の杭を基準にして三角測量を行い、後に作図した。

調査日誌抄

7月27日　土層堆積状況を把握すべく、トレンチを設定してローム層まで掘り下げる。
8月17日　調査区東側、ローム層で検出作業を実施。遺構が検出されなかったため、排土置場とする。
22日　調査区西側を中心にトレンチ設定。土層堆積状況を観察しつつ、遺構確認を行う。
29日　土坑6基を検出し調査にはいる。
30日　グリッド杭を設定。
9月2日　土層柱状図を記録。
9日　トレンチ設定の位置を三角測量で記録。
14日　遺構の広がりを捉えるため、中央付近を拡張する。
20日　土坑の実測および写真撮影などを開始。
21日　空測・空撮を実施。
30日　遺構の調査をすべて完了し、調査を終了する。
12月5日　整理作業開始。遺構図など図面類の確認、遺物の洗浄・注記を行う。



3　基本土層

基本的な層序は、Ⅰ層：現耕作土、Ⅱ層：スコリア質軽石を含む黒褐色土、Ⅲ層：ローム層である。

Ⅱ層はスコリア層全体に散点する黒褐色粘性土で、この層より縄文土器が出土したことから、隣接する吹付遺跡のⅣ層と対応できると推定される。本遺跡ではⅡ層の下はローム層で、吹付遺跡Ⅴ層(黒褐色土)に対比される層は認められないが、土坑の覆土下部に類似した土が見られる。これらのことから、吹付遺跡Ⅴ層は尾根頂部においては安定して堆積せず、遺構内のみに堆積したと推定される。

本遺跡の地形は、土層柱状図から推測すると、遺構がつくられた縄文時代と現在とはほぼ同じ傾向であったと考えられる。

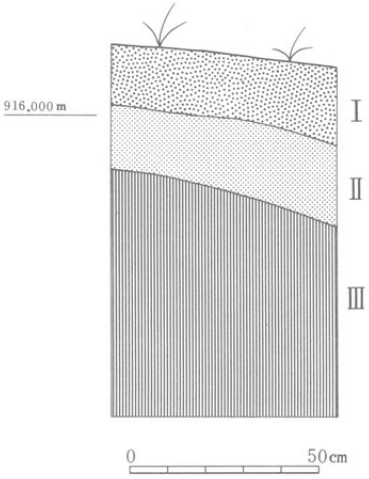


図3　基本土層

4　遺構と遺物

木戸平Ａ遺跡が占地する尾根の先端に近い南西斜面に６基の土坑が検出された。規模・形状などに共通の特徴が認められ、一般に「陥し穴」とされている土坑である。また、遺構外からは、縄文時代後期前葉の土器片がわずかに出土した。

(1)　遺構

１号土坑（図４、PL8）

ⅡＹ—A05グリッドに位置する。上端径224×140 cm、下端径150×74 cm の楕円形を呈すが、それぞれ短軸の中央にくびれをもつ。とりわけ下端は顕著にくびれ、バイオリン状をなす。深さは75 cm。

主軸方位はＮ—60°—Ｗを指し、等高線に平行する。平坦に整えられた坑底には、径10～15 cm、深さ18～34 cm の小ピットが３個列状に穿たれる。壁はほぼ垂直に立ち上がるものの、上半部は短軸のくびれ部を中心に大きく開く。土層は黒褐色土を基調とし、下層にはローム粒・ロームブロックが多く混入していた。

遺物は出土していない。

２号土坑（図４、PL8）

ⅡＹ—F09グリッドに位置する。上端径256×128 cm、下端径174×60 cm ほどをはかり、不整な長楕円形を呈す。深さは80 cm。１号土坑と同様短軸中央付近にくびれが認められるものの、均整さを欠く。

主軸方位はＮ—35°—Ｗを指し、等高線に対して若干北に振れる。坑底はほぼ平坦に整えられ、長軸に沿って４個の小ピットが開口する。ピットは径15～30 cm、深さ18～30 cm をはかるが、南東寄りの２つは極端に小さい。壁は長軸方向

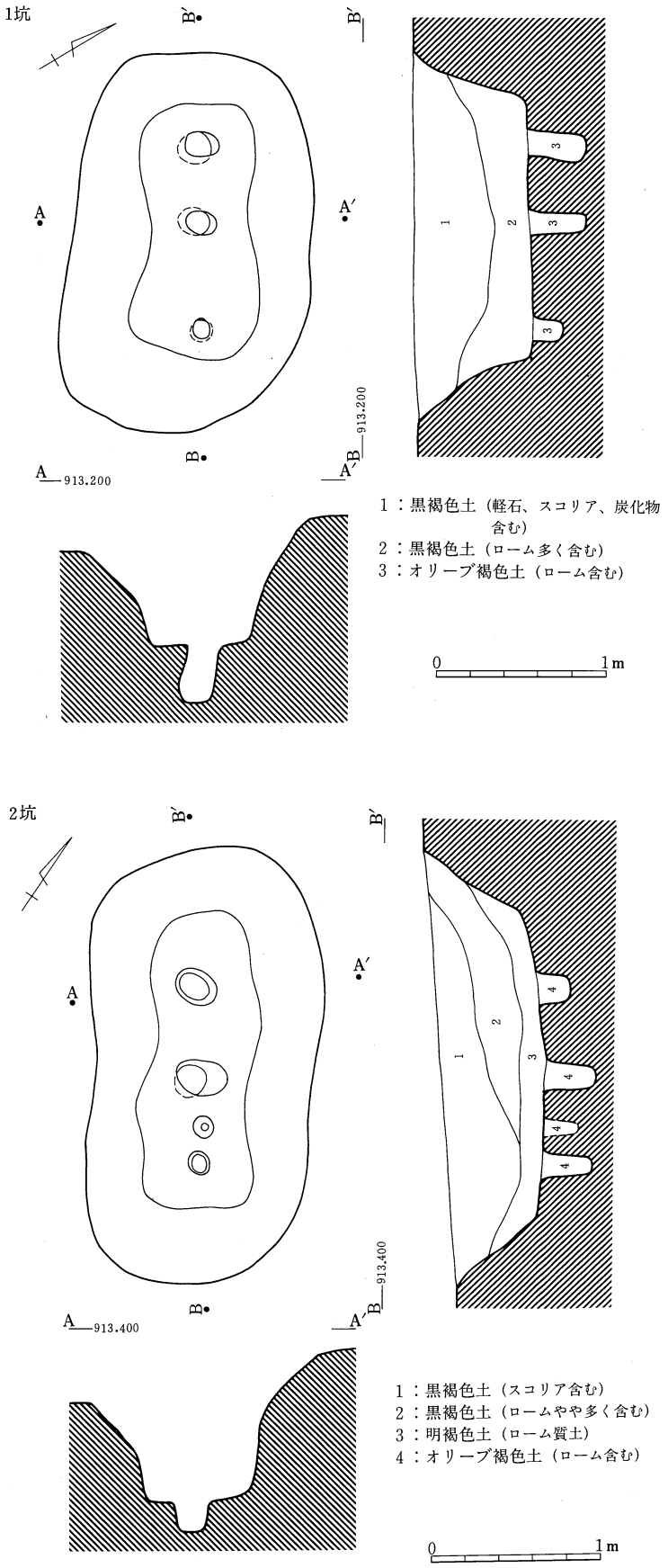


図４　１・２号土坑

をのぞき、急斜面に立ち上がる。覆土は黒褐色土を主とするが、最下層にはローム主体の土が堆積していた。

遺物は出土していない。

3号土坑（図5、PL8）

II Y—F01グリッドに位置する。上端径260×cm、下端径222×63 cmの不整長楕円形を呈す。深さは68 cmをはかる。坑底には、径15～20 cm、深さ18～23 cmピットが長軸に沿って3個穿たれる。

主軸方向はN—53°—Wを指し、等高線に平行する。壁は比較的急傾斜に立ち上がる。覆土は黒褐色土を基調とし、下層にはローム粒・ロームブロックが多く含まれていた。

遺物の出土はない。

4号土坑（図5、PL8）

II T—G09グリッドに位置する。長楕円形を呈し上端径256×136 cm、下端径226×75 cm、深さ60 cmをはかる。平坦に整えられた坑底には、径10～20 cm深さ18～21 cmの小ピット3個が穿たれる。うち中央のピットは長軸線からずれて北壁側に寄る。

主軸方位はS—90°—Wを指し、等高線に対して南に振れる。壁は急傾斜に立ち上がるものの、上部は大きく開く。覆土は黒褐色土を主とし、下層には多量のロームが混入していた。

遺物の出土はなかった。

5号土坑（図6、PL8）

II Y—G13グリッドに位置する。長軸130 cmほどの不整円形を呈し、深さ94 cmをはかる。坑底は70×43 cmの楕円形をなし、平坦に整えられる。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上部はやや傾斜をもって開口する。覆土は黒褐色土を基調とし、上層にはスコリア質軽石を、下層にはローム粒・ロームブロックを多く含んでいた。

遺物は出土していない。

6号土坑（図6、PL8）

II Y—I15・16グリッドに位置する。上端径274×

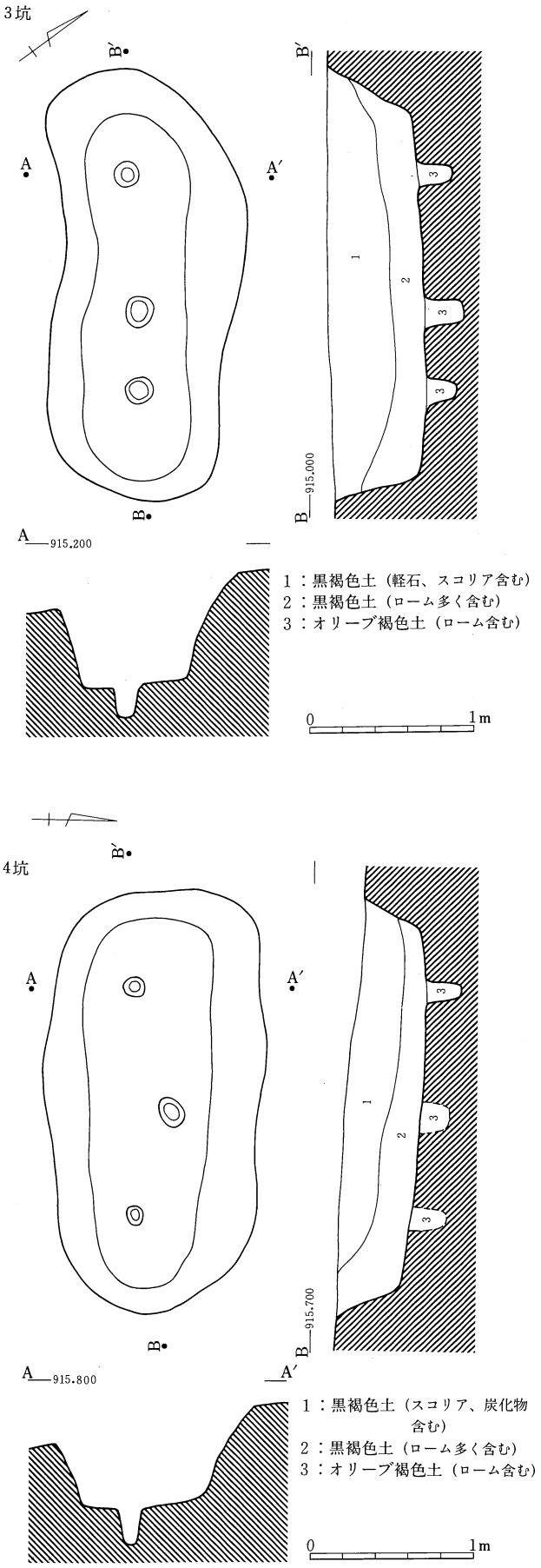


図5　3・4号土坑

130 cm、下端径240×74 cm、深さ37 cm をはかる。　ほぼ長楕円形を呈すが、南東側は若干ふくらんで丸みをもつ。坑底には長軸上に並んで４個の小ピットが穿たれる。おおむね径12～17 cm、深さ10～15 cmをはかるが、中央のピットは深さ23 cm と最も深い。主軸方位は N―50°―W を指し、等高線に平行する。

覆土は黒褐色土を基調とし、上層にはスコリア質軽石を、下層には若干量のロームが混入していた。

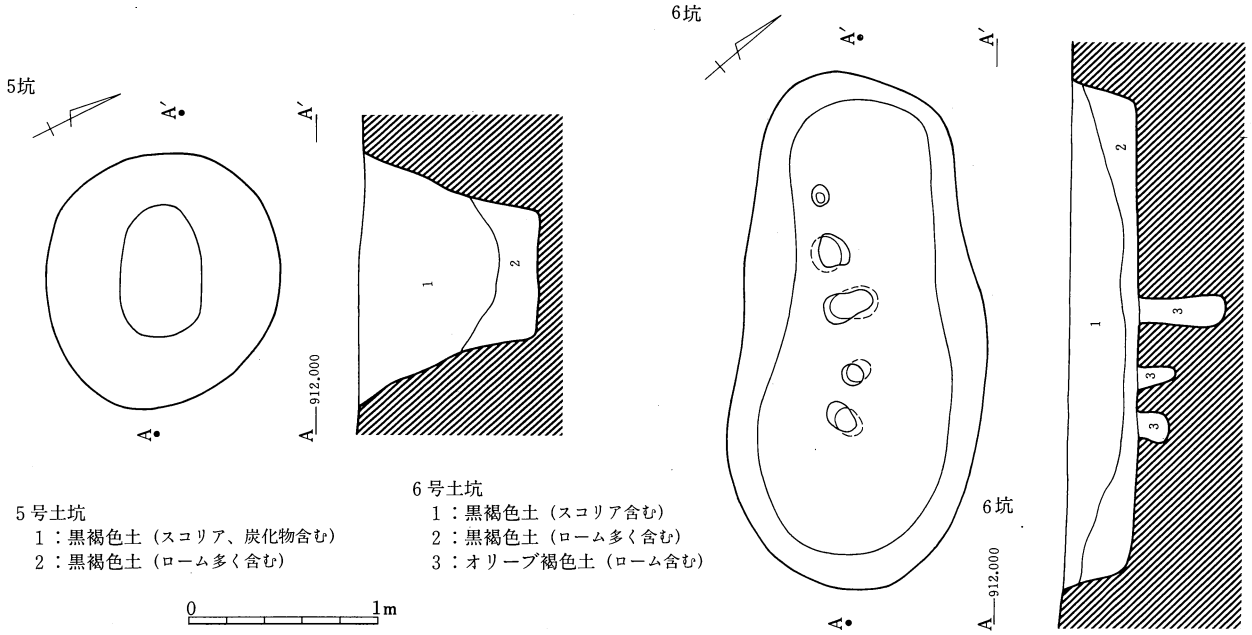


図６　５・６号土坑

(2)　遺構外出土遺物（図７）

本遺跡の調査では、遺構の内外を問わず、若干量の土器片が出土したのみである。すべて縄文時代後期前葉の土器である。

１は山形状をなす口縁下に渦巻き状の沈線文が施される。また、内面にも隆線による渦巻き文が付加される。２は多条の平行沈線文が施されるもので、幾何学状のモチーフを構成すると見られる。赤味のある茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。器厚５ mm と薄手のつくりで、焼成は堅緻。５・６は大きく外傾して開く無文の口縁部破片。８は沈線に区画された細い縄文帯が施される。内面上端部に沈線がめぐることから口縁下の破片と見られる。器厚４ mm ほどと薄手のつくりで、内外面とともにていねいな器面調整が加えられる。

１～７は縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式に、８は同Ⅱ式に相当しよう。

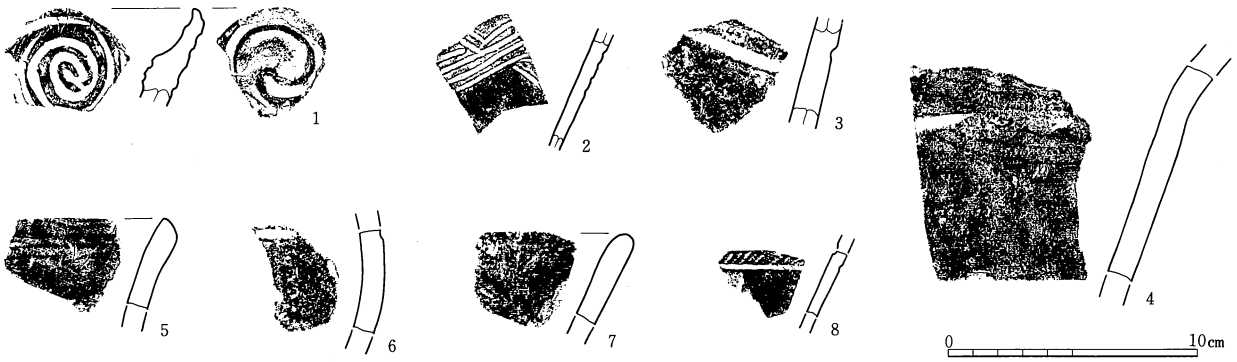


図７　遺構外出土土器

5　まとめ

今回の調査によって、木戸平A遺跡、より厳密にはその南端部付近に土坑群が存在すること、また、同地区が縄文時代後期前葉の遺物散布地であったことが明らかとなった。

土坑は縄文時代早期後葉に特徴的ないわゆる「陥し穴」に相当する規模・形態を備え、“群”としての分布にも一定の方向性が認められる。時期については伴出遺物がなく特定できないが、同様な土坑の検出をみた隣接する吹付遺跡で縄文時代早期後葉の土器片が出土していることから、従来より指摘されているように縄文時代早期後葉の所産である可能性を提示しておきたい。吹付遺跡例が縄文時代中期後葉の集落と重複して検出されたにもかかわらず、覆土中に該期の遺物をまったく含んでいなかつたことはその可能性を高めている。分布的には支尾根の南西斜面に限定され、６基が南北に連なるような位置関係を保っていた。形態や主軸方位に若干の相違がみられ、すべてが同時に構築されたとは言えない。しかしながら、分布に見られる規則的なあり方は、土坑群（陥し穴群）が「けもの道」といった媒体を介して有機的に結びついていたことを示していよう。また、土坑群は調査区外の南北へもさらにのびていると予測される。

一方、吹付遺跡で検出した土坑（１号・２号・22号・23号など）と対比すると、上記のように縄文時代早期後葉という時間枠では一致する反面、占地においては対称的なあり方を呈す(図８)。本遺跡例が斜面に分布するのに対し、吹付遺跡では谷頭から谷底への指向が認められる。後者の場合、図示したごとく、支谷状地形の先端に湧水あり、この水を求めて谷筋に集まる動物を対象として「陥し穴」が掘られたとも考ええられる。また、本遺跡例がおおむね楕円形を基調とするのに対して、吹付遺跡例は隅丸長方形を呈すという形態上の違いも認められる。これらの相違が生じた背景を特定することは困難であるが、ここでは、分布の違いには対象動物の習性に起因する用途の差を、形態の違いにはミクロな時間差や構築集団の差をそれぞれ想定しておきたい。いずれにしても、尾根の斜面と谷部とに「陥し穴」が掘られる傾向は一般的に見い出せるところであり、狩猟の一形態と言う側面では普遍的な様相を呈していると言えよう。

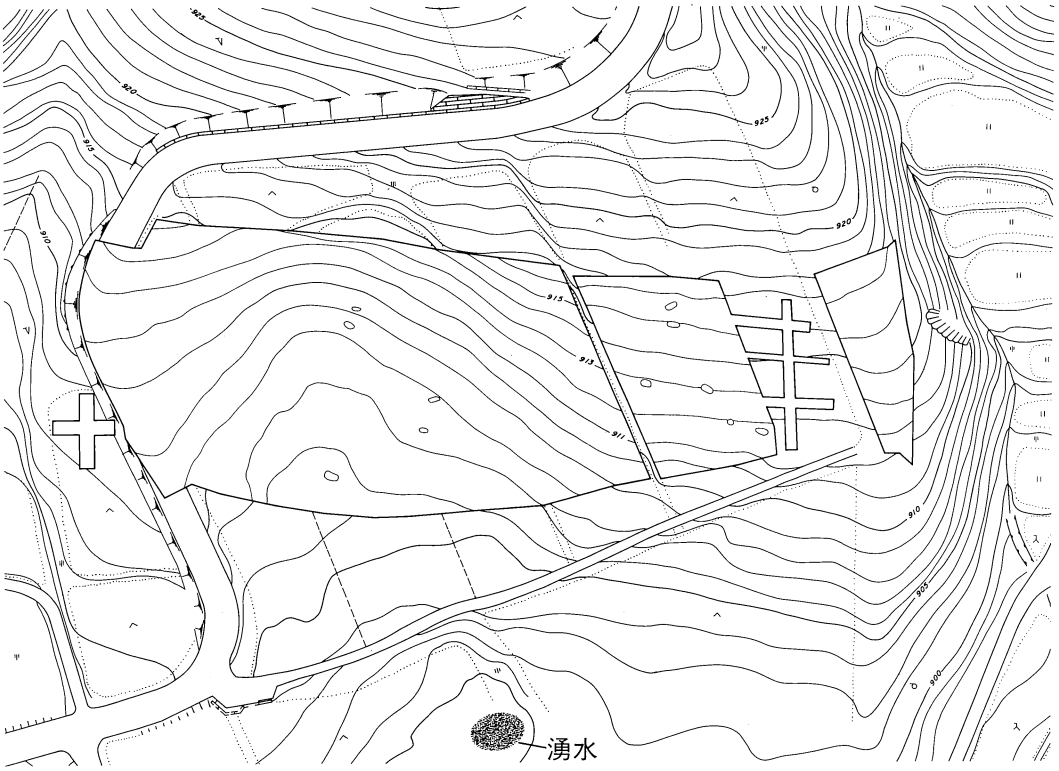


図８　「陥し穴」の立地と湧水

第２節　吹付（ふっつけ）遺跡

１　遺跡の概観

吹付遺跡は、佐久市大字香坂字曲尾311番地を中心とした緩斜面に所在する。

本遺跡の立地する南向き緩斜面は、曲尾遺跡群の占地に代表されるごとく香坂川流域でも最も生活に適した場所で、ここに縄文時代中期～後期の集落が広く展開したと推定される。また、ここは香坂川の最も上流であり標高が910ｍと高いため眺望がよく、香坂東地の集落・閼伽流（あかる）山を手前に見ながら佐久平が遠望できる。この台地では、南向き緩斜面の南西側、香坂川に近い一帯を曲尾遺跡が、その北側、東西の尾根間の狭小な地に吹付遺跡が立地し、東側の尾根部に木戸平Ａ遺跡が立地する（木戸平Ａ遺跡図１・２参照）。調査前は一部を除き畑地で、第一地点の凹地部分を中心に広い範囲にわたって縄文土器・打製石斧などが多く表採された。また、遺跡の南、緩斜面の中央部付近には湧水が見られ、現在でも水をたくわえている。

２　調査の経過と概要

上信越自動車道は遺跡の中央部を東西に横断するため、調査面積は10,400ｍ²と広範囲にわたり調査は昭和63年６月23日から同年11月15日までの間実働120日を要し、調査研究員４名・作業員延べ970名が当たった。また遺跡の東側では木戸平Ａ遺跡と接しているため、基本的には両遺跡と並行して調査をすることとなった。発掘調査に当たっては、調査区を南北に横切る県道香坂中込線を境として、東区・西区に分けて進めた。しかし、本報告に際しては、遺跡内部での性格や今後別の遺跡として捉え直される可能性も考慮し、前者を第一地点、後者を第二地点と呼ぶこととする。

なお、昭和63年度に調査を行うことができなかった県道香坂中込線下については、電線類の埋設工事およびカルバート・ボックスの工事工程に合わせ、平成２年３月７日～同31日まで調査を実施した。調査研究員１名と作業員数名がこれに当たり、延べ12日間を要した。

以下、地点ごとに概要を記す。既報（『年報5』1988）とは細部において若干異なるが、本稿をもって最終報告とする。

第一地点：県道香坂中込線から木戸平Ａ遺跡隣接地まで。現地形は、県道部分と木戸平Ａ遺跡隣接地付近が高く、その間が凹地状を呈していたので、現地表面下での土層堆積状況・遺物出土状況などを捉える目的で、高速道センター杭に平行する方向に２本のトレンチを設定し、ローム層まで掘り下げた。その結果、現耕作土下に３枚の黒色土（Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層）が認められ、Ⅲ・Ⅳ層より縄文時代中期～後期の土器・石器が出土した。また、遺構はトレンチで埋甕・配石を伴う土坑が確認された。トレンチの土層断面から土層の分布を推測すると、Ⅲ層は本地区中央部の凹地部分を中心に堆積し、Ⅳ層は調査区北側と１号住居址付近の南側一角を除くほぼ全域に堆積が認められ、特に凹地部分が厚い状況であった。表土剝ぎを行う前にトレンチ中央部で確認された配石付近を８×８ｍの範囲で掘り下げた。その結果、縄文土器・石器の出土が多く認められ、遺物はⅢ・Ⅳ層の両層に包含することが分かった。Ⅲ層での遺構検出では、Ⅲ層の堆積が薄い箇所または見られない箇所で礫の集中・１号住居址が認められたほかには遺構検出されなかった。遺物は、土器についてはⅣ層のものと比べ全体的に破片が多い傾向で、石器・獣骨も出土した（獣骨はⅢ層で確認されたが、上層に帰属する可能性がある）。Ⅳ層上面での遺構検出では礫の集中・遺物の広がりは確認されてはいたが、住居址は認められなかった。断面観察でスコリアを含む黒褐色土を覆土とする遺構が見られ、スコリアのわずかな含有度合いの相違によって検出されることが捉えられた。Ⅳ層を掘り下げる過程におい

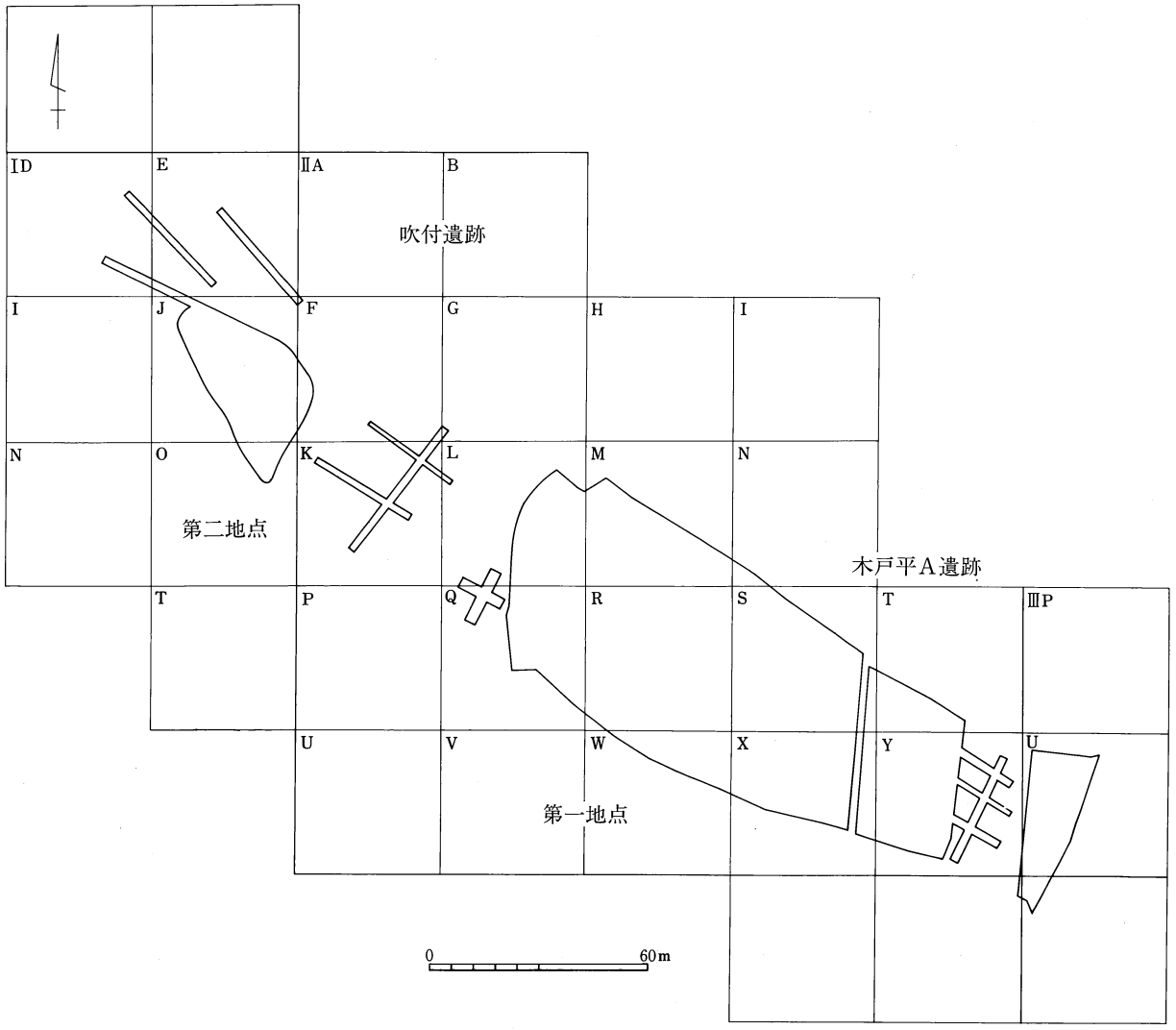


図1　グリッド配置

て、IV層下部で比較的大きな破片・土器の集中が見られたためIV層下部とV層で遺構検出を実施した。検出遺構の記録終了後、重機で凹地部分を中心にローム層まで下げ、再検出を行った結果、9号住居址(敷石住居址)・土坑などの遺構が検出された。本地区では、12軒の住居址が検出されたが、そのうち2軒が柄鏡形敷石住居址であった。

第二地点：遺跡の西限部から県道まで。

遺跡範囲外にあたる西側の尾根にトレンチを入れた結果、緩斜面を中心に縄文時代後期を主とした土器が認められたことにより、この尾根も調査対象とし、谷部に尾根部を加えて調査範囲とした。谷部では谷の方向とそれに直交する3本のトレンチを重機で掘削して、ローム層までの土層堆積状況を観察した。その結果、全体的に礫が見られ、特にIII・IV層は谷中央部が最も厚い状況であった。第一地点と同様、III・IV層より縄文土器片が認められたが、出土量は僅少でかつ摩耗が著しく、さらに遺構を検出することがなかった。したがって、生活域としては認定できず、以後調査は4か所で土層柱状図を記録し終了とした。

尾根部の調査は、本遺跡の西限を確認する目的で尾根上・斜面にトレンチを入れ精査した結果、斜面より縄文時代後期の土器が一定域に集中して認められた。土器はIII・IV層から出土し、特にIV1層(尾根部ではIV1層・IV2層とに分層できた)で多く認められた。土層堆積はIII層・IV層とも斜面の最も凹地に堆積していたが、IV層の範囲はIII層より若干広がる状況である。なお、急斜面では耕作土下がローム層であった。調査はIII

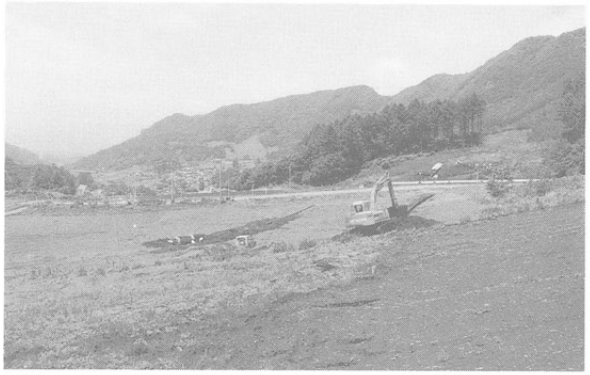
層での遺構検出から開始したが、遺構は認められず土器・石器が出土したのみであったため、Ⅳ１層上面まで掘り下げ遺物の出土状況を観察した。遺物の出土はⅣ１層から多かったことから、遺構検出はⅣ１層で主に行った。その結果、斜面中位で傾斜がなだらかな部分より焼土址が１基検出されたものの、土器が多く出土した凹地部分では検出されなかった。さらにⅣ１層をⅣ２層上面まで掘り下げたがその過程においても、遺構は検出されなかった。出土遺物は、面的調査を行った範囲でも北から南方向に傾斜する緩斜面に多く認められ、先行トレンチを入れた凹地部分に集中して見られた。なお斜面上部・尾根上部にトレンチを入れたが遺構は検出されず、遺物の出土も認められなかった。

本遺跡の遺構測量は、第一地点・第二地点（尾根部）とも業者委託して国家座標に合わせた測量用の杭を設定し、それを基準に行った。標高も杭設定作業とともに行いベンチマークを設定した。調査で用いたベンチマークは、第一地点では910.219ｍ、907.955ｍで、第二地点谷部では906.102ｍ、904.120ｍ、尾根部では909.527ｍである。空測・空撮を実施し、調査区の発掘範囲図・遺構分布図・コンタ図を写真測量で作成した。トレンチ配置図は基本的に８ｍグリッド杭を用いた三角測量で記録し、後に作図した。また現場での遺構番号は両地点とも通し番号により記録した。

調査日誌抄

昭和63年度

６月23日　発掘調査開始。鶉ヲネ遺跡より器材運搬。
　27日　調査区内の草刈り（残件部分は残す）。
　29日　センター杭に沿ってトレンチを設定。
７月１日　西区に尾根傾斜面にトレンチを掘削。
　６日　西区尾根部のトレンチで縄文土器が集中して出土。表土剝ぎを行う。
　11日　東区トレンチⅢ・Ⅳ層から縄文土器出土。重機でⅢ層上面まで剝ぐ。トレンチで配石・埋甕などを確認。配石周辺部を手掘りで下げ下層の状況を観察。
　13日　東区Ⅲ層で遺構検出。
　25日　測量基準杭設定。
　29日　西区Ⅲ層で遺構は認められず、遺物を取り上げる。
８月９日　東区Ⅲ層で遺構は認められず、遺物を取り上げる。
　18日　信州大学の西沢寿晃氏、現場視察。
　23日　夕方から夜の大雨により東区内の遺物が流失。西区尾根部・谷部のトレンチ位置を記録。
　26日　排水用のポンプを設置。
　29日　東区土層転写を実施。
　30日　西区Ⅳ１層出土の遺物取り上げ開始。
　31日　西区で焼土址（ＳＦ―01）記録。
９月２日　西区調査終了。
　８日　東区Ⅳ２層掘り下げ開始。１号住居址・１号配石土坑を検出。サブトレンチを設定し遺構検出。
　13日　東区Ⅳ２層出土の遺物取り上げ。１号住居址実測
　15日　重機で残件部分の表土剝ぎ実施。
　17日　西区尾根頂部に数本のトレンチを重機で掘削。
　21日　吹付遺跡・木戸平Ａ遺跡空測・空撮。
　27日　東区８ｍグリッドに沿ってトレンチを入れる。
　29日　東区02トレンチ西側の礫集中か所の精査。
10月５日　東区Ⅳ２層の残存部分を剝ぎ、Ⅴ層で遺構検出。
　19日　１号住居址調査終了。３号～７号住居址実測。
　26日　全景写真撮影。８号住居址調査終了。
　29日　２軒目の敷石住居址（９号住居址）確認。
　31日　吹付遺跡には調査研究員と作業員３名が残り、Ⅴ層を剝ぎⅥ層（ローム層）検出。



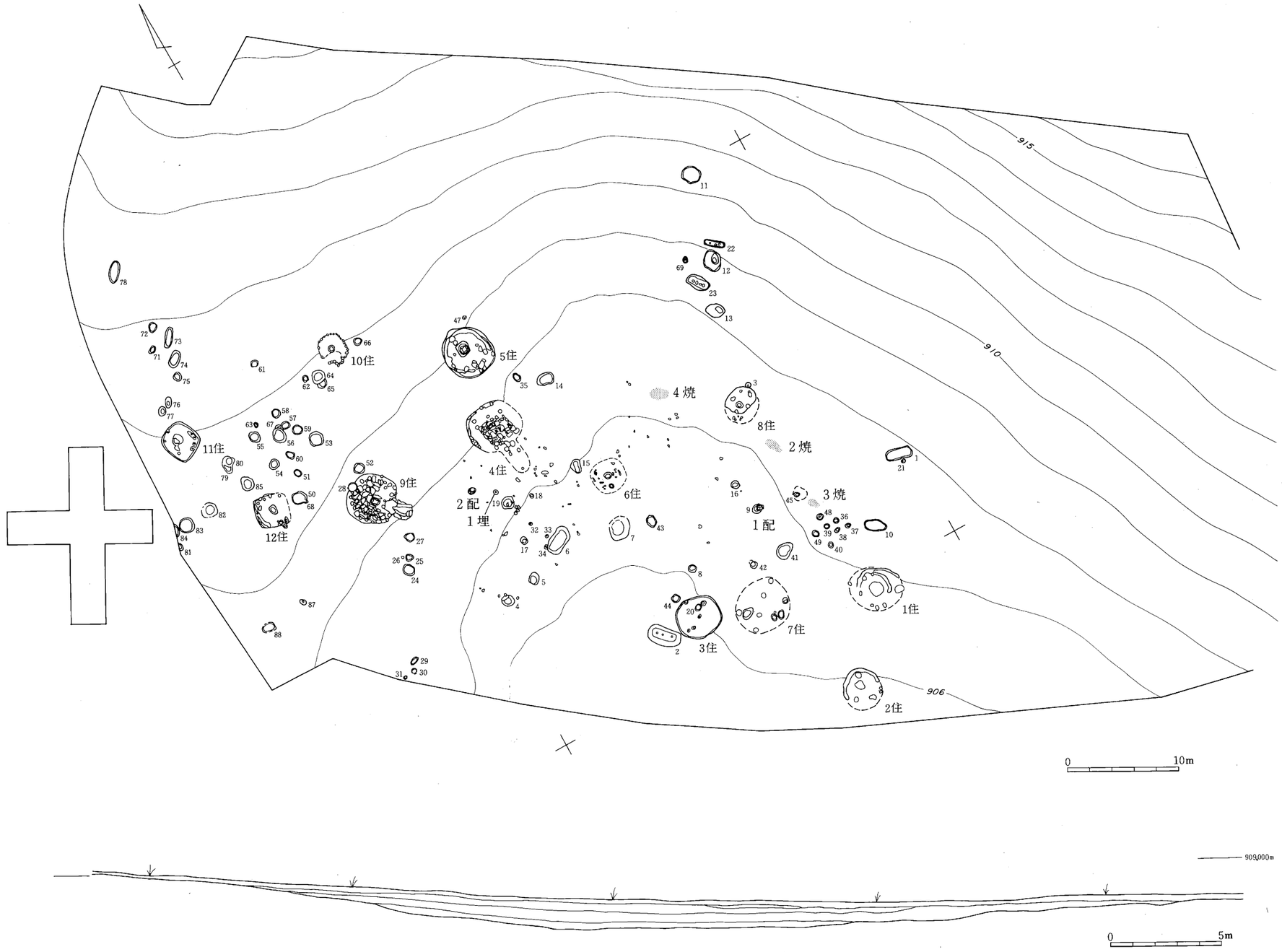

915
910
906
5住
10住
11住
12住
9住
4住
2配
1埋
6住
4焼
8住
2焼
3焼
1配
1住
7住
3住
2住
0
10m
909.000m
0
5m

図2　遺構配置

11月11日　9号住居址の敷石の取り上げ。
14日　プレハブ内外をかたずけ、遺物を事務所に運搬。
15日　発掘器材の撤収。調査終了。
12月5日　整理作業開始。遺物の洗浄・注記、遺構の図面など記録の確認と修正を行う。
平成2年度
3月7日　重機により県道下を掘削。遺構検出を行う。
8日　住居址1軒、土坑数基を検出。
12日　住居址の掘り下げと並行して、グリッド杭を設定。
13日　土坑の調査および調査区のコンタ図作成。
15日　住居址の図取りと写真撮影。
26日　調査区を拡張して、遺構検出を行う。
27日　住居址1軒、土坑5基を検出。
29日　遺構の掘り下げを行い、ほぼ完掘。
30日　遺構群の図取りと写真撮影。
31日　全景写真撮影後、器材の撤収。調査を完了する。

3　基本土層

層位はⅠ層：耕作土、Ⅱ層：暗褐色土、Ⅲ層：黒色土、Ⅳ層：スコリアを含む黒褐色土（Ⅳ1層とⅣ2層に分層される）、Ⅴ層：黒褐色土、Ⅵ層：ローム層である。遺物が出土した土層の分布は、縄文時代中期～後期の土器を含むⅢ層では、遺跡の全域にわたって見られるが、第二地点尾根部・第一地点凹地状の箇所に特に厚い堆積が見られることから、Ⅳ層堆積後に凹地化した部分を中心に堆積した層と推定される。Ⅳ層は、スコリアの含有度合い、色調の相違によりⅣ1層とⅣ2層とに分層した。Ⅳ1層は暗褐色土でスコリアの散点が顕著で、Ⅳ2層は黒褐色土でスコリアの散点はⅣ1層と比較して少ない反面、スコリアが層下部でブロック状（集積）を呈す特徴がある。本遺跡ではⅣ層・Ⅴ層が全域にわたって分布し、Ⅴ層推積後Ⅳ層が基本的には全域に見られるが、凹地部分を中心に堆積したと推定される。またⅣ層が明確に分層できた地点は、第二地点尾根部斜面部のみで、第二地点谷部・第一地点ではⅣ層上部（Ⅳ1層）を確認できなかった。遺物出土状況を見ると、Ⅳ1層上半部、第二地点Ⅳ2層下半部にかけて出土量が多い傾向があった。

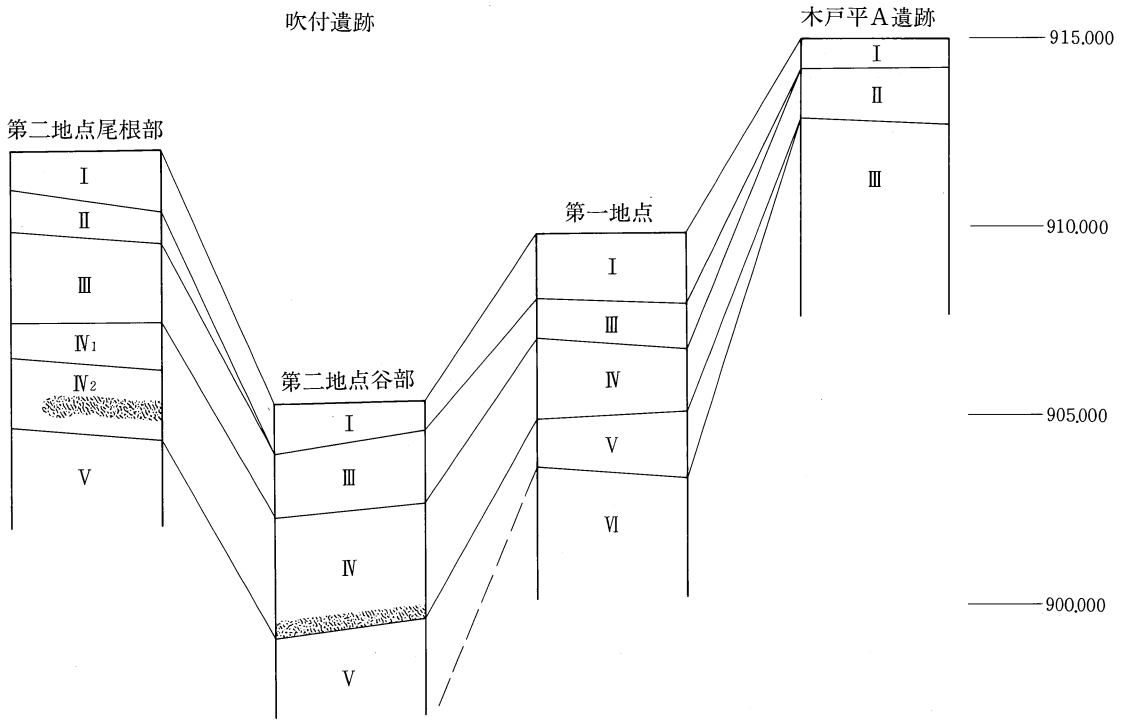


図3　基本土層

4　遺構と遺物

i　第一地点の調査（PL10）

第一地点は前記したとおり、吹付遺跡の主要地区に相当し、縄文時代中期の集落跡などが検出された。遺構群は小支谷の凹地を取り囲むように分布し、とりわけ、西側尾根の斜面には住居址とともに土坑群が主体的に分布していた。検出された遺構の総数は、住居址12軒、ピット群１基、屋外埋甕１基、焼土址３基、配石・配石土坑２基、土坑85基、遺物集中出土区２か所を数える。土坑の中には縄文時代早期後葉のものとみられる「陥し穴」が数基含まれ、前節で記したように、該期における木戸平Ａ遺跡と本遺跡との不可分な関係が推定される。

また、遺構覆土内や遺構外土層中からは、総重量355,710ｇ．14,452片を数える縄文時代の土器片と総数582点の石器類が出土した。遺構外遺物は主として遺構群に囲まれた中央の凹地部分から出土し、その分布範囲は集落の変遷とともに微妙な変化をみせていた。

なお、遺構外からは平安時代および中・近世の遺物もわずかに出土しており、本遺跡は縄文時代のみならず平安時代以降も営為の対象として、人々の手が加わり続けたことが考えられる。

(1)　縄文時代の遺構と遺物

ア　住居址

１号住居址（図４、PL11・39）

調査区の東南隅、ⅡW04・05グリッドに位置する。Ⅵ層上面で検出されたが、後世の削平や耕作により著しく攪乱されており、柱穴や炉址、周溝などを残すのみであった。

壁が残っていなかったことから規模・形状については推定の域は出ないが、柱穴と周溝の位置関係などから、径510×390 cmをはかる楕円形プランが想定される。しかし、周溝が２重になる箇所があり、建て替えや拡張が行われた可能性も考えられる。床面はローム層を若干掘り込んで造られた地床であり、炉址北側の一部分にのみ残存した。炉址は住居址のほぼ中央にあり、径130×130 cm、深さ20 cmをはかる。南側に穏やかな傾斜をもつが、北側はほぼ垂直に掘り込まれる。炉底に焼土が認められたほか、焚き口と推定される南側には炭化物を多く含む焼土が堆積していた。炉石およびその抜き取り痕は認められなかった。

炉址の南には70 cm余り離れて埋甕が検出された。口縁部および底部付近を欠く深鉢形土器を正位に埋設していた。

遺物　土器――１は埋甕に用いられていたもの。胴中位のみ残存する。２条１組の沈線文により器面を縦位分割し、その間を短沈線で埋める。

石器――１は緻密な安山岩製の大形剝片石器である。

時期　出土遺物より、本址は縄文時代中期後葉、本遺跡第Ⅰ期に構築された住居址と考えられる。

２号住居址（図５・６、PL12・39）

調査区南東端に近いⅡW04・09グリッドに位置する。Ⅵ層（ローム層）上面で検出した。検出時にはすでに上部を削平された状態であったため、壁や床面の大半を失っていた。

全体の規模・形状については不明であるが、周溝や柱穴配置などから、径370 cmほどの円形プランが想定される。床面はロームを若干掘り窪めて作られた地床であり、地形にそって北から南に向かって下がる。とりわけ、炉址の北側と南側とでは20 cm余りの比高差をもつ。P1～３が主柱穴とみられ、三角形状の配置をとる。径35～50 cm、深さ60～90 cmをはかる。P1内上部からは石器２が、P3からは土器２がそれぞれ出土した。また、北半部には幅20～40 cm、深さ10～15 cmの周溝がめぐり、その内部にもピット状の掘り

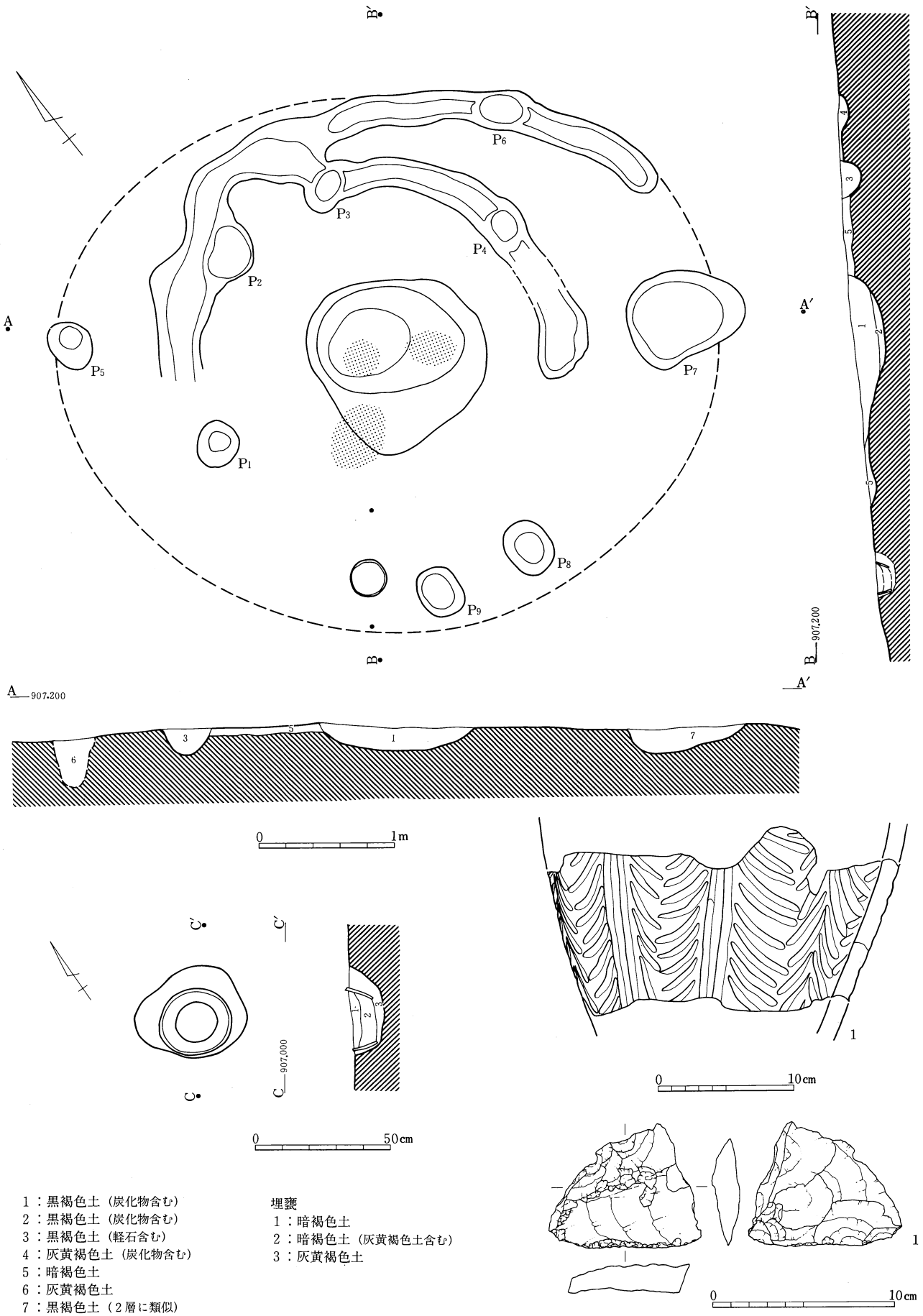

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A
A′
B
B′
C
C′
A 907.200
B 907.200
C 907.000
0 1m
0 50cm
0 10cm
1
1：黒褐色土（炭化物含む）
2：黒褐色土（炭化物含む）
3：黒褐色土（軽石含む）
4：灰黄褐色土（炭化物含む）
5：暗褐色土
6：灰黄褐色土
7：黒褐色土（2層に類似）
埋甕
1：暗褐色土
2：暗褐色土（灰黄褐色土含む）
3：灰黄褐色土

図4　1号住居址

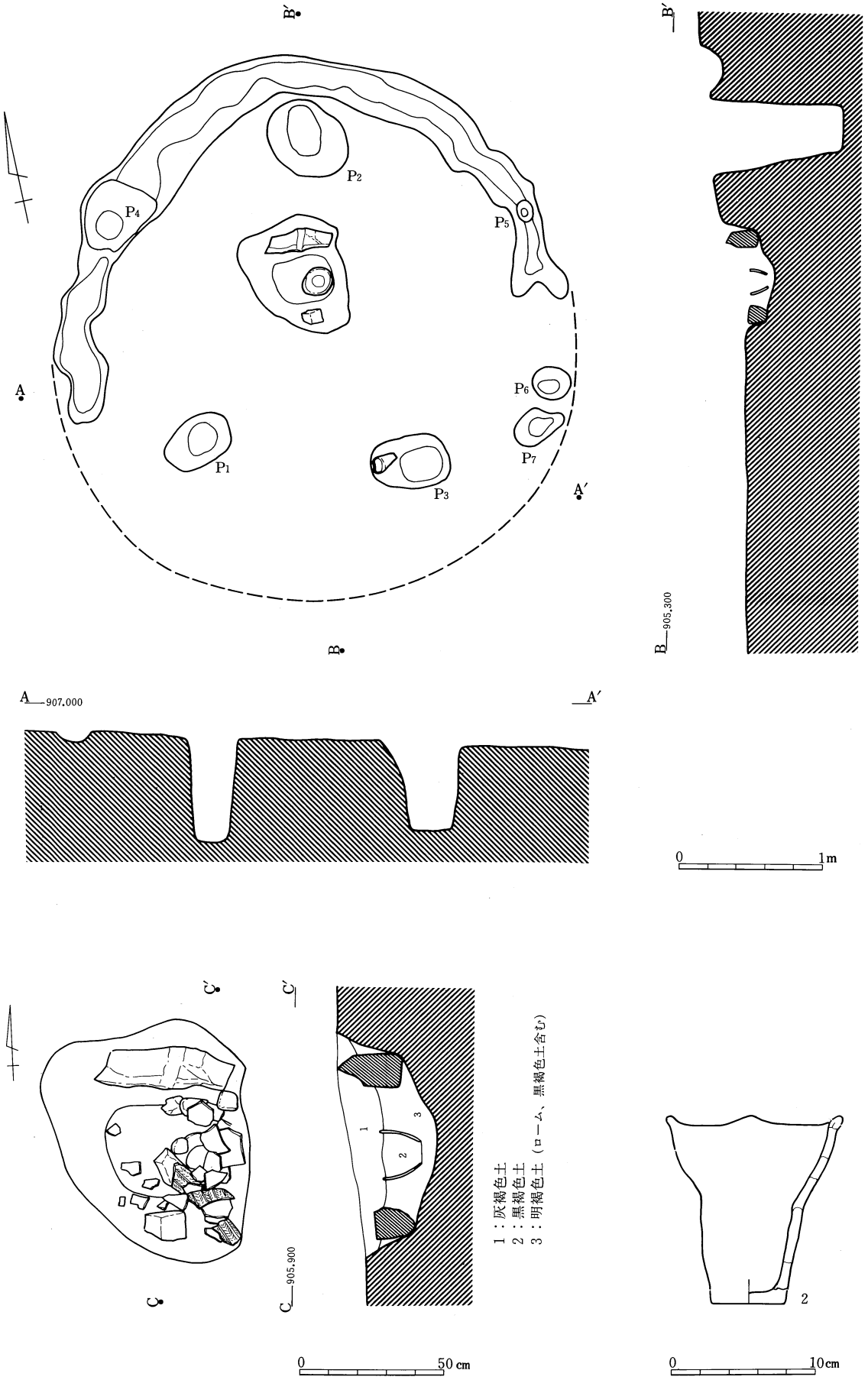

A
A′
B
B′
C
C′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
907.000
905.300
905.900
1：灰褐色土
2：黒褐色土
3：明褐色土（ローム、黒褐色土含む）
0
1m
50 cm
10cm

図５　２号住居址（１）

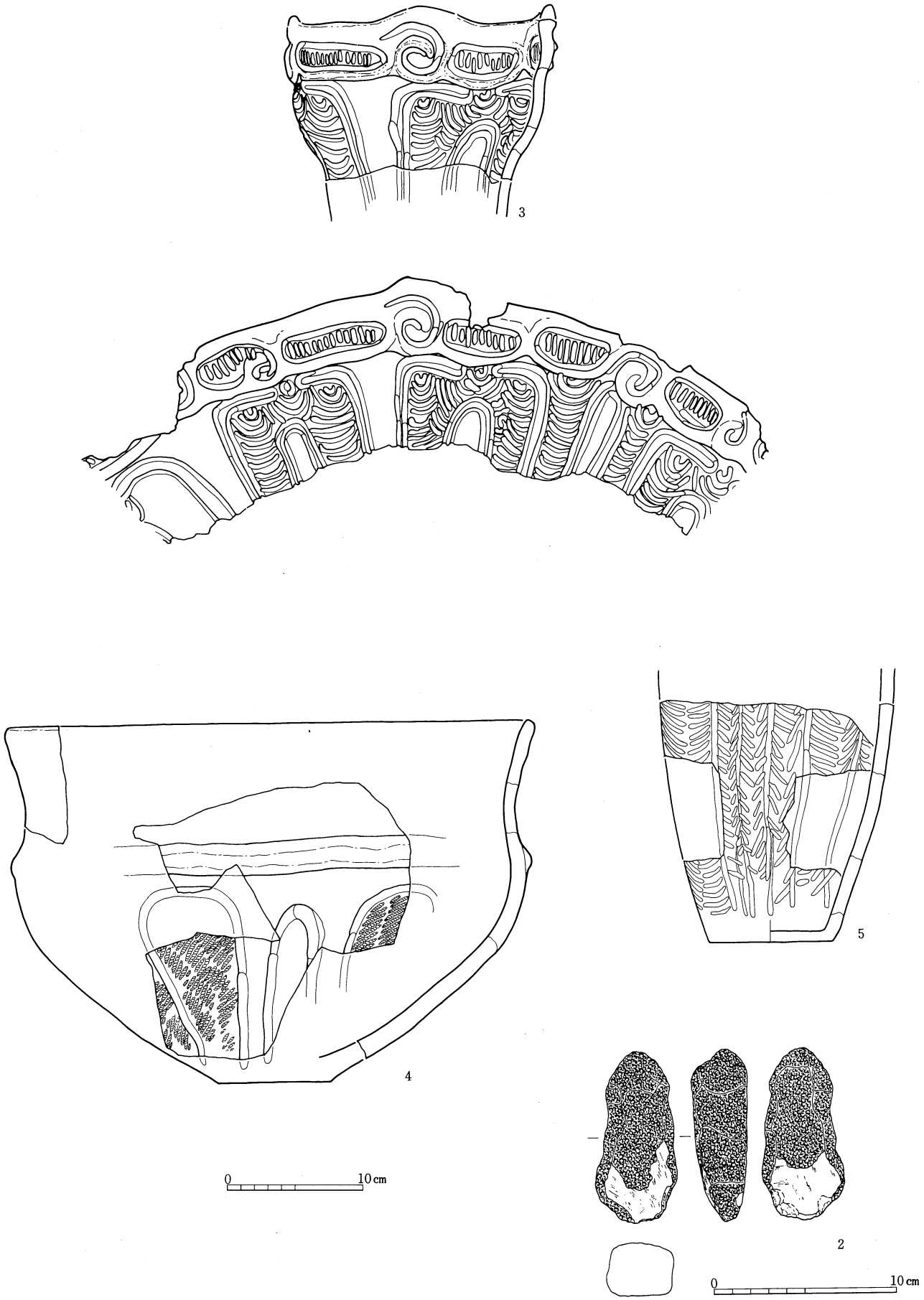


図6　2号住居址（2）

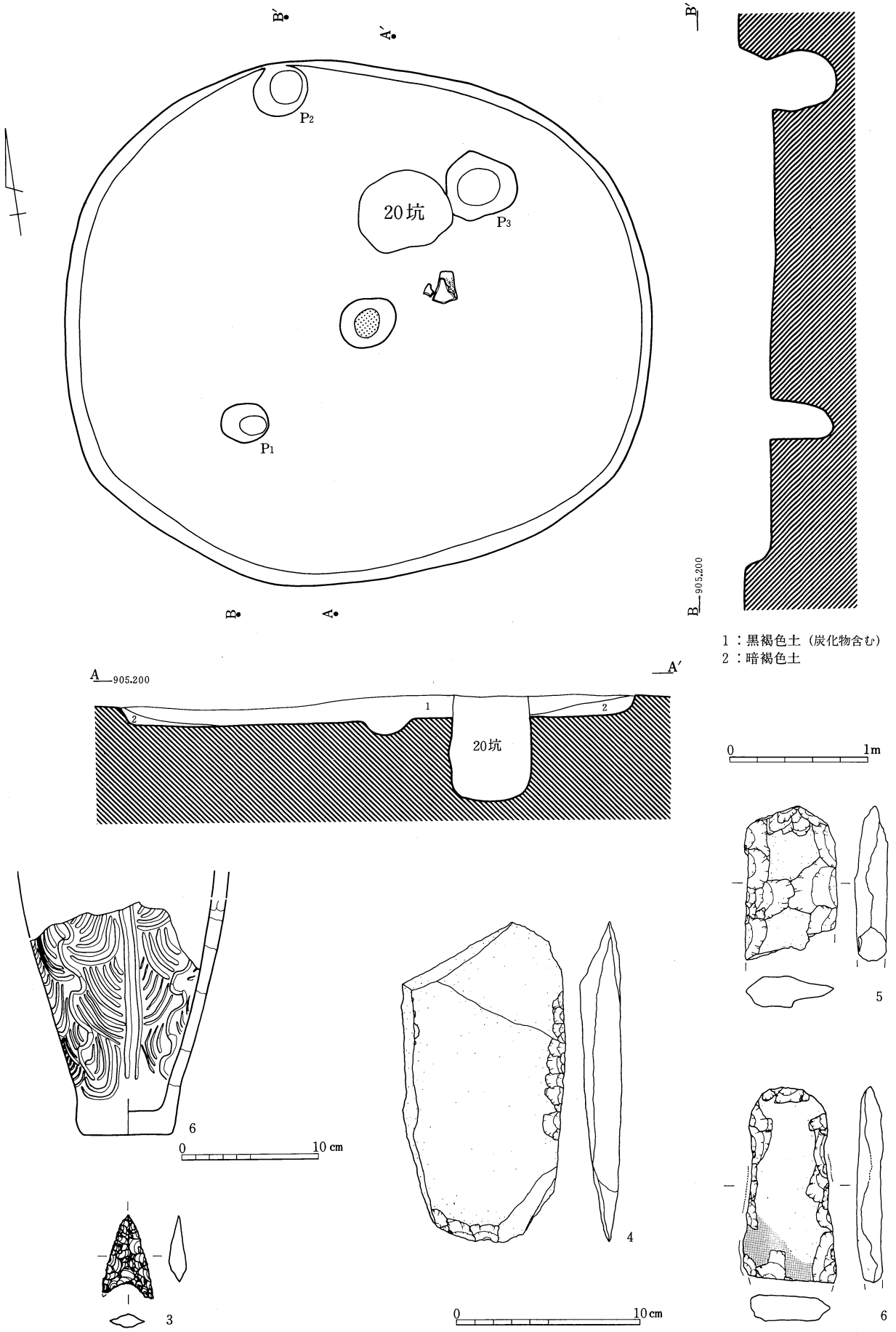

B'
A'
P2
20坑
P3
P1
B
A
B'
B 905.200
1：黒褐色土（炭化物含む）
2：暗褐色土
A 905.200
A'
1
2
2
20坑
0
1m
5
6
0
10 cm
4
0
10cm
3
6

図７　３号住居址

込み（P4～7）が穿たれる。炉址は住居址のやや北寄り中央にある。径165×130 cm、深さ60c m をはかる掘り方内の北と南に炉石をすえ、内部には胴下半を欠く土器を埋置してあった。炉内覆土中には多数の土器片が遺存し、炉石の一部と見られる角礫も認められた。

遺物　土器――図示したものがほとんどすべてである。2はP3より出土した小形土器。3は炉内に埋置されてあった土器で、胴下半を欠く。渦巻文と楕円文を横位に連結した口縁部文様帯をもち、胴部には曲線的な沈線区画文と鱗状の短沈線充塡文が施される。4・5は炉内に遺存していた土器。

石器――2はP1内出土の磨製石斧で、敲打痕を全面に残したもの。輝緑岩製である。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期の所産と考えられる。

3号住居址（図7、PL13・39）

調査区中央南寄り、IIR―22・23グリッドに位置する。覆土および床を20号土坑に切られる。V層上面でIV層土を覆土とする落ち込みとして検出された。また、覆土中には炭化材や炭化物が含まれていた。

東西に長軸をもつ楕円形プランを呈し、径425×380 cm をはかる。VI層（ローム層）上面を床とし、きわめて軟弱な床であった。壁は急傾斜に掘り込まれ、壁高20～25 cm を残す。柱穴はP1～3が相当すると考えられ、やや不規則ながら2号住居址同様三角形状の配置を示す。おおむね径35～50 cm、深さ40～50 cm をはかる。炉址は床面のほぼ中央に検出された。径35×40 cm、深さ40 cm の浅い掘り込み内に、焼土と炭化物がわずかに認められた。規模・形状から地床炉であったと考えられる。

遺物　土器――6は炉址近くの床面上に遺存していた深鉢形土器。胎土に粗砂・雲母を多く含み、赤味をおびた茶褐色を呈す。このほか覆土中から1,410 g・14点の土器片が出土した。

石器――3は黒曜石製の石鏃である。4～6は打製石斧で安山岩製である。このうち4は扁平な石片にに簡単な調整が施されたものである。

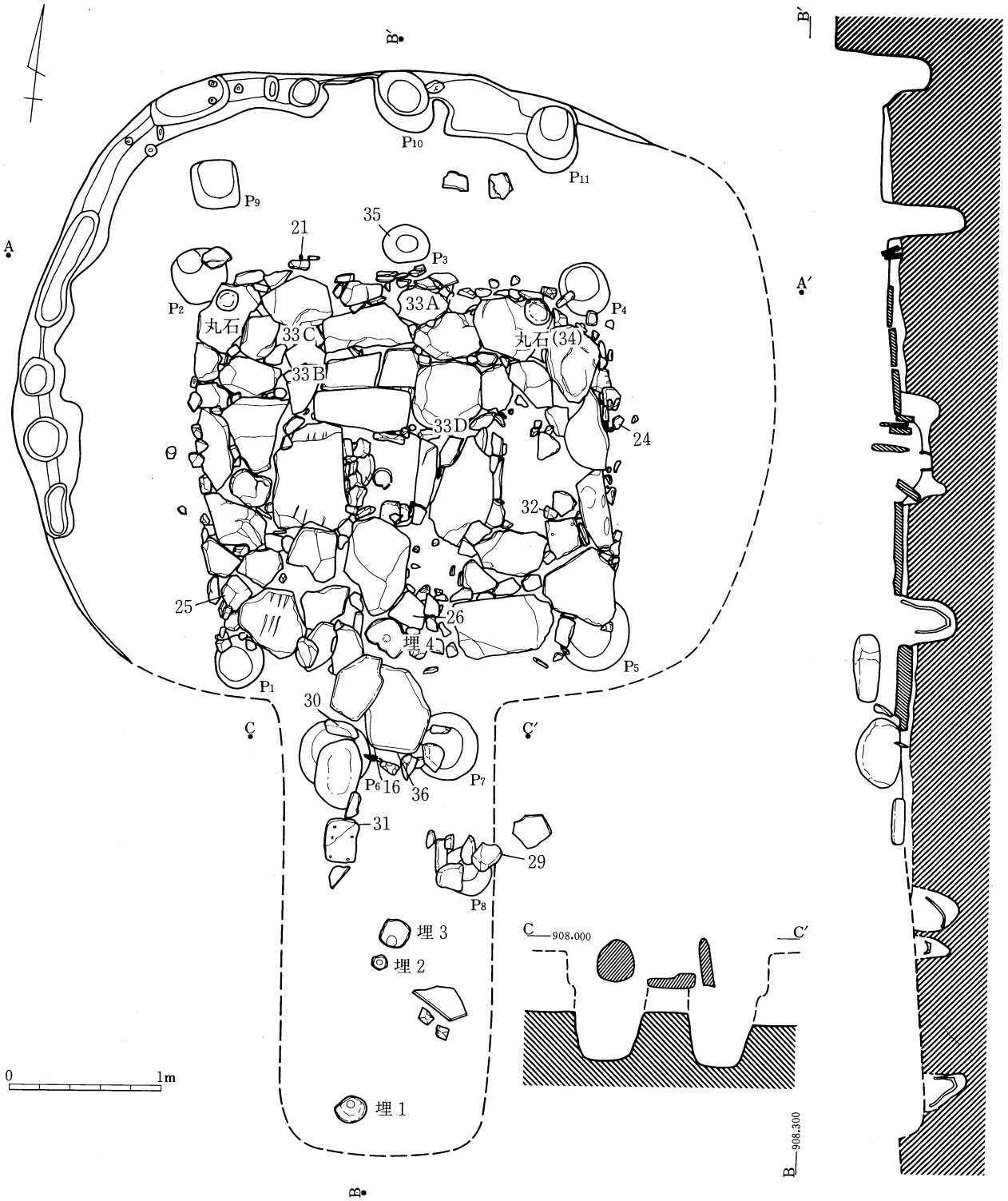
時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第I期の住居であったと考えられる。

4号住居址（図8～14、PL14・15・27・40・41）

調査区のほぼ中央、IIR―06・07グリッドに位置する。柄鏡形の敷石住居址であり、IV層上部で検出された。当初張り出し部先端の埋甕と同基部の敷石とが確認されたが、それぞれ単独の遺構として認識したままに周囲の掘り下げを続行したことから、張り出し部などプラン全体については未確認に終わった。

規模は主体部径410×500 cm、張り出し部推定長300 cm、同幅140 cm をはかり、主軸長は700 cm を越えていたと考えられる。主体部の中央やや前寄りに石囲い炉を設け、炉址を中心としてその周囲に扁平な礫を敷きつめていた。敷石は250×270 cm のほぼ方形を呈し、張り出し部と接する面を除く三方の縁には小礫が立位に埋め込まれていた。また、敷石部の北西隅と北東隅にはそれぞれ丸石が置かれ、張り出し部と主体部との接点には打製石斧と大形剝片石器が埋置されていた。張り出し部にも若干の敷石が使われていたとみられ、P6とP7上部は巨礫や扁平礫を立て配石状をなしていた。

主柱穴は主体部の敷石周囲に検出されたP1～5と考えられる。P10やP11など周溝内に検出されたピットも構造上重要であったと思われるが、東壁下の状況を把握できなかったことから全体像は不明のままとなった。張り出し部にはP6～8が検出された。とりわけ、上記したように主体部との接点に相当するP6・P7間は敷石や石器の埋置などに特異な状況がうかがえ、特別の配慮が加えられた空間であったと推定できる。炉址は扁平礫を立位に埋めて作られた方形の石囲い炉である。炉縁を敷石面とほぼ同じにそろえ、内部には小形の土器を埋設していた。また、張り出し部および主体部との接点には総数4個の埋甕が埋設されていた。これらのうち、埋甕1は主体部に対して外傾し、埋甕2・3は同内傾して埋められていた。



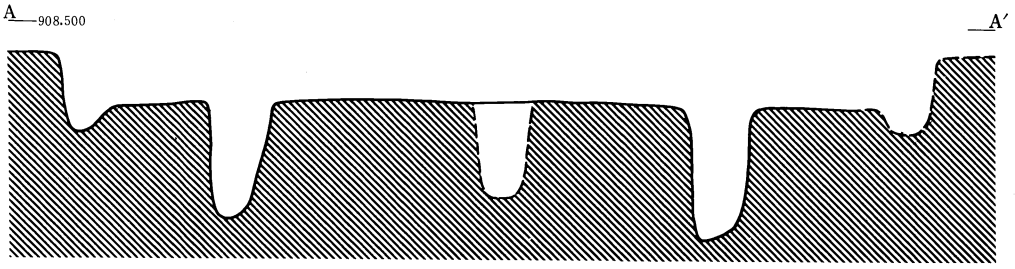


図８　４号住居址遺物分布（１）　　図９　４号住居址（２）

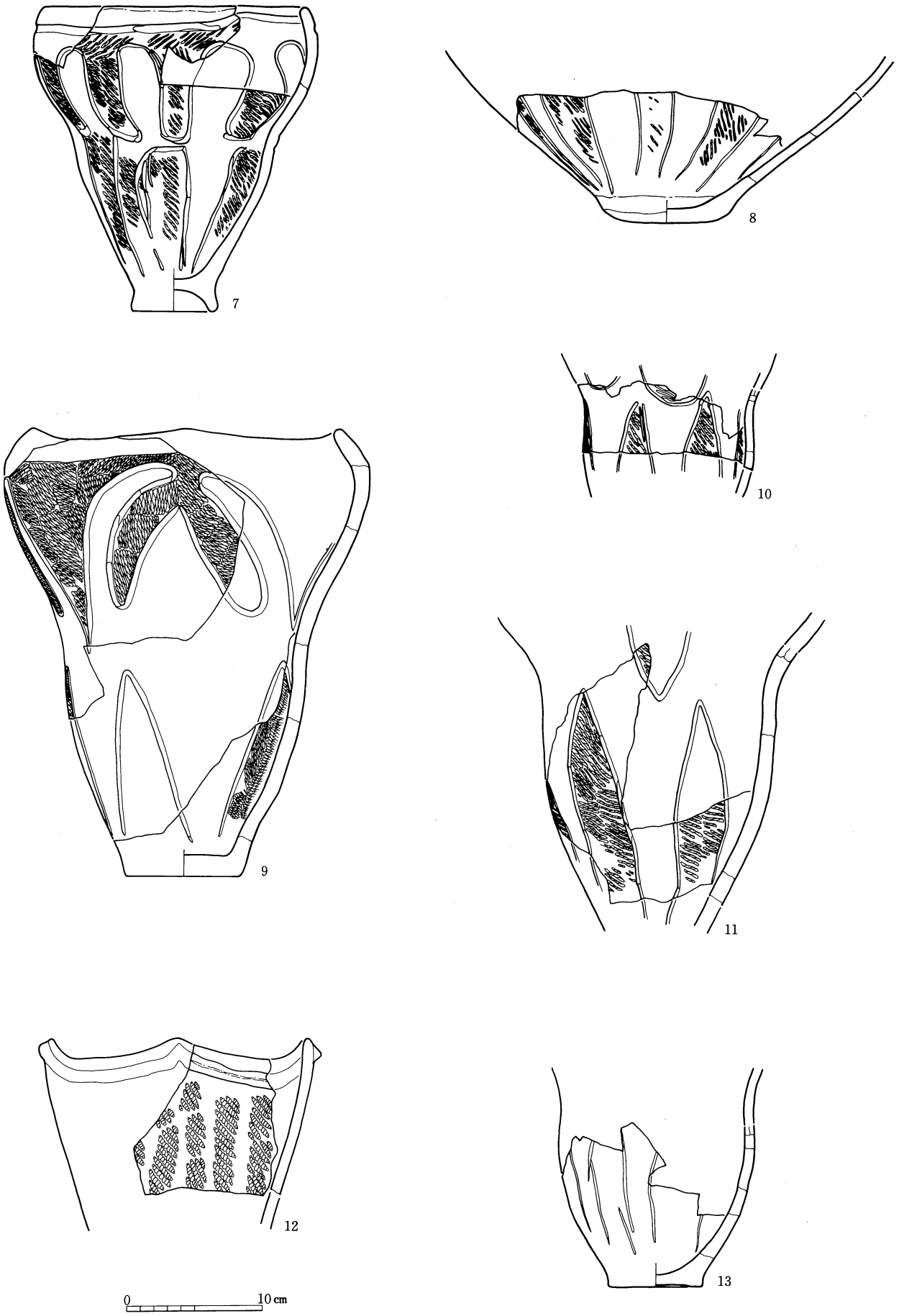


図10　4号住居址（3）

図11　４号住居址（４）

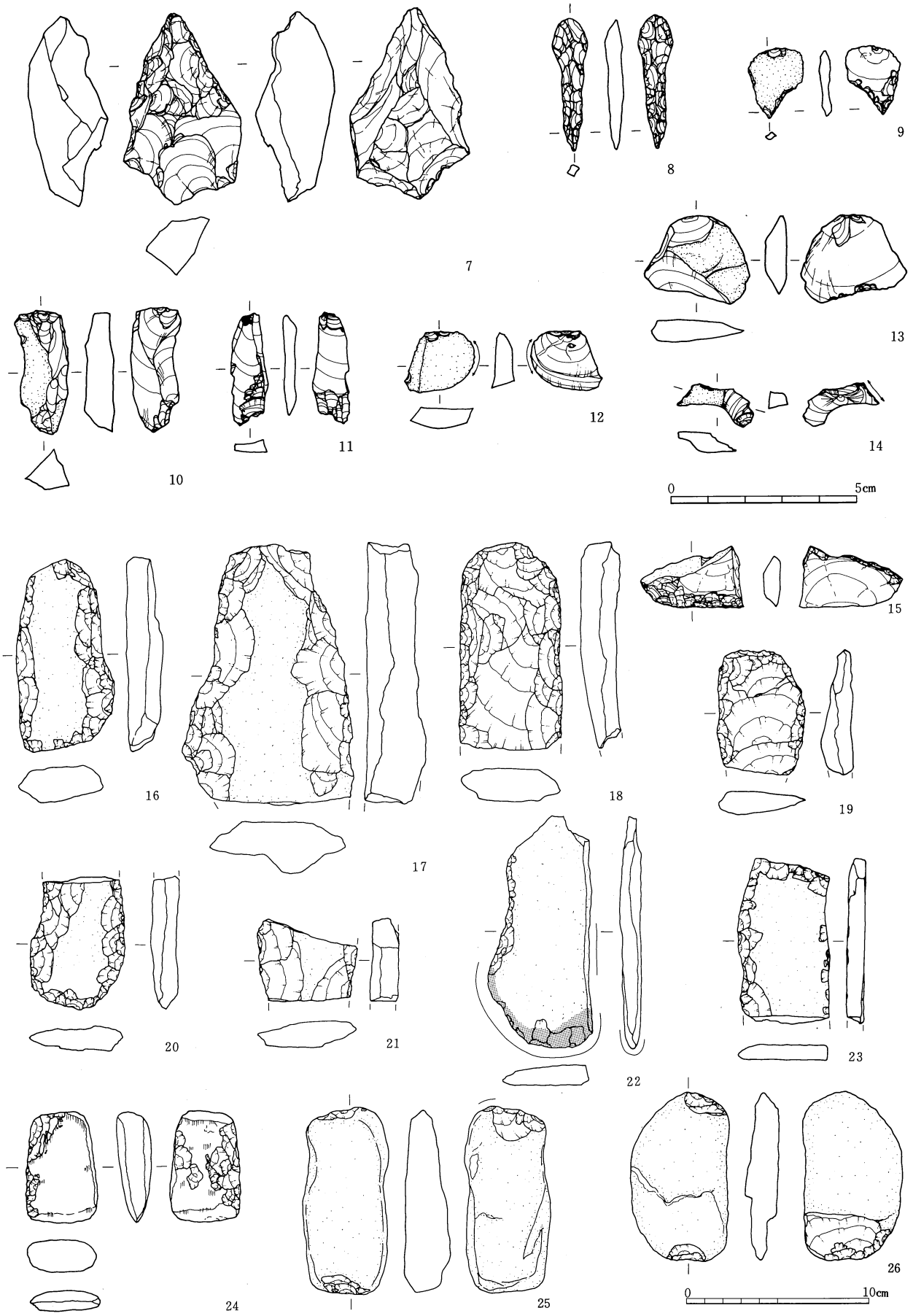


図12　4号住居址（5）

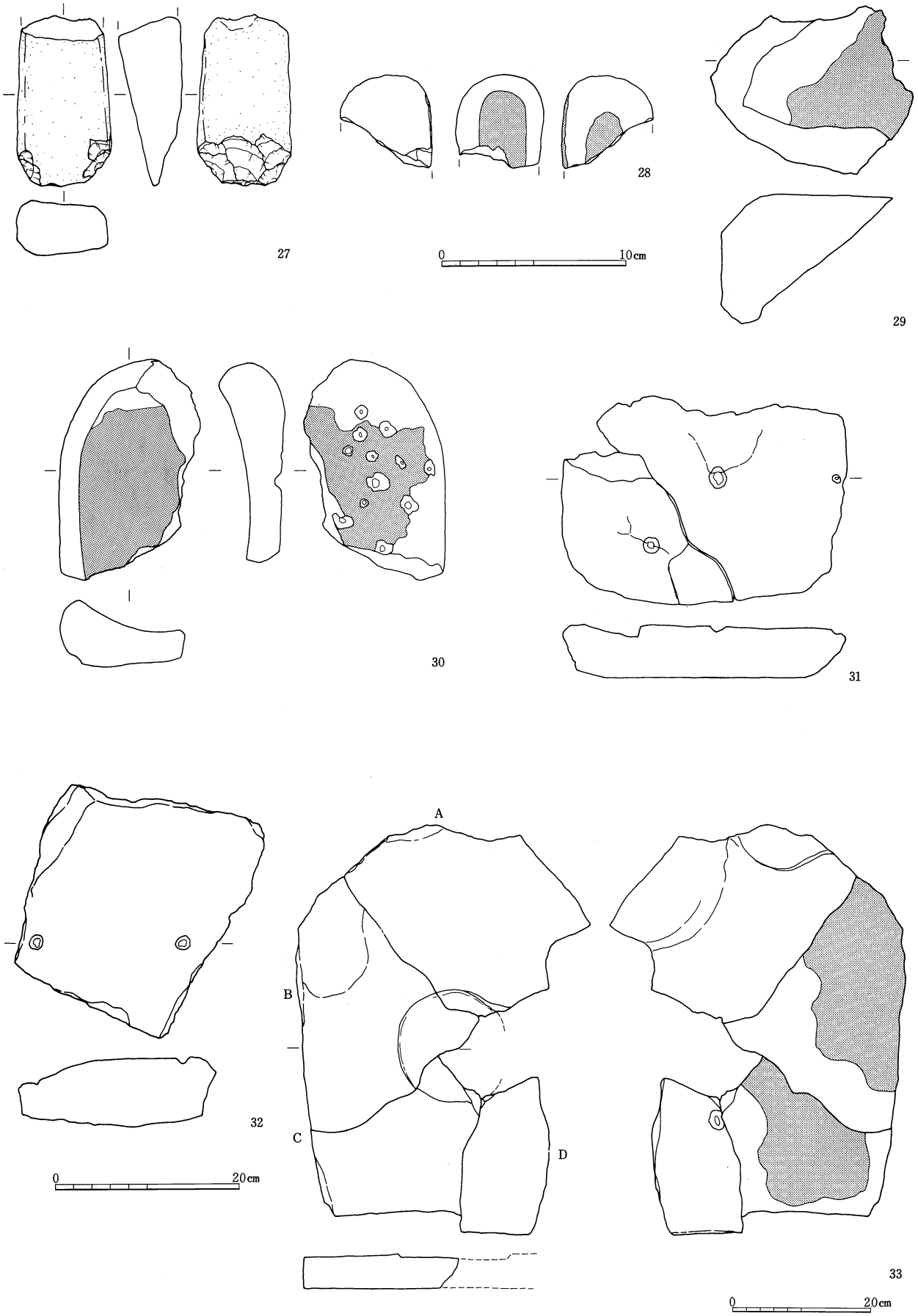


図13　４号住居址（６）

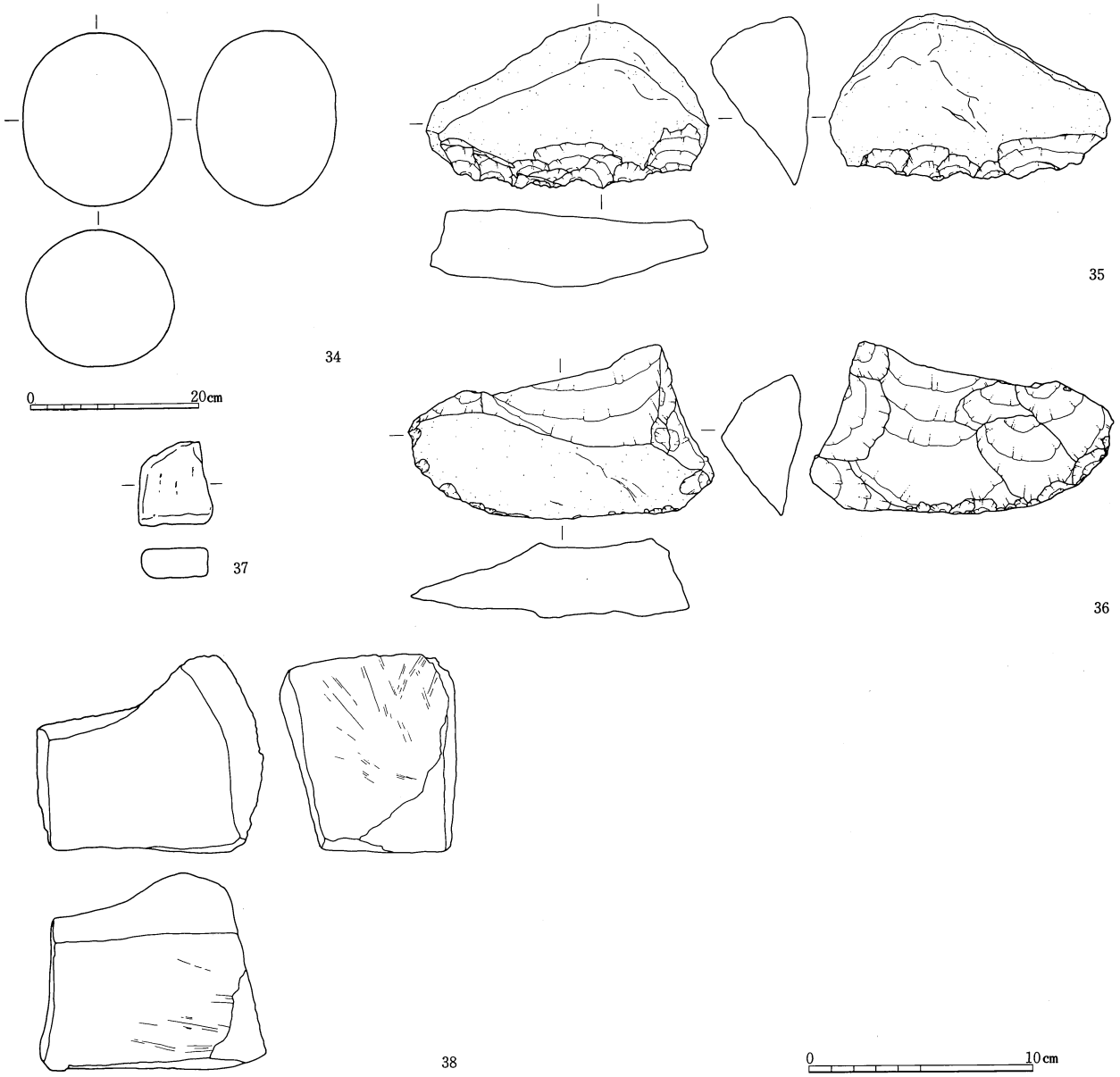


図14　4号住居址（7）

遺物　土器――総重量7,650 g・342片出土した。7～9は埋甕1・2・4に用いられていたもの。すべて無節縄文を地文とする。10は炉内に埋位されていた土器。11～31は覆土中より出土した土器で、後期前葉に帰属する31を除き、ほかはすべて中期後葉の土器である。

石器――7は石槍と思われる。8・9は石錐、10・11はピエス・エスキーユ、12～14は小剥離痕を有する剥片である。16～23は打製石斧で16・17は調整が粗雑で、特に17は背面に礫面を残し両者ともに非実用品の可能性がある。33は敷石に利用された鉄平石の接合資料で中央部に掘り窪めた跡が認められる。7・13がチャート製、8～14が黒曜石製、24が輝緑岩製の他は安山岩製である。

時期　出土遺物の特徴から、本址は中期後葉、本遺跡第Ⅲ期に構築された住居であったと考えられる。

5号住居址（図15～21、PL15・16・27・31・39）

調査区中央やや北寄り、ⅡR―02グリッドに位置する。4 m余り南には4号住居址がある。Ⅳ層中で遺物の集中的な出土により存在を確認したが遺構検出には至らず、Ⅴ～Ⅵ層まで掘り下げてプランを確認した。規模は径490×435 cmをはかり、南北にやや長い楕円形を呈する。壁は急傾斜に掘り込まれ、壁高は最

大で55 cmを残す。覆土はⅣ層に対比される暗褐色土や黒褐色土であり、炭化物やローム粒を含んでいた。また、１～３層にかけては多量の遺物を包含し、とりわけ、炉址上部からその南側にかけては大形破片が数多く遺存していた。

Ⅵ層（ローム層）を掘り窪めた面をそのまま床とし、南寄りを除く壁下には幅20～40 cmの周溝がめぐる。床面には14個のピットが掘られていたが、そのうちP1・５・８の３つが主柱穴とみられる。径40～50 cm、深さ50～60 cmをはかる。このほか、P2・４・６・７・９も上屋構築にかかわる柱穴であった可能性が高い。P10とP12や対ピット状のP13・14は出入口施設に関連する柱穴と考えられる。P11は埋甕に付随したものか。炉址は方形の石囲い炉であり、中央やや北寄りに設けられていた。径約90 cm、深さ65 cm余りの大きな掘り方内に大形の亜円礫を四方に組み合わせて作られ、内部には底部を欠く深鉢形土器が入れられていた。炉縁石上端から炉底までの深さは40 cm。また、炉辺南側には焼土の堆積が認められた。周溝や対ピット状のあり方などから出入口部と推定される南壁寄りには、埋甕が埋設されていた。径50×40 cm、深さ25 cmの掘り方内に、深鉢形土器の胴部を正位の状態に埋めてあった。

遺物　土器――総重量36,570 g・1,237片の土器が出土した。32は埋甕に用いられていた土器、33は炉内に入れられていた土器である。34～84は覆土中に遺存していたもの。32は縦位懸垂文により器面を４分割し、その間を蛇行懸垂文や鱗状の短沈線文で埋める。33は円形や逆「U」字状の沈線区画文内に縄文が充塡施文される深鉢形土器。40は床面より10 cmほど浮いた状態で出土した小形土器。肩部に小さな橋状把手をめぐらし、丸みをもつ体部には渦巻状のモチーフが組み合わされる。41の表裏と皿状の42には赤色塗彩の痕跡が認められる。

石器――出土量が一番多い。打製石斧は出土の半分以上をしめる。石錐（39）、小剝離痕を有する剝片（40～44）などの小形の石器は少ない。打製石斧のうち50・56は斜状の摩耗痕が認められる資料。68～70は磨石類である。石棒71は９号住居址出土の石棒と接合する。本址の方が先行するため廃棄されたものと判断される。72は軽石製品である。39～44が黒曜石製の他はすべて安山岩製である。

時期　本址は出土遺物より、中期後葉、本遺跡第Ⅲ期の所産であると考えられる。

６号住居址（図22、PL16・17・39）

調査区のほぼ中央、ⅡＲ―12グリッドに位置し、Ⅴ層上面で検出された。Ⅳ層掘り下げ時に埋甕が確認され、住居址の存在が予測されたものの、調査の不手際からプラン検出には至らなかった。その結果、Ⅴ層上面で埋甕および炉址、さらに一部配石状を呈す礫と遺物の広がりを記録したにとどまる。

炉址は径55×63 cm、深さ20 cm余りをはかり、南側に角柱状の炉石を残す。規模・形状から、炉石は当初より南縁に据えられていたのみであったと考えられる。炉底から炉壁にかけては部分的に焼土化していた。埋甕は炉址の南側に50 cmほど離れて検出された。径35 cmの掘り方内に底部を欠く深鉢形土器が上部を炉址側に傾けた状態で埋設されていた。炉址と埋甕の周囲には多数の円礫が遺物とともに遺存し、北西部および炉址東側では配石状を呈していた。これらの礫は住居構築時には炉址を中心として壁下をめぐっていたとも考えられ、その場合径280 cmほどの隅円方向プランが想定される。床はⅤ層上面にあったと考えられるが、硬化面など明瞭には捉えられなかった。

遺物　土器――総重量3,730 g・53片が出土した。85は埋甕に用いられていた土器。形骸化した口縁部文様帯をとどめ、口縁下から胴部にかけては、２号住居址出土の３や５号住居址出土の38と同様なモチーフが描かれる。86は床面出土の大形破片。縄文を地文として、２本１組の懸垂文を縦位に連らねる。

石器――73はチャート製の石鏃、74・75は打製石斧、76は礫器、77は多孔石である。73以外は安山岩製である。

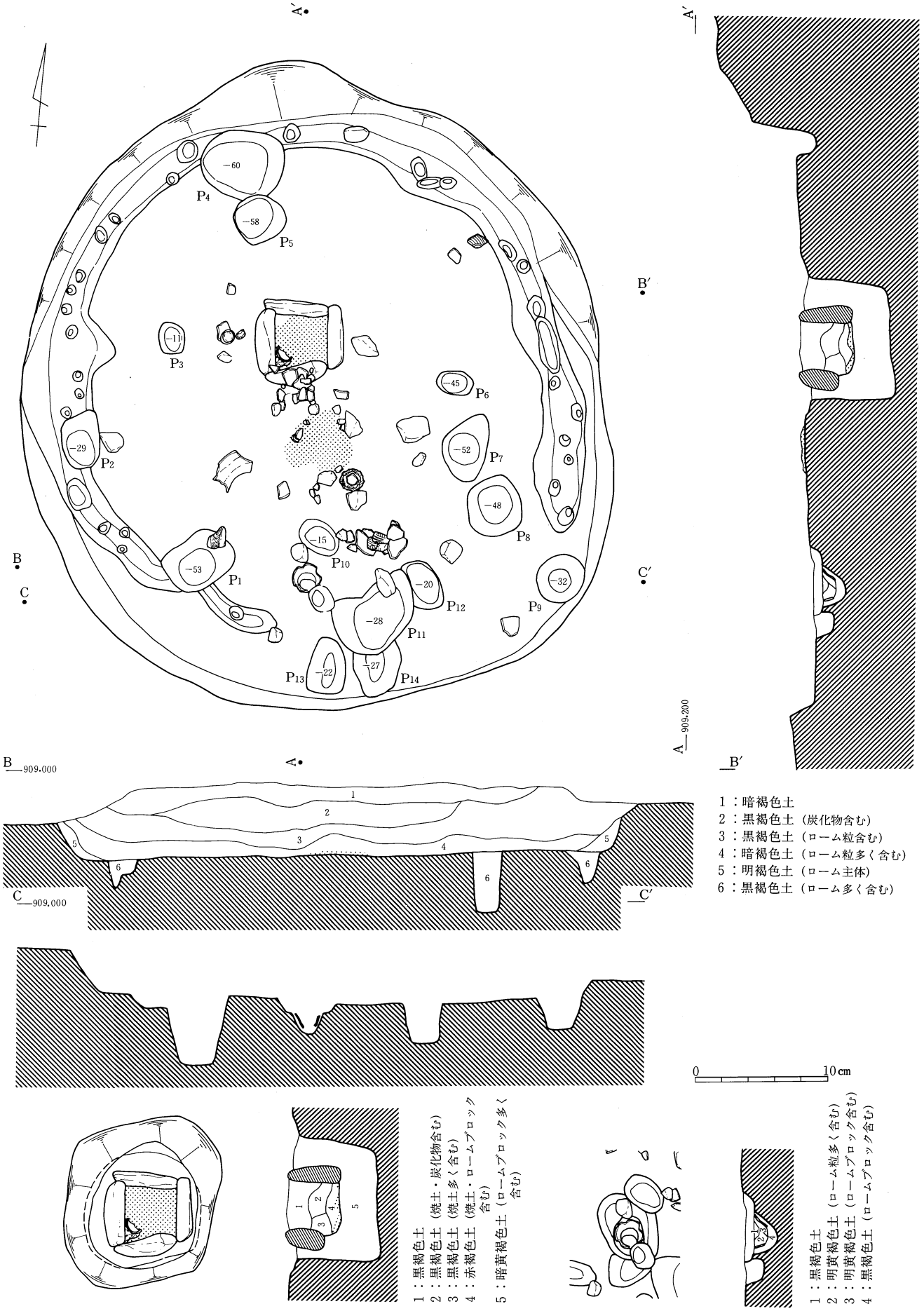

A′
A
B
B′
C
C′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
−60
−58
−11
−45
−29
−52
−48
−15
−53
−20
−32
−28
−27
−22
909.000
909.200
1：暗褐色土
2：黒褐色土（炭化物含む）
3：黒褐色土（ローム粒含む）
4：暗褐色土（ローム粒多く含む）
5：明褐色土（ローム主体）
6：黒褐色土（ローム多く含む）
0
10cm
1：黒褐色土
2：黒褐色土（焼土・炭化物含む）
3：黒褐色土（焼土多く含む）
4：赤褐色土（焼土・ロームブロック含む）
5：暗黄褐色土（ロームブロック多く含む）
1：黒褐色土
2：明黄褐色土（ローム粒多く含む）
3：明黄褐色土（ロームブロック含む）
4：黒褐色土（ロームブロック含む）

図15　5号住居址（1）

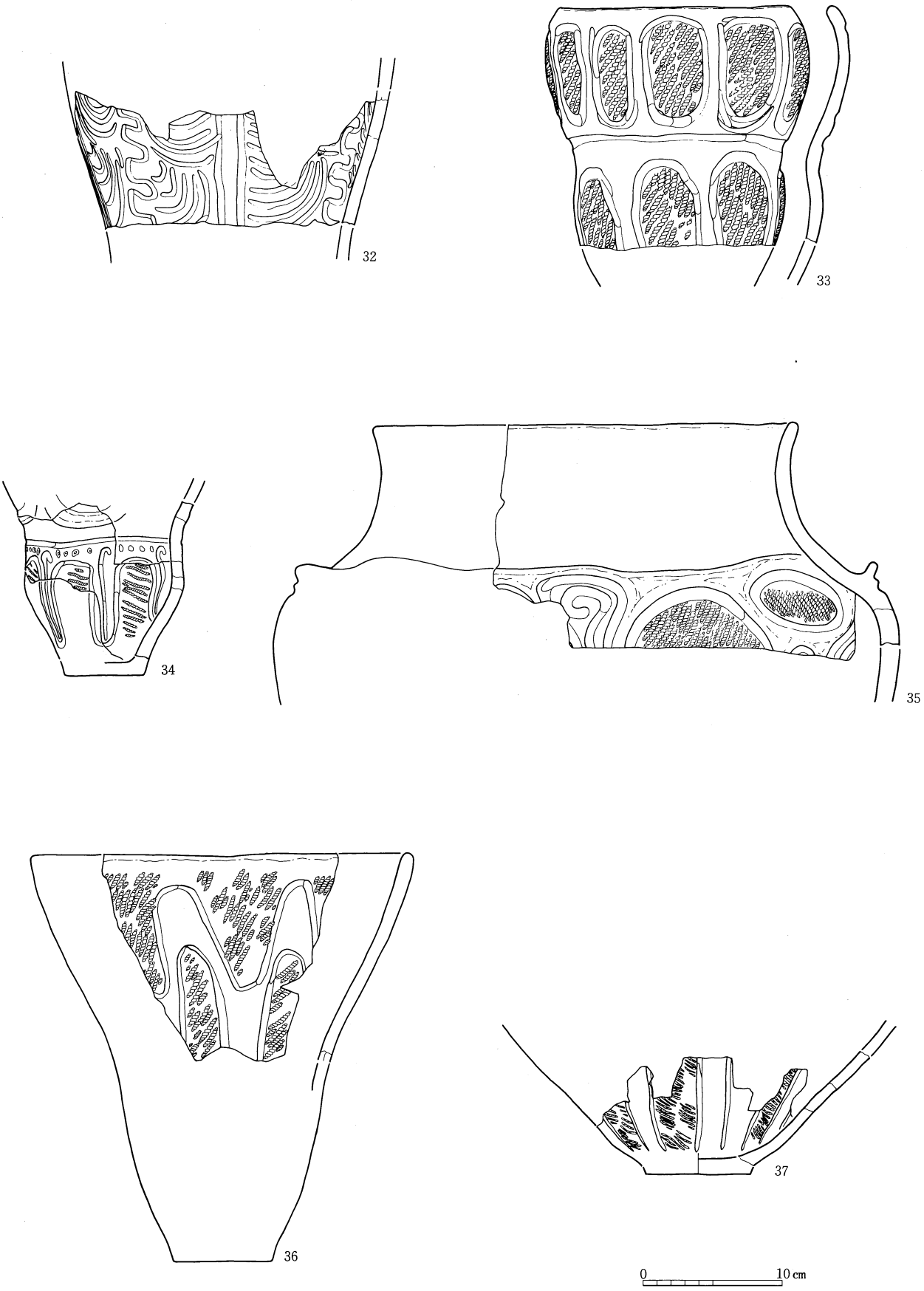


図16　５号住居址（２）

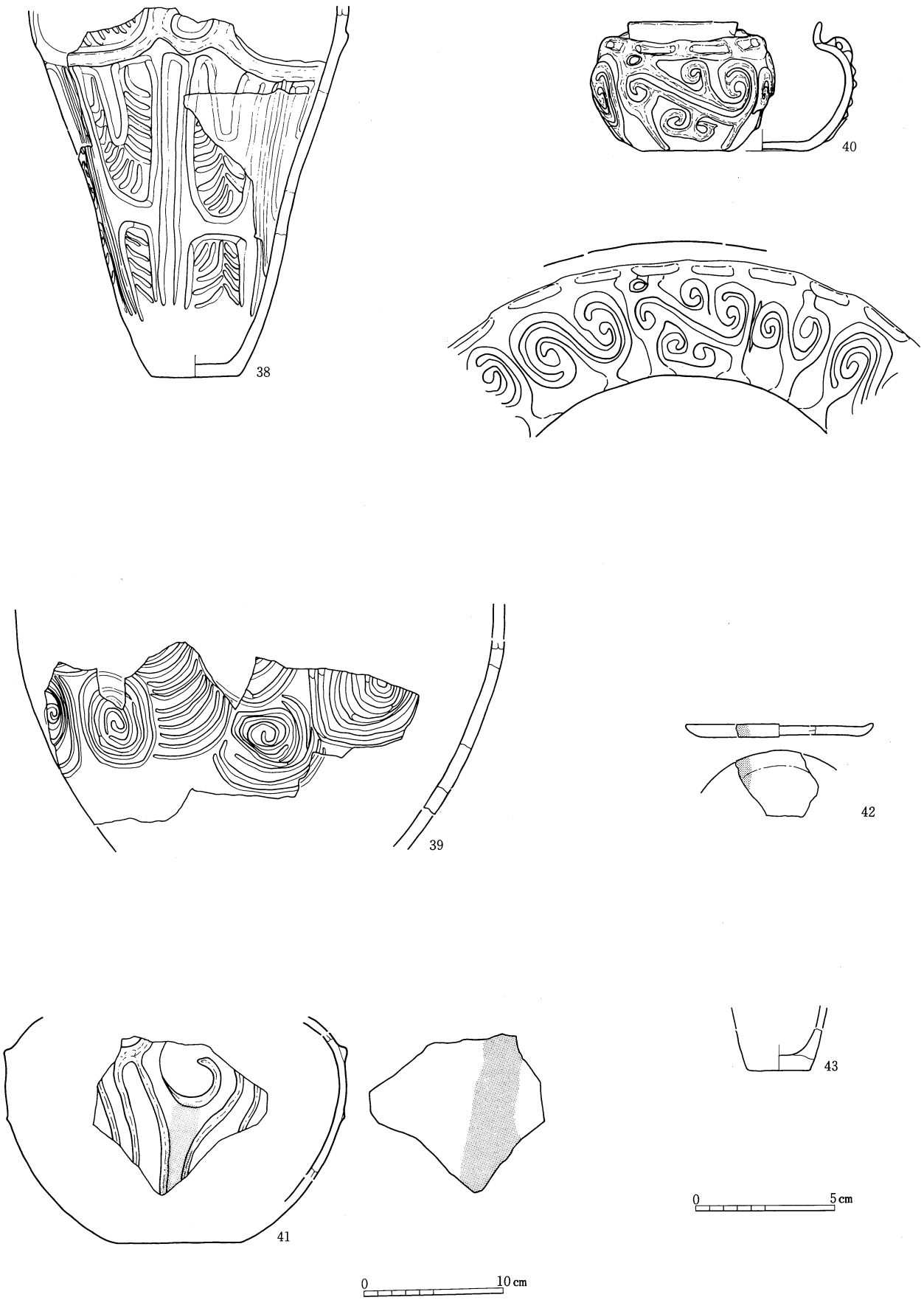


図17　5号住居址（3）

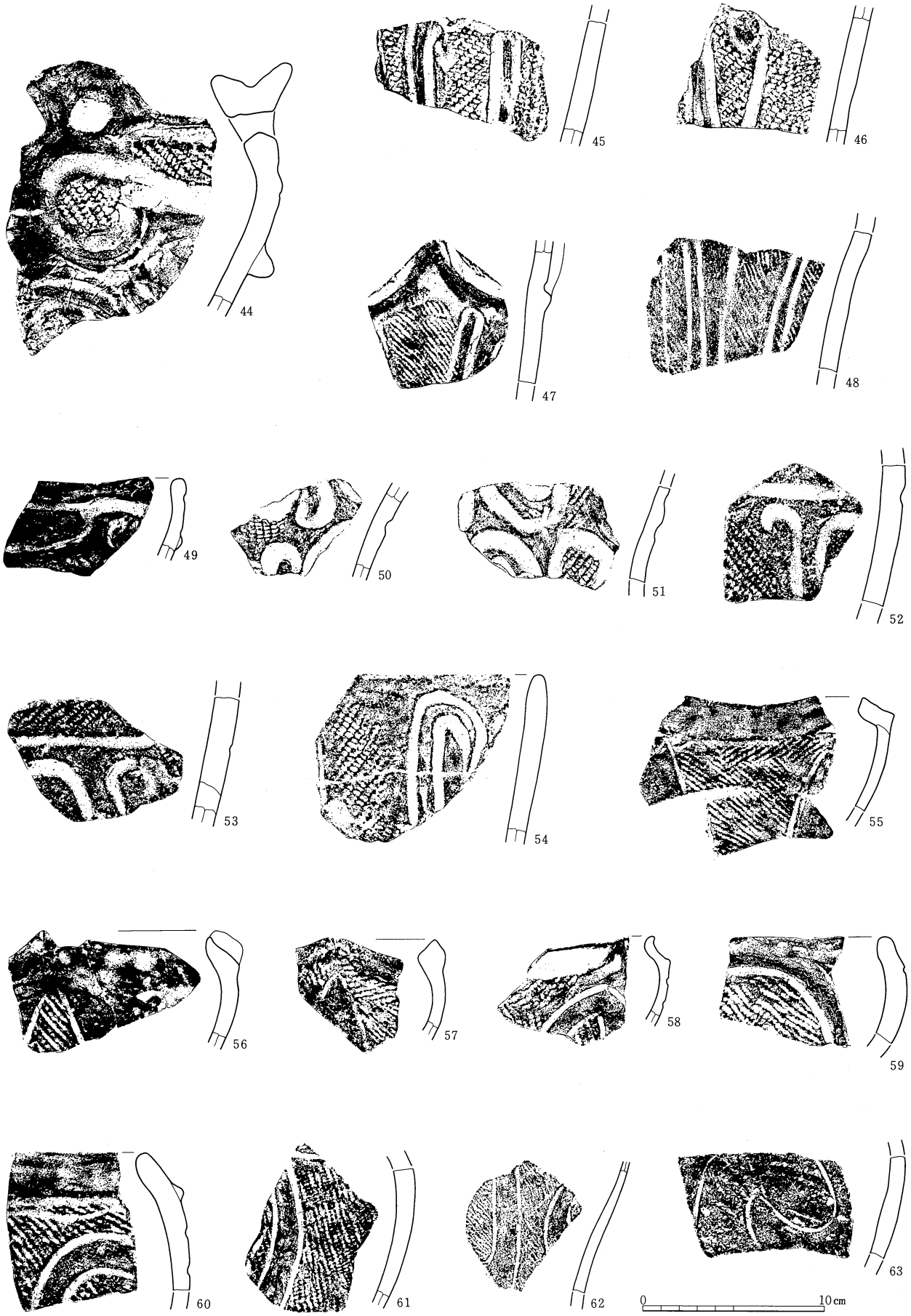


図18　５号住居址（４）

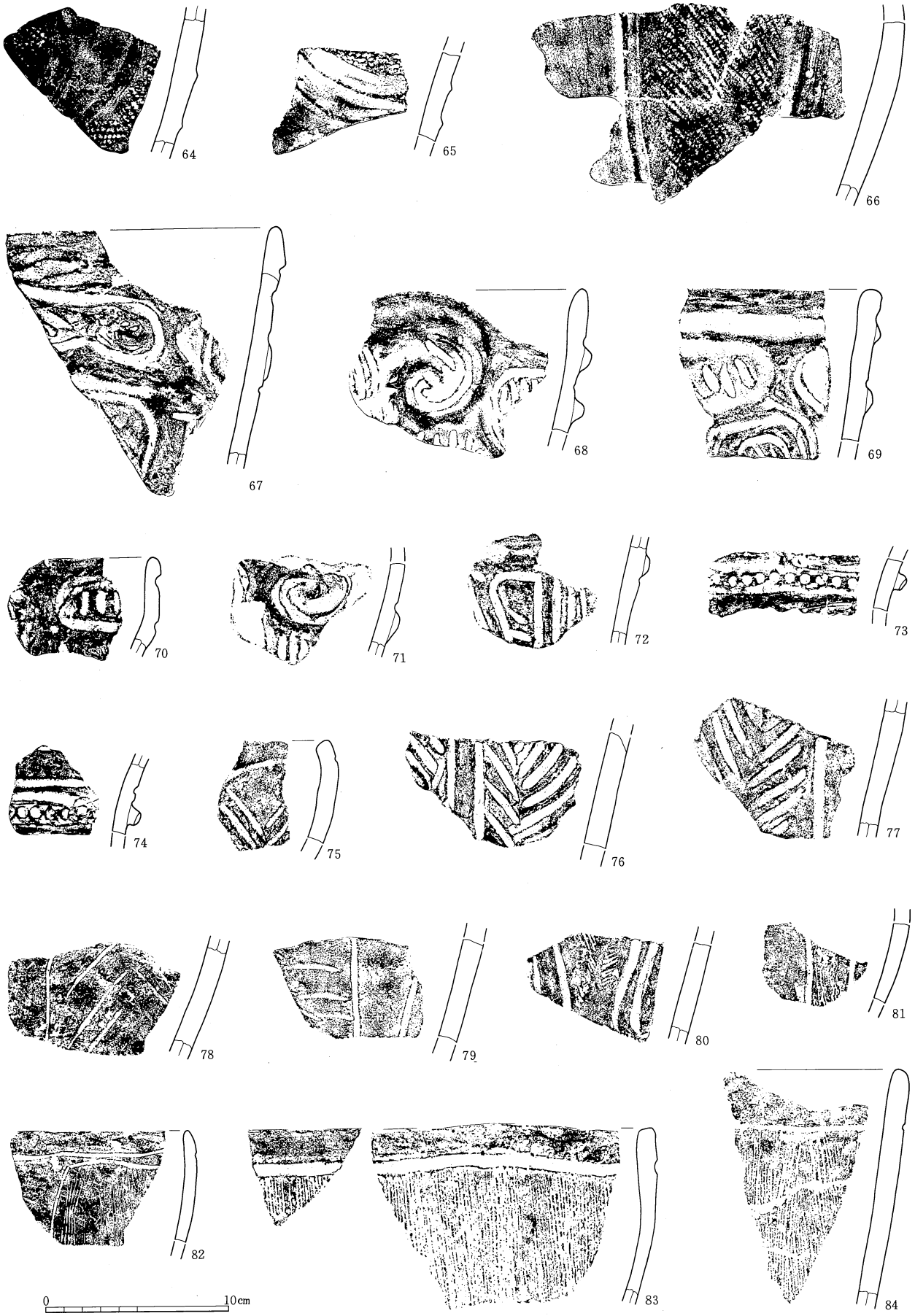


図19　5号住居址（5）

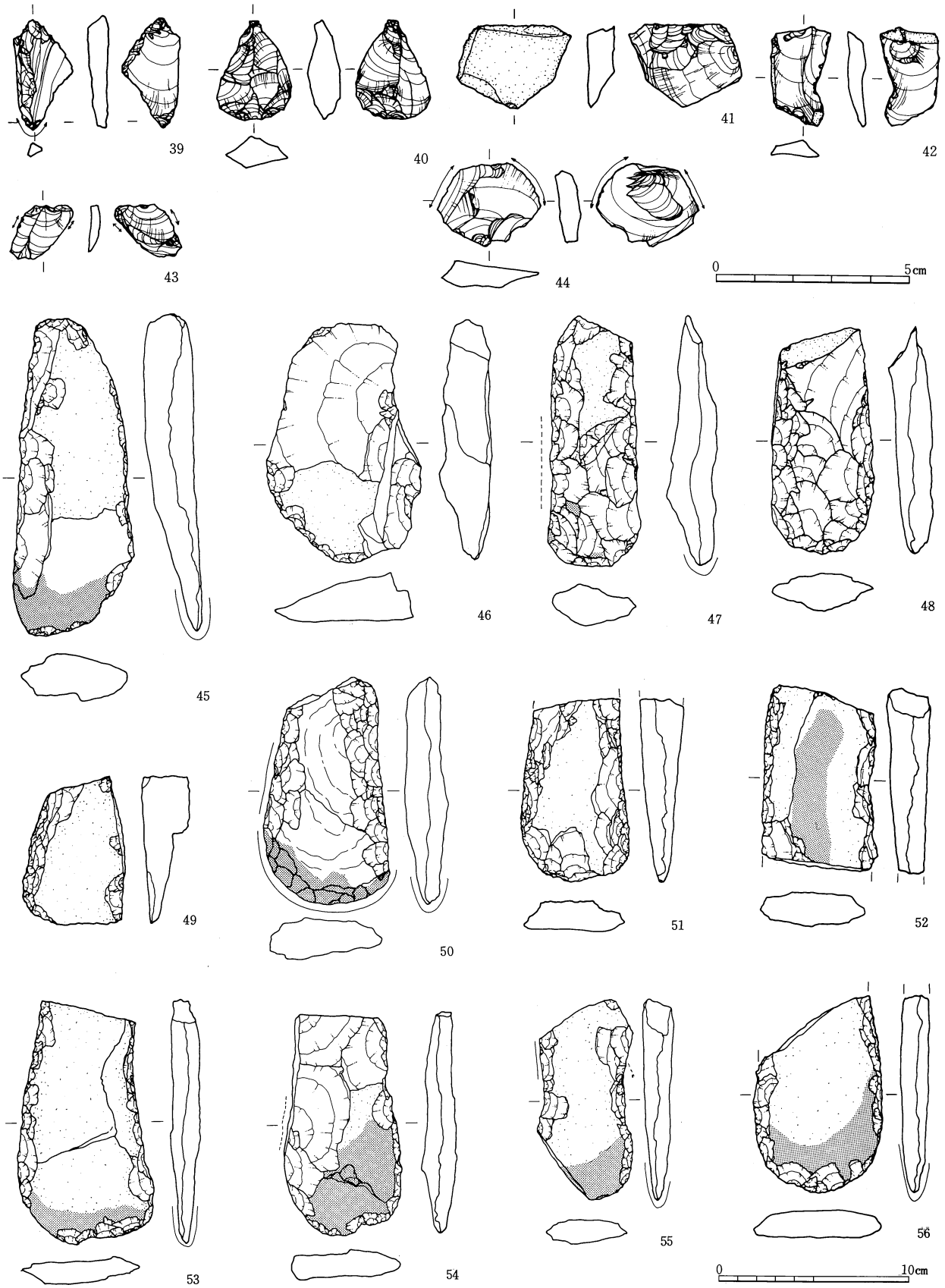


図20　５号住居址（６）

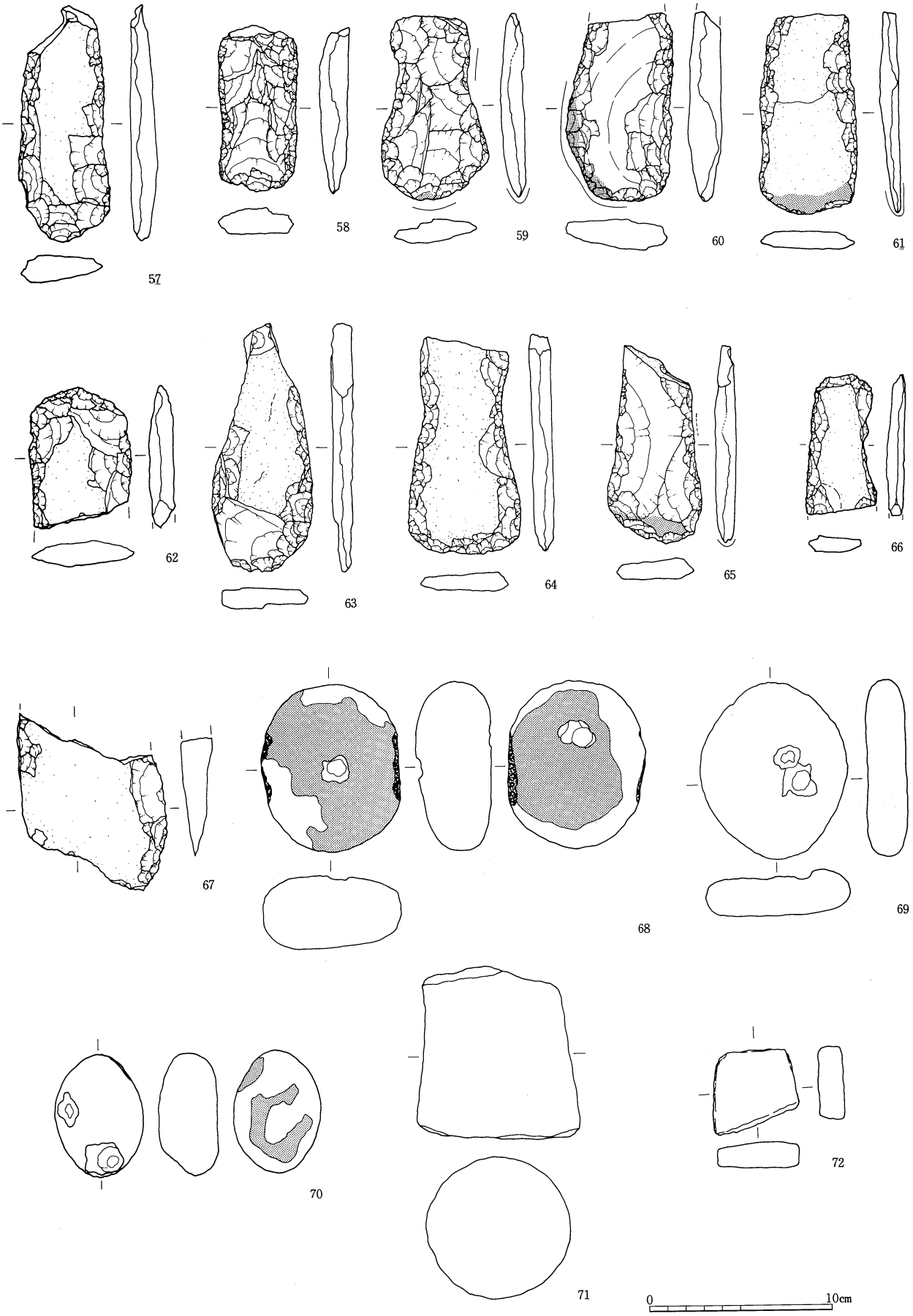


図21　5号住居址（7）

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期に構築された住居址と考えられる。

７号住居址（図23、PL17）

調査区南東寄り、IIＲ―23グリッドに位置する。IV層下部で埋甕が確認され、周辺を精査したところ柱穴とみられるピットが検出されたことから、住居址と判断した。検出時にはすでに床面を失っており、壁や床の範囲・覆土などは記録できなかった。

主柱穴と考えられるのはP1～４であり、東西に長い長方形配置に復原できる。P1とP4の間に埋甕が埋設され、その南側には対ピット状をなすP5・P6が掘られている。P7～P9については本址に伴うものか否か明らかにしえない。また、炉址や周溝も不明のままとなった。規模・形状については450×515 cmほどの楕円形プランが想定される。しかし、大形の対ピットの存在や埋甕に用いられていた土器の時期を考慮すると、敷石住居であったか否かは別として４号住居址や９号住居址のような柄鏡形を呈していたことも充分に考えられる。

遺物　土器――総重量1,230ｇ・５片の土器が出土したにすぎない。87は埋甕に用いられていた土器。口縁部と底部付近を欠いた深鉢形土器であり、逆「U」字状をなす細い沈線文が施される。胎土に粗砂を多く含み、調整も全体に粗い。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第III期に帰属すると考えられる。

８号住居址（図24、PL18）

調査区中央部のやや西寄り、IIＲ―14グリッドに位置する。IV層下部で検出された。

推定径約300×350 cmの楕円形プランを呈するとみられるが、壁の検出が一部にとどまったことから、全体の規模・形状は推定の域を出ない。床はIV層下部からＶ層上面にかけて掘り込んで作られていた。硬化面などは認められず、比較的軟弱であった。本址の中央やや北寄りに炉址が確認された。径約60 cm、深さ20 cmの掘り込みを有し、炉底には焼土が堆積していた。また、床面上には炉址を取り囲むように扁平な大形礫多数が遺存し、そのうちのいくつかには使用痕が観察された。柱穴・周溝は検出されなかった。

遺物　土器――総重量1,500ｇ・33片出土。88は上げ底状の脚を有する底部破片。遺構外出土のと類似する土器であろう。89・90は同一個体の土器片。縄文を地文として、隆帯文や沈線文が施される。

石器――78は多孔石である。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期に使用・廃棄された住居址と考えられる。

９号住居址（図25～29、PL18～20・41）

調査区南西寄り、IIＱ―10グリッドに位置する。VI層上面において、暗褐色土の落ち込みとして検出された。検出時に攪乱と誤認したことから住居址との認定に至らず、住居址中央から南東側にかけてを過度に削ってしまっている。また、北西端部を28号土坑に切られる。

柄鏡形の敷石住居址であり、隅丸方形を呈する主体部に長さ160 cm余りの張り出し部が接続する。主体部径は450 cmほどをはかり、主軸長は618 cmに達する。覆土は暗褐色土を主体とし、炭化物やロームを含んでいた。主体部の中央やや前寄りに方形の石囲い炉を設け、床面には南東部を除いて敷石が施される。敷石は厚さ５～８ cmの扁平な礫をびっしりと敷きつめ、とりわけ、炉址の奥寄りには大形礫を用いていた。用材は遺跡周辺に産する板状節理の安山岩を多用し、すき間を小礫で埋めていた。南東側は壁下に敷石がめぐるのみであるが、これは住居構築当初より「土間」的な機能を意図していたことによると考えられる。この部分の床面上には完形の深鉢形土器をはじめ、磨石や打製石斧など石器類も多く遺存していた。

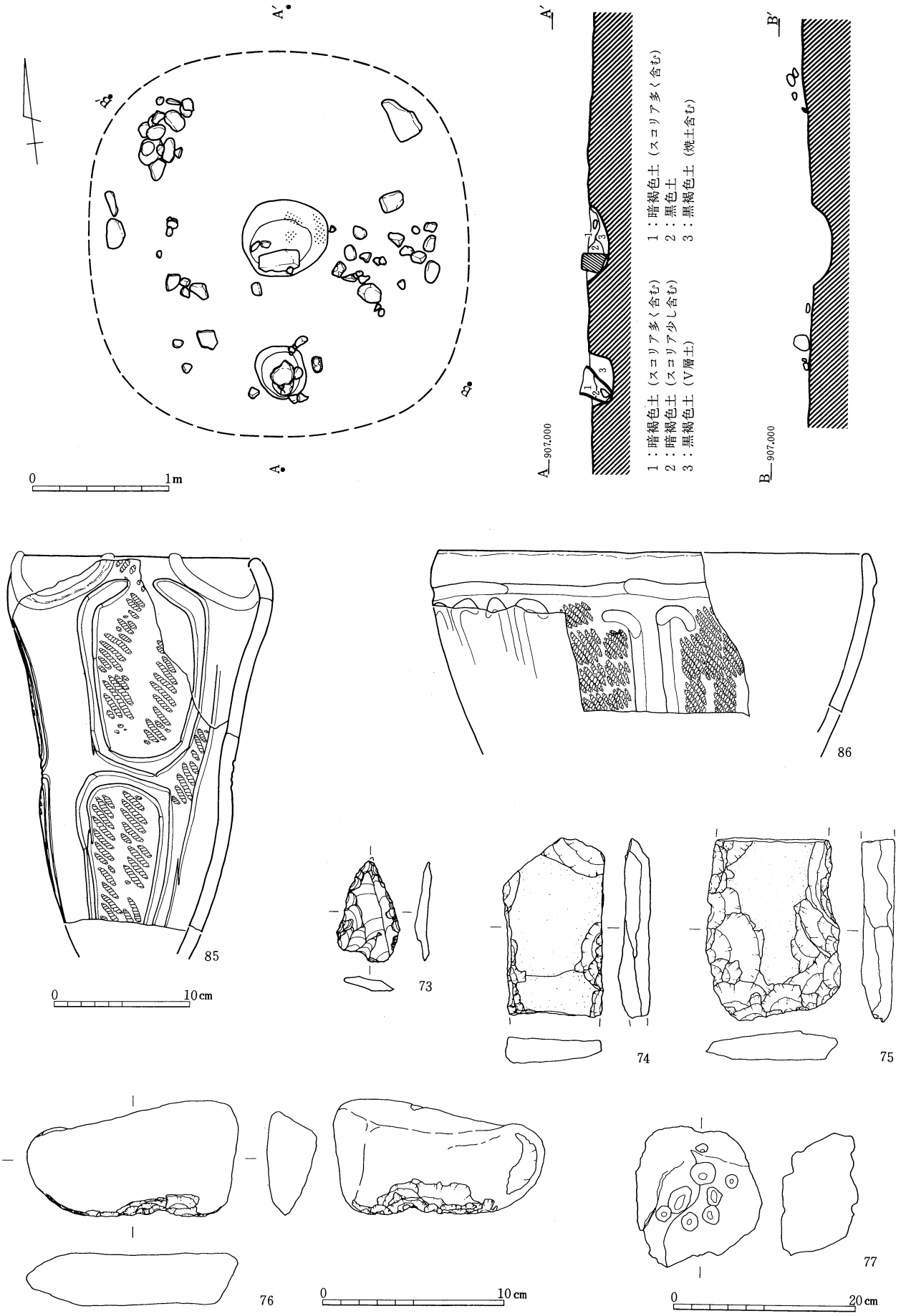

A
A′
B
B′
0
1m
A 907,000
1：暗褐色土（スコリア多く含む）
2：暗褐色土（スコリア少し含む）
3：黒褐色土（Ⅴ層土）
1：暗褐色土（スコリア多く含む）
2：黒色土
3：黒褐色土（焼土含む）
B 907,000
85
86
73
74
75
76
77
0
10cm
0
10cm
0
20cm

図22　6号住居址

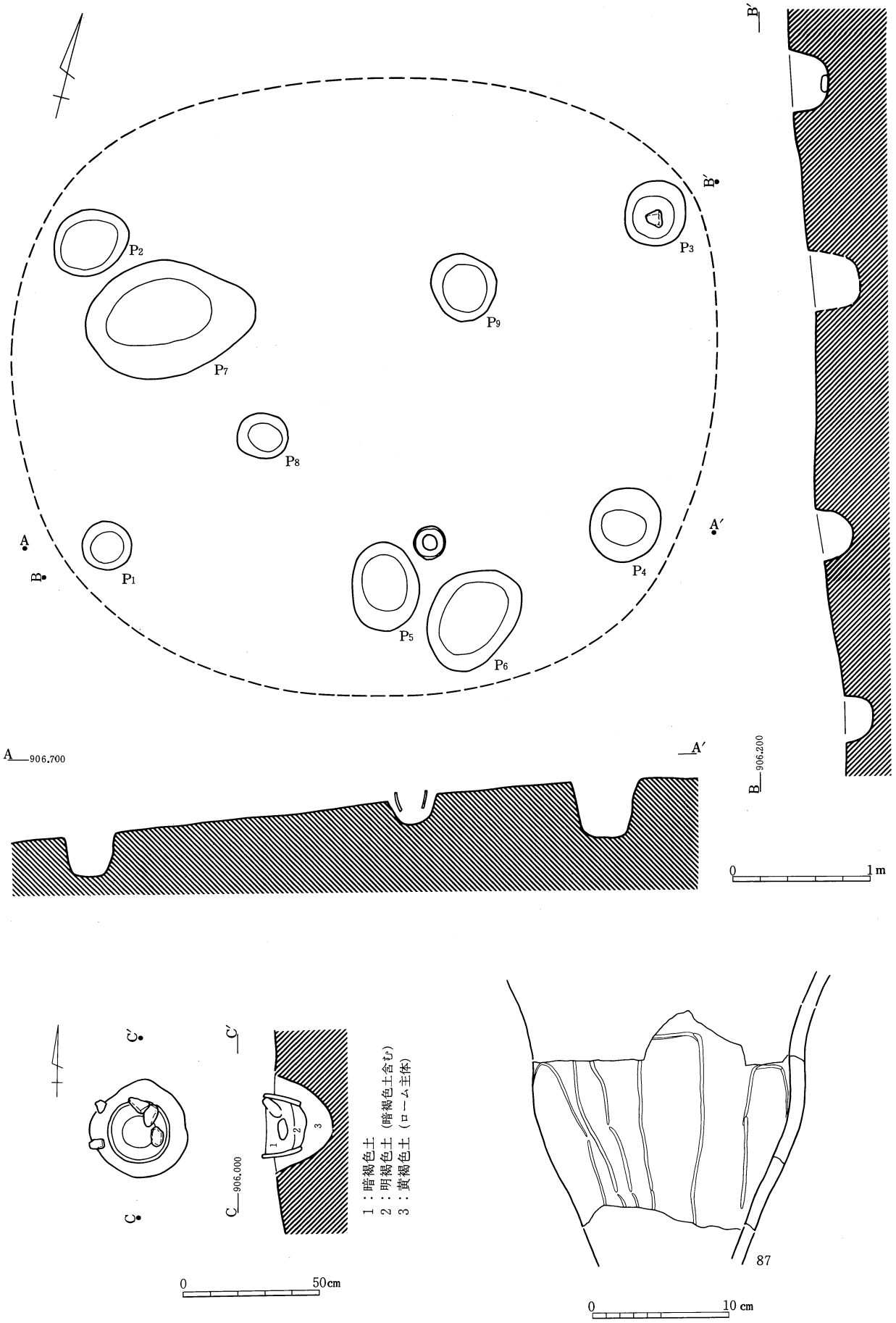
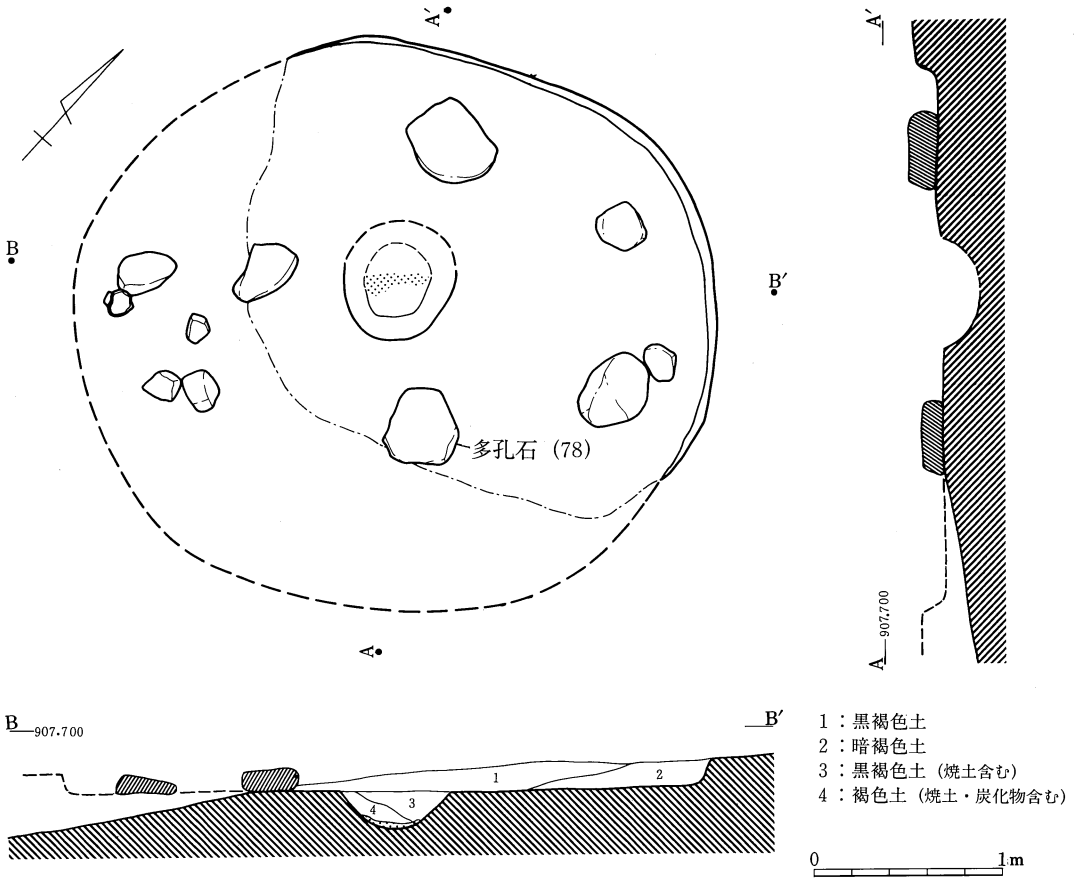

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
A
A′
B
B′
C
C′
A 906.700
B 906.200
C 906.000
0 1m
0 50cm
0 10 cm
1：暗褐色土
2：明褐色土（暗褐色土含む）
3：黄褐色土（ローム主体）
87

図23　７号住居址


A′
B
B′
多孔石（78）
A
A′
A
907.700
B
907.700
B′
1
2
3
4
1：黒褐色土
2：暗褐色土
3：黒褐色土（焼土含む）
4：褐色土（焼土・炭化物含む）
0
1m

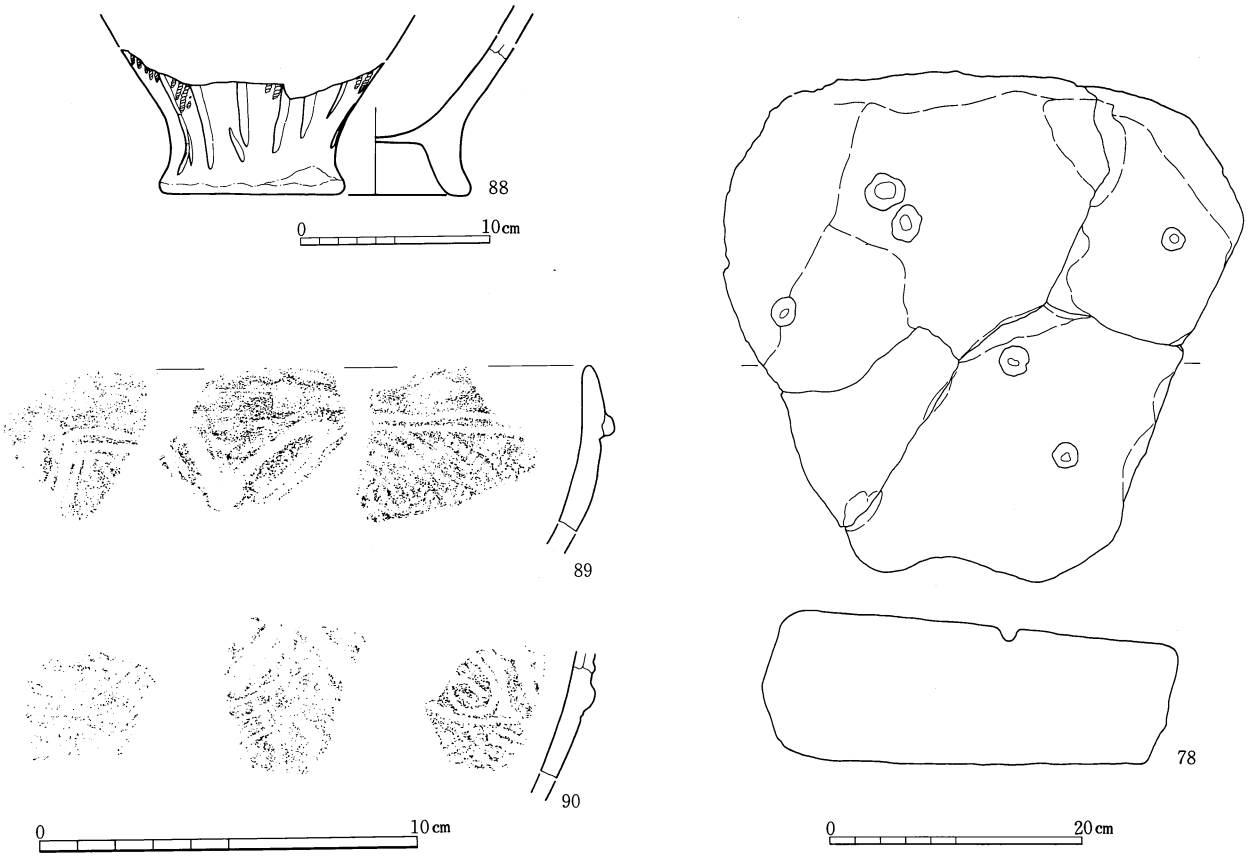

88
0
10cm
89
90
0
10cm
78
0
20cm

図24　8号住居址

また、柱穴を結んだ壁下には、小石を土石混合状にした土堤がめぐらされていた。柱穴は20～30 cm 間隔で壁下をめぐり、径約40 cm，深さ50～80 cm の大形のものと、径約25 cm、深さ15～20 cm の小形のものとが交互に穿たれる。炉址は扁平な大形礫を立位に組み合わせた方形の石囲い炉であり、内径30×50 cm をはかる。炉縁は敷石面より15 cm ほど高く設置され、上端からの深さは30 cm 余りをはかる。また、炉底には大形の深鉢形土器を割って破片を敷き重ねてあった。

張り出し部と接するか所には対ピットが連結したと思われる大きなピットが掘られ、くびれを介して接続する張り出し部の溝へと移行する。張り出し部の先端には一方の溝と連結したピットが穿たれている。

遺物　土器――総重量21,550 g・153片の土器が出土した。91は炉内に敷かれていた深鉢形土器。底部付近を欠損するが、口縁から胴部にかけては全周する。92～94は床面出土の土器。92は口径44 cm、器高52 cm の大形深鉢。95は覆土から出土した両耳広口壺の口縁部破片。

石器――打製石斧 (79～82)、磨石類 (83～85)、砥石 (86)、石皿 (87)、多孔石 (88・89)、石棒 (90) が出土した。82は扁平な剝片に荒い調整が施されたもので、上半部が縦方向に剝落したものとも考えられる。84は凹みが著しく、使用により形成されたというよりは凹んでいることに意味のある成形痕と捉えられるものである。90は5号住居址出土の71と接合する資料で、上部が71である。なお、86は砥石における作業面的な磨り面と整形痕としての剝離とが認められるもので欠損品である。すべて安山岩製である。

10号住居址 (図30、PL20)

調査区北西寄りのⅡL―25グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。ナガイモ栽培による攪乱が床面にも及び、炉址や柱穴などが破壊されていた。

径270 cm ほどの隅丸方形プランを呈し、南壁に若干の張り出し部がつく。張り出し部を含めた主軸長は290 cm 余りをはかる。壁下には径15～20 cm のピットが多数めぐらされる。ピットは深さ5～15 cm ほどのものがほとんどであるが、P1～4は30～40 cm と際立って深く主柱穴と考えられる。また、これらのピットは住居址中央部上に収束するように斜めに掘り込まれている。張り出し部両側のピット (P5・6) も25～30 cm と深い。このふたつは張り出し部上で交叉するように掘られており、出入口施設に関わる柱穴と考えられる。以上のような柱穴配置から、本址は丸みをもつ角錐状の上屋に小さく張り出す出入口部が開口する構造であったと推測される。

ローム層を掘り込んだ面をそのまま床とし、その中央部に炉址が設けられる。炉址は径約55 cm、深さ20 cm 余りの掘り方を15 cm ほど埋め戻し、上部に大形の土器破片が置かれていた。北壁下の床面上には大形の凹石が、炉址の埋め戻し土中には多孔石が、それぞれ遺存していた。

遺物　土器――総重量960 g・3片の土器片が出土したのみである。96は炉址の火床部に敷かれていた両耳広口壺。肩部から底部にかけての4分の1が現存する。

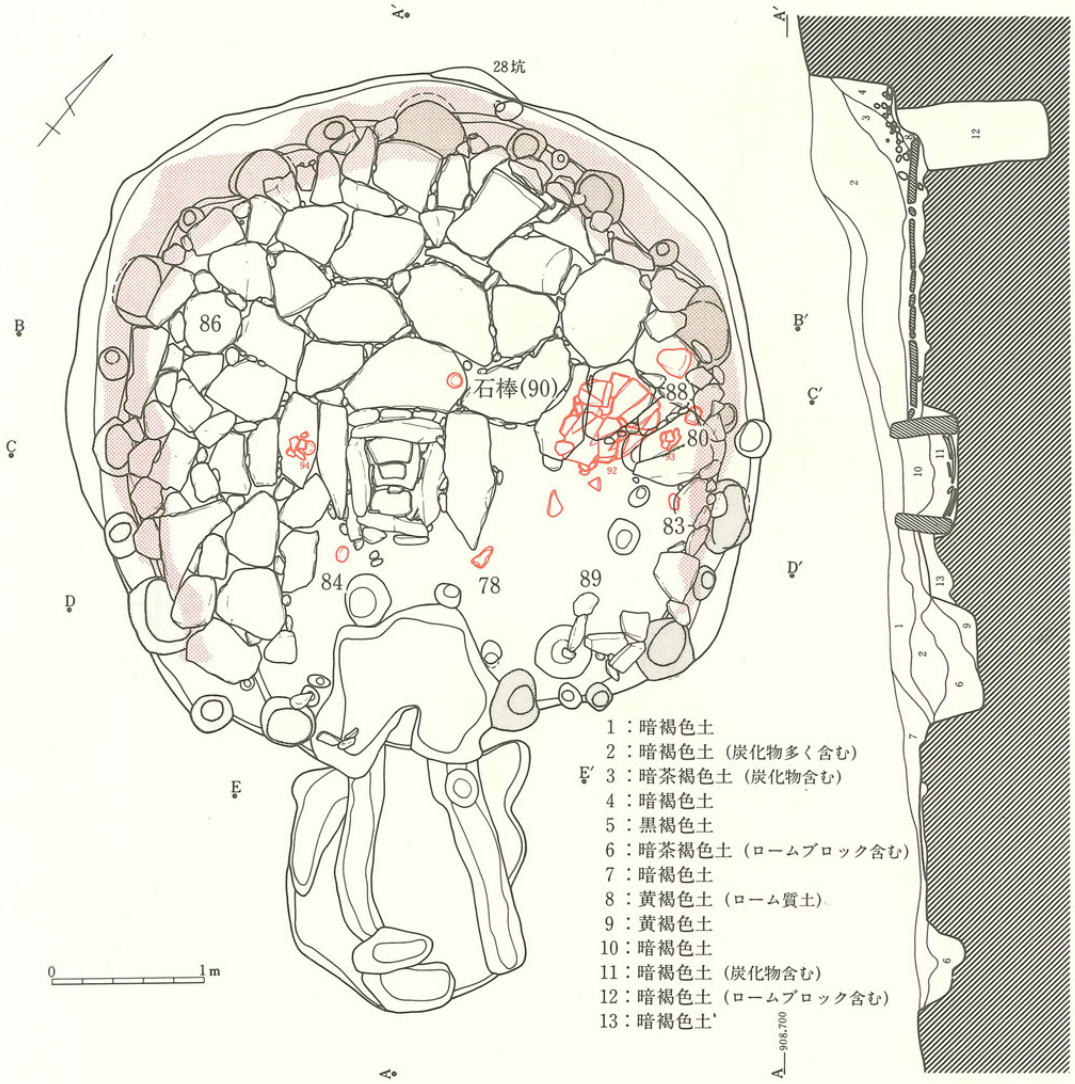
石器――91は凹石、92は多孔石である。どちらも安山岩製である。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第Ⅲ期に構築された住居址と考えられる。

11号住居址 (図31～35、PL20・21・28・39)

調査区西端、ⅡL―23グリッドに位置する。Ⅴ層中において検出されたが、道路建設時の削平が検出面まで及んでいた。

隅丸方形を呈し、規模は径320×290 cm をはかる。検出時より多数の遺物が出土し、本址中央から北西寄りにかけて集中した分布を示した。出土層位は覆土1層中にほぼ限定される。ローム層を掘り込んだ面をそのまま床とし、南西部がやや低まるものの、全体としては平坦に整えられる。東壁から南壁下にかけて



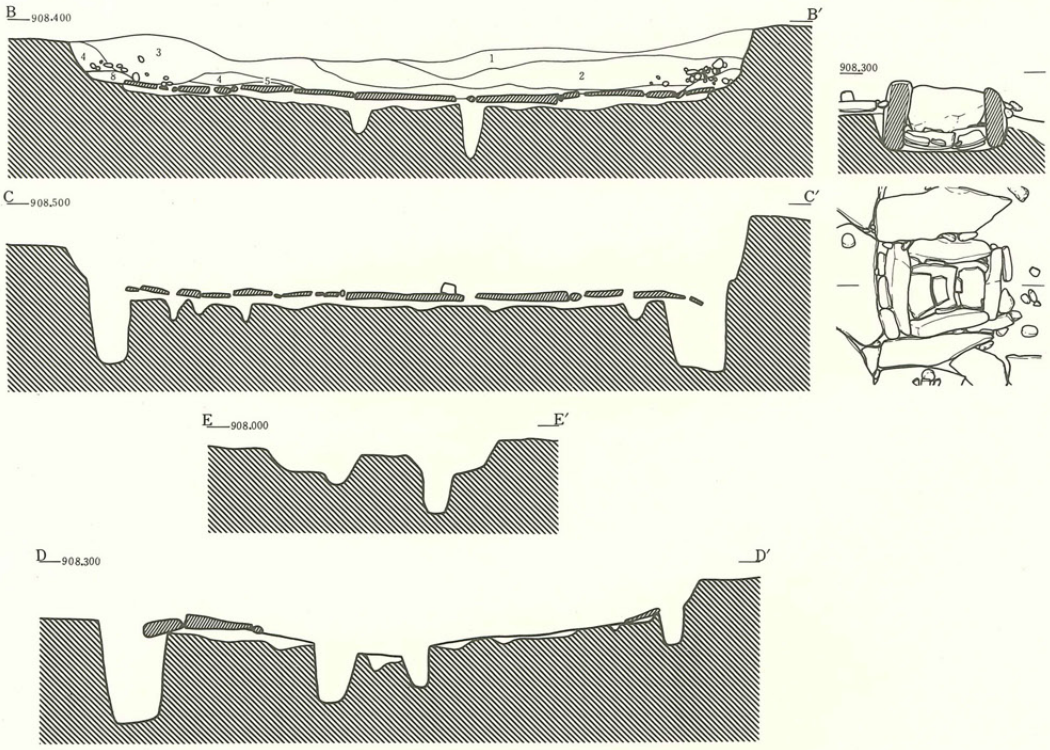
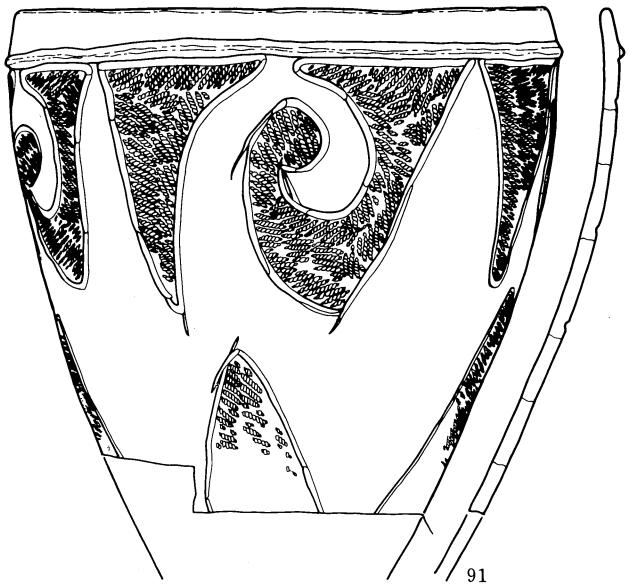
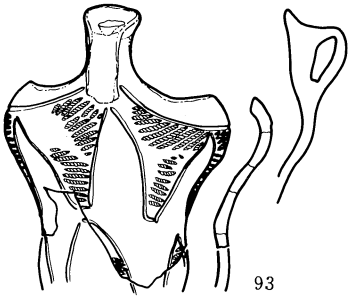
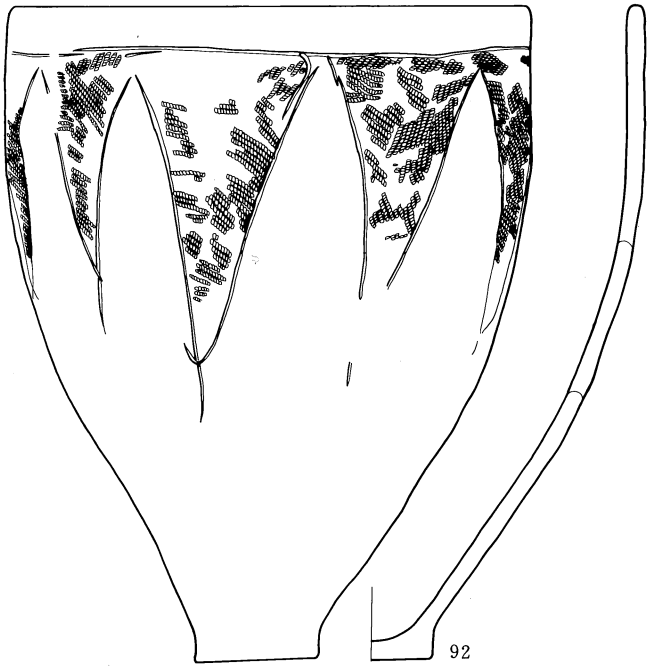
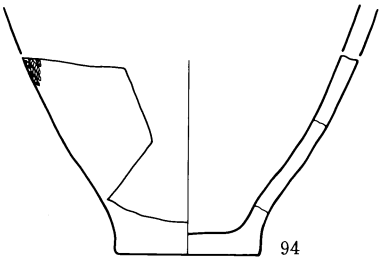


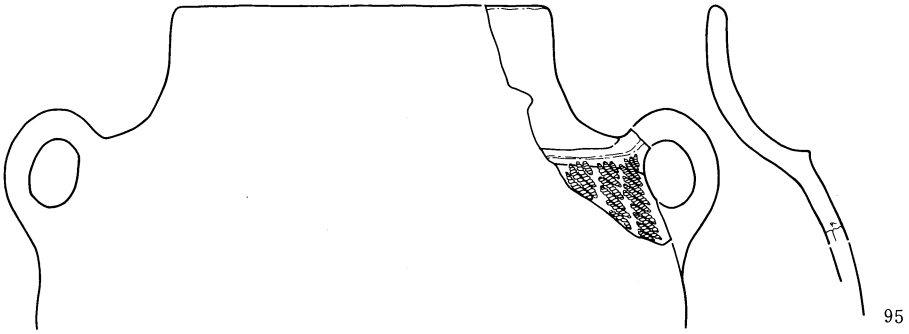
図25　9号住居址遺物分布（1）　　図26　9号住居址（2）











0　10cm

図27　９号住居址（３）

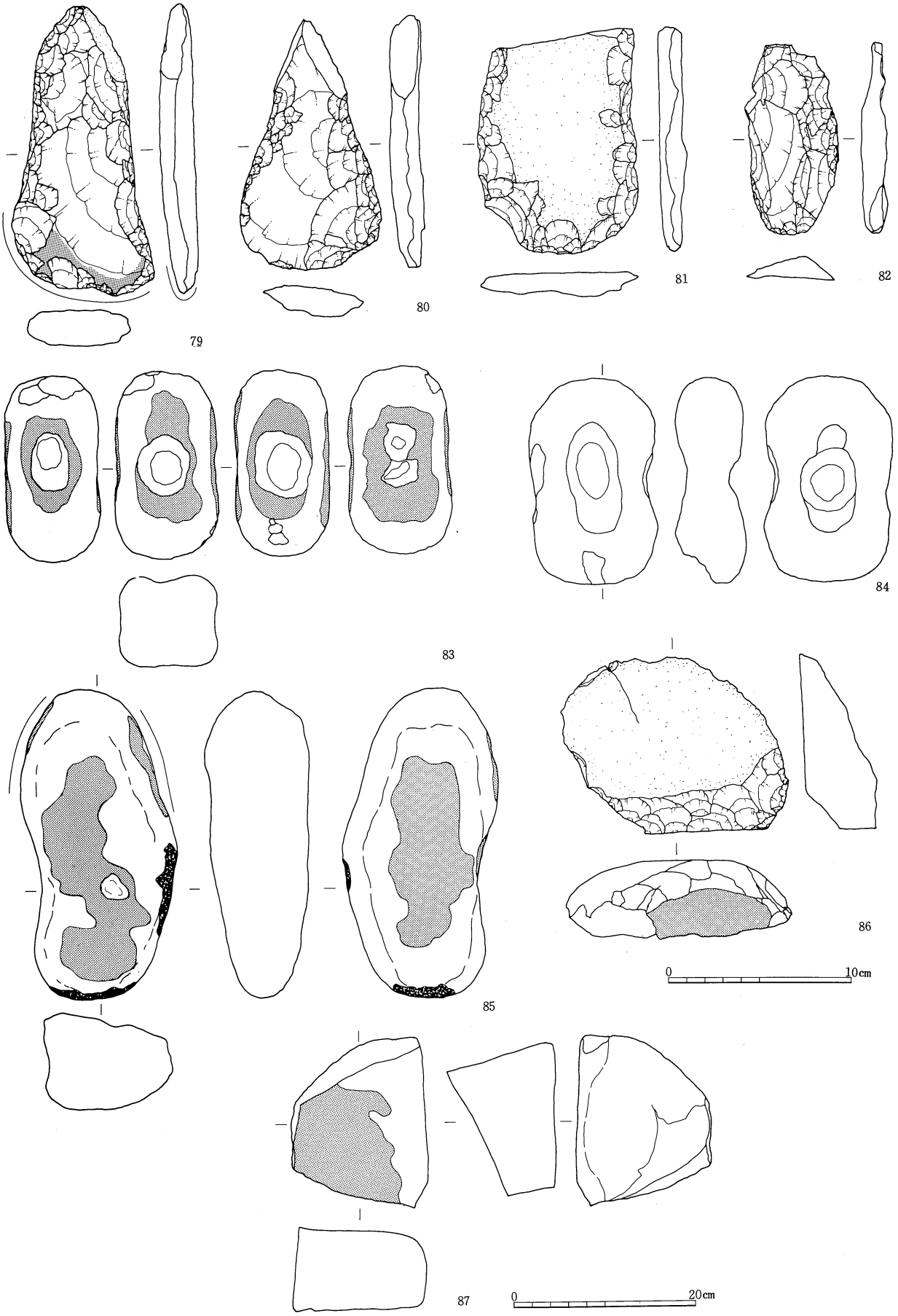


図28　9号住居址（4）

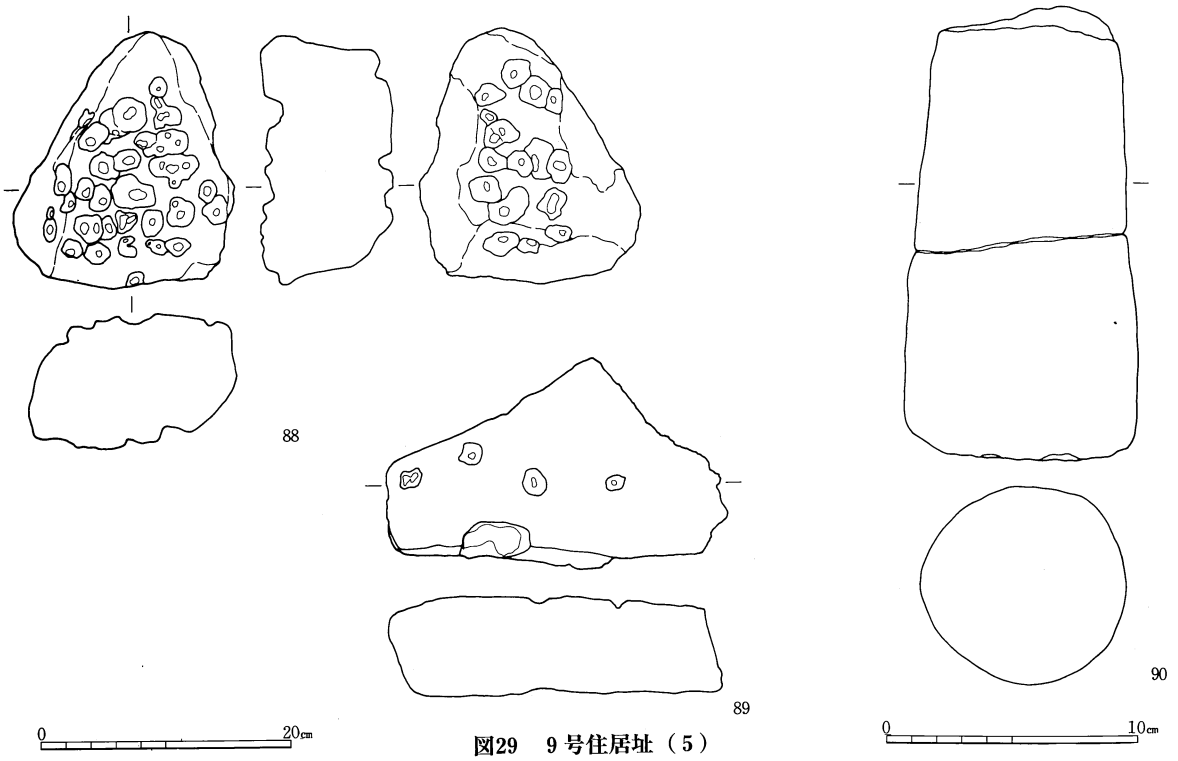


図29　9号住居址（5）

周溝がめぐり、壁下に近い位置には柱穴と考えられるピットが7個穿たれる。このうち主柱穴とみられるのはP1・2・4・5であり、これにP3・6が加わる。周溝の末端につながるP7は、位置関係から出入口施設にかかわるものであろう。また、P1とP6間の床面上には、深鉢形土器が伏せられてあった。上端が削平され当初の姿そのままではないが、いわゆる「床面倒置土器」と考えられる。

炉址は中央やや奥寄りに設けられていた。径90×100 cmの不整形な掘り方を有し、底部には微量の焼土と炭化物が認められた。掘り方内に炉石の抜き取り痕と思われる凹みがいくつか検出されたことから、簡便な石囲いが存在した可能性が高い。

遺物　土器――総重量14,660 g・309片が出土した。97は床面に伏せられていた深鉢形土器。98～116は覆土中からまとまって出土したもの。縄文を地文とする一群（98～102・105～112）と短沈線を地文とする一群（103・104・113～116）とに大別される。後者の中で104・116は系統的に分離されるべき土器かもしれない

石器――石鏃（93）、スクレイパー（94・95）、打製石斧（99～101）、磨石（102）などのほか、98のような横刃形石器状のものが認められた。93～96が黒曜石製の他は、安山岩製である。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期の住居址と考えられる。

12号住居址（図36・37、PL21・39）

調査区西端に近いIIQ―09グリッドに位置する。V層下部で検出されたが、斜面下方の東壁側は柱穴を残してすでに失われていた。

径315×325 cmほどの方形プランを呈するとみられ、壁高は最大で30 cmをはかる。VI層（ローム層）を平坦に掘り込んで床面とし、西壁下には周溝をめぐらす。床面には10個のピットが掘られており、そのうちP1・3・7・10の4個が主柱穴と考えられる。また、北壁及び南壁下のほぼ中央に掘られたP6とP9も11号住居址例と同様重要な柱穴であったと推測される。P9とP10は対ピット状の位置関係を保っており、出入口施設に関連した機能を合わせ持っていた可能性も否定できない。

炉址は中央やや前寄りにあり、径85×60 cm、深さ15 cmの楕円形を呈する。炉底には焼土と炭化物が若

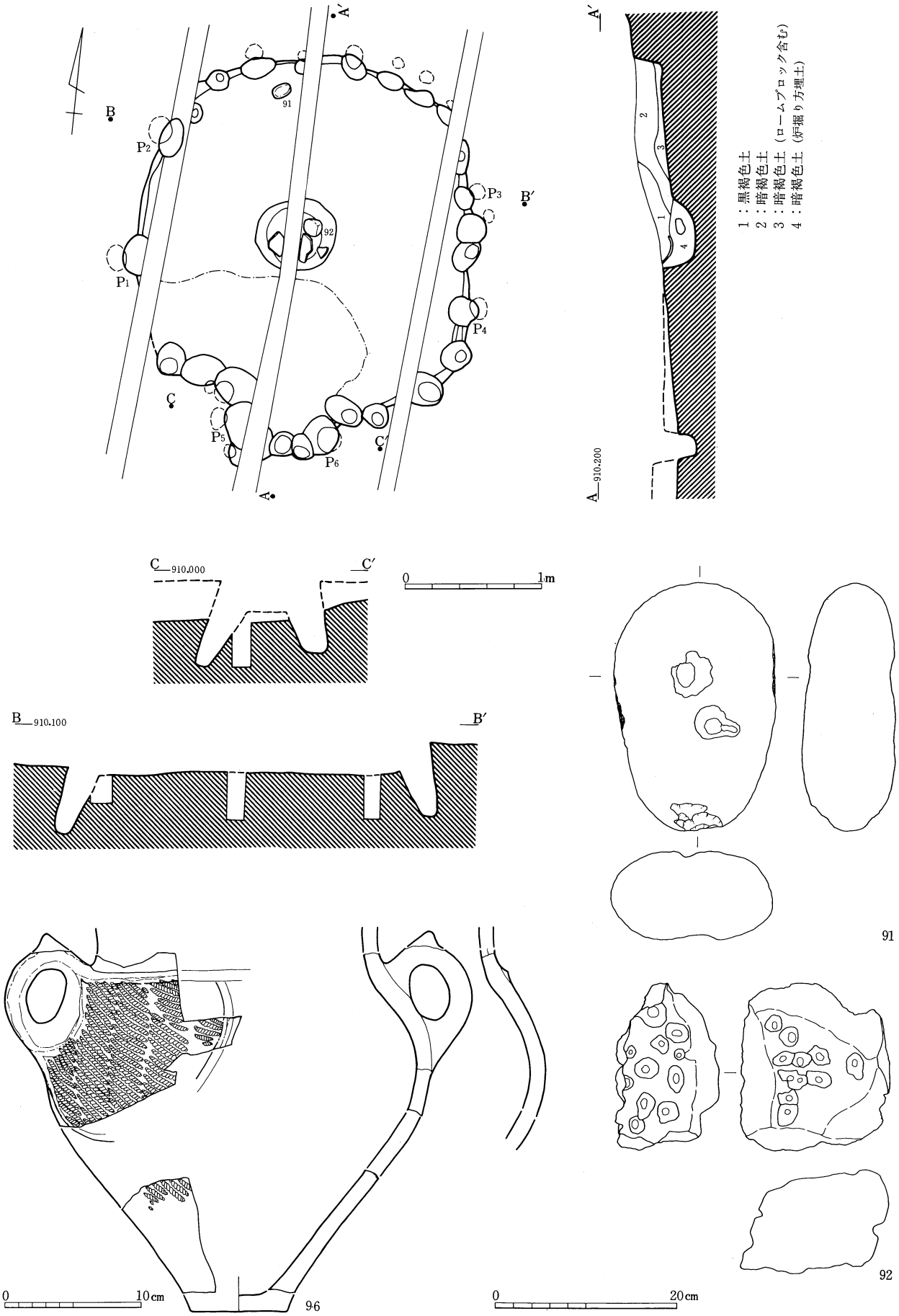

A
A′
B
B′
C
C′
P1
P2
P3
P4
P5
P6
91
92
A 910.200
1：黒褐色土
2：暗褐色土
3：暗褐色土（ロームブロック含む）
4：暗褐色土（炉掘り方埋土）
C 910.000
B 910.100
0　1m
0　10cm
0　20cm
96
91
92

図30　10号住居址

B′
P3
P2
P4
A
A′
P1
P6
P5
P7
B
B
B′
910.200
1：黒褐色土（Ⅳ層土）
2：暗褐色土
3：暗褐色土（ローム粒多く含む）
4：暗褐色土（ローム粒・ロームブロック多く含む）
5：明褐色土（ローム多い）
6：黄褐色土（ローム質土、暗褐色土含む）
A
910.200
A′
床面倒置土器
99
100
101
103
102
104
98
97
0
1m

図31　11号住居址（１）

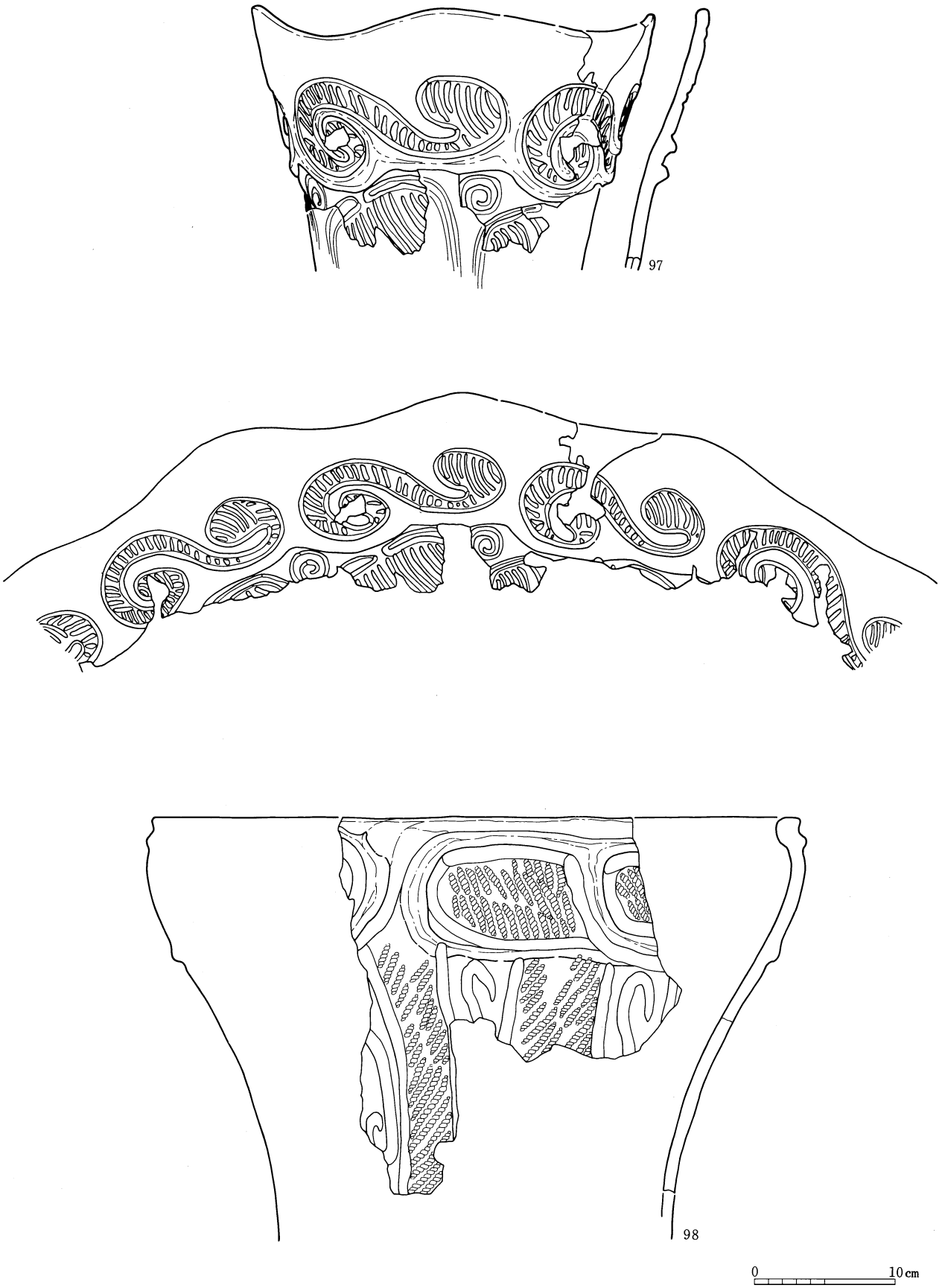


図32　11号住居址（2）

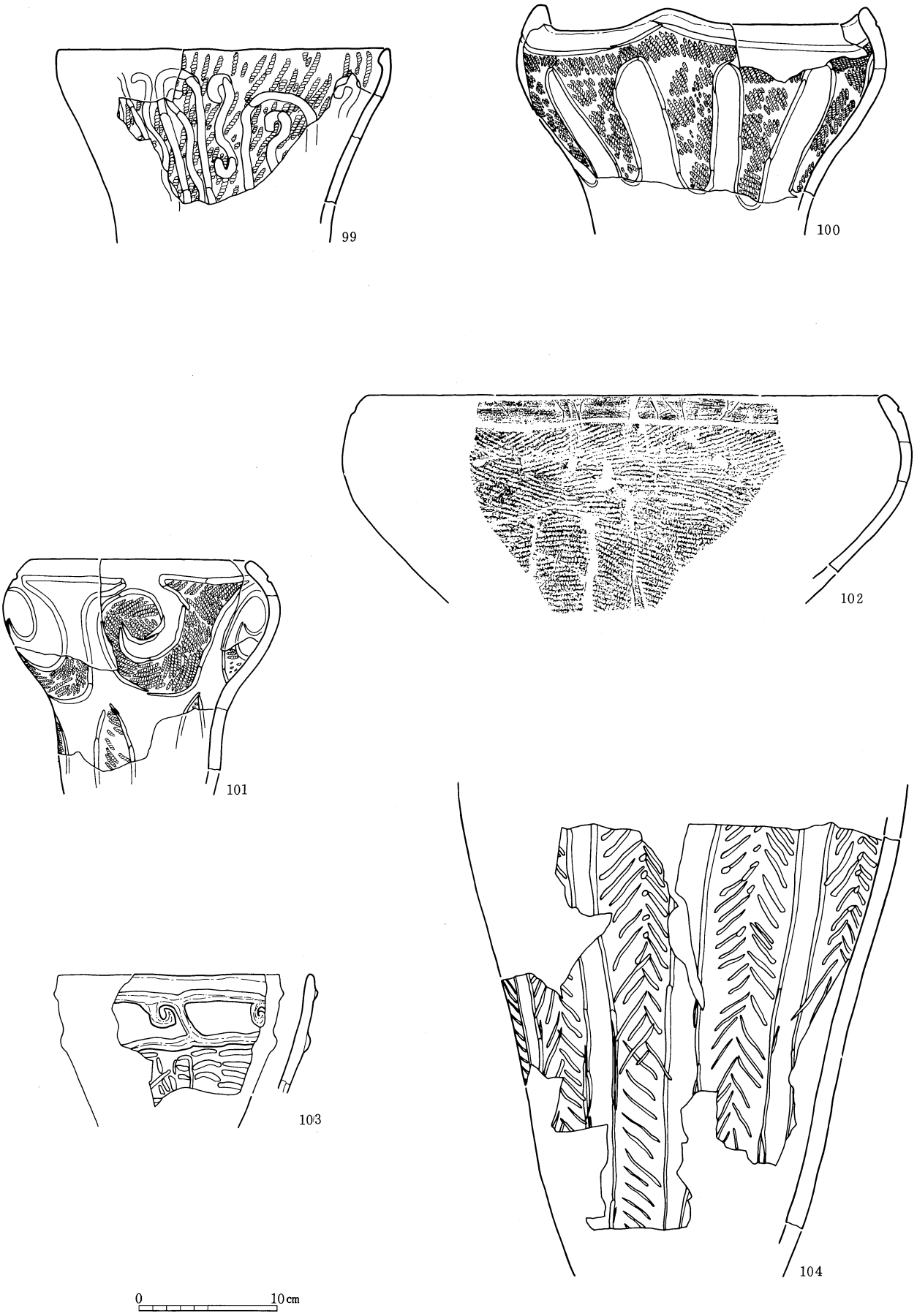


図33　11号住居址（３）

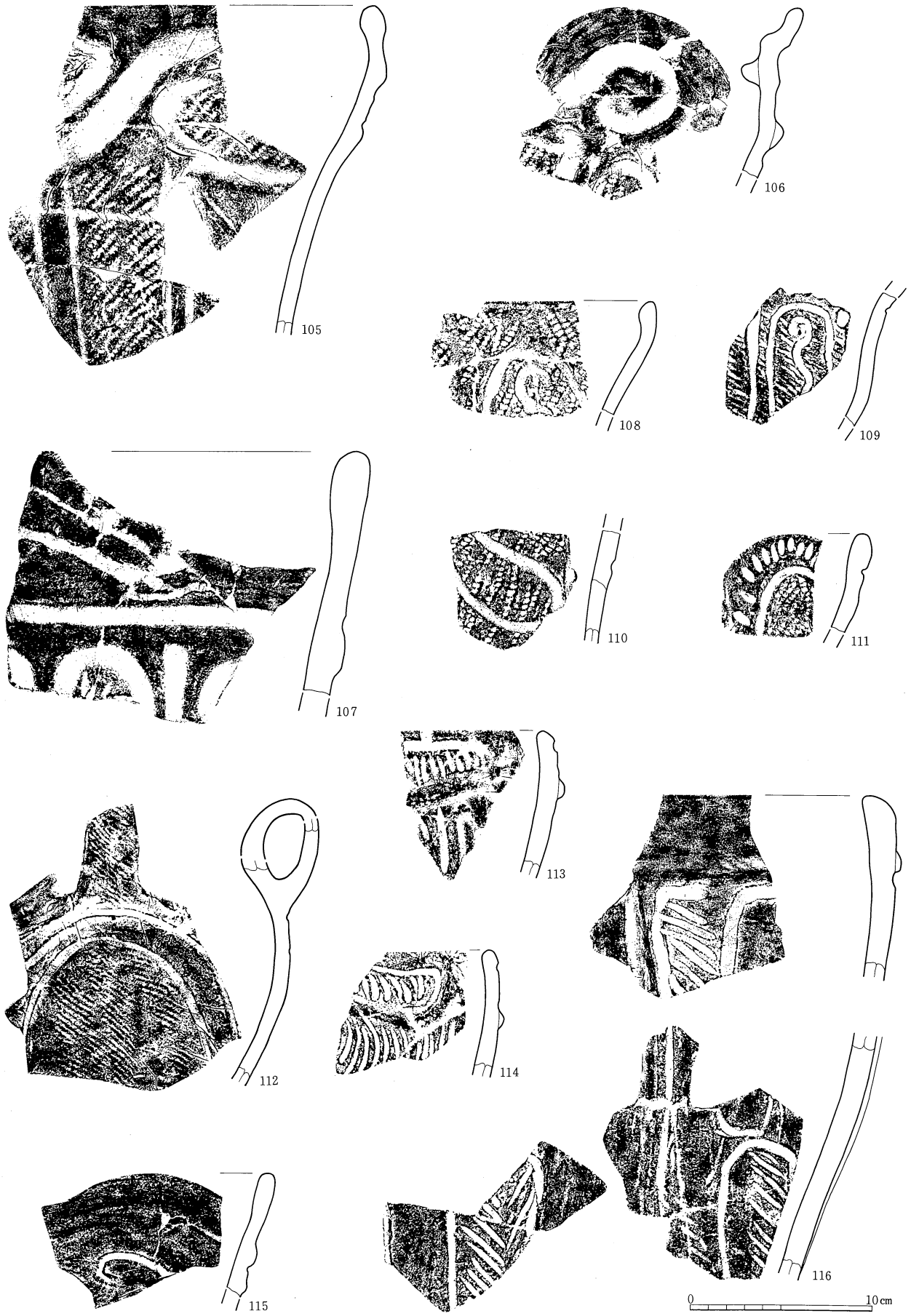


図34　11号住居址（4）

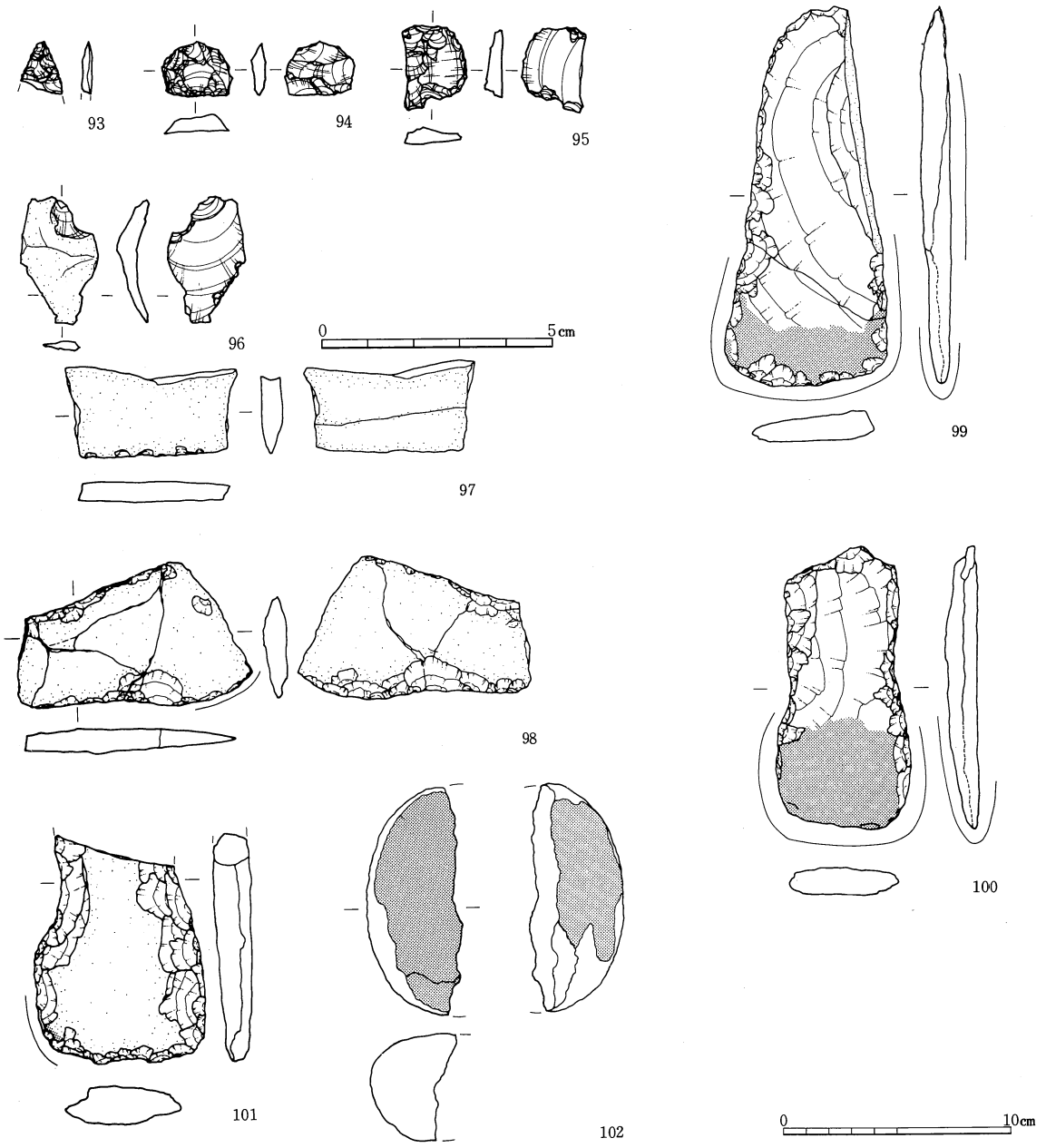


図35　11号住居址（5）

干量残存していた。炉石の抜き取り痕が確認されず地床炉であったと考えられるが、断定はできない。

遺物　土器――総重量1,550 g・67片が出土した。図示した1点を除き、ほかはすべて小破片であった。117は小形の深鉢形土器。底部付近のみで全体像は不明であるが、細い沈線で曲線的な文様が施される。

石器――103は石錐、104・105はスクレイパー、106・107は小剥離痕を有する剥片、108～110は大形剥片石器、111～113は打製石斧、108は緻密な安山岩製で刃部に細かな調整が施されている。103・104がチャート製、105～107が黒曜石製、他は安山岩製である。

時期　本址は、出土遺物から中期後葉、本遺跡第II期の住居であったと考えられる。

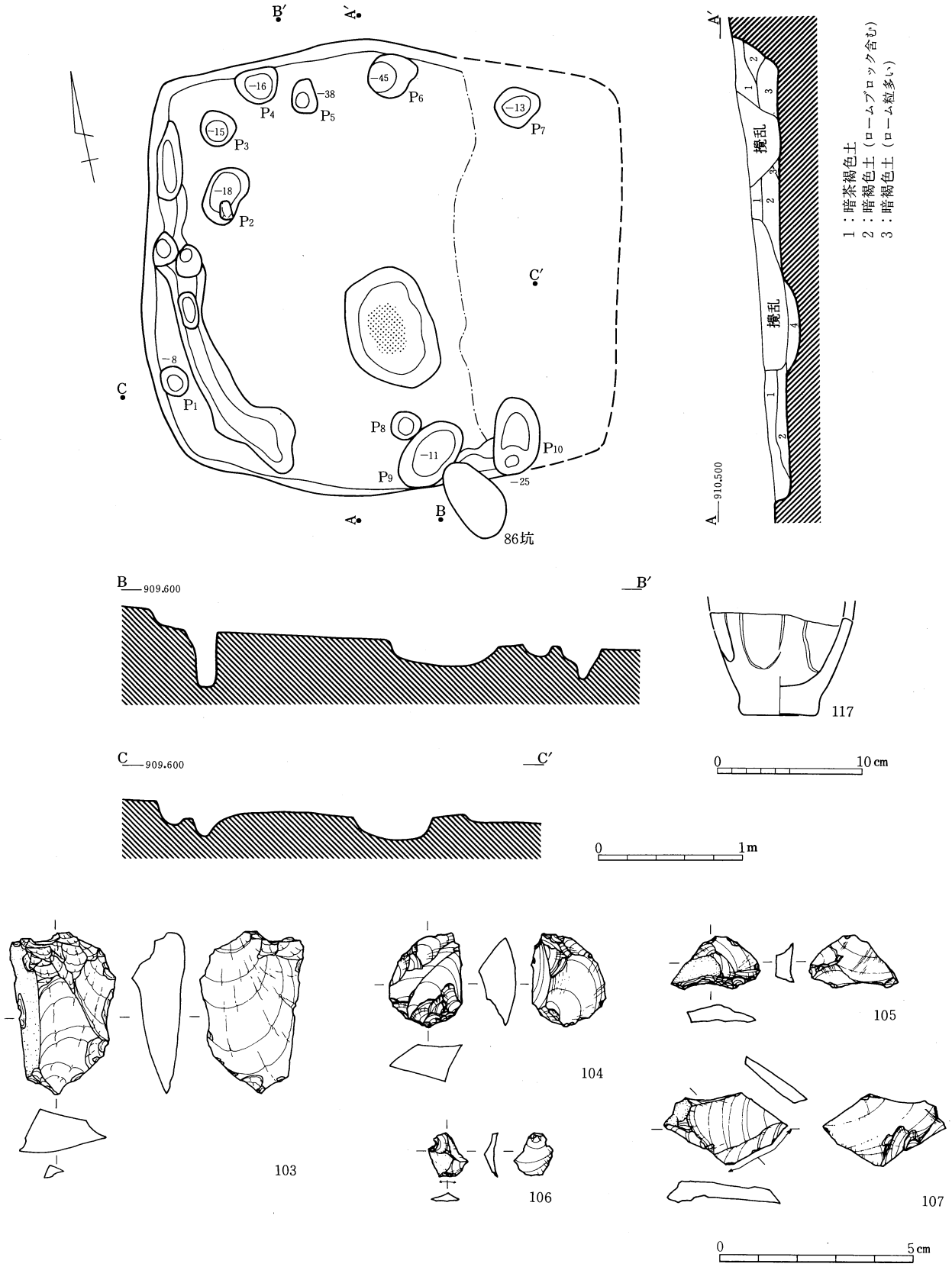

B′
A′
−16
P4
−38
P5
−45
P6
−13
P7
−15
P3
−18
P2
C′
−8
P1
C
P8
−11
P9
P10
−25
B
A
86坑
A′
撹乱
撹乱
A 910.500
1：暗茶褐色土
2：暗褐色土（ローム粒多い）
3：暗褐色土（ローム粒多い）
B 909.600
B′
117
0 10cm
C 909.600
C′
0 1m
103
104
105
106
107
0 5cm

図36　12号住居址（1）

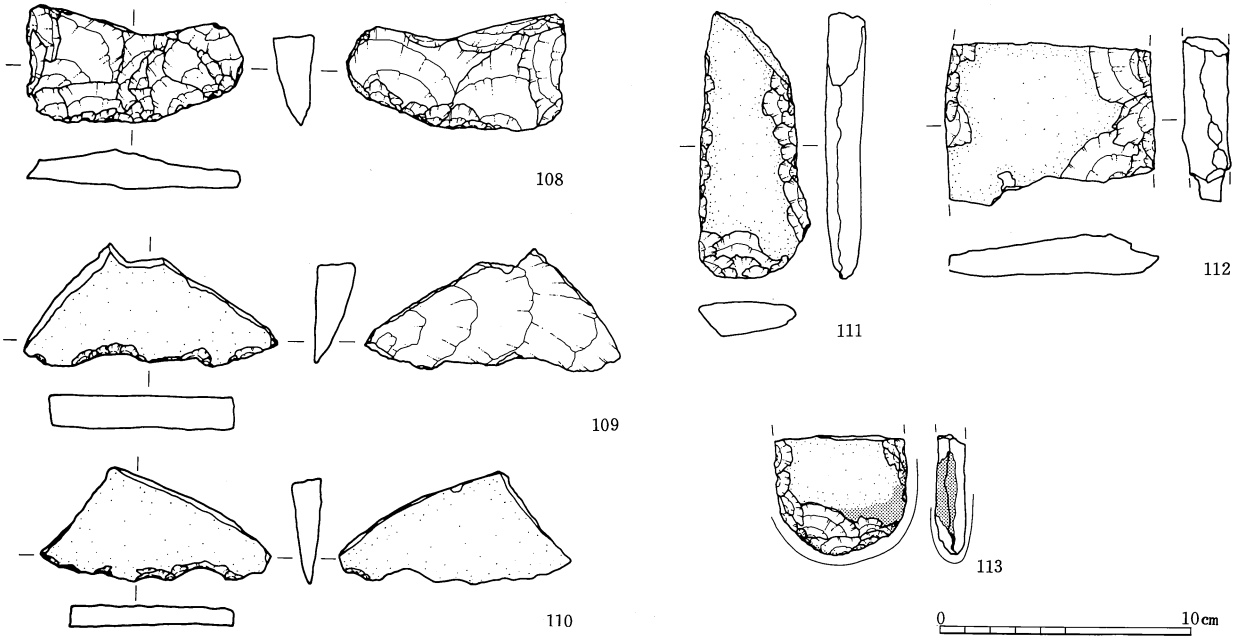


図37　12号住居址（２）

イ　ピット群

１号ピット群（図38）

調査区東寄り、ⅡＲ―24グリッドに位置する。重機によるⅥ層検出時に、径40～60 cm、深さ20～30 cmのピット状遺構の集中か所として確認した。覆土は黒褐色土および灰褐色土であった。調査時点では土坑として個別に記録したが、周囲の状況や規模などを考慮し、整理の段階でピット群として一括した。

炉址や周溝などの諸施設は検出されなかったものの、住居址の痕跡である可能性がきわめて高い。住居

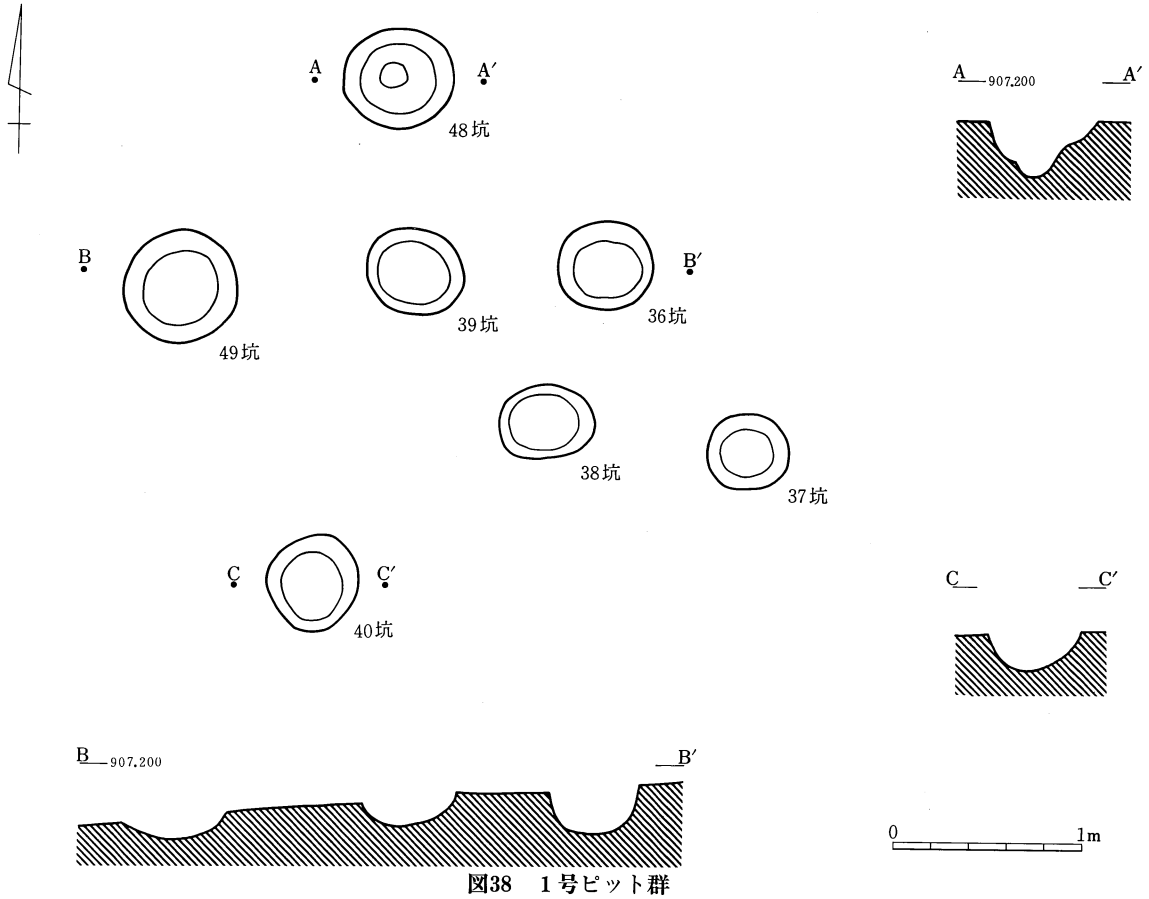


図38　１号ピット群

址と仮定した場合、37号・40号・48号土坑が主柱穴と考えられ、２号や３号住居址と同様三角形をなす柱穴配置を想定しうる。

時期　伴出遺物がなく時期を細かく特定できないが、少なくとも中期後葉に帰属する遺構であることは動かしえないと考えられる。

ウ　焼土址

２号焼土址（図39）

調査区西寄り、ⅡＲ－Ｏ13グリッドに位置する。Ⅳ層中部で検出。径145×70 cm の不整形な焼土の広がりとして確認された。焼土の厚さは約５ cm と薄い。平面および断面に掘り方は認められず、地山と焼土の境も漸移的変化を呈す。本址上部で火が焚かれ、地山が焼土化したと考えられる。

伴出遺物がなく帰属時期を明確にできないが、周囲の状況や検出層位などから、中期後葉の所産である可能性が最も高い。

３号焼土址（図39）

調査区西寄り、ⅡＲ－Ｏ16・Ｐ16グリッドに位置し、Ⅳ層掘り下げ中に検出した。

径80×55 cm ほどの範囲に、不整形な焼土の広がりが認められた。焼土は周辺部ほどまばらとなり、地山との境も不明瞭であった。断面は中心部が厚いレンズ状をなすが、平面同様地山との境は漸移的である。２号焼土址と同じく、地山が被熱により焼土化した遺構と考えられる。

伴出遺物はないが、検出面から中期後葉の土器片が多数出土していることから、同期の所産であると考えられる。

４号焼土址（図39）

調査区のほぼ中央、ⅡＲ－Ｋ07グリッドを中心に位置する。Ⅳ層掘り下げ時に、同層中部で検出された。

径約160×90 cm の楕円形を呈する焼土の広がりとして確認された。焼土の厚さは14 cm。平面および断面ともに焼土と地山の境は漸移的で、掘り方を持たない。２号・３号焼土址と同様、地山が焼土化した様相を呈す。中心部ほど焼土化が著しく、断面も厚く凸レンズ状となる。

伴出遺物はないものの、検出層位や周辺出土の遺物から中期後葉の所産と考えられる。２号・３号焼土址とともにそれぞれが一定の距離を保って分布している反面、遺跡全体の中では、調査区の中央からやや西寄りにかけての部分に集中する傾向がうかがわれる。

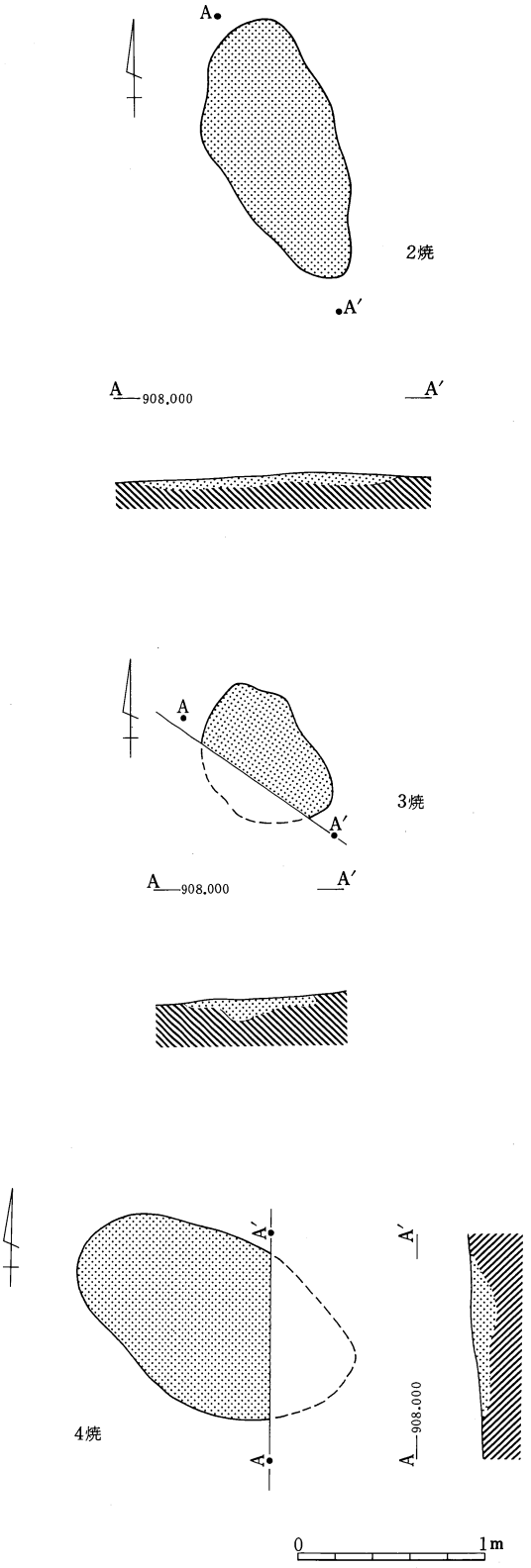


図39　焼土址

エ　遺物集中箇所

遺物集中Ⅰ（図40、PL26・40）

調査区東寄りのⅡＲ－Ｏ16グリッドに位置する。本址の南には３号焼土址が接し、３ｍほど西には１号配石土坑（旧９号土坑）が存在する。Ⅳ層掘り下げ時に、大形の土器破片や石器類がまとまって出土した。周囲の遺物出土状況との間に粗密の差や内容の違いが顕著であったことから、特別の性格を持つ箇所と判断した。

径120 cm余りの範囲内に大形の土器破片や打製石斧・磨製石斧・敲石が集中して出土した。土器は器形復原可能な個体を含み、打製石斧と磨製石斧は折り重なるように遺存していた。

Ⅵ層（ローム層）調査時に、本址の下部から45号土坑が検出された。45号土坑は径50×40 cmの楕円形を呈し、遺物出土面から坑底までの深さは90 cmをはかる。両址が一体のものとすれば45号土坑埋め戻し後に土器および石器類が置かれたと推定できる。その場合、断定はできないが１号配石土坑と同様な性格が考えられ、墓址である可能性が最も高い。

遺物　土器――118は細い沈線により「U」字状・逆「U」字状の文様が施される小形の深鉢形土器。120は45号土坑の真上から出土した土器。沈線区画内に「ハ」の字状の短沈線文が充塡される。

石器――114と115は折り重って出土した打製石斧と磨製石斧である。115は着柄の便をはかったものか敲打痕が認められる。敲石（116）は手頃な三角柱状の礫の稜線部を調整加工を施したものである。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第Ⅲ期に帰属すると考えられる。

遺物集中Ⅱ（図41、PL29）

調査区西寄りのⅡＲ－Ｄ～Ｅ12・13グリッドを中心に検出された。検出層位はⅣ層上面である。調査の時点では遺物集中箇所としての認定はできず、２ｍグリッドごとに取り上げを行った。しかし、整理の段階で、後期前葉・堀之内Ⅱ式土器が一括して出土していたことが判明し、遺物集中箇所と認定した。

上記した４つのグリッドを中心として径４ｍほどの範囲内に、図示した土器をはじめ時期を同じくする土器片が3,460 g・25片遺存していた。また、その周辺にも小破片ながら52,360 g・59片の土器片が散在しており、調査区全体の中できわめて特異な状況がうかがえる。炉址や柱穴などの諸施設こそ検出されなかったが、分布の規模や遺物の内容などから該期の住居址が存在したとも考えられる。住居址の存在を断定できる資料には恵まれなかったものの、祭祀の場やキャンプの場といった推測も含め、少なくともこの地点が人的営為の対象であったことは誤りない事実と思われる。

遺物　121は推定口径33.5cm、推定器高31 cmをはかる深鉢形土器。全体の２分の１が現存する。朝顔形に開く口縁から直線的に底部へ移行する。「8」の字状の貼り付け文を伴う紐線文を口線下にめぐらせ、胴上半部には幅の狭い縄文帯を用いて幾何学状・渦巻状のモチーフを交互に連続させる。明黄褐色を呈し、器面はていねいに研磨されている。胎土には川砂を多く含む。122は推定口径33 cm、推定器高26.5 cmをはかる深鉢形土器で、121と同様な器形・文様を呈す。123は推定口径38.5 cmをはかる口縁部破片。器面に粗い調整痕をとどめ、くびれ部には沈線がめぐる。124は深鉢形土器の胴下半であり、ほぼ全周する。一部に縄文施文が認められるほか、器面にはやや粗い研磨が加えられている。明黄褐色を呈し、胎土に川砂を多く含む。123と124は同一個体とも考えられる。また、121～124は色調や胎土・調整など全体のつくりがきわめて酷似しており、同時に製作された可能性がきわめて高い。125は暗茶褐色を呈す小形土器。沈線によって区画された縄文帯によって幾何学状のモチーフが施される。胎土に砂粒・石英などを含み、器面は研磨される。薄手・堅緻なつくりの土器である。

時期　本址は、後期前葉、堀之内Ⅱ式期に帰属する。

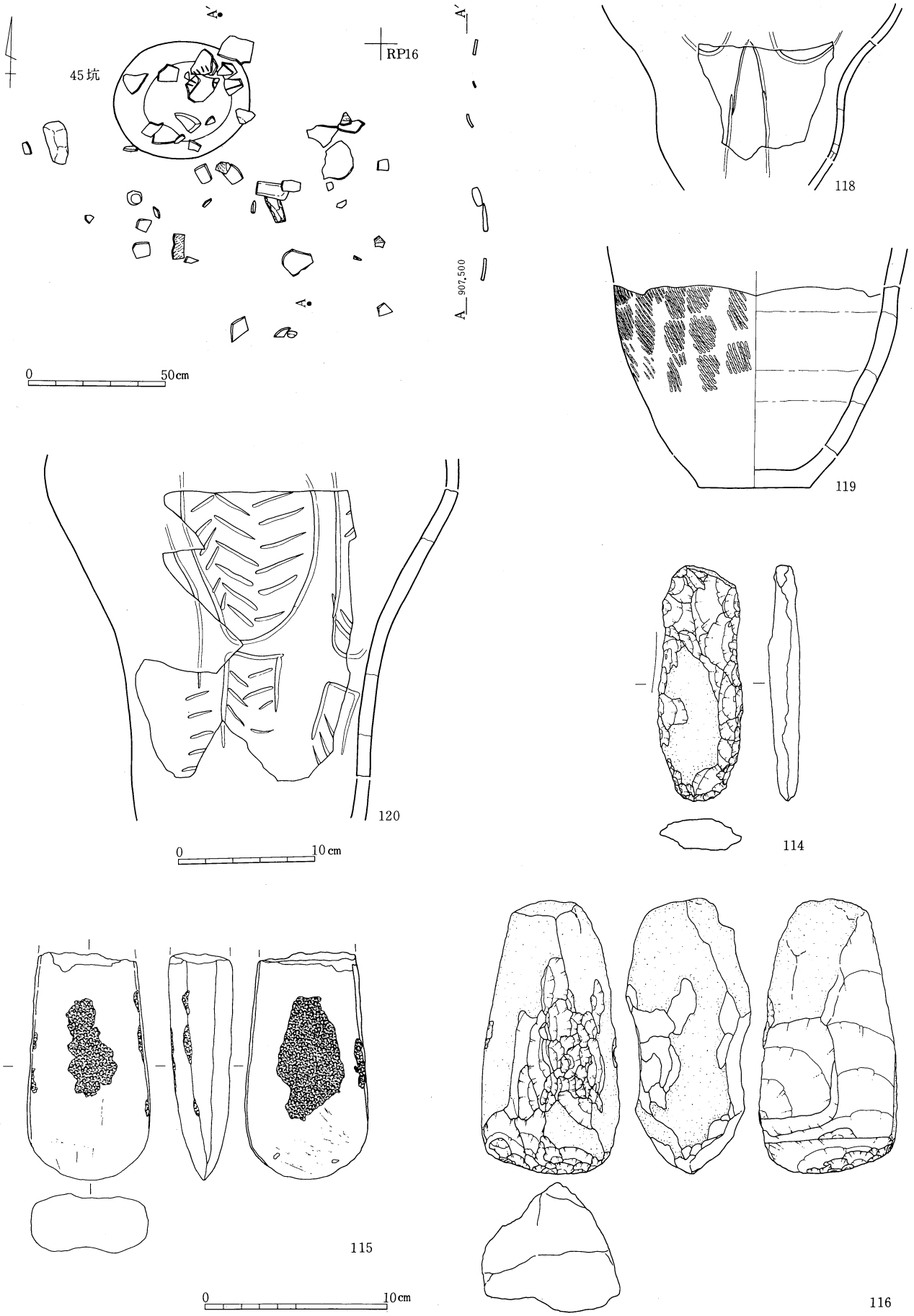
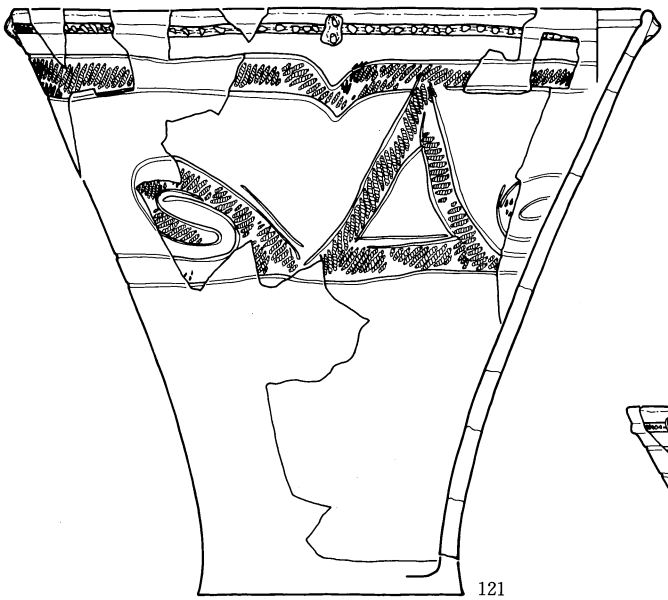
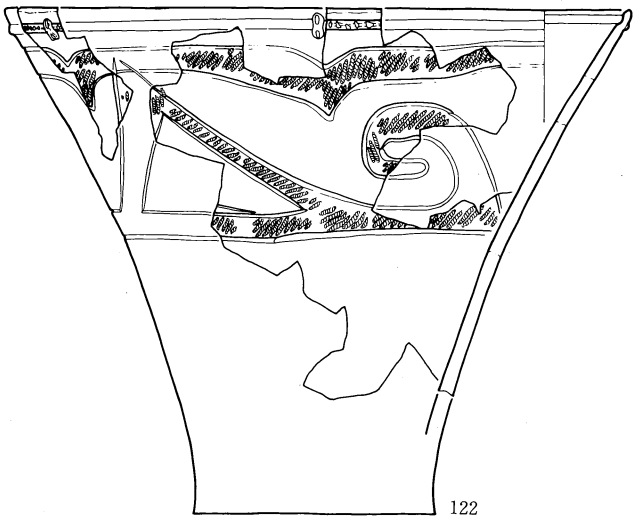
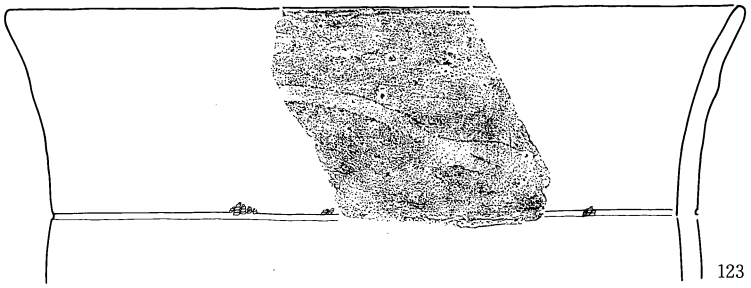
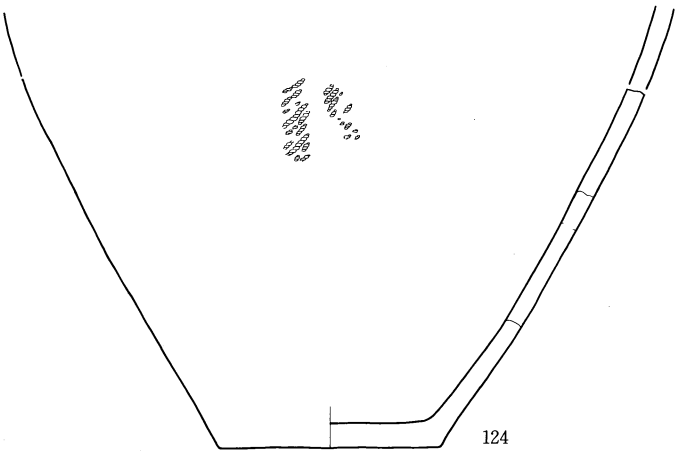


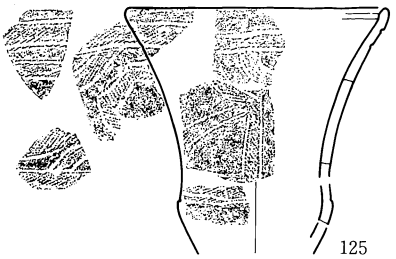
図40　遺物集中Ⅰ











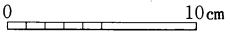


図41　遺物集中Ⅱ

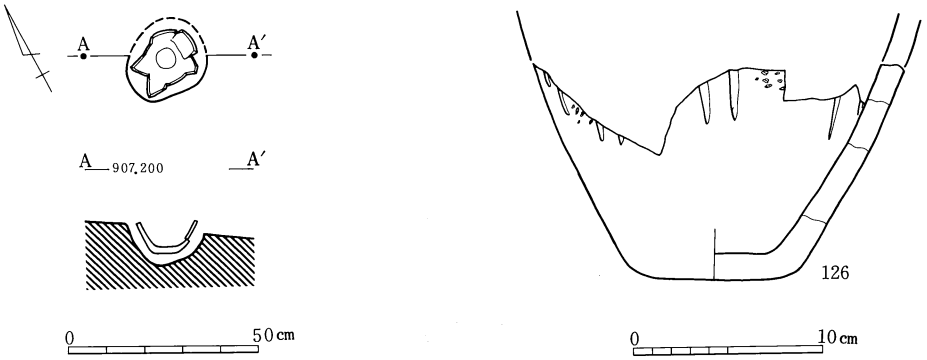


図42　1号屋外埋甕

オ　屋外埋甕

1号埋甕（図42）

調査区西よりのⅡR－C09グリッドに位置する。表土剝ぎに先行して掘ったトレンチの断面にかかったことから確認された。Ⅳ層中で平面プランを捉えたが、覆土の状況から掘り込み面も同層中にあったと考えられる。

径20 cm 余りの掘り方内に、深鉢形土器の底部破片を正位に埋設していた。土器の破断面は打ち欠いたと思われる割れ方を呈しており、埋設に際して大きさの調節が行われたことをうかがわせる。

126は埋甕に用いられていた土器。縄文を地文として2本単位の沈線文が垂下する。比較的ていねいな調整が行われるものの、整形が粗く凹凸を残す。上部は二次焼成を受けて赤変しもろい。本址は中期後葉、本遺跡第Ⅲ期の所産である。

カ　土坑（図43～54、PL22～25・28、表1～3）

前記したように、本遺跡からは配石土坑を含め87基の土坑が検出された。これらは形態的にいくつかのグループに分類することが可能であり、形態ごとの分布にも偏在する傾向がうかがわれた。そこで、すべての土坑を図示または列挙する煩雑さを避け、なおかつより理解しやすい方法として、土坑形態の類型化と各形態の分布傾向の抽出を行うこととした。また、記述に当たっては、遺物が出土した土坑を中心として各形態を代表する例を図示するにとどめ、記述も特に詳細な説明を要すると判断されるもののみに限定した。各土坑の規模・形状・類型などは、一覧表に一括して示してある。

〈分類の基準と分類項目〉

土坑の形態を類型化するに際し、まず時期的にも機能的にも分離される「陥し穴」（木戸平A遺跡参照）を一項目とした。「陥し穴」を除く他の土坑については、平面形と規模を第一の分類基準とし、さらに断面形と伴出遺物のあり方を加味して分類項目を設定した。Ⅰ～Ⅵ類に分類される後者の一群は前記した各遺構と同様中期後葉に帰属し、本遺跡の集落構造に深くかかわっていたと考えられる。

陥し穴：早期後葉から同末葉にかけて多出することが知られるもの。

他の土坑に比べて規模が大きく、画一的な形態を示す。本遺跡の場合、隅丸方形を呈し、長軸に沿って3～4個のピットが穿たれるものが基本形である。1号・2号・22号・23号の4基がこれに相当する。

Ⅰ　類：径30 cm ほどのピット状を呈するもの。

25基検出された。深さ10～30 cm のものが多いが、46号・86号のように50 cm を越える土坑も

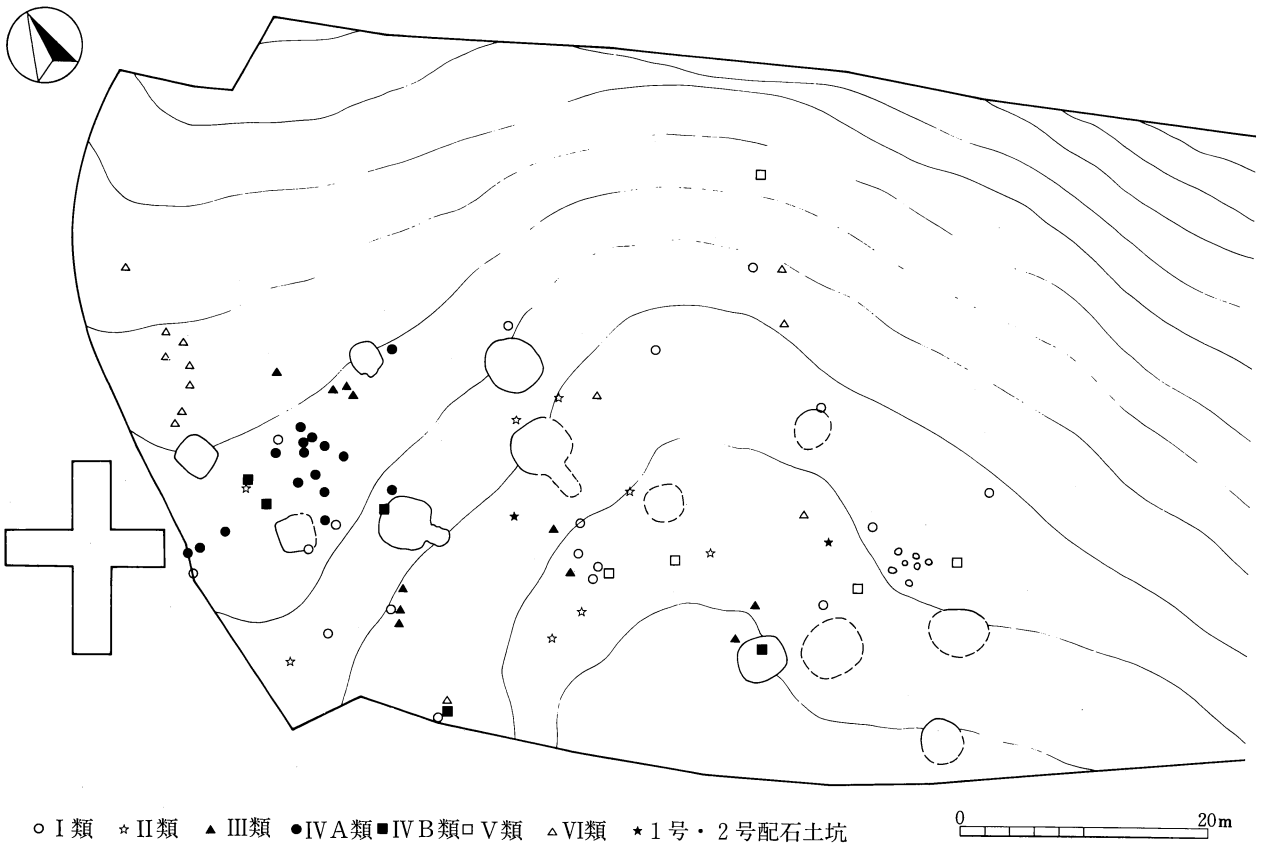


図43　土坑の類型別分布

存在する。遺構分布域内全体に散在する傾向を示す。唯一集中して分布する36号～40号・48号・49号の各土坑は1号ピット群として一括し、住居址の痕跡と考えた。

Ⅱ　類　長径100 cmほどの小判形で、壁が比較的急傾斜で立ち上がるもの。

全体で9基が検出された。深さ30 cm前後から80 cm余りと相対的に深いものが多く、1号・2号配石土坑など配石や礫・土器を伴う例を含む。調査区の中央付近に集中する分布傾向を示すほか、1号配石土坑や88号土坑のように東西にやや離れて位置する土坑もある。配石ないし礫を伴う例や坑底に土器が遺存していた例が存在することから、本類に含まれる土坑は墓坑であった可能性がきわめて高い。

Ⅲ　類：径80～100 cmの不整円形を呈し、断面が丸底状をなすもの。

総数11基を数える。深さは15～60 cmと変異に富むが、検出層位の異なる土坑が混在しており平均的には50～60 cmをはかると考えられる。調査区の中央付近に位置し、Ⅱ類と共通したあり方を示す。配石状の礫を伴う土坑（19号）が認められるなど土坑自体にもⅡ類と似た属性が認められる。積極的な根拠に欠ける面もあるが、状況的にはⅡ類と同様本類も墓坑であった可能性が考えられる。

Ⅳ　類：径70～140 cmほどの円形ないし不整円形を呈すもの。断面形により2種に細分される。

A種　断面形がタライ状をなすもの。Ⅳ類の主体を占め、総数15基を数える。規模の点では大小さまざまであるが、分布的には調査区西端の支尾根部分に集中する。形態的な特徴から、本来的には貯蔵穴であった可能性が高い。しかし、検出面からの深さが10～20 cm足らずの土坑や埋め戻されたとみられる土坑があり、二次的な転用の問題も含め断定はできない。また、仮りに貯蔵

穴であったとすれば、南面する支尾根斜面という立地環境からみて、湿気を嫌う好乾性の貯蔵物が考えられる。

B種　断面が円筒状をなすもの。A種との区別は必ずしも絶対的ではなく、相対的に深く筒状を呈す土坑を本種とした。総数5基が分離される。20号や30号土坑のように調査区中央の凹地部分に位置するものもあるが、ほとんどはA種と同様な分布を示す。形態的な類似性や分布傾向から、A種と同様な用途が考えられる。ただし、貯蔵穴と考えた場合、凹地に存在する20号・30号両址については他址と異なり好湿性の貯蔵物が想定される。

V　類：楕円形ないし長楕円形を呈し、長軸が200 cm前後と大形のものを一括する。

調査区の中央付近からやや西寄りにかけて4基が存在する。分類要素以外に共通する特徴を見出せず、それぞれ個別的な形態をもつ。6号と7号土坑はとりわけ規模が大きく、ともに断面形が丸底状となる。また、10号土坑はやや不規則ながら「陥し穴」に含まれる土坑とも見受けられる。

VI　類：不整形で坑底から壁に至る掘り方が明確ではないもの。

調査区の西側支尾根部および中央北寄りを中心として、総数13基検出された。位置的に耕作時の攪乱を受けたか所であったり、該期の遺構分布域からはずれるか所であったりすることから、人為的に掘られたものか否か断定はできない。

1号土坑（図44、PL23）

ⅡR－T16グリッドに位置し、Ⅵ層（ローム層）上面で検出した。隅丸長方形を呈し、上端径240×98 cm、下端径226×82 cmをはかる。検出面からの深さは38 cm。主軸方位はN－75°－Wを指し、等高線に対して大きく振れる。坑底はおおむね平坦に整えられ、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土はⅣ層土に対比される黒褐色土であった。

2号土坑（図44、PL23）

ⅡR－F18・F19グリッドに位置し、Ⅴ層上面で検出された。上端は径293×154 cmの不整な隅丸長方形を呈すが、下端は径229×104 cmをはかる均整のとれた隅丸長方形を呈す。検出面からの深さは92 cm。主軸方位はN－44°－Wを指し、等高線に対してほぼ平行する。平坦に整えられた坑底には、長軸に沿って径17cm、深さ15～25 cmほどの小ピットが3個穿たれる。壁はほぼ垂直に立ち上がるものの、上半部は斜めに開口する。覆土はⅣ層に対応する黒褐色土であり、自然埋没の状況を示す。また、下部にはローム質土の堆積も認められた。

22号土坑（図44、PL24）

ⅡR－Q04グリッドに位置し、Ⅵ層（ローム層）上面で検出された。上端径191×54 cmをはかる軸の長い隅丸長方形を呈する。検出面からの深さは29 cm。主軸方位はN－52°－Wを指し、等高線にほぼ平行する。坑底には長軸に沿って3個の小ピットが穿たれる。坑底は掘り方を7 cmほど埋めて平坦に整えられていた。覆土はⅣ層を基調とする黒褐色土であった。

23号土坑（図44、PL24）

ⅡR－P05グリッドに位置する。Ⅵ層（ローム層）上面で検出された。隅丸長方形を呈し、上端径212×113 cm、下端径192×73 cmをはかる。検出面からの深さは55 cm。主軸方位はN－38°－Wを指し、等高線に対

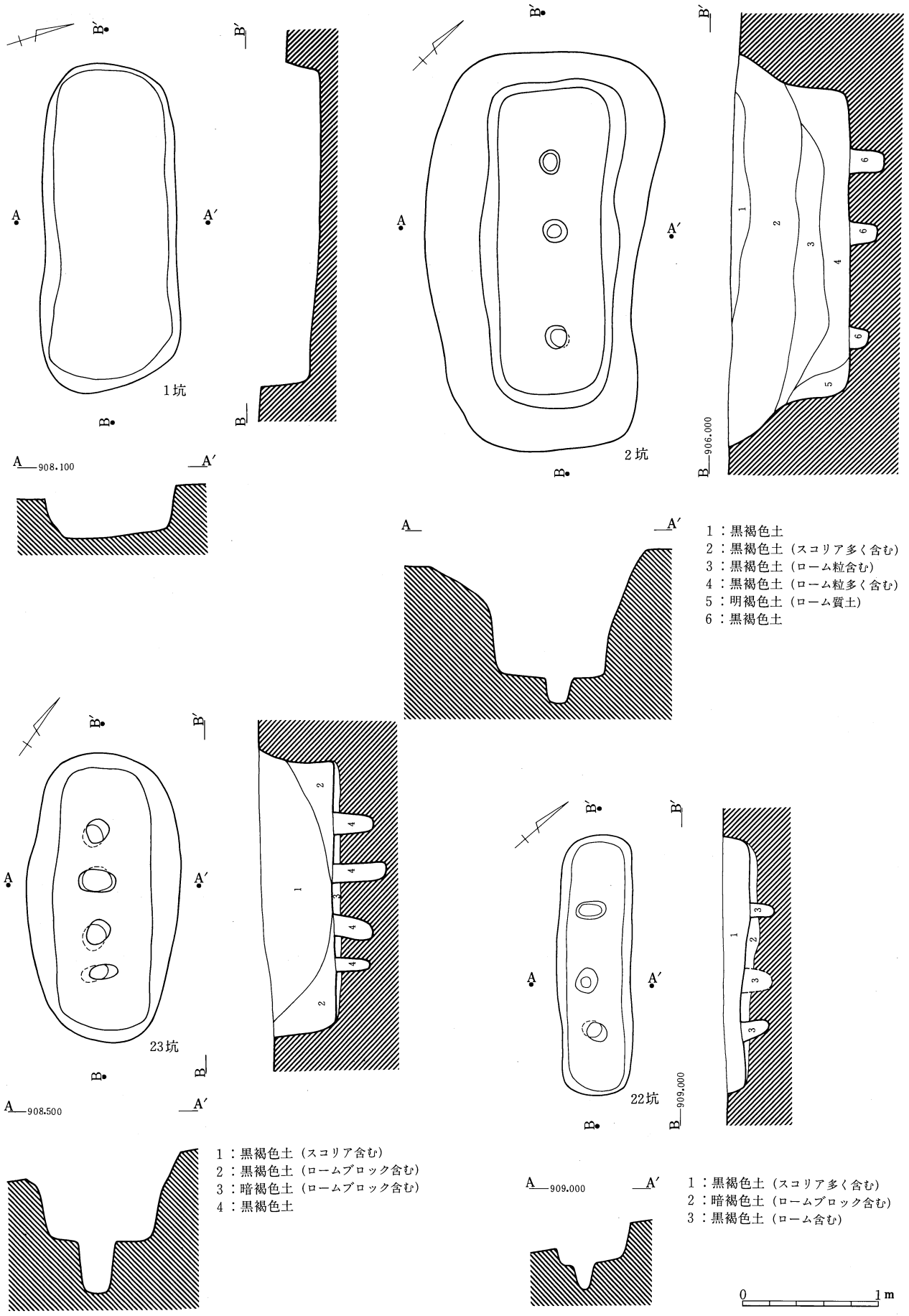

1坑
A
A′
B
B′
A 908.100
A′
2坑
B 906.000
1：黒褐色土
2：黒褐色土（スコリア多く含む）
3：黒褐色土（ローム粒含む）
4：黒褐色土（ローム粒多く含む）
5：明褐色土（ローム質土）
6：黒褐色土
23坑
A 908.500
1：黒褐色土（スコリア含む）
2：黒褐色土（ロームブロック含む）
3：暗褐色土（ロームブロック含む）
4：黒褐色土
22坑
B 909.000
A 909.000
1：黒褐色土（スコリア多く含む）
2：暗褐色土（ロームブロック含む）
3：黒褐色土（ローム含む）
0
1m

図44　土坑（１）

して平行する。坑底には径18～27 cm、深さ25～40 cm の小ピットが 4 個開口する。坑底は掘り方を 5 cm ほど埋めて平坦に整えられており、ほぼ垂直に壁が立ち上がる。覆土はⅣ層に対比される黒褐色土を主とし、壁際から坑底にかけてはローム粒・ロームブロックが混入していた。

1号配石土坑（図45、PL22）

調査区の中央やや東寄り、ⅡR—M15グリッドに位置する。土層観察用トレンチの掘削時にⅣ層上部で確認された。当初は上部の石組みのみと判断して配石と認定していたが、整理の段階で下部に別途検出された土坑（9号土坑）が重複することがわかり、検討した結果両者を一体の遺構と認定した。ただし、机上合

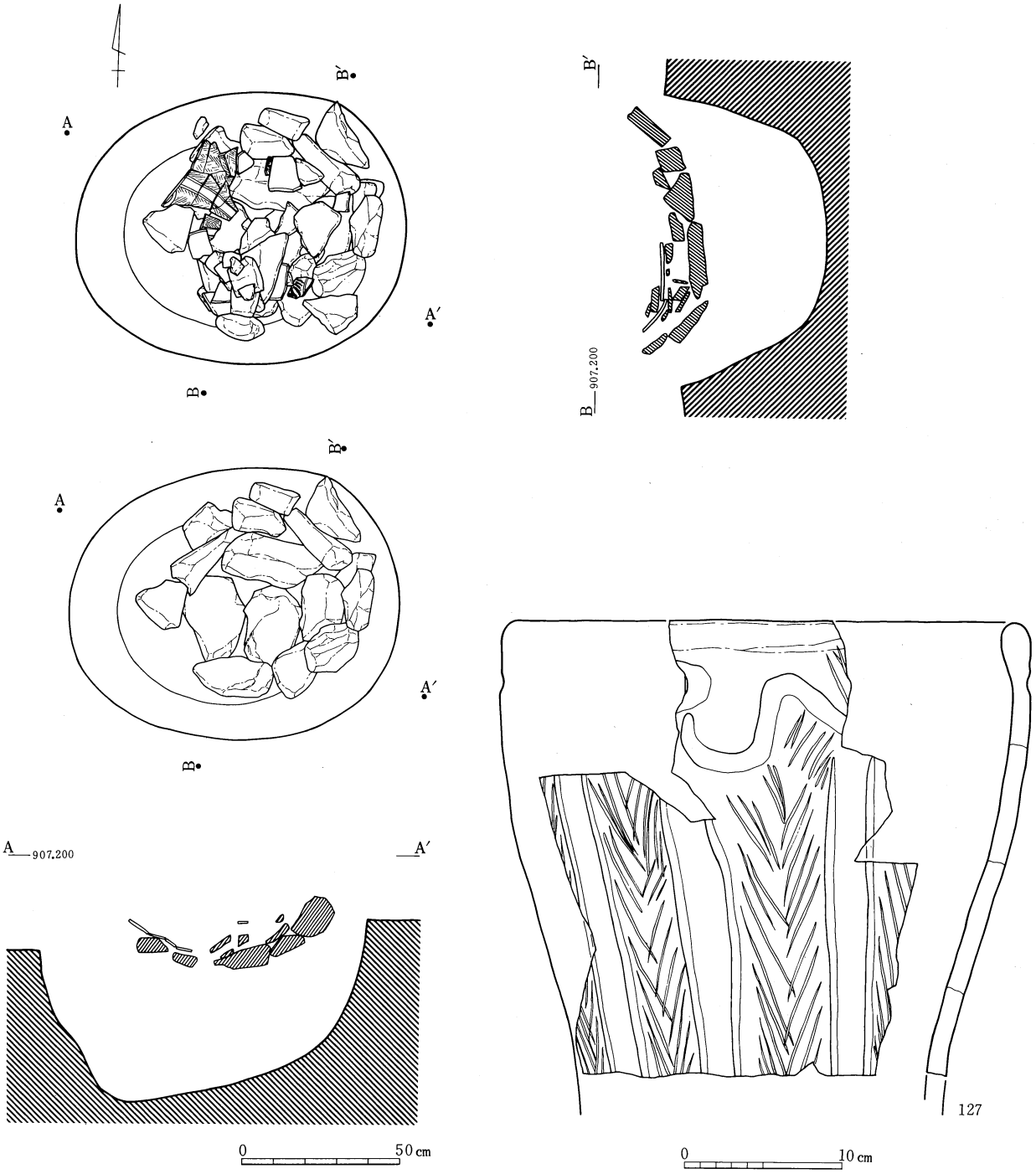


図45　土坑（2）・1号配石土坑

成で配石土坑としたことから、一覧表での名称は旧土坑番号のまま掲載し、改変後の遺構名は備考欄に記した。

径50×41 cmをはかる楕円形の土坑(II類)上部に、18個の礫を用いて配石が組まれる。配石は径35 cm余りの円形を呈し、中央部が大きく窪む。また、その上部には深鉢形土器の大破片が置かれていた。配石上端から坑底までの深さは65 cm。礫の多くは被熱を受けて赤変していたが、本址内で火が焚かれた痕跡はまったくなく、焼礫の転用が考えられる。

127は配石上に遺存していた土器。粗雑な綾杉状文を地文とし、形骸化した口縁部文様帯を残す。

時期　出土遺物より、本址は中期後葉、本遺跡第II期の所産と考えられる。

2号配石土坑（図46、PL22・40）

調査区中央やや西寄りのIIR－B08グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

径76×60 cmをはかる楕円形の土坑上部に配石が組まれる。土坑形態はII類。配石は小・中礫を楕円形に敷き並べ、その上部に径40 cmを越える大礫を重ねる。下部の配石は1号配石土坑例と同様に中央部がやや窪む。また、下部配石中には緻密な安山岩製の石核が含まれていた（117）。

4号土坑（図47）

IIR—A14グリッドに位置し、IV層上部で検出された。

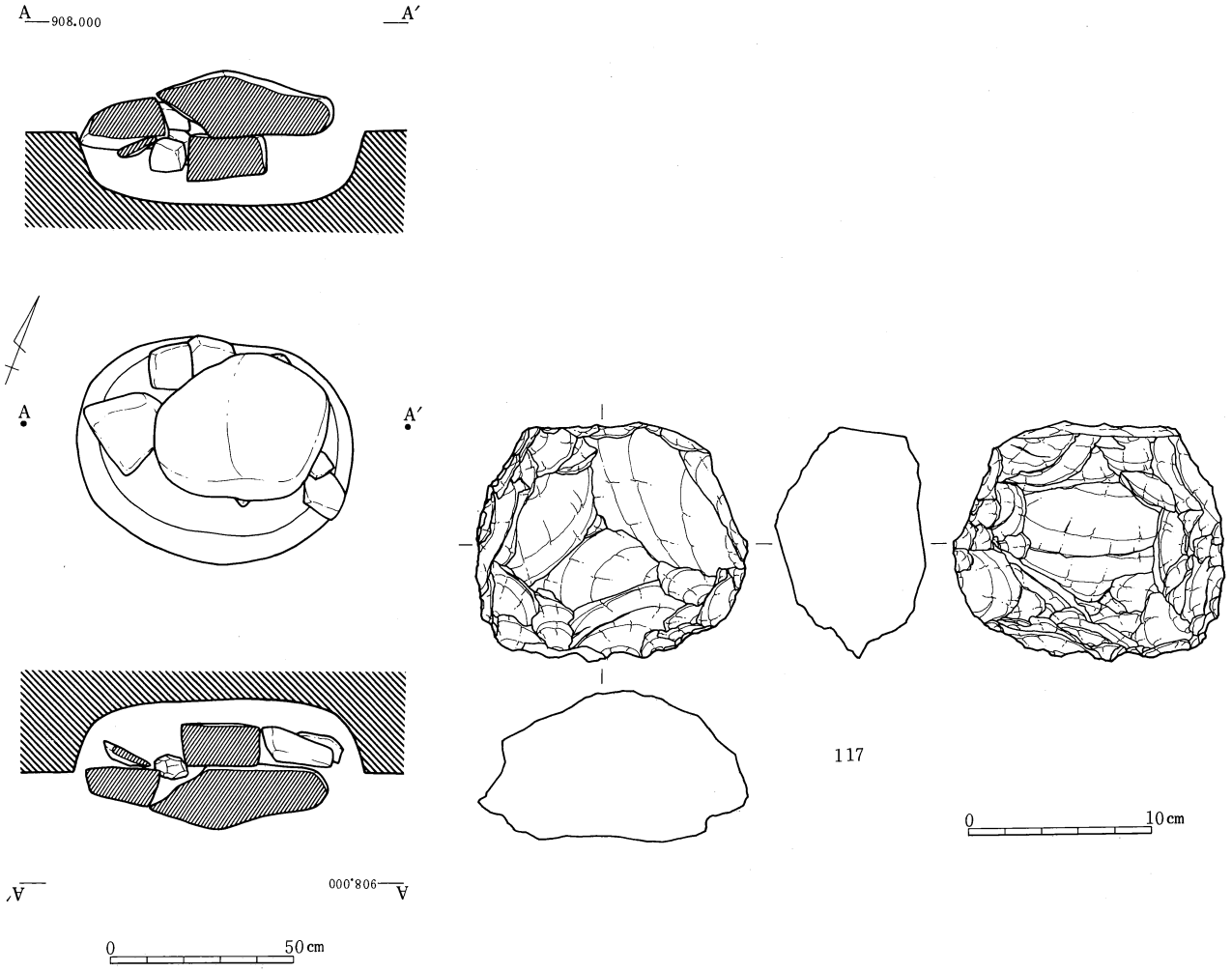


図46　土坑（3）・2号配石土坑

II類に帰属する楕円形の土坑であり、推定径120×90 cm、深さ60 cmをはかる。上面北側に大形礫を伴い周辺にも礫が遺存していた。覆土は2層に分けられ、ともにIV層を基調とする黒褐色土であった。

6号土坑（図47・53）

IIR－E12グリッドを中心に位置し、IV層中で検出された。上端径270×160 cmほどをはかる大形の土坑であり、V類に分類される。検出面からの深さは65 cm。断面は丸底状を呈し、平面形こそ違え隣接する7号土坑と類似する。覆土はIV層に対比される黒褐色土であったが、坑底にはロームを主体とする明褐色土が堆積していた。

10号土坑（図47）

IIR－R19グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

長径200 cmの不整楕円形を呈し、検出面からの深さは42c mをはかる。壁は急傾斜に掘り込まれ、坑底はほぼ平坦に整えられる。覆土はIV層に対比される黒褐色土であり、下部にはロームが混入していた。「陥し穴」とも考えられるが、ここではV類土坑の範疇で捉えておきたい。

19号土坑（図48、PL22・23・40）

IIR－D10グリッドに位置し、V層上面で検出された。

不整円形を呈し、径122×117 cmをはかる。断面は丸底状をなし、III類に含まれる。検出面からの深さは60 cmと深く、IV層に対比される黒褐色土を覆土としていた。整理の段階で本址上部から南側にかけて礫が遺存していたことが明らかとなった。礫は30 cmを前後する大礫を主とし、多孔石などを含んでいる。

本址との関係は必ずしも明確とはいえないものの、4号土坑と同様な性格をもつことも充分に考えられる。

30号土坑（図49）

IIQ－P14グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

径50 cmほどの円形プランを呈し、検出面からの深さは55 cmをはかる。断面は筒状に掘り込まれ、一部でオーバーハングする。坑底はほぼ平らに整えられる。規模はやや小振りであるが、形態的にはIV類B種に分類される。覆土はIV層土を基調とする暗褐色土で、下部にはロームが混入していた。

52号土坑（図49、PL24）

IIQ－R05グリッドに位置し、VI層上面で検出された。

径102×94 cmをはかり、平面形はほぼ円形を呈する。検出面からの深さは52 cm。断面タライ状をなし、IV類A種に分類される。覆土にはローム粒・ロームブロックが多く混入し、埋め戻されたと考えられる堆積状況を示していた。

56号土坑（図50・53、PL24）

IIQ－P02グリッドに位置し、67号土坑を切る。VI層上面で検出された。径141×120 cmの不整円形を呈し、深さ86 cmをはかる。断面形はタライ状に深まり、坑底は平坦に整えられる。形態はIV類A種。覆土にはローム粒・ロームブロックが多く混入し、埋め戻されたと考えられる複雑な堆積状況を示していた。

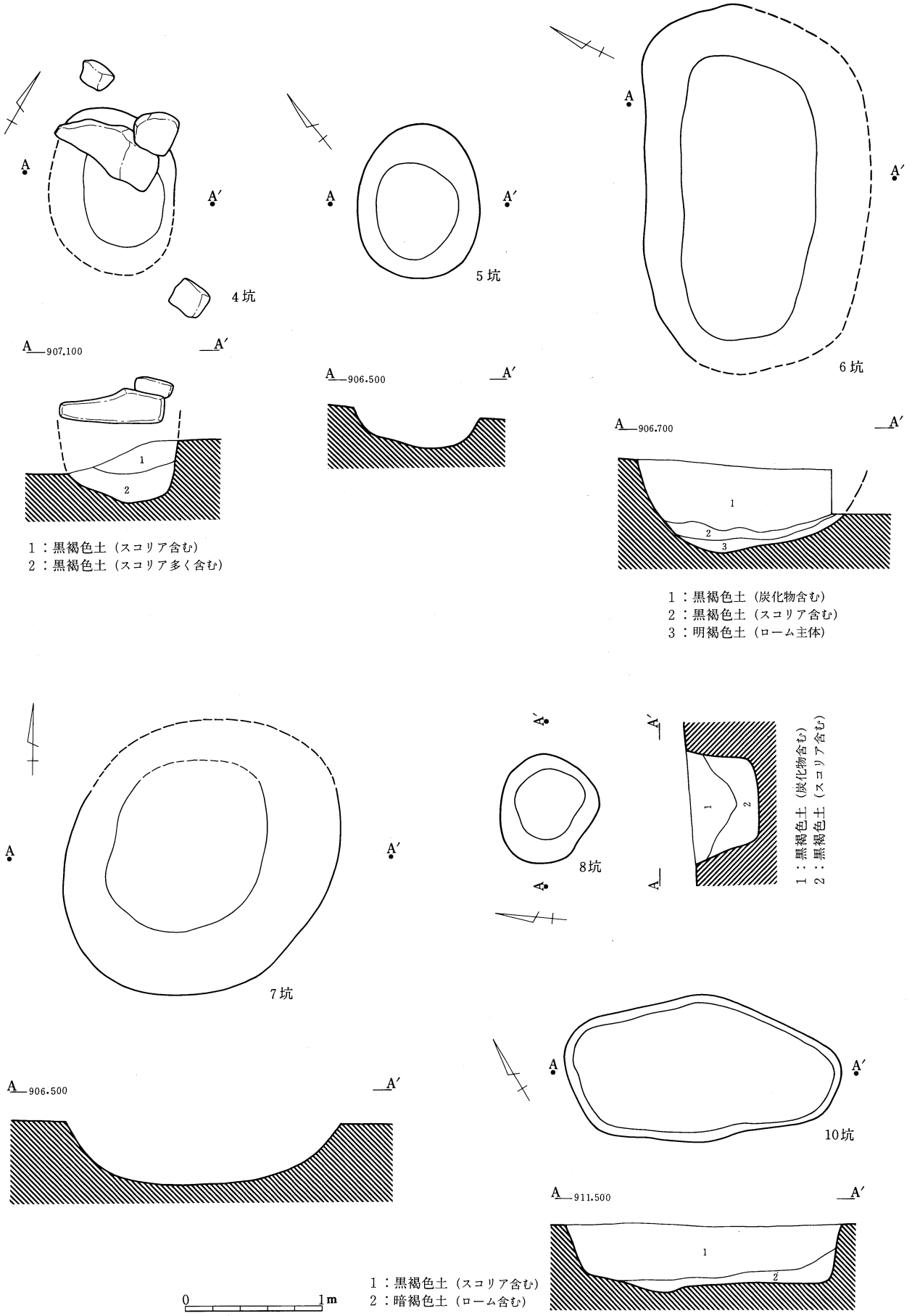

A
A′
4坑
907.100
1
2
1：黒褐色土（スコリア含む）
2：黒褐色土（スコリア多く含む）
5坑
906.500
6坑
906.700
3
1：黒褐色土（炭化物含む）
2：黒褐色土（スコリア含む）
3：明褐色土（ローム主体）
7坑
906.500
8坑
1：黒褐色土（炭化物含む）
2：黒褐色土（スコリア含む）
10坑
911.500
1：黒褐色土（スコリア含む）
2：暗褐色土（ローム含む）
0
1m

図47　土坑（４）

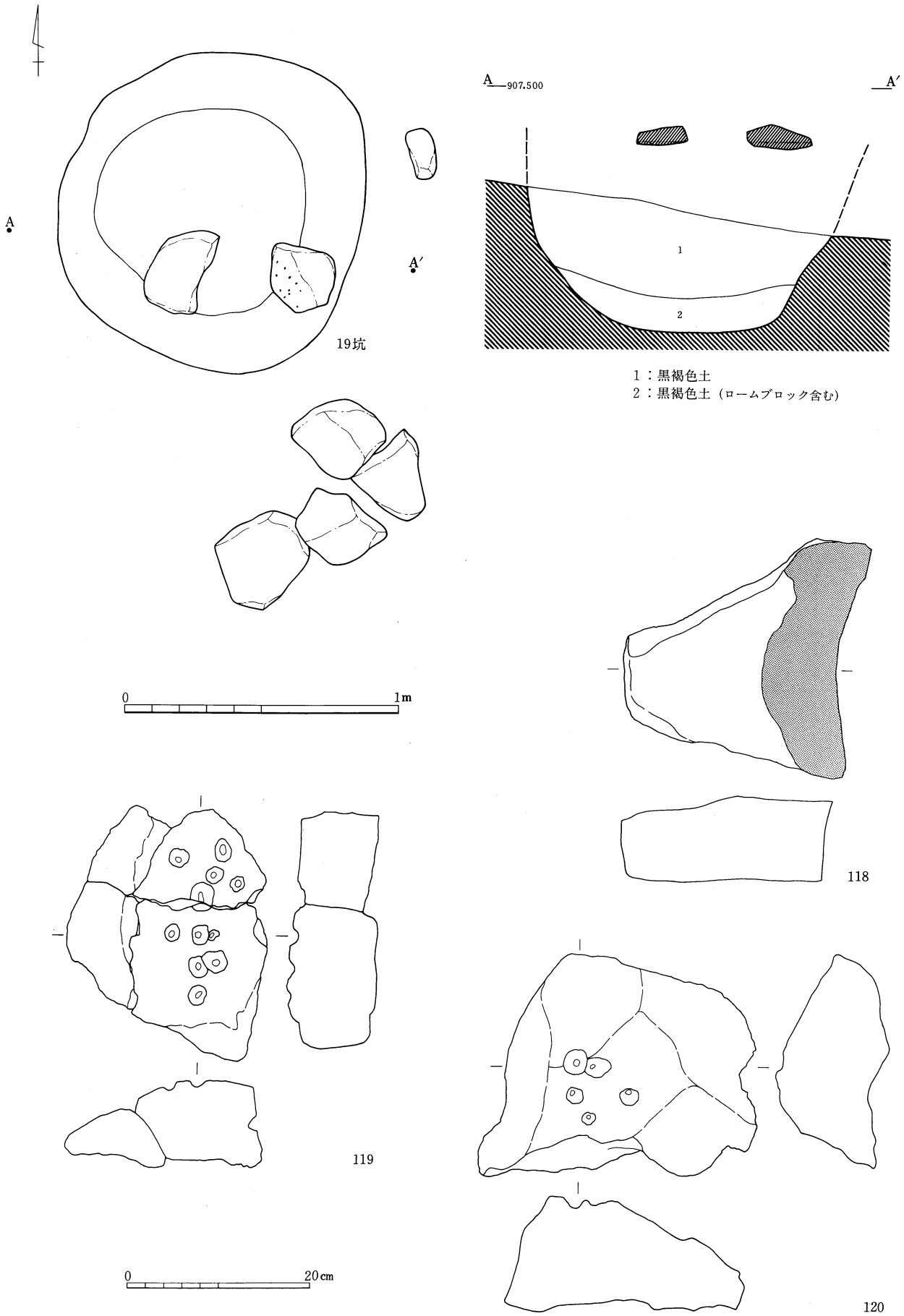

A
A′
19坑
A 907.500
A′
1
2
1：黒褐色土
2：黒褐色土（ロームブロック含む）
0
1m
118
119
120
0
20cm

図48　土坑（5）

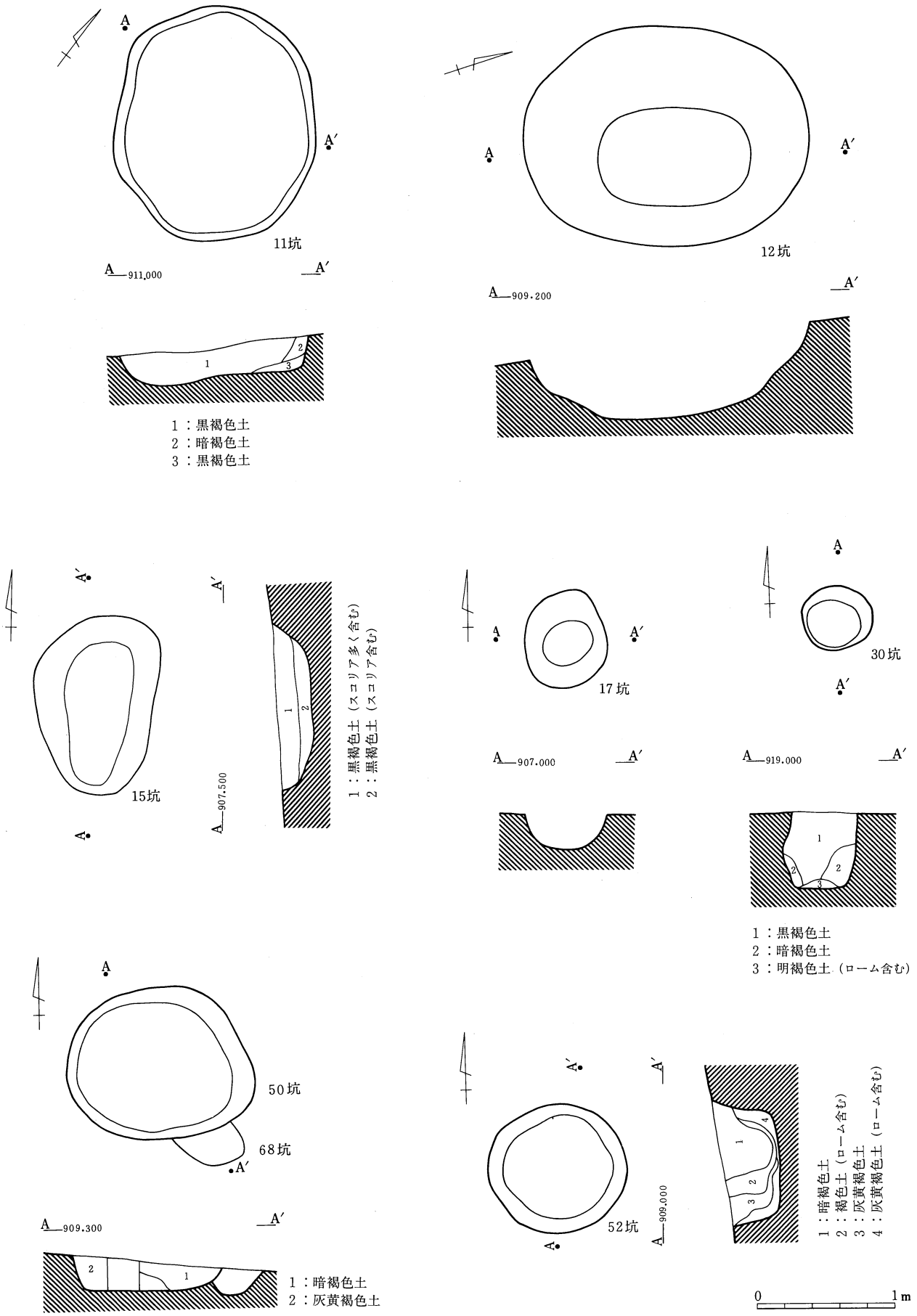

11坑
A 911.000
1：黒褐色土
2：暗褐色土
3：黒褐色土
12坑
A 909.200
15坑
A 907.500
1：黒褐色土（スコリア多く含む）
2：黒褐色土（スコリア含む）
17坑
A 907.000
30坑
A 919.000
1：黒褐色土
2：暗褐色土
3：明褐色土（ローム含む）
50坑
68坑
A 909.300
1：暗褐色土
2：灰黄褐色土
52坑
A 909.000
1：暗褐色土
2：褐色土（ローム含む）
3：灰黄褐色土
4：灰黄褐色土（ローム含む）
0
1m

図49　土坑（６）

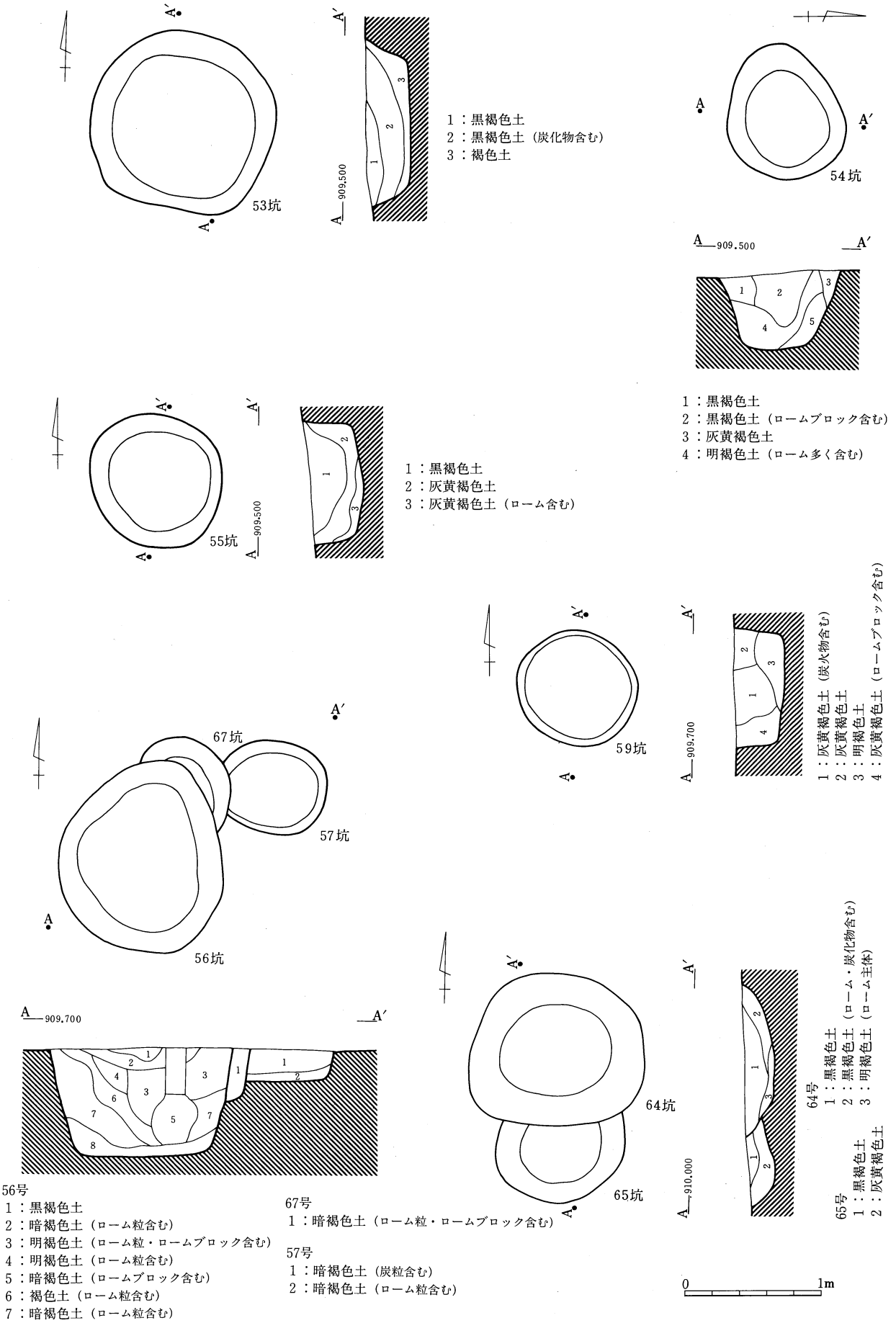

53坑
A
A′
909.500
1：黒褐色土
2：黒褐色土（炭化物含む）
3：褐色土
54坑
909.500
1：黒褐色土
2：黒褐色土（ロームブロック含む）
3：灰黄褐色土
4：明褐色土（ローム多く含む）
55坑
909.500
1：黒褐色土
2：灰黄褐色土
3：灰黄褐色土（ローム含む）
59坑
909.700
1：灰黄褐色土（炭火物含む）
2：灰黄褐色土
3：明褐色土
4：灰黄褐色土（ロームブロック含む）
67坑
57坑
56坑
909.700
64坑
65坑
910.000
64号
1：黒褐色土
2：黒褐色土（ローム・炭化物含む）
3：明褐色土（ローム主体）
65号
1：黒褐色土
2：灰黄褐色土
56号
1：黒褐色土
2：暗褐色土（ローム粒含む）
3：明褐色土（ローム粒・ロームブロック含む）
4：明褐色土（ローム粒含む）
5：暗褐色土（ロームブロック含む）
6：褐色土（ローム粒含む）
7：暗褐色土（ローム粒含む）
8：暗褐色土（ロームブロック含む）
67号
1：暗褐色土（ローム粒・ロームブロック含む）
57号
1：暗褐色土（炭粒含む）
2：暗褐色土（ローム粒含む）
0
1m

図50　土坑（7）

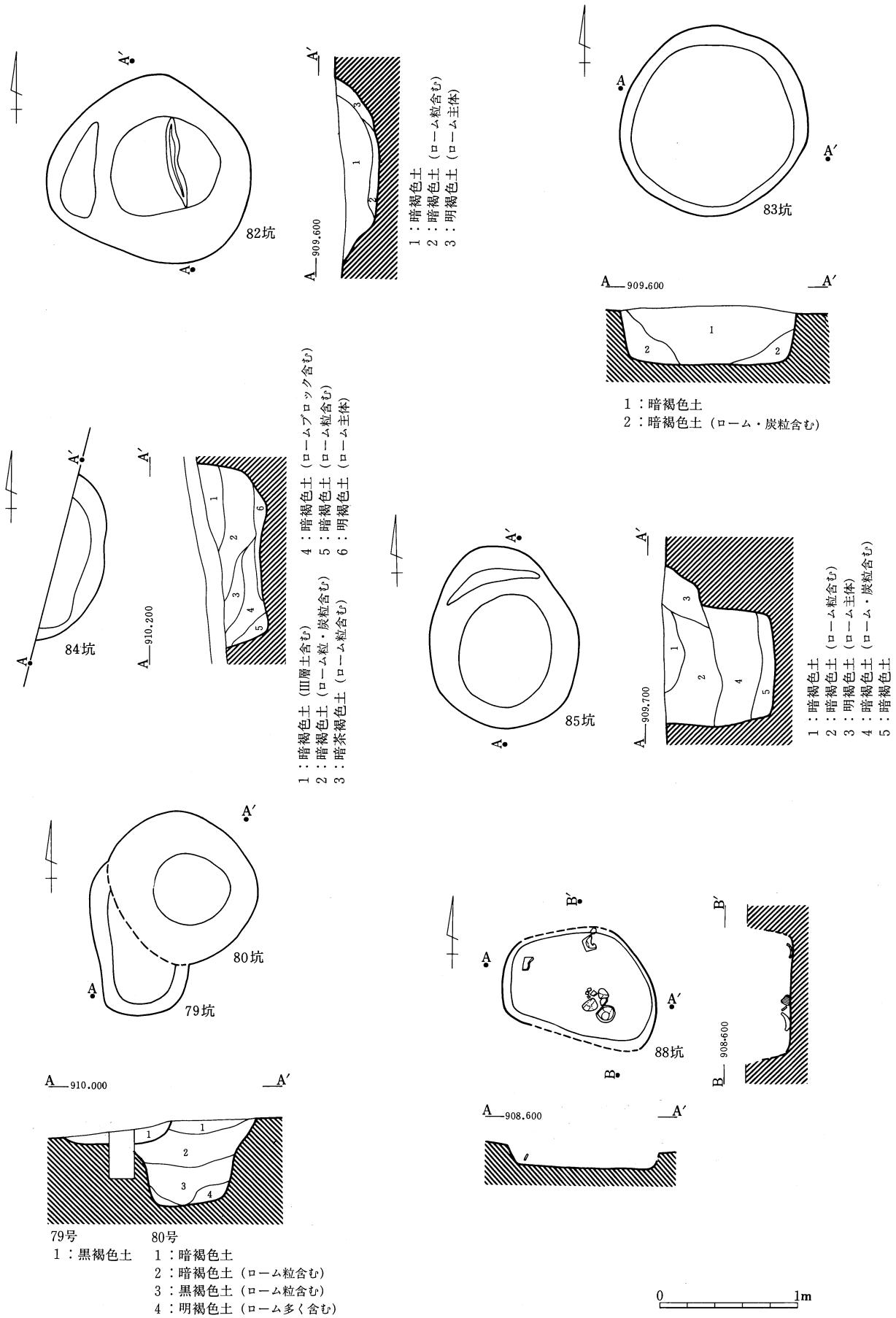

82坑
A 909.600
1：暗褐色土
2：暗褐色土（ローム粒含む）
3：明褐色土（ローム主体）
83坑
A 909.600
1：暗褐色土
2：暗褐色土（ローム・炭粒含む）
84坑
A 910.200
1：暗褐色土（Ⅲ層土含む）
2：暗褐色土（ローム粒・炭粒含む）
3：暗茶褐色土（ローム粒含む）
4：暗褐色土（ロームブロック含む）
5：暗褐色土（ローム粒含む）
6：明褐色土（ローム主体）
85坑
A 909.700
1：暗褐色土
2：暗褐色土（ローム粒含む）
3：明褐色土（ローム主体）
4：暗褐色土（ローム・炭粒含む）
5：暗褐色土
80坑
79坑
A 910.000
79号
1：黒褐色土
80号
1：暗褐色土
2：暗褐色土（ローム粒含む）
3：黒褐色土（ローム粒含む）
4：明褐色土（ローム多く含む）
88坑
A 908.600
B 908.600
0 1m

図51　土坑（８）

83号土坑（図51・53・54、PL25・28）

ⅡQ－J03･04グリッドに位置する。検出層位はⅥ層上面。径140×130 cmをはかり、ほぼ円形を呈する。検出面からの深さは40 cmと比較的深く、断面タライ状をなす。Ⅳ類A種に分類される。覆土はⅣ層土を基調とする暗褐色土であり、中・下層からは図53・54―155～160をはじめ多数の遺物が出土した。

84号土坑（図51、PL25）

ⅡQ－J03・04グリッドに位置し、83号土坑の西に接する。調査区境の壁にかかり、Ⅳ層上面から掘り込まれた事実を確認した。プランの検出層位はⅥ層上面。

本址のほとんどが調査範囲外にあることから、全体の形状は不明のままとなったが、径130 cmほどの不整円形を呈すると推定される。Ⅵ層（ローム層）をわずかに掘り込むのみであるが、掘り込み面からの深さは45 cmをはかる。断面タライ状をなし、Ⅳ類A種に分類される。

85号土坑（図51・54、PL25）

ⅡQ―M03・N03グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。

径132×108 cmの不整円形を呈し、断面円筒状をなす。検出面からの深さは80 cmであるが、84号土坑を参考とした掘り込み面からの深さはおよそ120 cmに達する。Ⅳ類B種に分類される。覆土はⅣ層を基調とする暗褐色土を主とし、壁際の一部にはロームが混ざる。また、覆土中から図52―130などが出土した。

88号土坑（図51・54、PL25・28）

ⅡQ―K09・10グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出された。

径116×82 cmほどの小判形を呈し、断面はタライ状をなす。道路建設時の削平を受け、壁の多くが失われていた。土坑形態はⅡ類。平坦に整えられた坑底には、深鉢形土器の底部破片（図52―131・132）のほか花

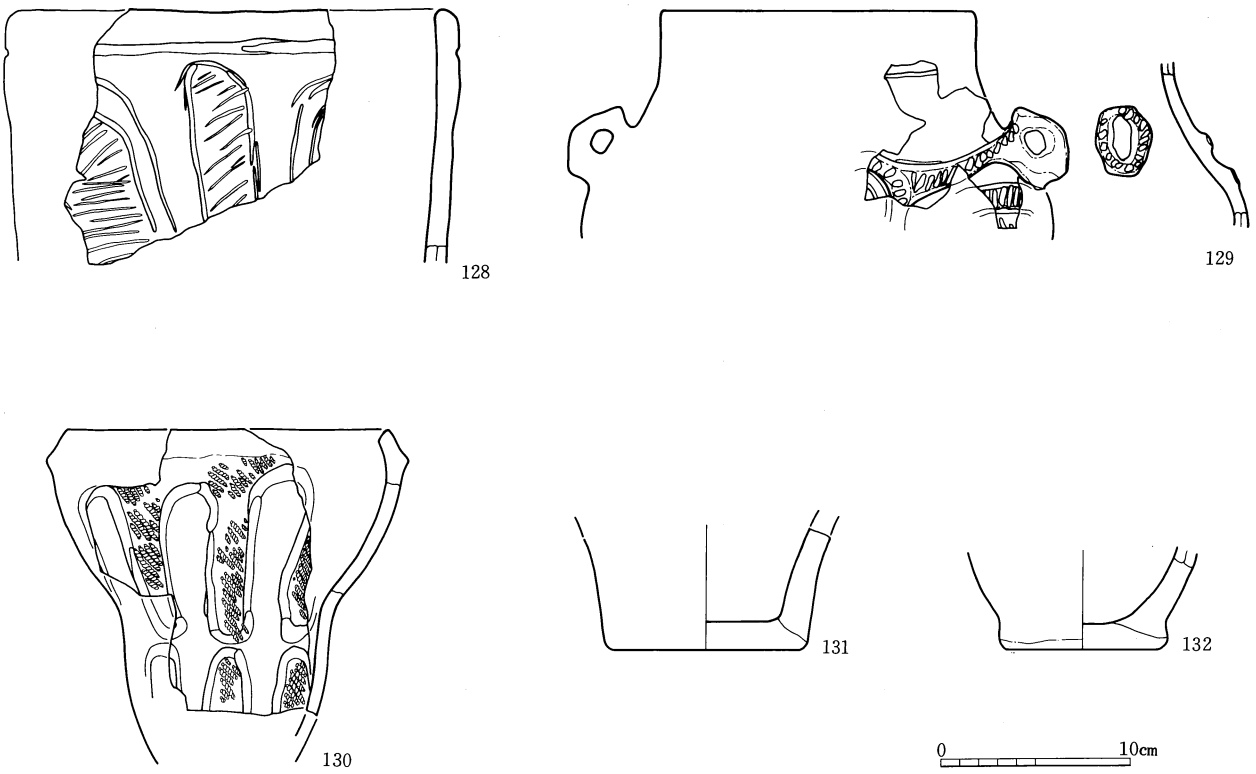


図52　土坑出土遺物（1）

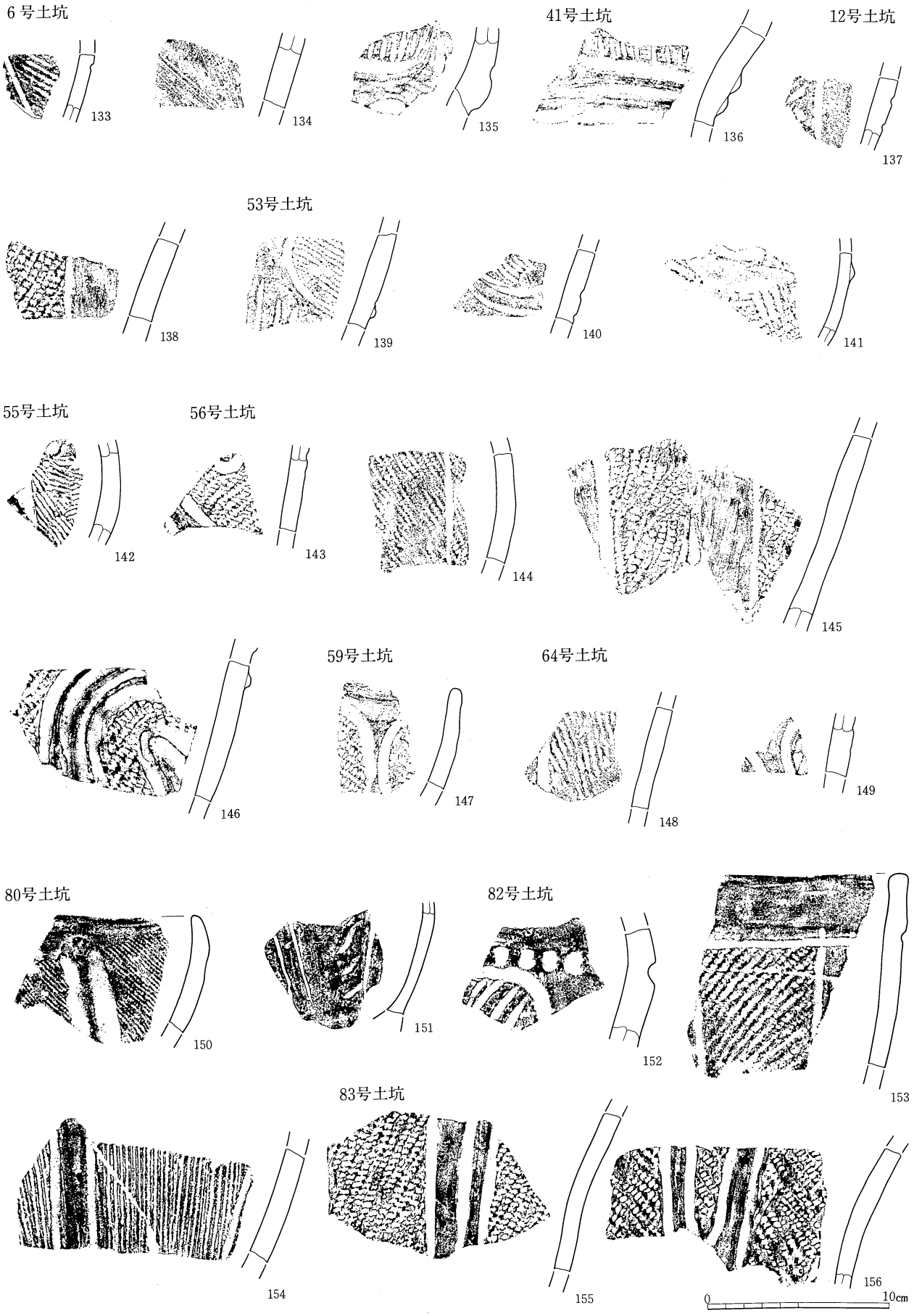

6号土坑
41号土坑
12号土坑
133
134
135
136
137
53号土坑
138
139
140
141
55号土坑
56号土坑
142
143
144
145
146
59号土坑
64号土坑
147
148
149
80号土坑
82号土坑
150
151
152
153
83号土坑
154
155
156
0
10cm

図53　土坑出土遺物（２）

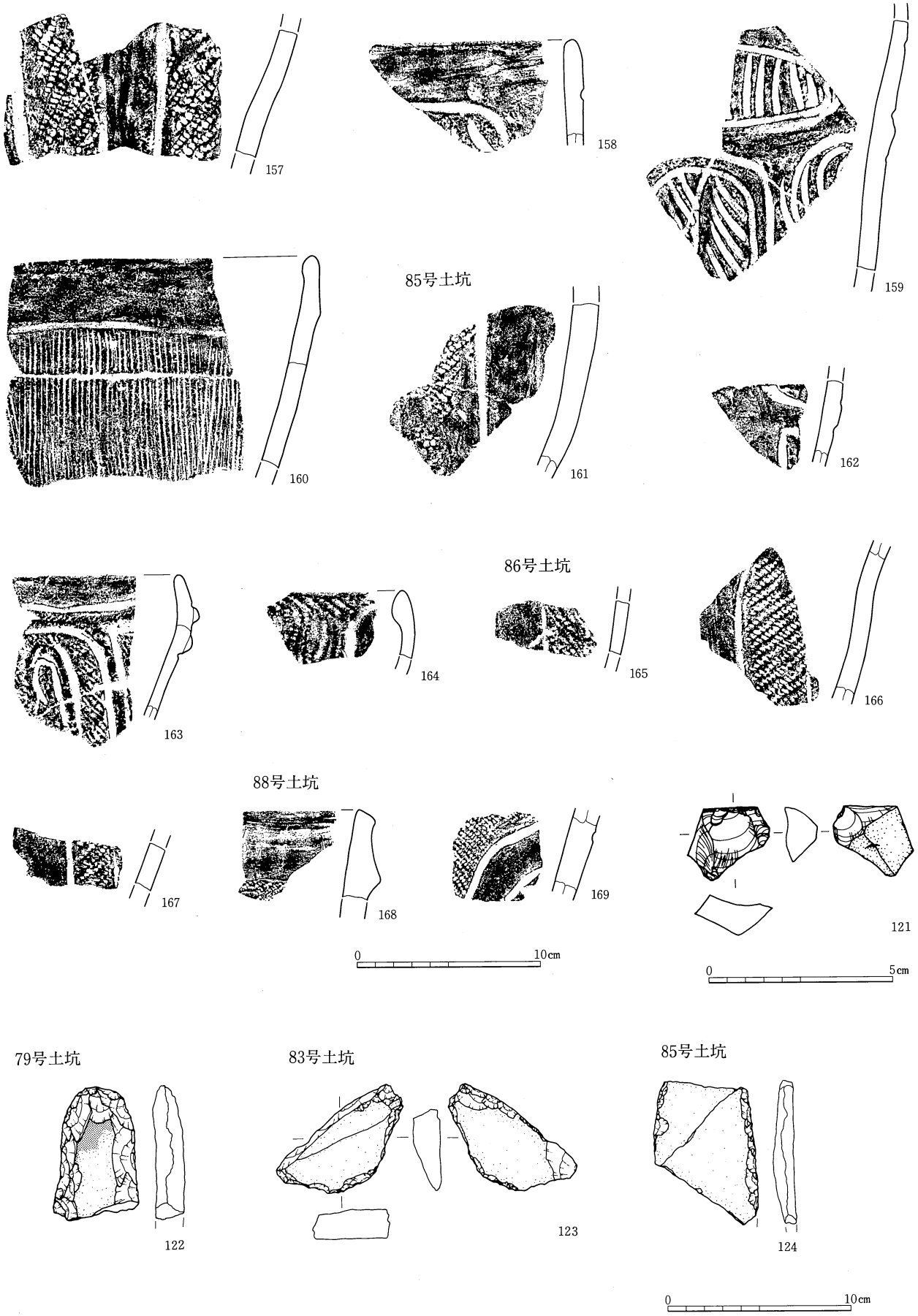

157
158
159
85号土坑
160
161
162
86号土坑
163
164
165
166
88号土坑
167
168
169
121
0
10cm
0
5cm
79号土坑
83号土坑
85号土坑
122
123
124
0
10cm

図54　土坑出土遺物（3）

表１　土坑一覧（１）

（　）は推定

番号	位置	規模 (cm) 上端	下端	深さ	形状 平面	断面	分類	備考
01	RT-16	240×98	226×82	38			陥し穴	
02	RF-18・19 RG-18・19	293×154	229×104	92			陥し穴	
03	RO-10 RP-10	(59)×(30)	(56)×(23)	28	小ピット	柱穴	I	
04	RA-13・14	(124)×(92)	(80)×58	45	小判形	円筒	II	
05	RC-13	113×89	70×58	30	小判形	丸底	II	
06	RD-12 RE-12	(269)×(163)	205×95	61	楕円	丸底	V	第IIIｂ期
07	RG-13 RH-13	(223)×(187)	(135)×112	46	楕円	丸底	V	
08	RI-16	80×69	56×46	49	略円形	円筒	IVA	
09	RM-15	(100)×(82)	75×(60)	46	小判形	丸底	II	
10	RQ-18・19 RR-18・19	203×106	190×93	43	楕円	タライ	V	
11	RR-01	171×146	160×132	29	楕円	タライ	V	
12	RQ-04・05	206×160	109×71	70	不整形	丸底	VI	第IIIｂ期
13	RP-07	171×130	77×42	63	不整形	丸底	VI	
14	RG-06 RH-06	155×101	135×86	44	不整形	丸底	VI	
15	RG-10	130×86	104×48	28	小判形	丸底	II	
16	RM-14	81×(76)	53×32	39	不整形	丸底	VI	
17	RC-11・12	73×64	37×30	26	略円形	丸底	III	
18	RE-10	(33)×(32)	18×18	21	小ピット	柱穴	I	
19	RC-10 RD-10	122×117	77×76	60	略円形	丸底	III	
20	RI-18	65×56	57×49	52	円	円筒	IVB	
21	RT-17	31×29	17×12	10	小ピット	柱穴	I	
22	RQ-04 RR-04	191×54	182×41	29			陥し穴	
23	RP-05 RO-05	212×113	192×73	55			陥し穴	
24	QR-10	121×95	92×82	37	略円形	タライ	III	
25	QR-10	72×57	59×43	12	略円形	タライ	III	
26	QR-10	22×21	6×5	15	小ピット	柱穴	I	
27	QS-09	89×80	80×72	32	略円形	丸底	III	
28	QR-06	89×75	84×70	54	円	円筒	IVB	
29	QP-14	mk×45	76×36	13	不整形	タライ	VI	
30	QP-14	51×47	39×33	55	円	円筒	IVB	
31	QP-14	37×31	24×18	20	小ピット	柱穴	I	
32	RD-11	28×25	15×13	24	小ピット	柱穴	I	
33	RD-12	22×21	12×11	11	小ピット	柱穴	I	
34	RD-12	38×32	22×18	13	小ピット	柱穴	I	
35	RG-05・06	92×62	76×46	20	小判形	タライ	II	
36	RP-17・18	50×46	35×30	24	小ピット	柱穴	I	
37	RP-18	43×41	28×25	13	小ピット	柱穴	I	
38	RP-18	51×37	39×29	17	小ピット	柱穴	I	

表2　土坑一覧（2）

番号	位置	規模 (cm)			形状		分類	備考
		上端	下端	深さ	平面	断面		
39	RP-17・18	52×46	38×32	17	小ピット	柱穴	I	
40	RO-18	52×48	36×33	20	小ピット	柱穴	I	
41	RM-17・18 RN-17・18	169×123	117×86	42	楕円	タライ	V	第II期
42	RL-17・18	66×59	55×43	44	小ピット	柱穴	I	
43	RI-13・14	111×87	90×67	45	小判形	タライ	II	
44	RH-17	80×72	58×50	25	円	タライ	III	
45	RO-16	50×44	21×19	32	小ピット	柱穴	I	
46	RK-05	34×27	29×16	52	小ピット	柱穴	I	
47	RF-02	37×29	21×18	13	小ピット	柱穴	I	
48	RO-17 RP-17	58×53	40×37	29	小ピット	柱穴	I	
49	RO-17・18	60×58	40×38	12	小ピット	柱穴	I	
50	QO-05 QP-05	138×111	114×94	26	不整円形	タライ	IVA	68坑を切る
51	QP-04	72×59	63×48	12	円	タライ	IVA	
52	QR-05	102×94	80×75	52	円	タライ	IVA	埋め戻し
53	QQ-03	140×138	113×105	31	円	タライ	IVA	第III期
54	QO-03	99×86	69×58	59	不整円形	タライ	IVA	埋め戻し
55	QO-01・02	104×96	76×72	46	円	タライ	IVA	第III期
56	QP-02	141×120	108×88	86	不整円形	タライ	IVA	67坑を切る　埋め戻し 第III期
57	QP-02	(82)×68	(70)×54	23	円	タライ	IVA	67坑に切られる
58	QP-01	82×81	69×67	38	円	タライ	IVA	
59	QQ-02	89×85	77×74	38	円	タライ	IVA	埋め戻し　第II期
60	QP-03	88×63	75×49	13	不整円形	タライ	IVA	
61	LP-19 LQ-19	75×62	65×53	16	略円形	丸底	III	
62	LR-20	62×50	43×37	16	円	丸底	III	
63	QO-01	48×36	39×26	11	小ピット	柱穴	I	
64	QS-01 LS-20	128×112	83×67	25	略円形	丸底	III	65坑を切る　第III期
65	QS-01	100×(85)	63×(55)	23	略円形	丸底	III	64坑に切られる
66	MA-20	75×64	60×48	18	円	タライ	IVA	
67	QP-02	(80)×(63)	(53)×(30)	40	円	タライ	IVA	57坑を切る 56坑に切られる
68	QO-05 QP-05	(57)×(39)	—	19	小ピット	柱穴	I	50坑に切られる
69	RP-04	56×44	47×35	37	小ピット	柱穴	I	
70	RD-06	(101)×72	(83)×61	86	小判形	丸底	II	
71	LM-16	69×45	56×30	13	不整形	丸底	VI	
72	LM-15	81×(76)	(72)×(58)	19	不整形	丸底	VI	
73	LM-16 LN-16	194×70	173×(43)	27	不整形	丸底	VI	
74	LM-17 LN-17	155×(91)	(125)×60	27	不整形	丸底	VI	
75	LM-18	77-63	52×42	17	不整形	丸底	VI	
76	LL-18 LL-19	98×57	34×24	34	不整形	丸底	VI	

表3　土坑一覧（3）

番号	位置	規模 (cm)			形状		分類	備考
		上端	下端	深さ	平面	断面		
77	LL-18・19	89×64	46×28	26	不整形	丸底	VI	
78	LM-12	200×85	177×68	16	不整形	丸底	VI	
79	QM-02	(155)×(67)	(95)×(48)	15	小判形	タライ	II	80坑との切り合い
80	QM-02	109×(99)	55×50	60	円	円筒	IVB	79坑との切り合い 第III期
81	QJ-04	68×(46)	55×(29)	20	小ピット	柱穴	I	
82	QK-03・04 QL-03・04	148×135	79×70	31	不整円形	丸底	IVA	第III期
83	QJ-04	140×130	119×113	40	円	タライ	IVA	第IIa期
84	QJ-04	125×(77)	96×(53)	45	不整円形	タライ	IVA	
85	QM-03 QN-03	132×108	82×66	80	不整円形	円筒	IVB	第IIc期
86	QN-06	58×33	42×23	50	小ピット	柱穴	I	第III期
87	QM-09	57×(36)	42×23	20	小ピット	柱穴	I	
88	QK-09・10	116×(82)	104×74	17	小判形	タライ	II	第III期

崗岩の小礫が遺存していた。

キ　遺構外出土遺物

1）土　器（図55～71、PL29～38）

遺構外からは総数12,138片・総重量258,000ｇの土器が出土した。これらは遺構分布範囲とほぼ重なり合うように出土し、とりわけ、調査区中央の凹地部分に集中する傾向を示していた。出土層位はIII層下部からIV層上部にかけてである。時期的には縄文時代中期後葉を中心とし、早期後葉から前期初頭、中期初頭、後期初頭から同中葉の土器を含む。

以下、必要に応じて細分を加えながら、時期別に詳述する。

早期後葉の土器（図55―170～180、PL31）

総重量11片・320ｇの土器片が出土したのみであり、すべてを図示した。

170～172は同一個体とみられる口縁部破片。直立ぎみに開く口縁上部からくびれを介して胴部へ移行する。微隆線による幾何学状の区画文内に短沈線を充塡し、要所に円形刺突文を加えている。口唇部は「内削（そ）ぎ」状に細まり、端部には鋭いキザミをめぐらす。外面はナデ調整されるものの、内面には横方向の条痕文をとどめる。明褐色ないしくすんだ褐色を呈し、胎土に植物繊維や砂粒を含む。173・174は微隆線による区画内に押引き沈線が充塡されるもので、ともに「く」の字状に折れる段をもつ。175は沈線による幾何学状の区画文内に押引き沈線が充塡され、170などと同様に円形刺突文が加えられる。胎土に若干量の植物繊維のほか、砂粒・石英・長石などを多く含む。

176は格子目状の沈線文が施された胴部破片。胎土に川砂・小石を多く含み、くすんだ褐色を呈す。177～180は条痕文のみをとどめるもの。177・178は表裏に、179は裏面のみに、180は表面のみにそれぞれ斜方向を中心とする条痕文が認められる。くすんだ褐色ないし茶褐色を呈し、胎土には植物繊維のほか砂粒・石英などを含む。

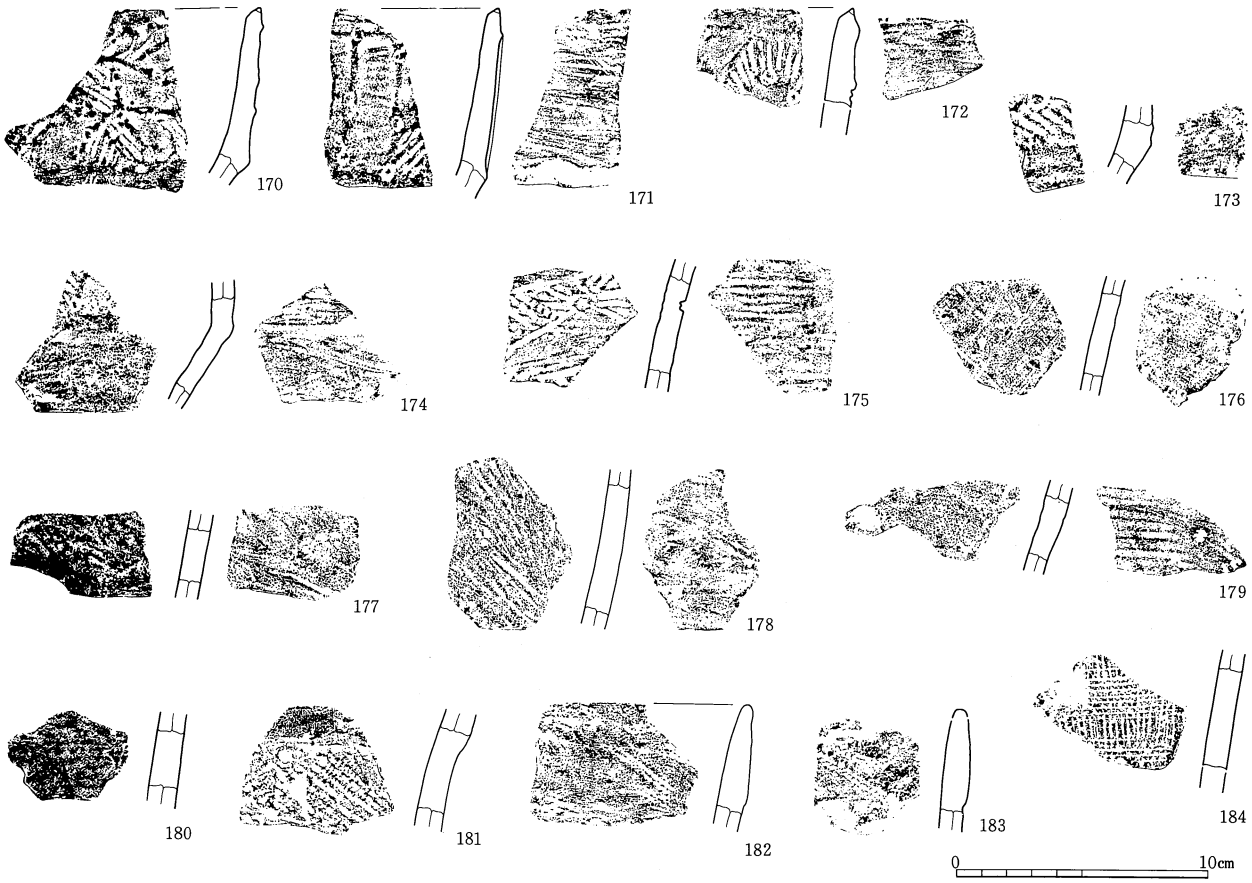


図55　遺構外出土土器（1）

早期末葉～前期初頭の土器（図55―181～183、PL31）

図示した3片を含め、総数量4片・90ｇが出土したにすぎない。

181は斜縄文が施されるもの。異種の原体を用いて羽状に施文している。色調は茶褐色。胎土にはやや多くの植物繊維とともに粗砂・石英などが混入される。182・183は撚糸文が施される口縁部破片。ともに口端部が円頭状に細まる。撚糸文は原体縄2本揃え軸巻き回転施文により施される。182はＬ原体2本揃え、183はＲ・Ｌ原体2本揃えである。胎土に多くの植物繊維を含み、吸水性に富む。

中期初頭の土器（図55―184、PL32）

図示した1点のみであり、ⅡＲ―Ｅグリッドから出土した。

184は格子目状の沈線文が施された胴部破片。施文具は櫛歯状工具であろう。内面にはていねいな器面調整が行われ、また、胎土には砂粒のほか石英などが含まれる。

中期後葉の土器（図56～67―185～380、PL30・32～35）

前記したように、遺構群に囲まれた調査区の中央付近からまとまって出土した。出土総数11,801片・総重量243,630ｇをはかり、本遺跡出土土器の主体を占める。以下、系統的な相違に注目しつつその概要を記すが、分類による記号化を避け個別的な説明に重点をおく。

1．おもに縄文を地文とする一群（図56～60―185～211，図62～66―224～340）

加曽利Ｅ式土器とその系統上に連なる土器であり、該期土器群の中心的な位置を占める。

185～195・224～236は口縁部文様帯を有する。185と224は器形や文様に古い要素をもつが、190・191な

どをはじめとして口縁部文様帯が崩れるなどより新しい傾向を示す土器が多い。隆帯により胴部文様が構成される233は、東北地方中・南部に分布する大木系土器とも考えられる。

196～199・237～266は口縁部文様帯を消失し、凹線様をなす幅広の浅い沈線により波状モチーフなどが描かれる。196のようにずんぐりとした丸みのある器形が主体となり、これに198や265に代表される単純な器形の深鉢形土器が加わる。「角頭」状の口唇部形態を呈し、「蕨手」状の懸垂文が多用されることも大きな特徴である。328～340に一括した一群も凹線様の沈線文により文様が施され、「蕨手」状文を多用する。口縁部文様帯をとどめ、個々のモチーフが区画文的であるなど大きな相違を示すものの、時間的な枠組みを共有する可能性が高い。

200～202・215・216・267～307は体部の文様が上下２段に分割される。屈曲の強いキャリパー状の器形を呈し、口縁下に「W」字状や「V」字状・「渦巻」状のモチーフが施される。４単位の波状もしくは山形状口縁をなすものが多く、なかには201や215・216のように大形の橋状把手のつく例もある。303～307は沈線文間に縄文が充填されず、総じて細く鋭い沈線により文様が描かれる。

308～319は隆線により文様が施される一群。１条単位のもの（308～314）と２条単位のもの（315～319）とがあるが、沈線により文様が施される一群に比べ量的にきわめて少ない。

203～206・320・321は口縁から底部まで屈曲をもたずに移行する大形の深鉢形土器。沈線によるもの（203）と隆帯によるもの（204～206・320・321）との違いはあるが、胴部を縦位分割して交互に縄文を充填する文様において共通性が強い。器形や法量など９号住居址出土のとに類似する。207・208・322～324は広口壺。209～211・325は櫛歯状工具による条線文を地文とする土器。部位を異にして縄文施文が併用される211の破断面には、製作時に加えられたキザミが認められる。接合面積を増やす工夫であろう。

326・327は本系統土器の中でも後期初頭まで下ると考えられる新しい要素をもつ。

２．おもに鱗状の短沈線文を地文とする一群（図60・66・67―212・213・342～368）

２号住居址出土の３や３号住居址出土の６を代表例とし、342～354などもそれらと同様な文様構成をもつ。ただし、345と346は隆帯状にキザミが加えられており、系統上異質な土器である可能性を残す。212は口縁部文様帯の意識が薄れ、沈線による形骸化したモチーフのみをとどめる。356～365などは口縁部文様帯を喪失し、212に現れた逆「U」字状の胴部文様が主要な位置を占めるようになる。213については便宜上本群に含めたが、器形・文様ともに異質な土器であり、系統性など検討を要しよう。また、366～369は以下の土器との識別に不安を残す。

３．おもに「ハ」の字状の短沈線文を地文とする一群（図60・67―214・369～380）

214は口縁下に隆帯をめぐらし、胴部には短沈線文をやや粗雑に施す。371～375は縦位懸垂文により器面を分割し、空白部を「ハ」の字状をなす短沈線文で埋める。377～380は同一個体とみられる土器であり、櫛歯状工具を用いて「ハ」の字状文を施している。壺形を呈する土器とも考えられるが、口縁部および底部付近の形状が不明であり断定はできない。

４．小形土器・ミニチュア土器を一括する（図61―217～223）

217は口径推定８cmをはかる薄手の土器であり、口縁下を除いて縄文が施文される。220は口縁下に刺突文をめぐらし、胴部には逆「U」字状の区画文と細沈線による充填文が施される。推定口径は8.5cm。221は手捏ね土器に類する「カップ」状の土器。剥落痕より左右一対の橋状把手がついていたと考えられる。222は赤色塗彩の痕跡をとどめた小形土器。外面口縁下および内面上部に赤色顔料がわずかに残る。223は

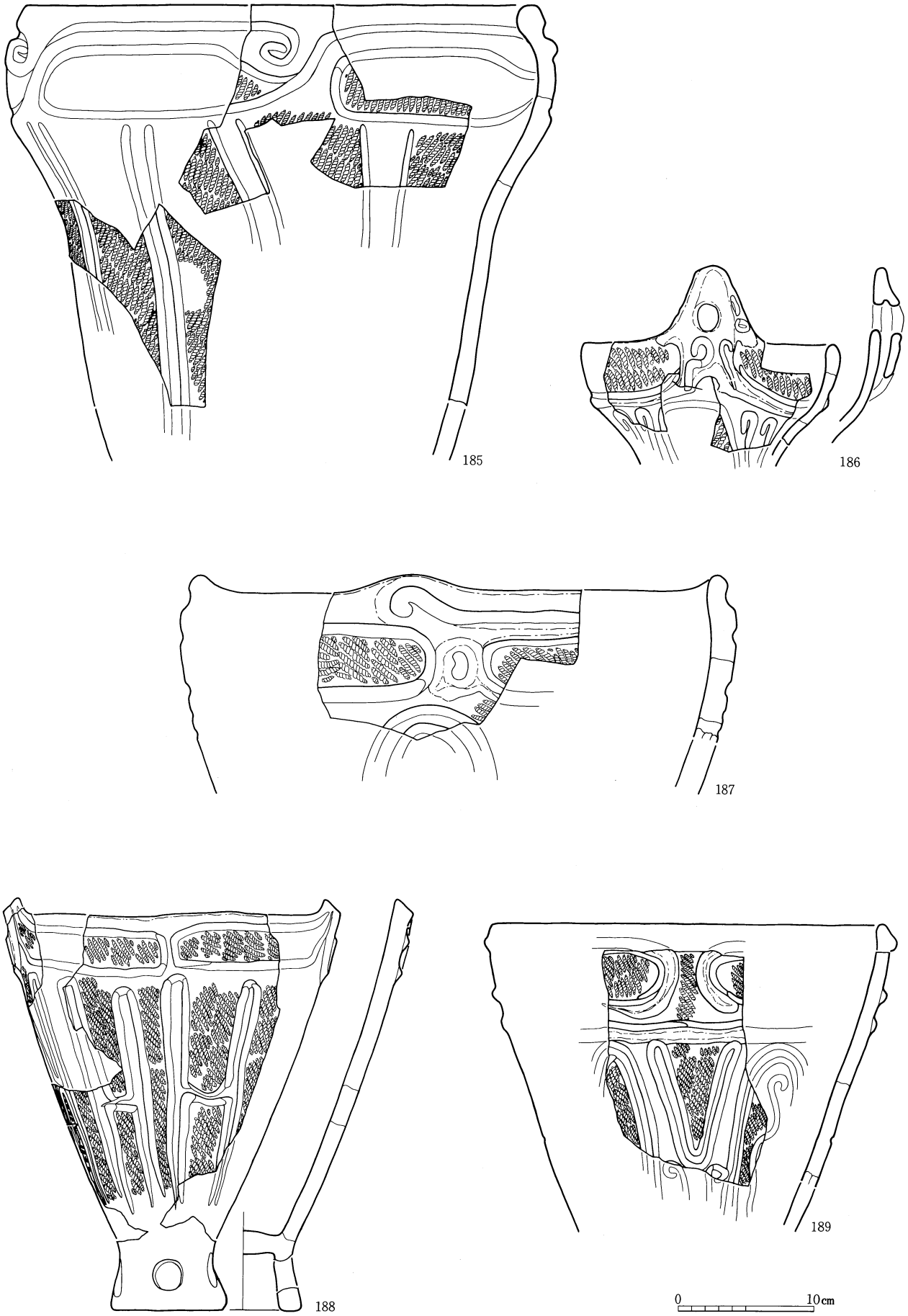


図56　遺構外出土土器（2）

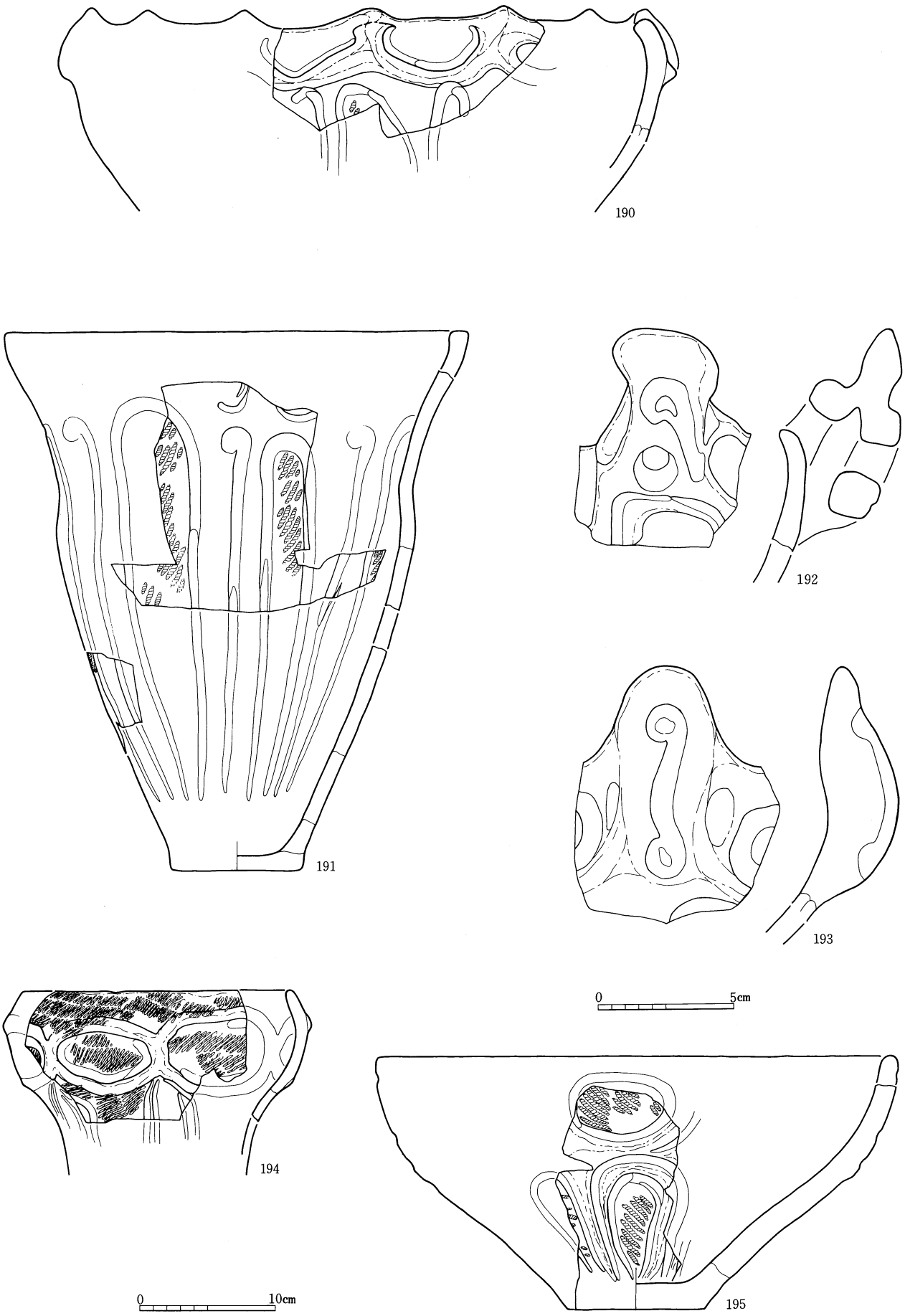


図57　遺構外出土土器（３）

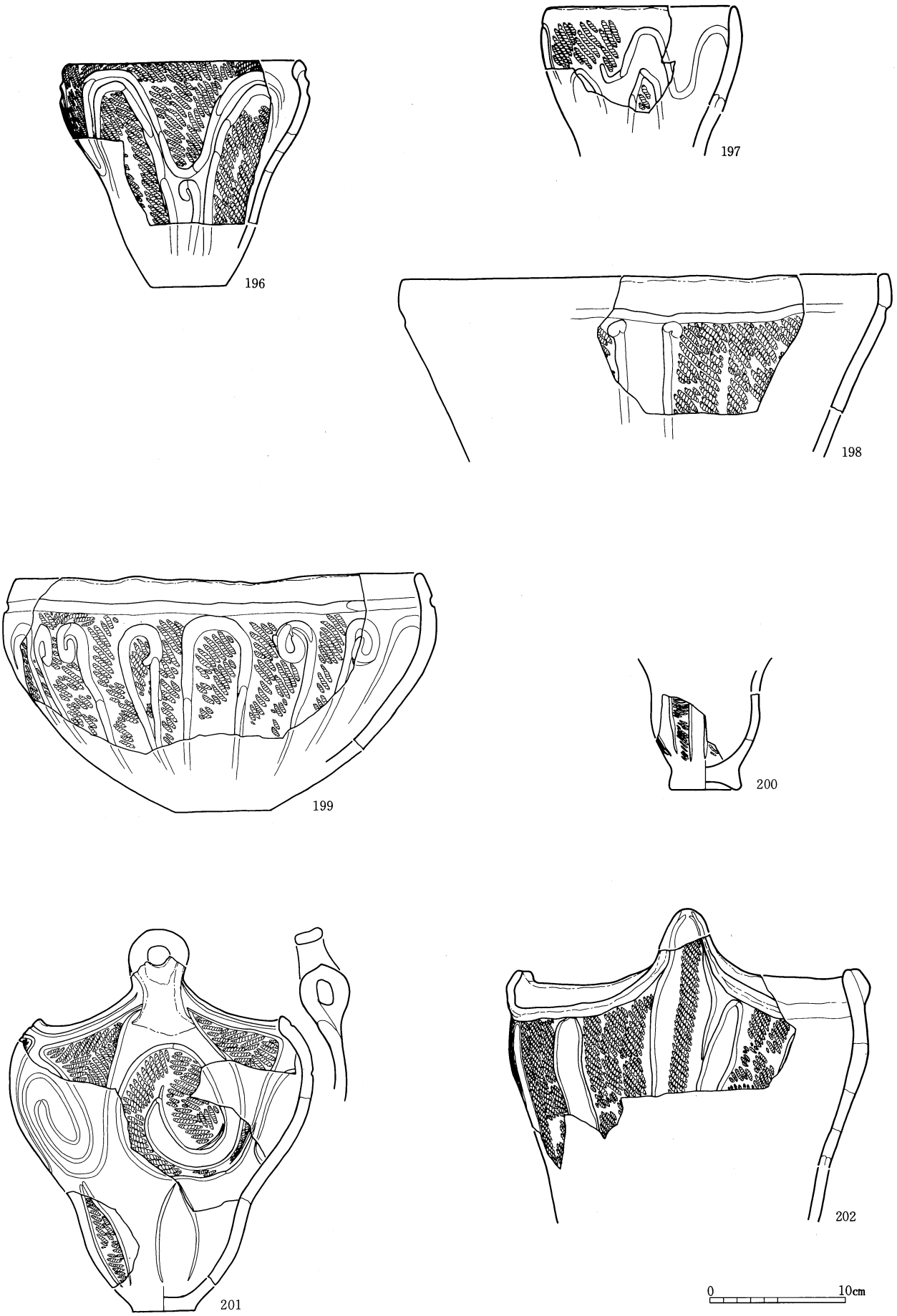
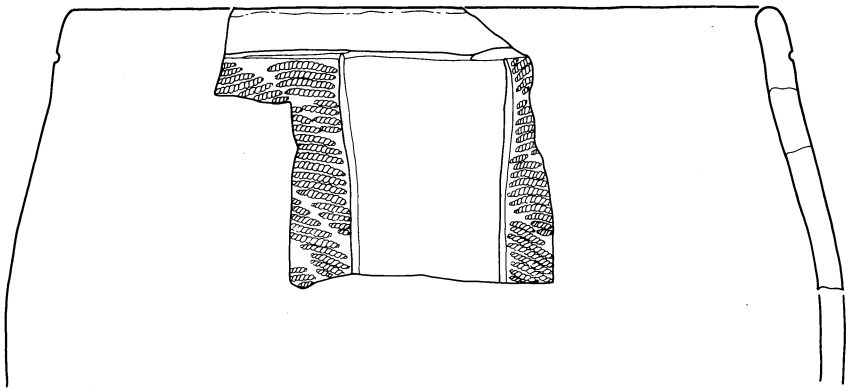
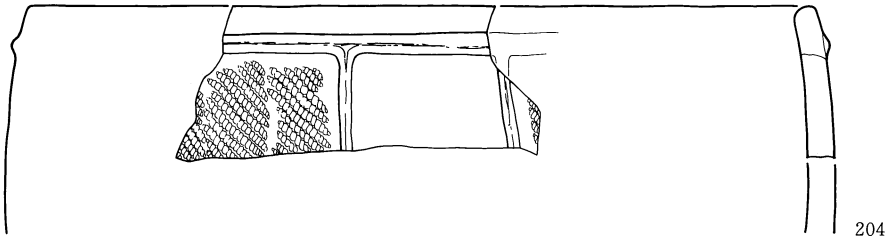
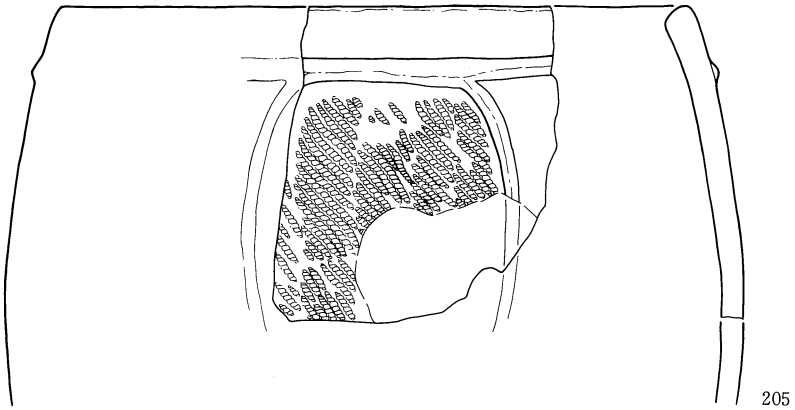
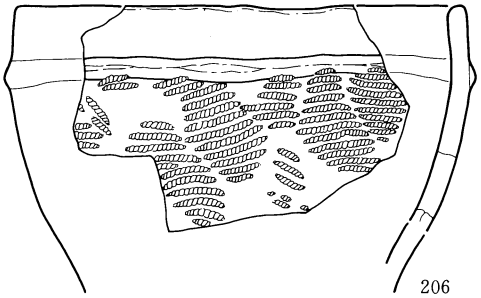


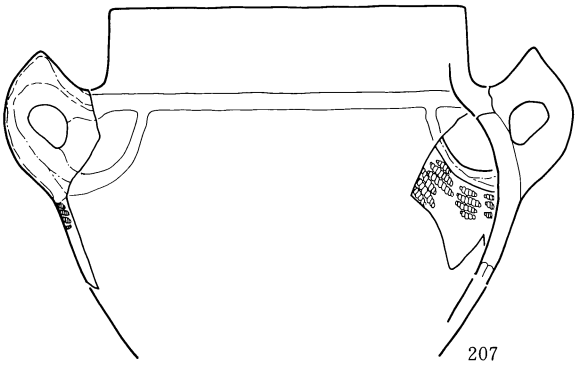
図58　遺構外出土土器（4）











0　10cm

図59　遺構外出土土器（５）

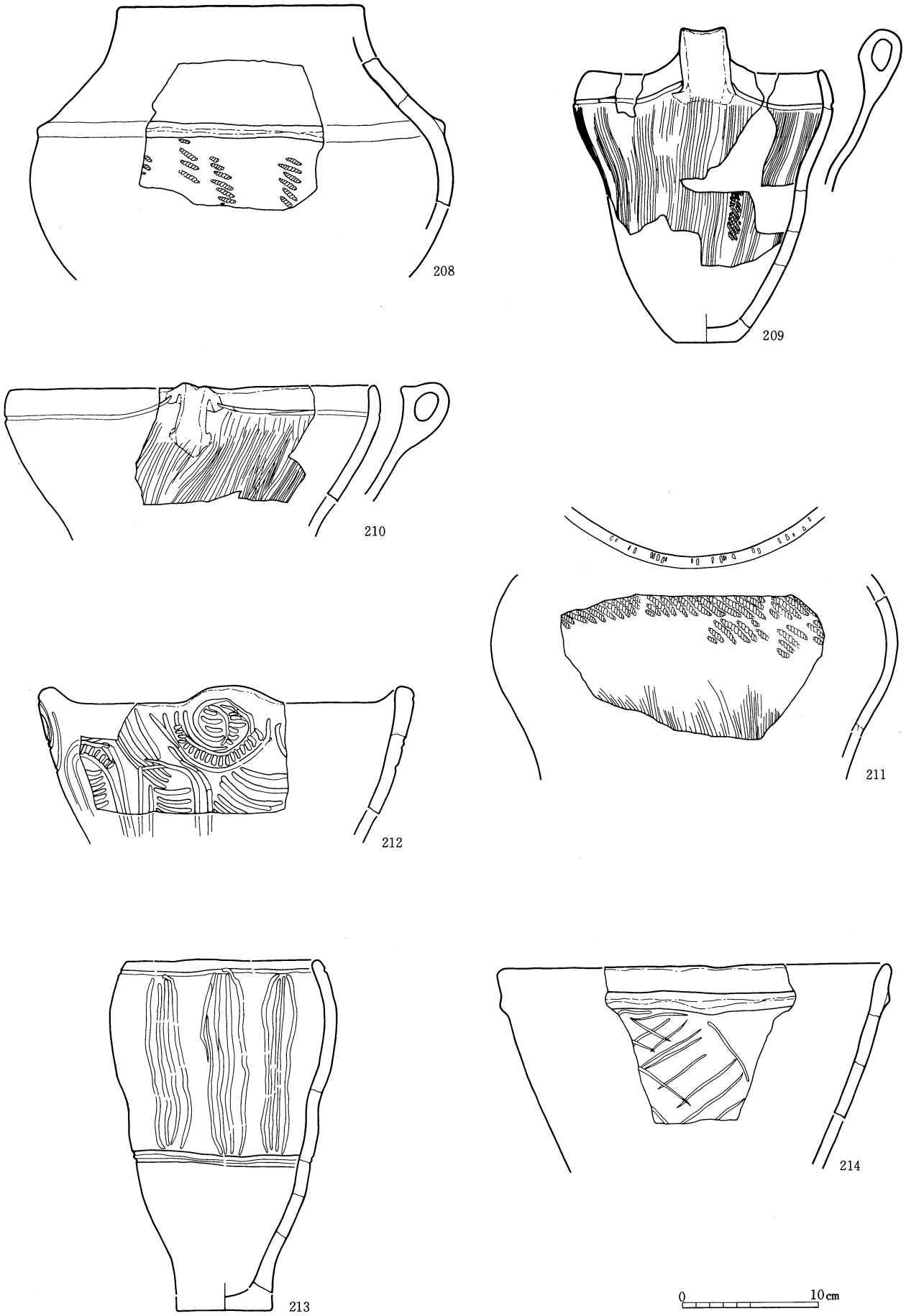


図60　遺構外出土土器（6）

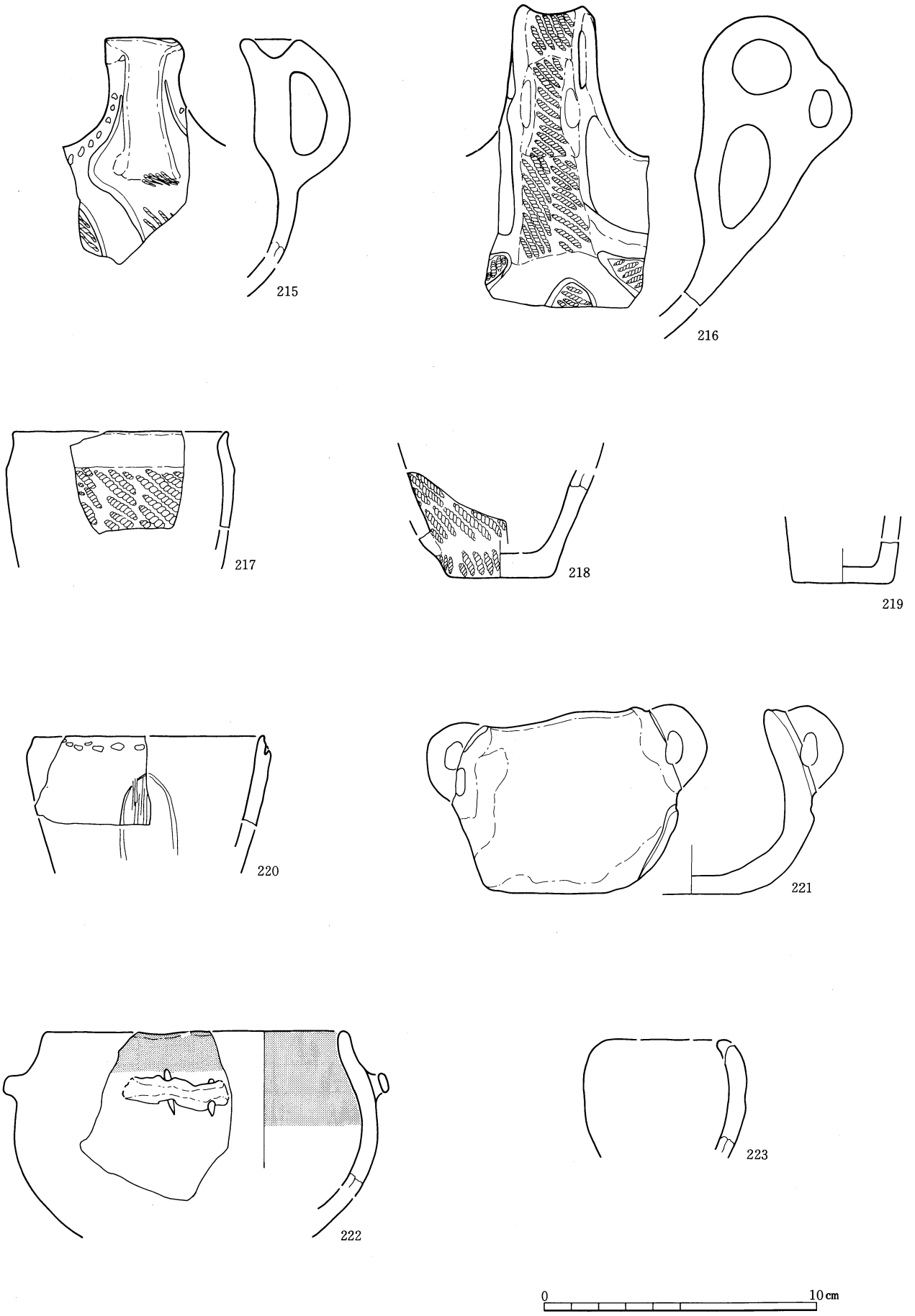


図61　遺構外出土土器（7）

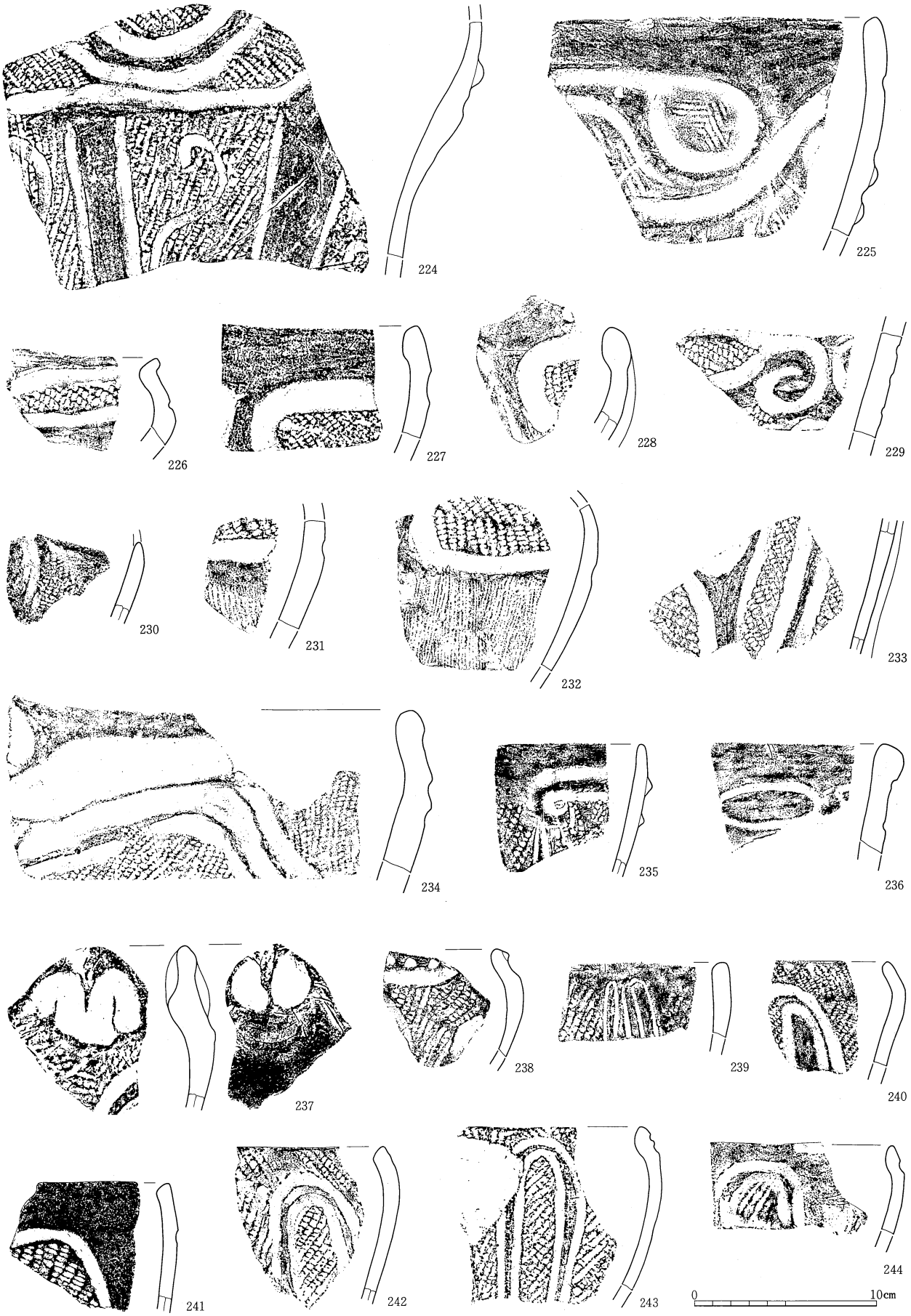


図62　遺構外出土土器（8）

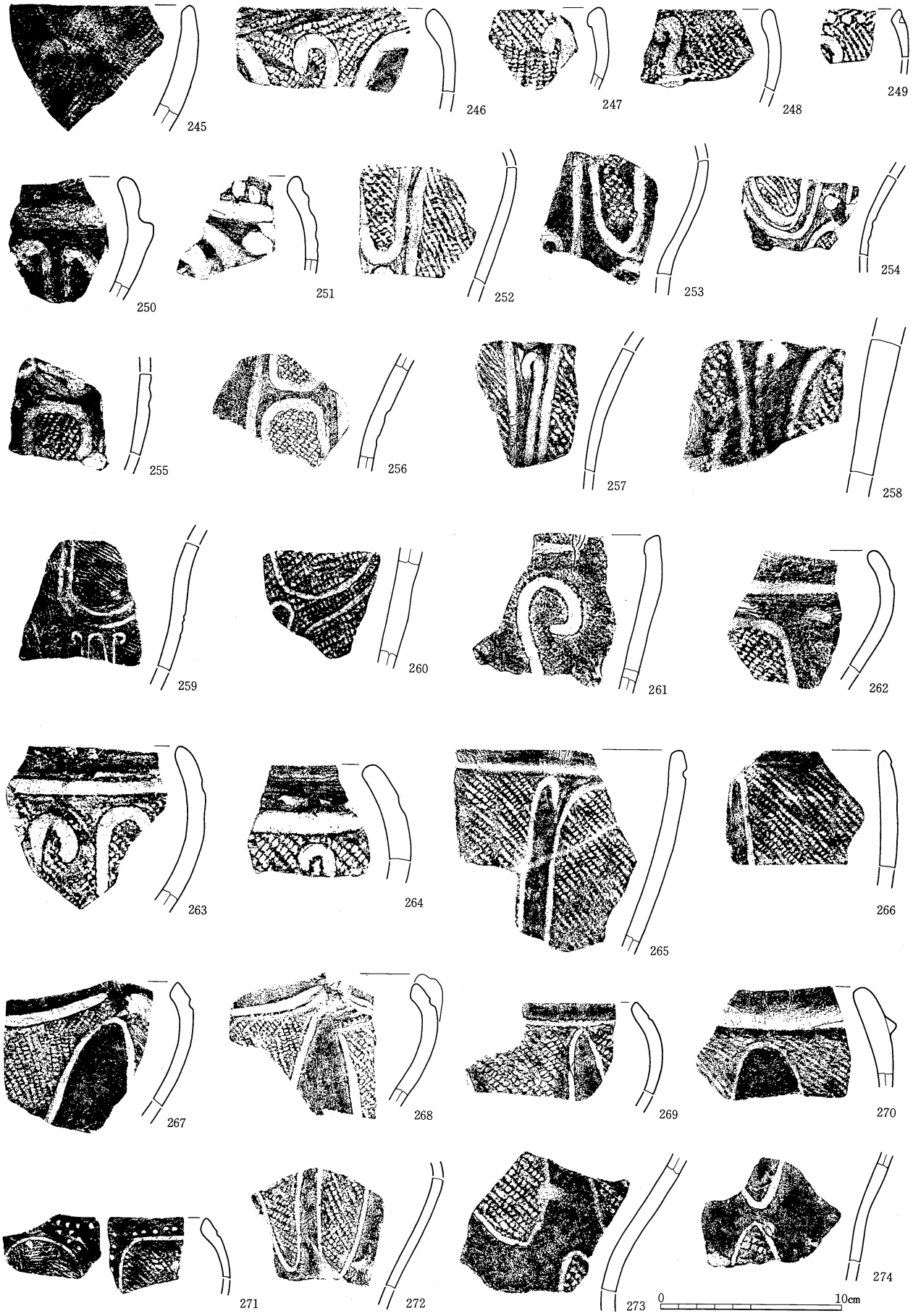


図63　遺構外出土土器（９）

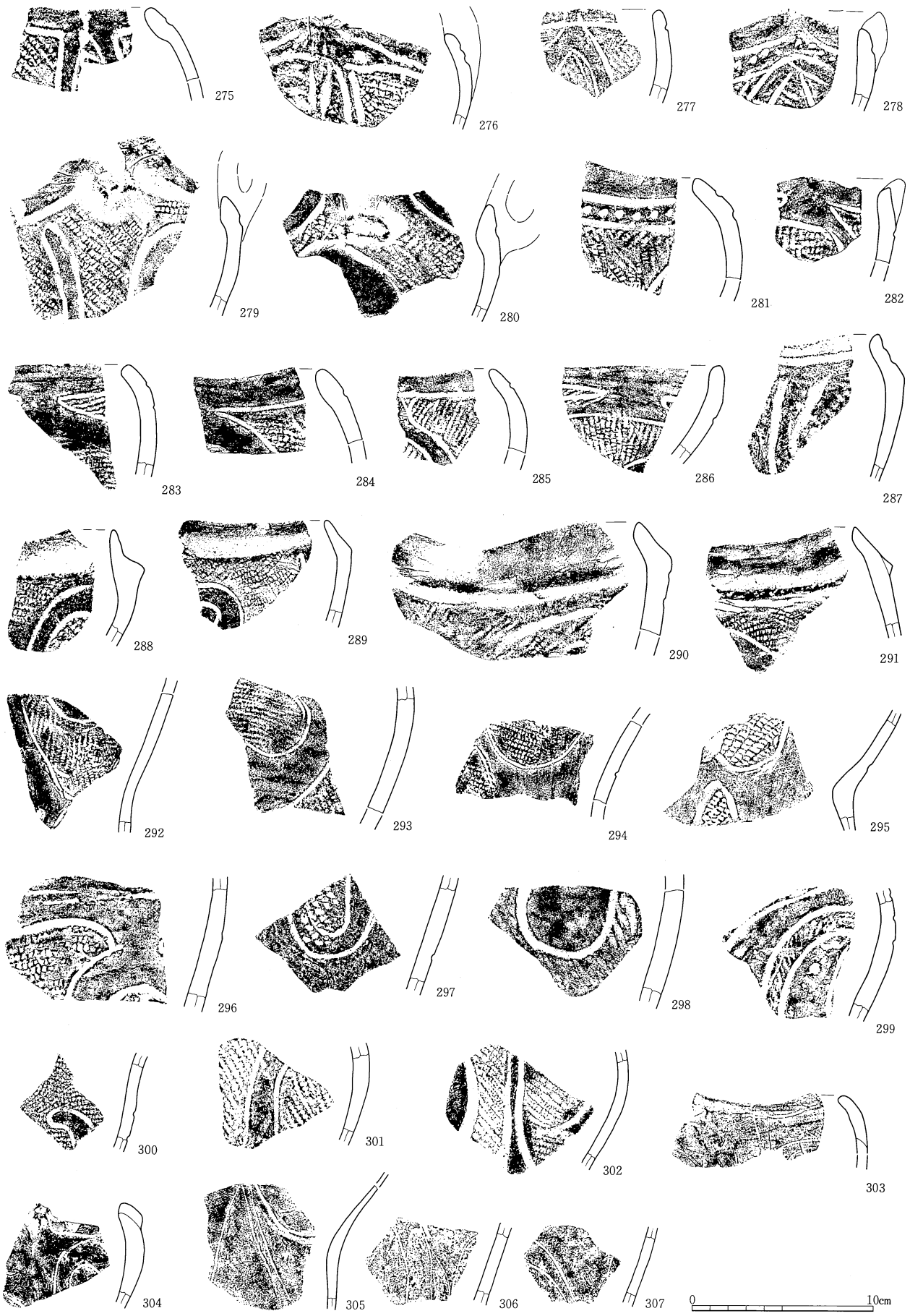


図64　遺構外出土土器（10）

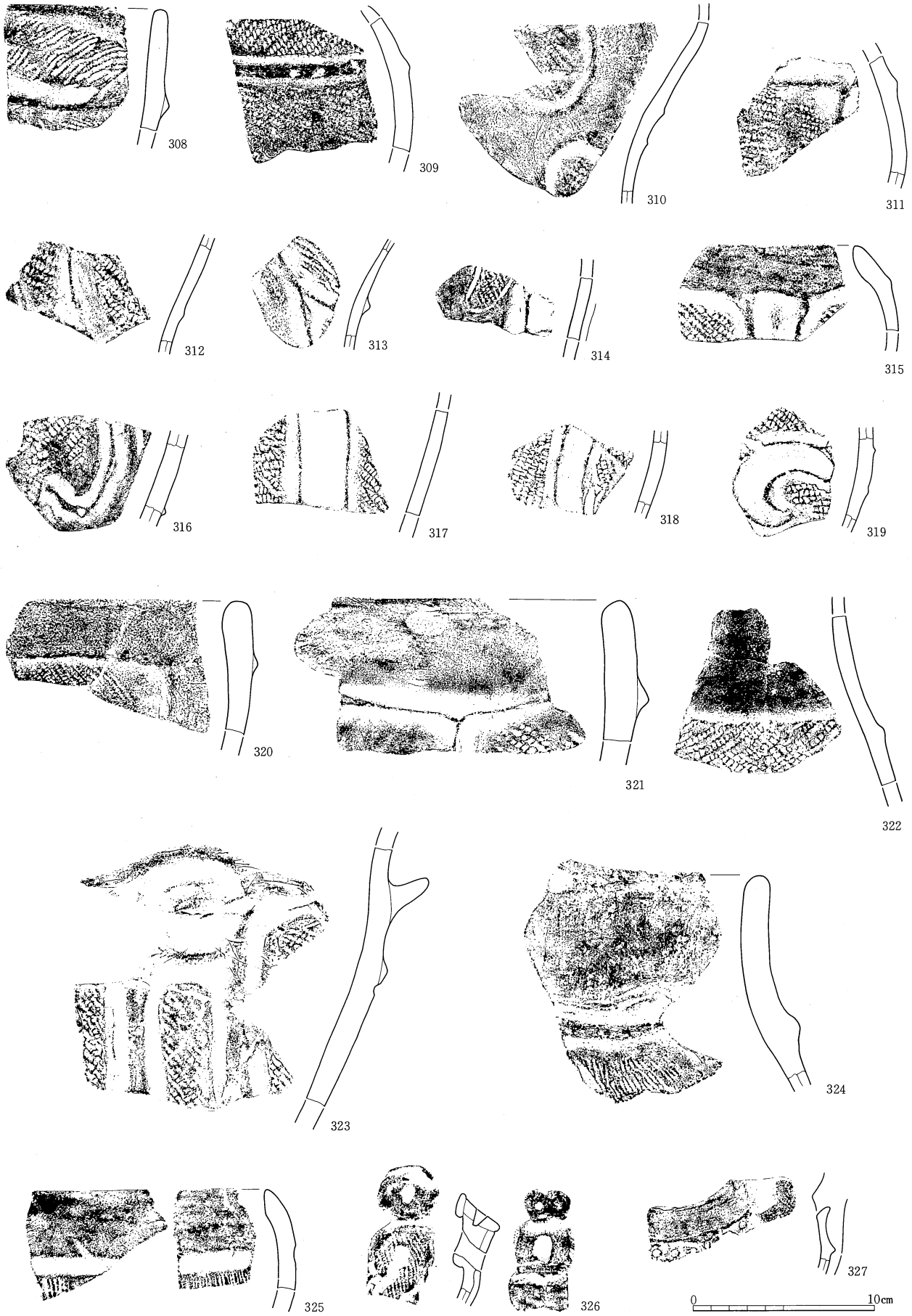


図65　遺構外出土土器（11）

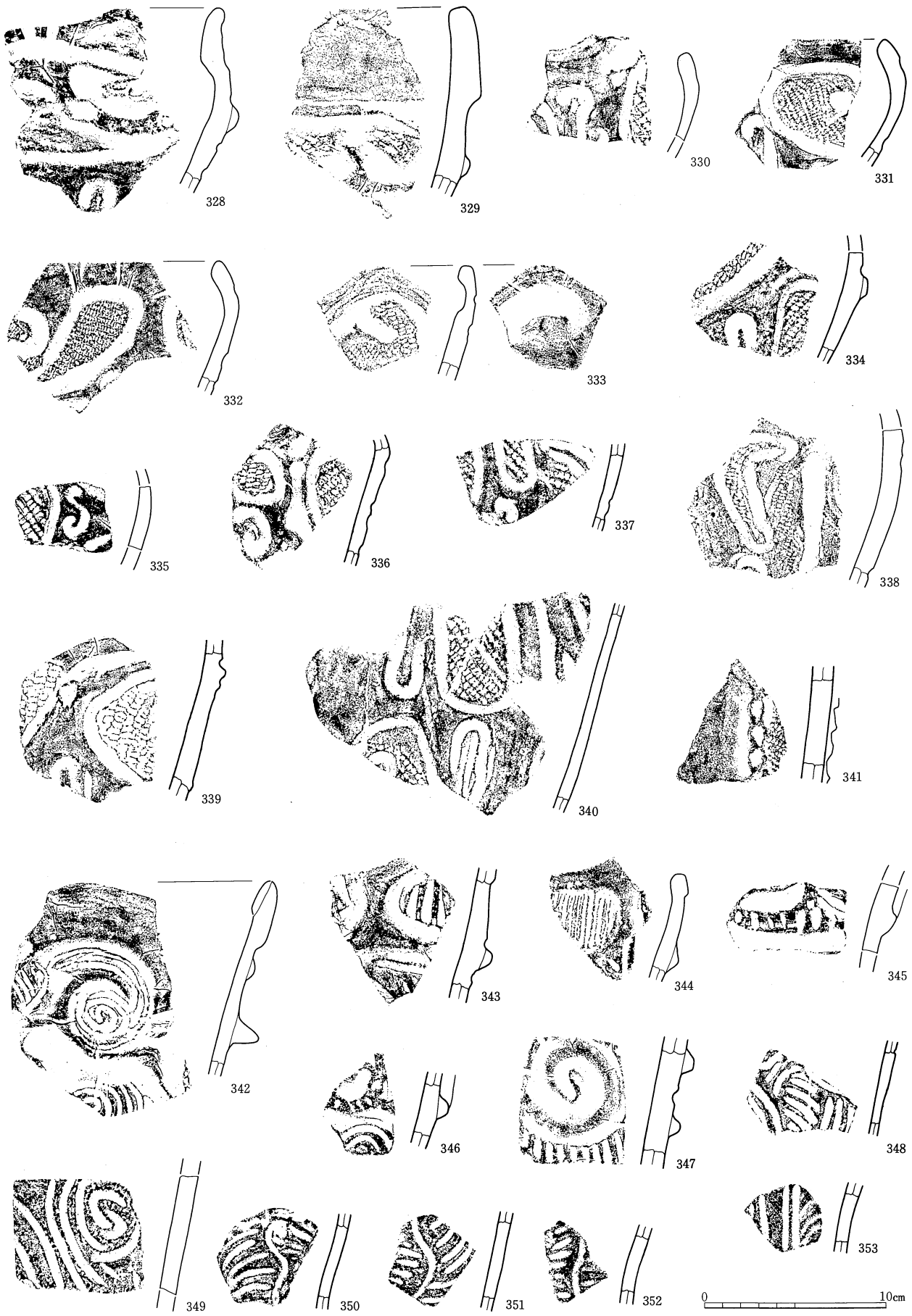


図66　遺構外出土土器（12）

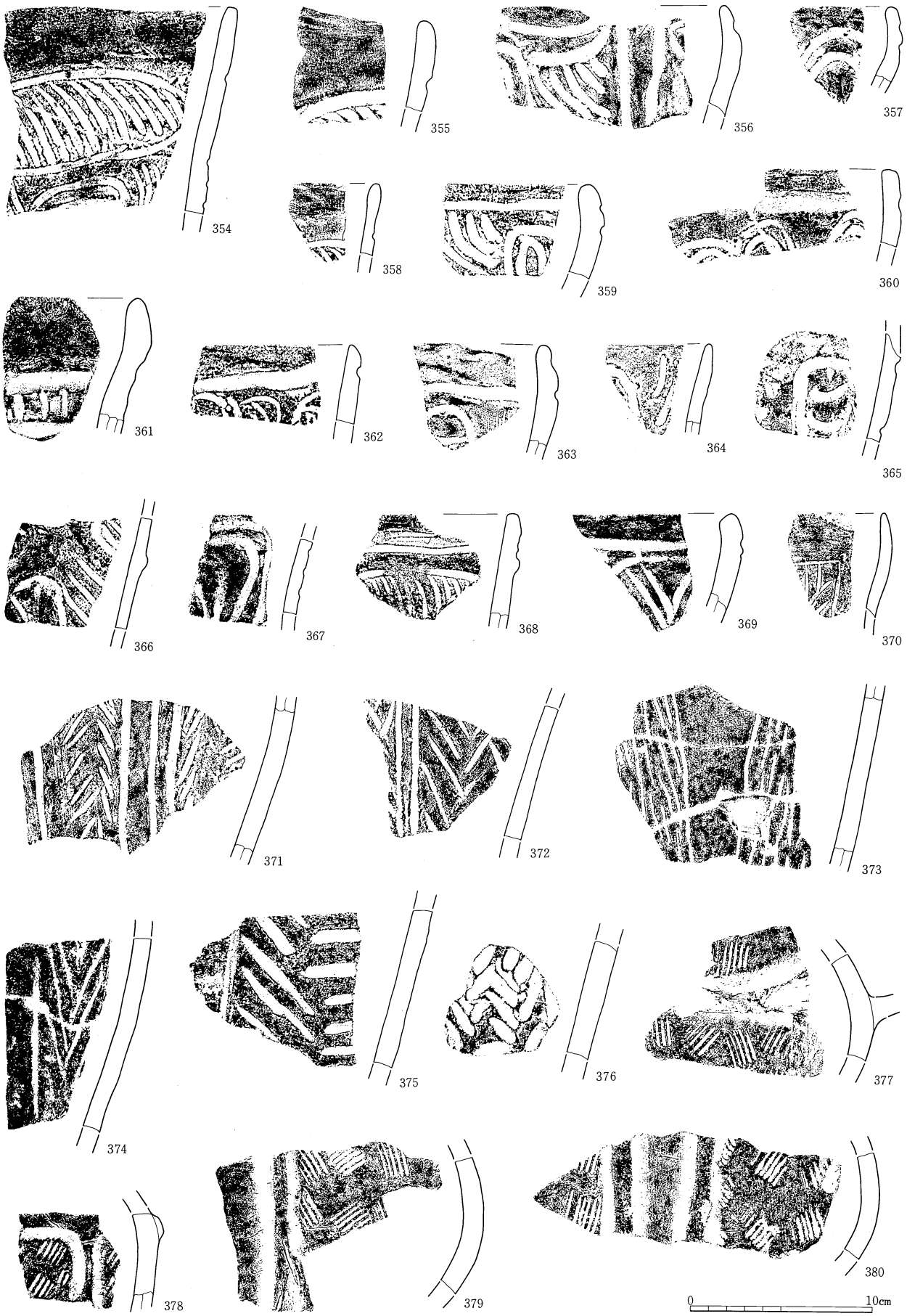


図67　遺構外出土土器（13）

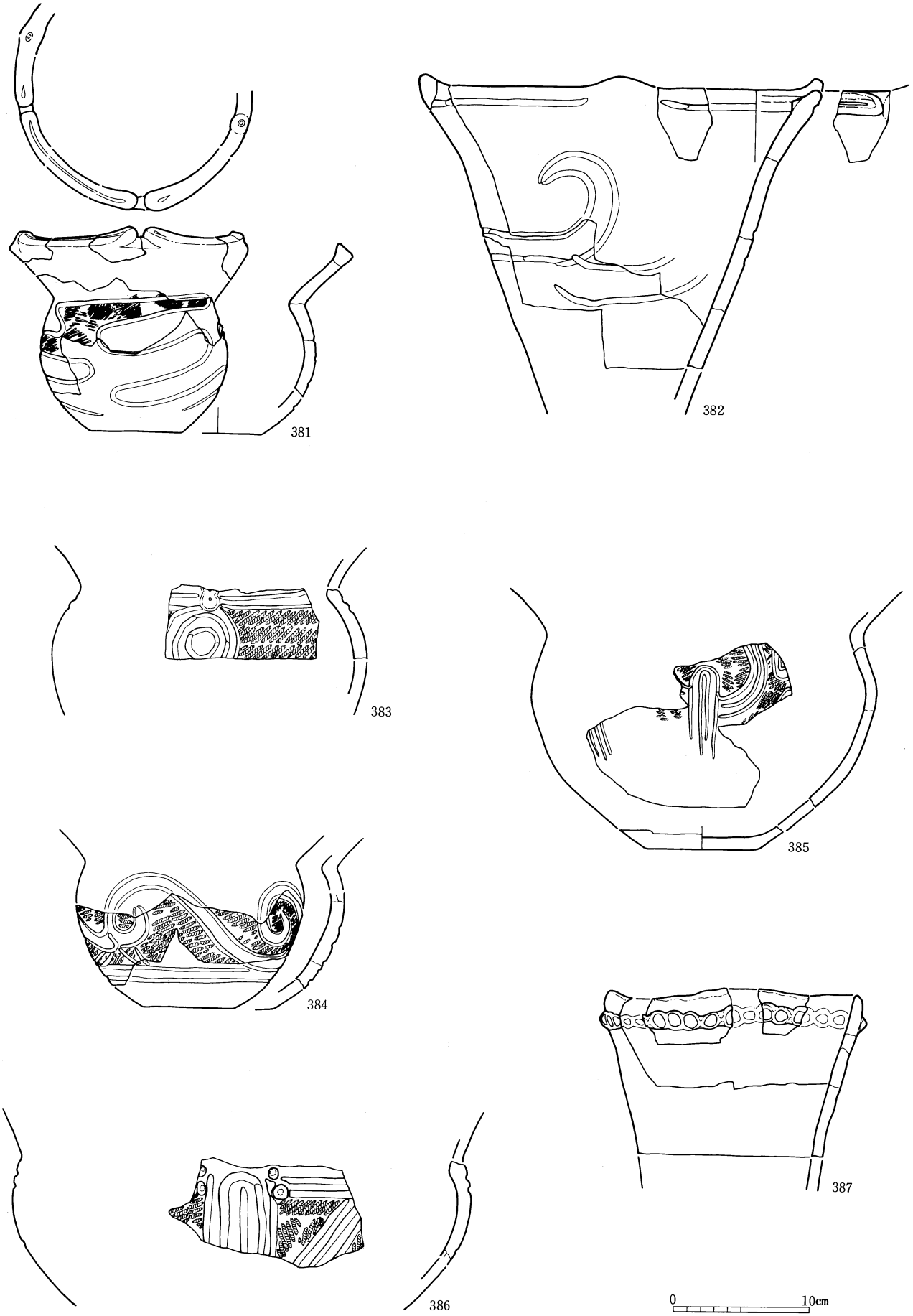


図68　遺構外出土土器（14）

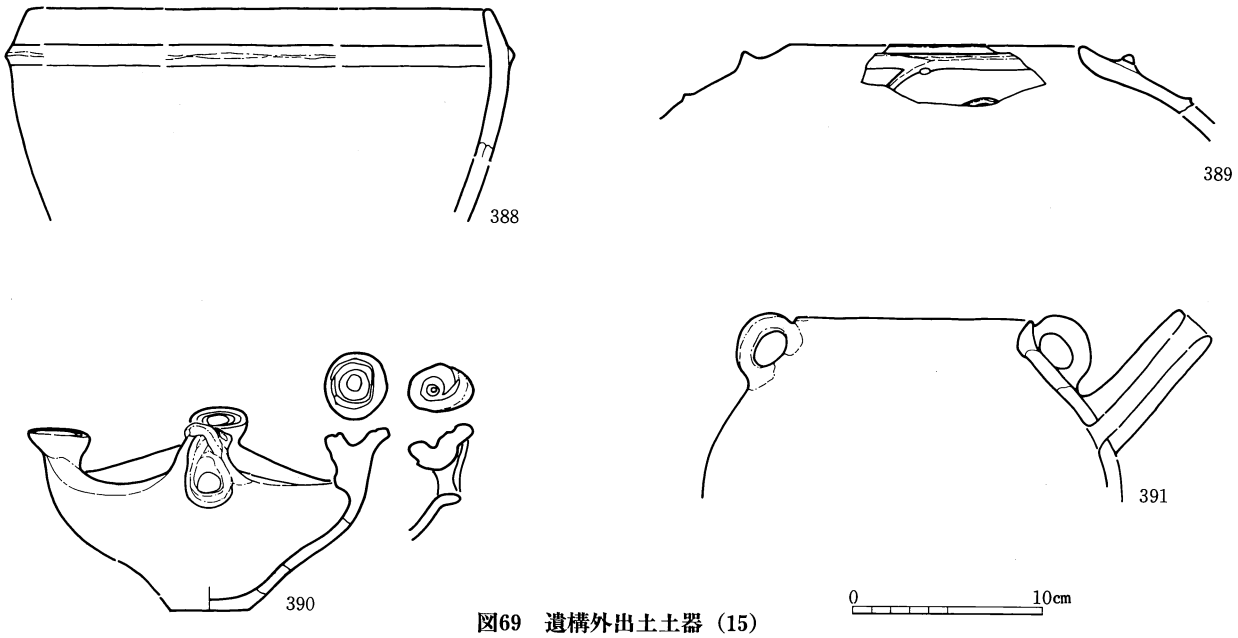


図69　遺構外出土土器（15）

ぐい呑み状を呈し、口径は4 cmほどと推定される。

後期初頭の土器（図68—381，図70—392～403、PL29・36）

出土総数31片・総重量1,290 gの土器が出土した。分布傾向はおおむね中期後葉の土器と一致する。

381は唯一復原できた個体。強くくびれる口縁下を無文帯とし、胴部には大きく蛇行する沈線文が施される。沈線文間には縄文が充塡施文されるが、該期に特徴的な帯状構成にはなっていない。口唇部には突起が付加されるとともに、沈線文や刺突文も組み合わされる。口径推定7.5 cm、器高推定7.5 cmをはかる。392～402は平行沈線文間に縄文を充塡施文するもの。392は中期後葉、加曽利E系土器の要素をもつようにもみえる。平行する沈線は深く明瞭で、本群土器に特徴的である。また、397～399は「J」字状や「スペード」状の端部モチーフを伴う。403は平行沈線文間に刺突文が加えられる。

後期前葉の土器（図68・69—382～391、図70・71—404～459、PL29・30・36）

出土総数266片・総重量9,220 gの土器が出土した。中期後葉の遺構分布範囲に重なる分布を示すが、若干南側に偏る傾向をもつ。とりわけ、堀之内II式に比定される439～450などでは、遺物集中箇所としたIIR—D・E12・13グリッドの周辺に集中していた。

382・404～410は沈線文のみによって文様が構成されるもの。382と404～407は前段階の土器からの系統をひく一群であり、382～404は特に古相を呈す。重区画文状のモチーフが施される410は、新しい要素をもつ土器と考えられる。

383～386・411～424は沈線文とともに縄文が施文されるもの。411は唯一出土した深鉢形土器。薄手・堅緻なつくりで、重層する沈線文間の一部に縄文が充塡施文される。ほかは甕形土器。球胴状の体部に大きく開く口縁部がつく。頸部に沈線文や紐線文をめぐらし、体部には2条ないし多条の沈線により弧状や渦巻状のモチーフが描かれる。空白部や沈線間の一部に縄文が充塡され、磨消縄文を思わせる施文効果をもつ個体も少なくない。425・426は隆帯文が施される。427～438は種々の口縁部破片。

439～450は幅の狭い縄文帯によって幾何学状の文様が構成される一群。439～445は深鉢形土器。口縁下に「8」の字状の貼り付けを伴う紐線文がめぐる。446～450は甕形土器。446と447の内面口縁下に沈線が

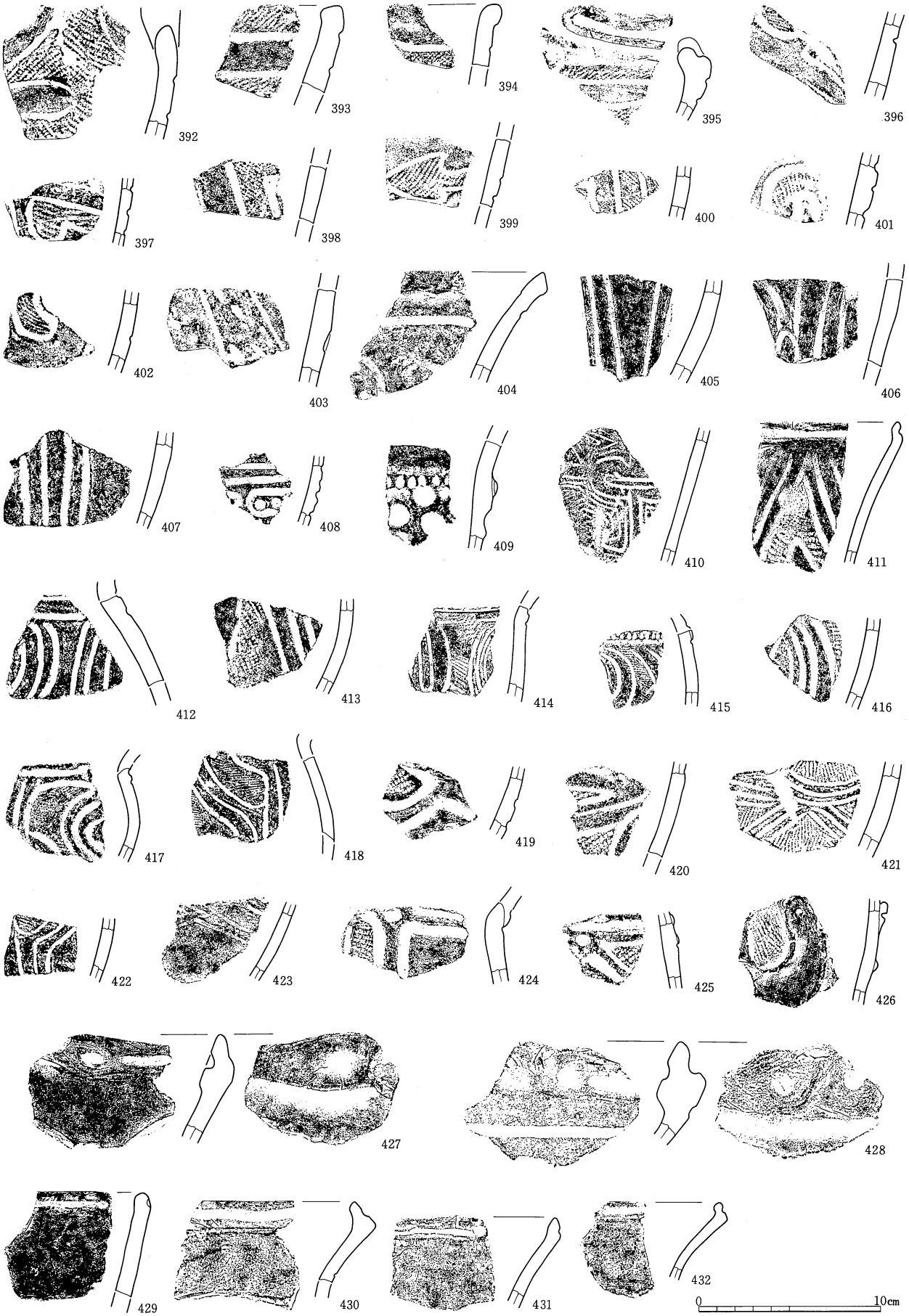


図70　遺構外出土土器（16）

図71　遺構外出土土器（17）

めぐらされる。

451～456は粗製の深鉢形土器。口縁下に指頭状の圧痕が加えられた紐帯文をめぐらすのみであるが、内外面ともに比較的ていねいな器面調整が行われる。胎土に砂粒などを含み、おもに赤褐色を呈する。

457～459は時間的な併行関係に問題を残すものの、系統的に異質な土器をまとめた。457は縄文を地文とし、細い紐線文が付けられる。458・459は器面全体に特徴的な刺突文が施され、後者には曲線的な隆線文も認められる。458・459は新潟県下などに分布する三十稲場式に比定されよう。

後期中葉の土器（図71―460）

図示した１点が出土したのみである。460は「く」の字状に折れる胴部に平行沈線をめぐらし、その沈線間を羽状の短沈線文で埋める。薄手・堅緻なつくりの土器であり、器面はていねいな調整により平滑に仕上げてある。

2）土製品（図72、PL31）

管状の土製品１点と土製円板９点が出土した。分布に際立った偏在性は認められず、遺構外出土土器の分布傾向と同様なあり方を呈す。遺構数ならびに遺構外出土土器の量を考えれば、土製品の出土総数はきわめて少ない。土偶の出土が皆無であったことなど、時期的・地域的差異として今後の検討が必要となろう。

１は管状の土製品。一端を欠損する。先端部付近に沈線をめぐらし、内部には径1.5～２mmほどの穴が貫通する。土製円板は９点中７点を図示する。大きさや加工状態などは一覧表に示すとおりであるが、おおむね円形を呈し、径３～４cmのものが多い。すべて中期後葉の土器片を用いている。

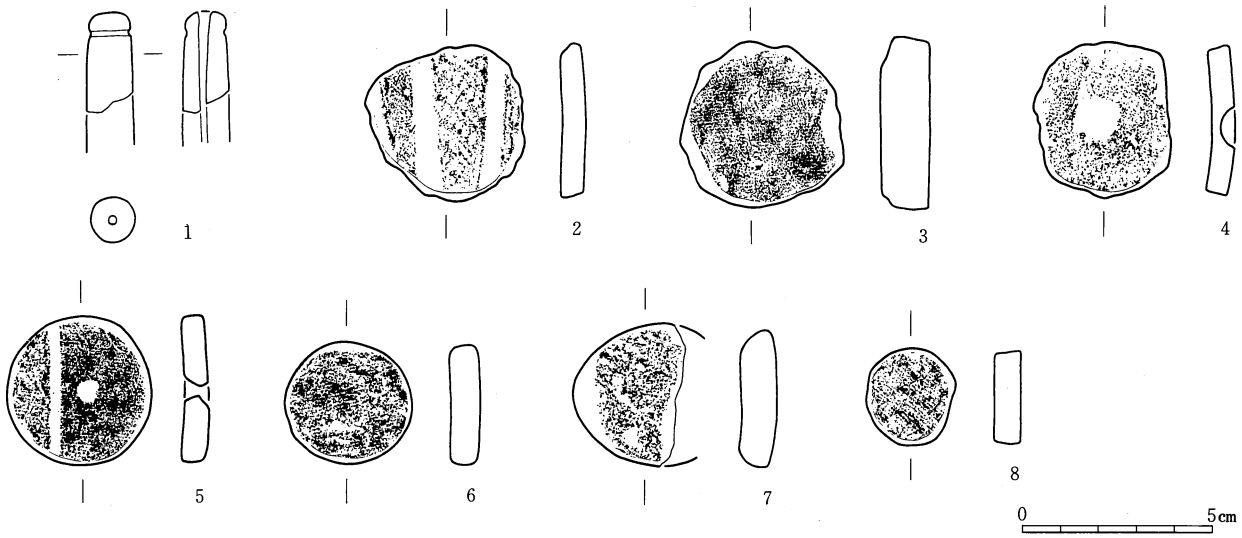


図72　土製品

表４　土製品一覧　〔単位はcm・g，（　）は現存値〕

番号	出土区	利用部位	長さ	幅	厚さ	重量	周縁加工	形態	時期	備考
1	IIR－N08・IV層		(2.6)	(1.2)		(3.4)		筒状	中期後葉？	穿孔、半欠品
2	IVR－O08・IV層	胴部	4.1	4.1	0.7	13.4	打割	不整円形	中期後葉	
3	IIR－G13・IV層	胴部	4.3	4.2	1.3	28.6	打割	不整円形	中期後葉	
4	IIR－F14・III層	胴部	4.0	3.6	0.6	12.2	打割	不整楕円形	中期後葉	穿孔途中？
5	IIM－I19・IV層	胴部	3.9	3.8	0.7	13.6	磨耗	円形	中期後葉	中心を穿孔
6	IIR－R05・IV層	胴部	3.3	3.4	0.8	9.3	磨耗	円形	中期後葉	
7	IIR－P13・IV層	胴部	3.7	2.8	1.1	(11.6)	磨耗	円形？	中期後葉	半欠品、推定重量20g
8	IIR－K09・IV層	胴部	2.7	2.4	0.7	4.4	打割、一部磨耗	不整楕円形	中期後葉	
9	IIR－C13・IV層	底部	(6.3)	(2.8)	1.8	(27.5)	磨耗	円形？	中期後葉	半欠品、推定重量60g
10	IIR－J11・IV層	胴部	(3.0)	4.5	0.9	(12.9)	打割後磨耗	不整円形？	中期後葉	半欠品、推定重量25g

3）石器（図73～93、PL42～48）

吹付遺跡Ｉ区で検出された石器・石片類は、図73に示した。このうち分類可能な石器は総数556点である。この数量は出土状況により４者に大別できる。縄文時代中期後葉、後期前葉土器の包含層となるIII～IV層（一部V層含む）から出土したもの。この包含層より上位の耕作による攪乱を受けているＩ～II層から出土したもの。出土層位不明なもの。遺構内出土のもの。以上である。図73にみられるように、III～IV層から出

土したもの以外は、遺構内出土のものを除いて、全体の５％にも満たないため、全体を一括して扱うこととした。また、石器の点数については完形品・欠損品をそれぞれ一点として計算してある。このため、たとえば打製石斧の部分小片についてもそれが再加工による可能性もあるが点数に入っている。さらに接合資料については接合されたものについて１点として扱った。

石片類については、一部写真掲載した。観察表については、まったくの不備である点をあらかじめお詫びしておく。

556点の石器は、一般に考えられているおおまかな用途に区分すれば、狩猟具（石鏃・石槍など）、樹木の伐採などのほか、さまざまな使われ方をされた加工具（磨製石斧・スクレイパー・石錐・敲石など）、植物質食料の生産にかかわる採集・調理具（打製石斧・磨製類・石皿など）、精神的な用途が考えられるもの（丸石・石棒・多孔石など）などとなろう。これらの石器組成を、Ⅲ～Ⅳ層出土のものを対象に図73に示した。図は一見して打製石斧の出土量の多さと、石鏃など狩猟具の少なさを示し、縄文時代中期における中部・関東地方にみられると同様の石器組成を表わしているといえる。

各器種に利用された石材については、図73に示した。図から明らかなように各器種によって一定の質の石材が選択されていることが知れる。このうち、安山岩は石器の素材としての視点から３者に分かれる。

安山岩Ａ：円・角礫を呈する安山岩、安山岩Ｂ：板状節理の安山岩片（鉄平石）、安山岩Ｃ：玄武岩に近似する緻密な安山岩である。なお、本文中の記述においては便宜的にこの３者を使用した部分もある。

各石材については、黒曜石以外は、吹付遺跡の位置する香坂川流域の河岸、付近の露頭、土中から充分得られるもので、輝緑岩についても、上信越自動車道群馬県境の八風山トンネル内で存在が確認できていることから、そう遠くない所からの採取であろう。とくに安山岩Ｂ・Ｃは八風山の山崖で露頭が確認でき、香坂川では円礫の安山岩が実際に得られている。繰り返しになるが、石材の選択状況は、素材としての石のもつ物理的性質を考慮して、必要度に応じていることが認められる。

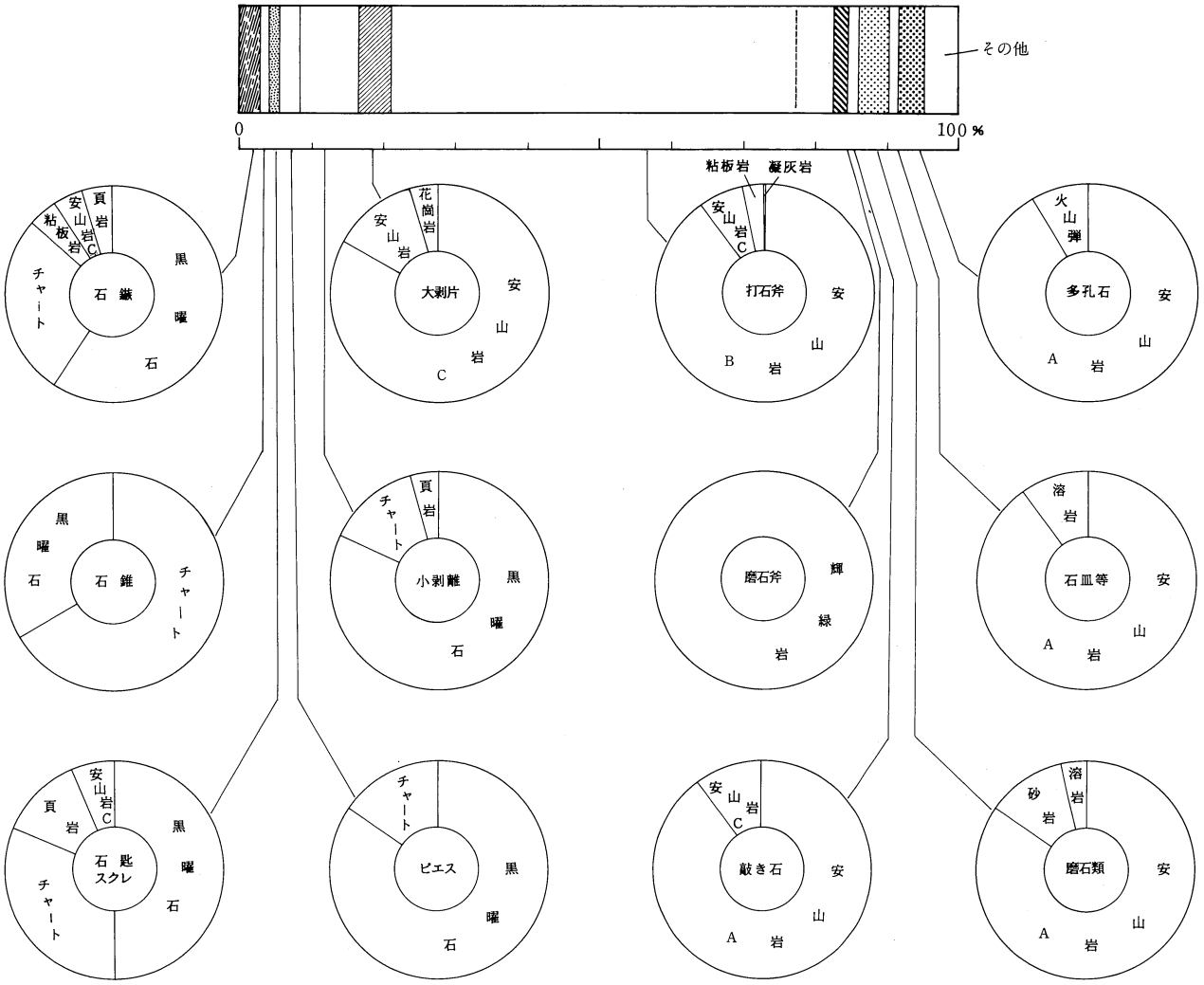
分布状況については別項（５まとめ）で述べるが、概観としてⅡＲグリッドがその分布域にほぼあてはまる。もちろんこれらがすべて同時期に廃棄・遺棄されたものでもなく、住居址・土坑などの諸遺構も認められることから、集落内における空間利用のあり方の時間的変遷の中で全石器類が扱われねばならないであろう。

この他、原石・石核・石片については、図73にみられるように、黒曜石・チャートを利用した石器類の全体量が少ないことに比例して、たとえば黒曜石は総数56点が検出されたにすぎず、遺構内出土のものは極めて少ない。一方で、打製石斧の素材となる安山岩Ｂは20×10 cmほどの石片から５×５ cmほどの小石片まで含め出土量は多く、安山岩Ｃについても15×15 cmの岩塊から、２ cmほどの石片を含め出土量は多かった。これら黒曜石・安山岩の分布状況は、石器分布のあり方と同様にⅡＲグリッドをその中心範囲としている。

以下、冒頭（第１章３節）の石器分類に従い、形態・製作技法などから細分を試み、各石器別に記述を行うこととしたい。なお、記述内容は遺構外出土のものを中心とするが、同時に遺構内出土のものについても包括することにした。また、石鏃、石錐、石匙、スクレイパー、ピエス・エスキーユ、小剝離痕を有する剝片については、細分に際し、栗毛坂遺跡群（第３章18節）に基本的に従った。

石槍（図12―７、74―125・126、PL39・42）

石槍は、チャート製（７）、粘板岩製（125）、安山岩Ｃ製（126）である。機能的に石鏃と同様であり、組成的にもその占める位置は低い。しかしながら、石鏃以外にこのような狩猟具が存在する点は注目すべき内容を持っている。形状は、長短はあるものの、先端を突出させた角形状の平面形を呈す。７・125は小形・肉



器種 / 数量	石鏃	石錐	石匙	スクレ	ピエス	小剥離	打石斧	大剥片	磨石斧	磨石類	石皿等	多孔石	石製品	その他	黒曜石 点／g	チャート類 (g)	安山岩C (g)
1号住居址								1									216
2号住居址						1			1								51
3号住居址	1						3										
4号住居址	1	2			3	4	9	1	1	2	1		7	1			2369
5号住居址		1		2		4	51	1		2			3				3196
6号住居址	1						2					1	1				355
7号住居址																	15
8号住居址												2					297
9号住居址							5			2	1	2	1				1401
10号住居址										1		1					
11号住居址	1			1	1	1	3	2		1					18／7		655
12号住居址		1		2		2	3	3									116
他の遺構						1	4	1	1		1	2	1		1／11		616
遺構外Ⅰ～Ⅱ	3		1			1	19	3	1				1				
遺構外Ⅲ～Ⅴ	11	4	1	6	9	31	248	21	9	13		5	12	4	56／204	914	26600
遺構外不明	4		1			3	66	9		4	7	10	10				
総計 (個)	21	8	3	11	13	48	413	42	13	25	10	23	36	5	57／215	914	35887

図73　石器組成・石材組成

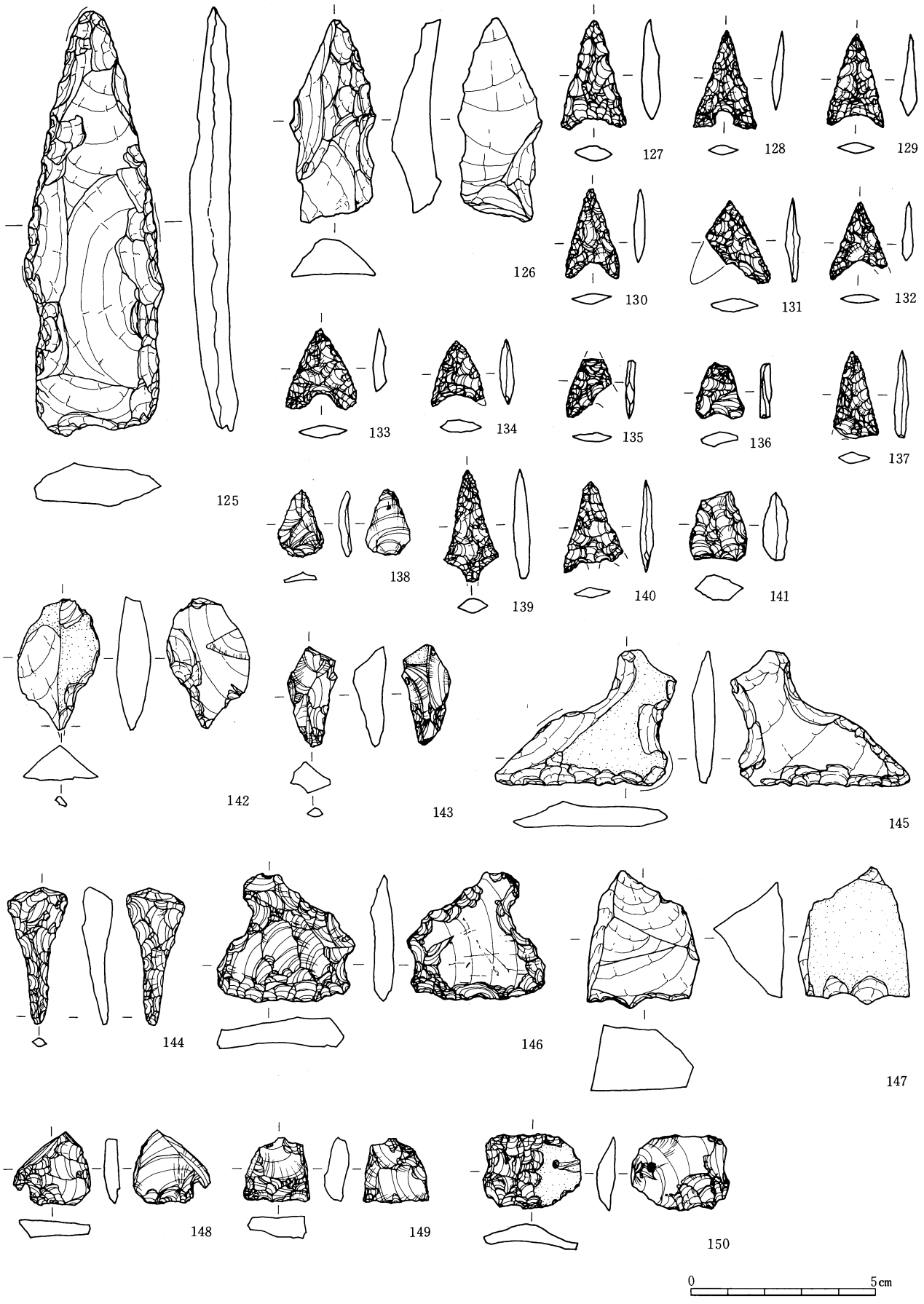


図74　遺構外出土石器（１）

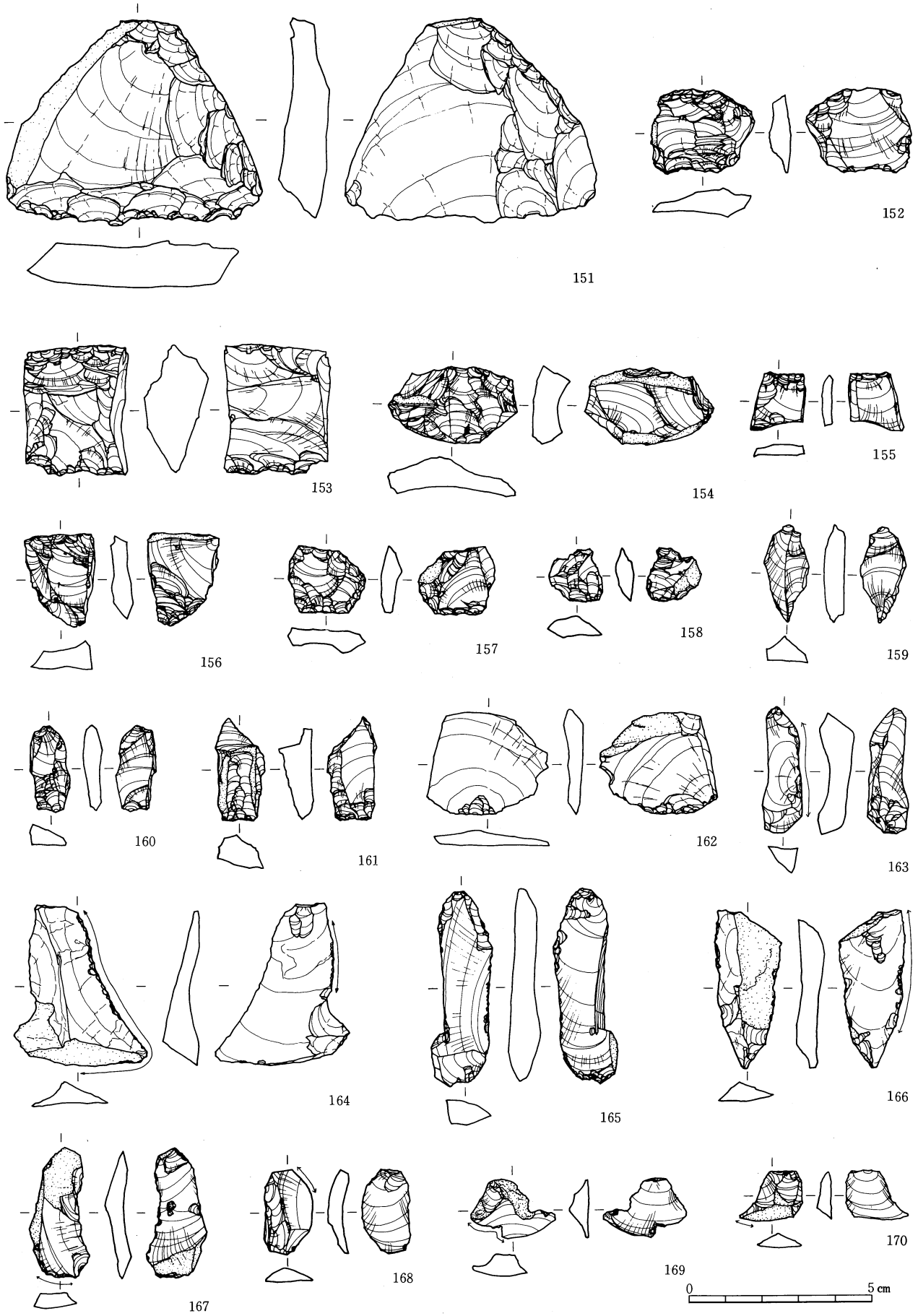


図75　遺構外出土石器（2）

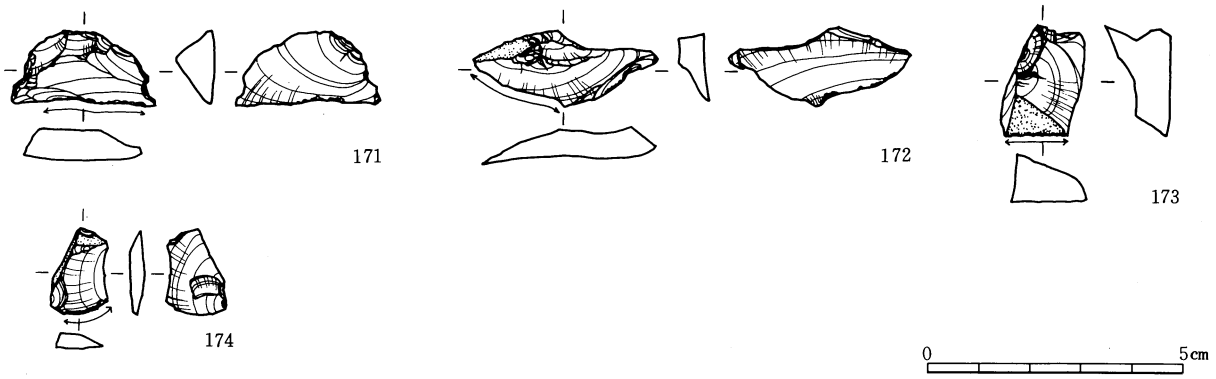


図76　遺構外出土石器（3）

厚で、先端部を除いて側縁からの調整加工はほとんど見られない。125は大形・薄手で先端から側縁にかけて連続した調整加工が両面に施されている。先端部に使用痕としての、側縁部に装着痕としての稜磨滅(耗)が観察される。

石鏃（図7－3、22—73、74—127～141、PL39・42）

石鏃（127～141）は、チャート製（73・127・128・129・134・133）のほか、黒曜石製である。総点数18点と少ない割りに、形状はバラエティーに富む。基部に視点をおき、分類した。

Ⅰ類：無茎凹基（3・127～136）

Ⅱ類：無茎平基（137）

Ⅲ類：無茎円基（73・138）

Ⅳ類：有茎（139・140）

Ⅰ類は、長幅比からさらに分類可能であろうが、全体量も少なく、きりがないので、バラエティーに富むだけとしておく。136はねじれた剝片を素材としているためか、縁辺に簡便な調整加工を施したものである。Ⅱ類は一点だけ認められ、Ⅰ類と比べ、長幅比が大きいものである。Ⅲ類は、いずれも薄手の剝片を素材として、基部に剝片の打点部をあて、刃部・縁辺に簡便な調整加工を施す。このため、側面観は反る。なお、剝片をこれ以上調整してゆくことは不可能であることから、完形品と考えられる。Ⅳ類はいずれも基部欠損品で、茎長は不明である。そのほか、刃部の作出が完成しない厚手の未成品(141)が得られている。欠損品の率は全体で5割に近く、基部（脚部）の欠損が主体をしめる。完形品には再加工によるものも含まれるだろうが、使用可能なものの廃棄は、各報告書で認められ、指摘されるように、本遺跡でも認められる。

石錐（図12－8・9、20—39、36—103、74—142～144、PL39・42）

石錐（142・143）は、黒曜石製（9・39・143）・チャート製（8・142・144）・安山岩C製（103）である。つまみ部・錐部ともにていねいな調整加工が施されるもの（8・144）のほか、石片の端部を縁辺からの調整加工により錐部を作出したものが主体を占める。このうち9は、薄手の剝片を使用したものである。使用痕は、稜に若干の磨滅が認められる程度であった。

石匙（図74—145～146、PL42）

石匙（145・146）は、黒曜石製（146）・チャート製（145）である。145は抉れ部から下の側縁部に、稜磨滅が観察され、着装を想起させる。146は主要剝離面が残り、バルブの発達した部分を欠落させるように端部を

調整加工し、抉りを作出している。このためつまみ部は、幅広のものとなる。両者ともに対象物を斜めに切り込んでゆく使用法が考えられる点が指摘しうる。この他、2 cmほどの破片がある。

スクレイパー（図36—104・107、74・75—147～151、PL39・42）

小剥離面を有する剥片・大形剥片石器を除いた、調整加工された刃部を有する不定形石器を一括した。スクレイパー（107～151）は、チャート製（104・147）のほかは黒曜石製である。総数8点と少量であったが、刃部調整されずに、スクレイパー的な使用がなされた石片(特に安山岩C石片)が充分に想定されよう。大形剥片石器も含め、不定形石器の一群は、素材の形状を整形し一定の「型」を求めるというよりも機能が充分はたしうる素材を選択し、調整加工を施すといったことが多分にあったと示唆される。出土したもののうち、素材縁辺の性状を利用し、急角度の片面剥離調整を施し、刃部が直状をなすもの（147・149・151）、同様な剥離調整を施すが、刃部が弧状になるもの（104）などが認められる。なお150については、縁辺からの押圧剥離が施され、石鏃の加工途中の可能性も考えうるものがあるがここで扱った。

ピエス・エスキーユ（図12—10・11、75—152～161、PL40・42）

両極打法の特徴を有する石片類を一括した。チャート製(152・153)のほかは、黒曜石製である。このうち、二対以上の複合的な刃部を有するものはみられず、すべて一対の刃部である。形状より、縦長のもの（10・11・159・160）、方形状のもの（152・153・157）、一極の辺が弧状・突出状のもの（154・156・158）などに分類される。また155は上縁辺にツブレが見られ、剥片状の薄手であるが、11も薄手の剥片を利用していることから、欠損品として扱った。161も欠損品である。断面形はレンズ状のもの、台形状のもの、その中間形のものの各形状が認められる。159側面部は、風化度も異なり、いわゆる剥断状ではない。159は上下両端からの応力による、剪断状を呈し、本体より剥落したもの思われる。

小剥離痕を有する剥片（図12—13、36—105、54—121、75・76—162～174、PL39・40・42）

小剥離痕を有する剥片（162～174）はチャート製（13・164・166）のほか、すべて黒曜石製である。形状はバラエティーに富み、素材縁辺のあり方も同様である。また、破片（105・172など）・ネガティブな面で構成される残核状のもの（121・173など）もここでは除いてはいない。小剥離痕の認められる部位の断面形は、薄手の偏平形状（169など）、三角形状（164・166など）、台形状（105・121など）が認められる。なお、図上では表現し得ない微細な剥離痕を持つもの（168～174など）も含め、剥離痕のあり方で2分される。

Ⅰ類：剥離痕が連続し、規則的に並ぶもの41点（105・164・168など）

Ⅱ類：剥離痕が不連続で不揃いに並ぶもの6点（165・166など）

Ⅰ類には、微細な剥離痕を持つものが含まれるものが多いため、点数が多くなった。また、ノッチ状の剥離痕を呈するもの（169）がある。刃こぼれ状を呈するもの（剥離痕が不揃い）を含め、ほとんどが、素材の鋭い縁辺部を刃部（機能部位）として利用したものと考えられる。なお、169は主要剥離面のバルブ部分に調整剥離状の小剥離が認められる点で特異である。

大形剥片石器（図4－1、7－5、37—109・110、54—123、77・78—175～194、PL39・43）

剥片を素材とする打製石器の中で不定形の一群の石器を扱うに際し、黒曜石・チャート製のスクレイパー・小剥離痕を有する剥片に比べ、形状が大振りで、おもに現地で入手可能な安山岩製のものを一括した。剥片の長辺に刃部を有するものがほとんどとはいえ、横刃形（型）石器の概念規定・分類基準が流動的であることも考慮して、今回この用語は避けた。

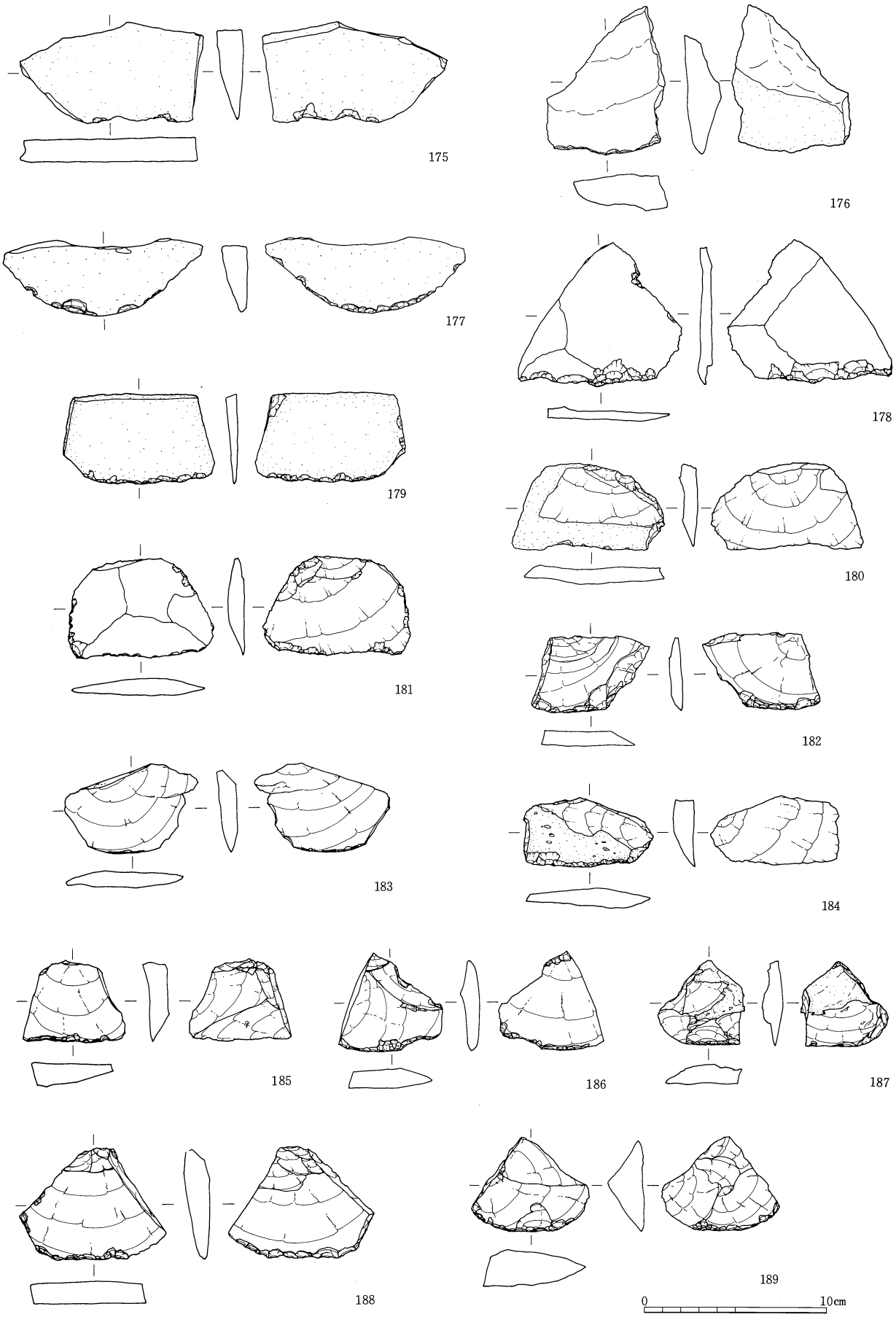


図77　遺構外出土石器（４）

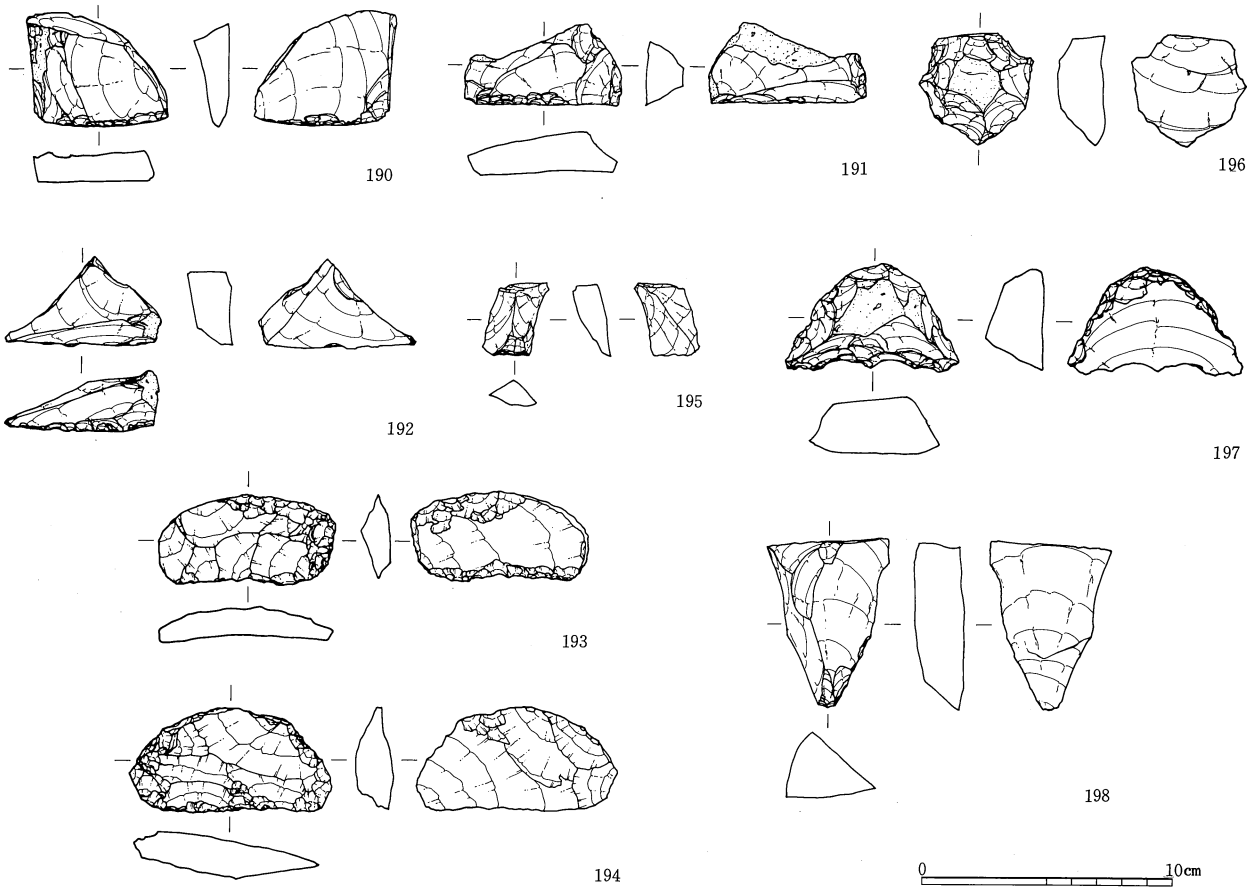


図78　遺構外出土石器（5）

Ⅰ区からは、前述したごとく多量の安山岩の石片類が出土しているが、この中から、剝片の刃部を作出したもの・使用によると思われる連続した小剝離痕が認められるものを抽出した。このため、剝片の縁辺が、いかにも利用できそうなものなど(どんな状況であれ使用しようと思えば充分使用できる)は含めていない。石質・調整加工のあり方から以下のように分類される。

Ⅰ類：安山岩Ｂ製で、基部に調整加工が施されないもの（109・110・175～179）

Ⅱ類：　〃　〃　施されるもの（123・180～181）

Ⅲ類：安山岩Ｃ製で、器体が薄いもの（1・15・182～188）

Ⅳ類：　〃　〃　厚いもの（189～192）

Ⅴ類：　〃　Ⅰ・Ⅱ類と比べ調整加工が全体におよぶもの（108・193・194）

Ⅵ類：その他

Ⅰ・Ⅱ類ともに、全体に薄手の素材を選択し、177を除いてほぼ直刃である。刃部は不連続・不揃いな刃こぼれ状のものがおもに観察され、刃部を作出した感はない。Ⅲ類は、小剝離が片面のみに認められるもの（184・185・187）と、両面に認められるものとがある。平面形は扇状のものが多く選択されている。Ⅳ類は、断面台形状のもの(191～192)が特徴的でいずれも片面に連続する剝離が認められる。Ⅴ類は横長形状を呈し、基部に刃つぶし状の調整加工が入る。Ⅵ類は、急角度の刃部調整加工が施されたスクレイパーである。169はラウンドスクレイパー状のもの、198は彫器的な機能が推測されようか。

Ⅵ類を除いて、剝片の長辺に刃部を持つ点では、横刃形石器といえようが、Ⅲ・Ⅳ類における安山岩Ｃ製の石材は、本遺跡石器組成の主体となる打製石斧に２点が認められたにすぎず、本遺跡でみられる打製石斧石材の一般性からはずれ、打製石斧の主要な石材になり得ないものであった。したがって横刃形石器

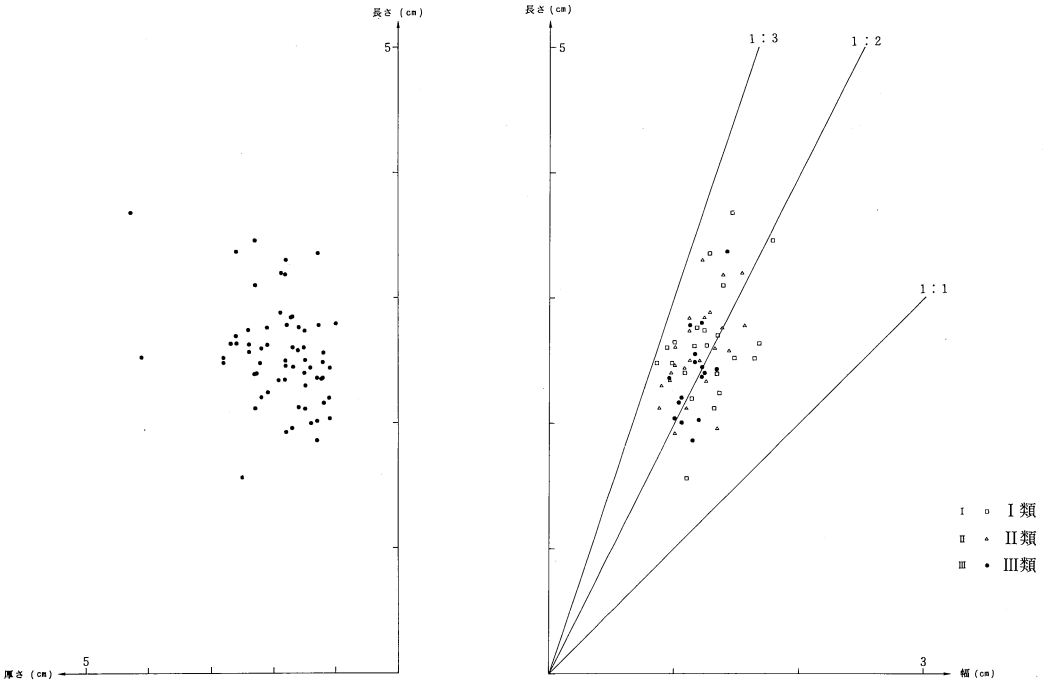


図79　打製石斧長幅厚相関

が、打製石斧と同様の素材と製作方法をとるという一般的な指摘に合致するものは、本遺跡ではみられない。ただし、打製石斧と同様な素材剥片を横刃形石器の範疇に入れるなら、Ⅰ・Ⅱ類が該当しよう。また、一定の横形の形状を呈することのみを横刃形石器の分類基準とすれば、Ⅴ類がこれに該当する。このように認定しえない器種決定にこの用語を用いることは石器組成の点でも混乱のもとになろうから、大形剥片石器として本報告では分類したわけである。

なお、全体的に素材を極端に整形加工したものはほとんどなく、いずれも素材の形状を生かしたもの(選択されたもの)であることが指摘される。多量に出土した安山岩の石片類の背景があってこそ、選択行為が可能であったことを示唆するものでなかろうか。また、Ⅲ類に認められる、両面に対応する連続する剥離痕は、縁辺を前後に移動することによって形成された(切る機能)ものとも考えられ、一方片面のみに連続する剥離痕を持つものは、スクレイパー状に使用されたことを推測させる。断面の形状も刃部角度は急である。

打製石斧（図80～86―199～269、PL44～46）

打製石斧は、本遺跡の石器組成の主体をしめる。完形品(刃こぼれ的なもの、使用可能と思えるものも含む)は、68点あり、製作途中のものか、再加工によるものかは不明であるが破片が41点認められる。これらの破片と欠損品を含め総数は413点である。図73に示したように、このうち遺構内からは80点出土している。ここでは遺構外出土の完形品をおもに分類の対象とした。

①　石材・素材

石材は安山岩Ｂ（板状節理面をもつ安山岩）の特徴である板状の素材がおもに選択されている。ほかには、安山岩Ｃ24、粘板岩10などが認められるにすぎない。このため、完成した打製石斧の器面には両面に節理面（自然面）を多く残すものが多い。また、厚手の石材からは、横位の打撃によって素材を作出したものもみられる。石材は香坂川流域で得られるものである。

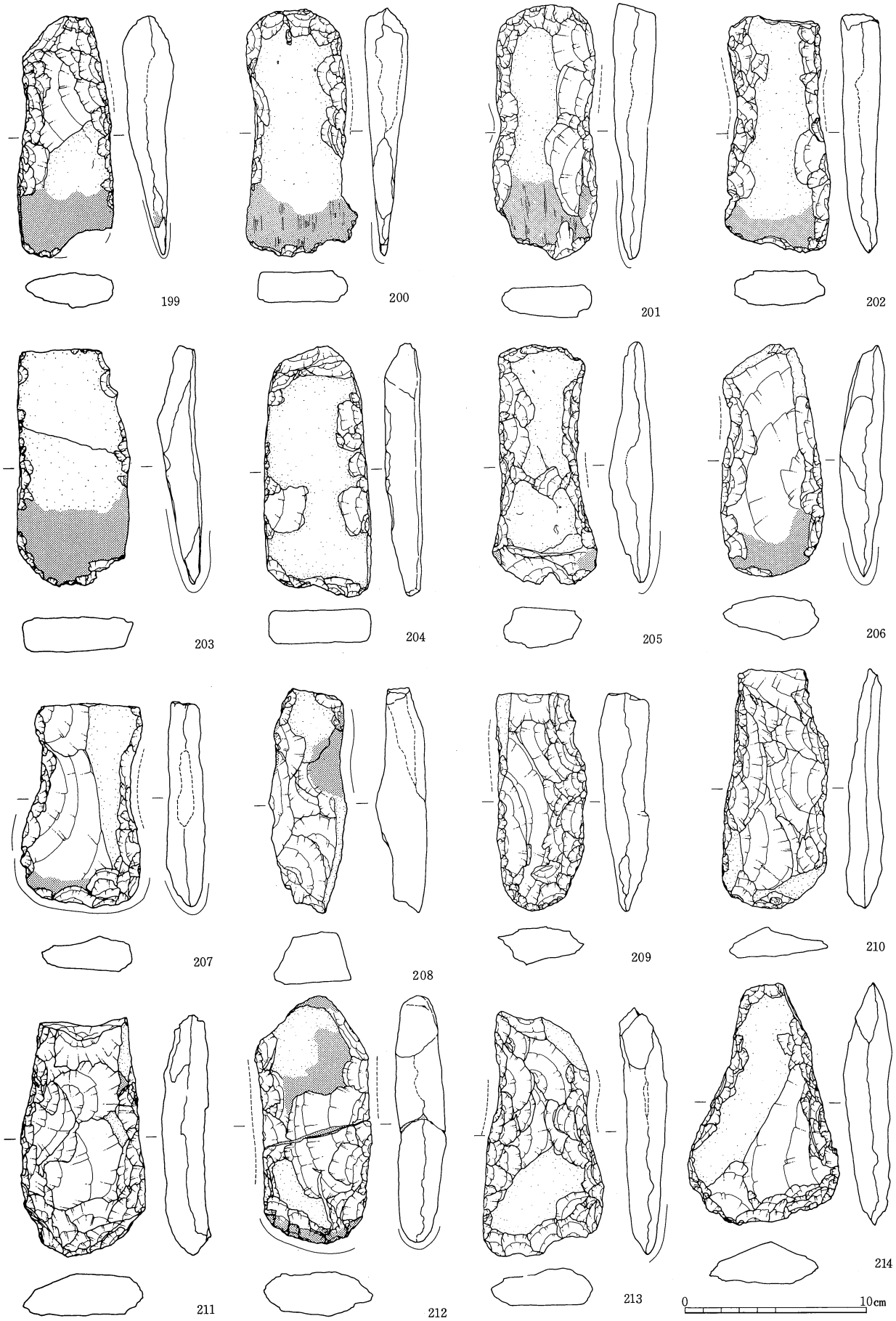


図80　遺構外出土石器（6）

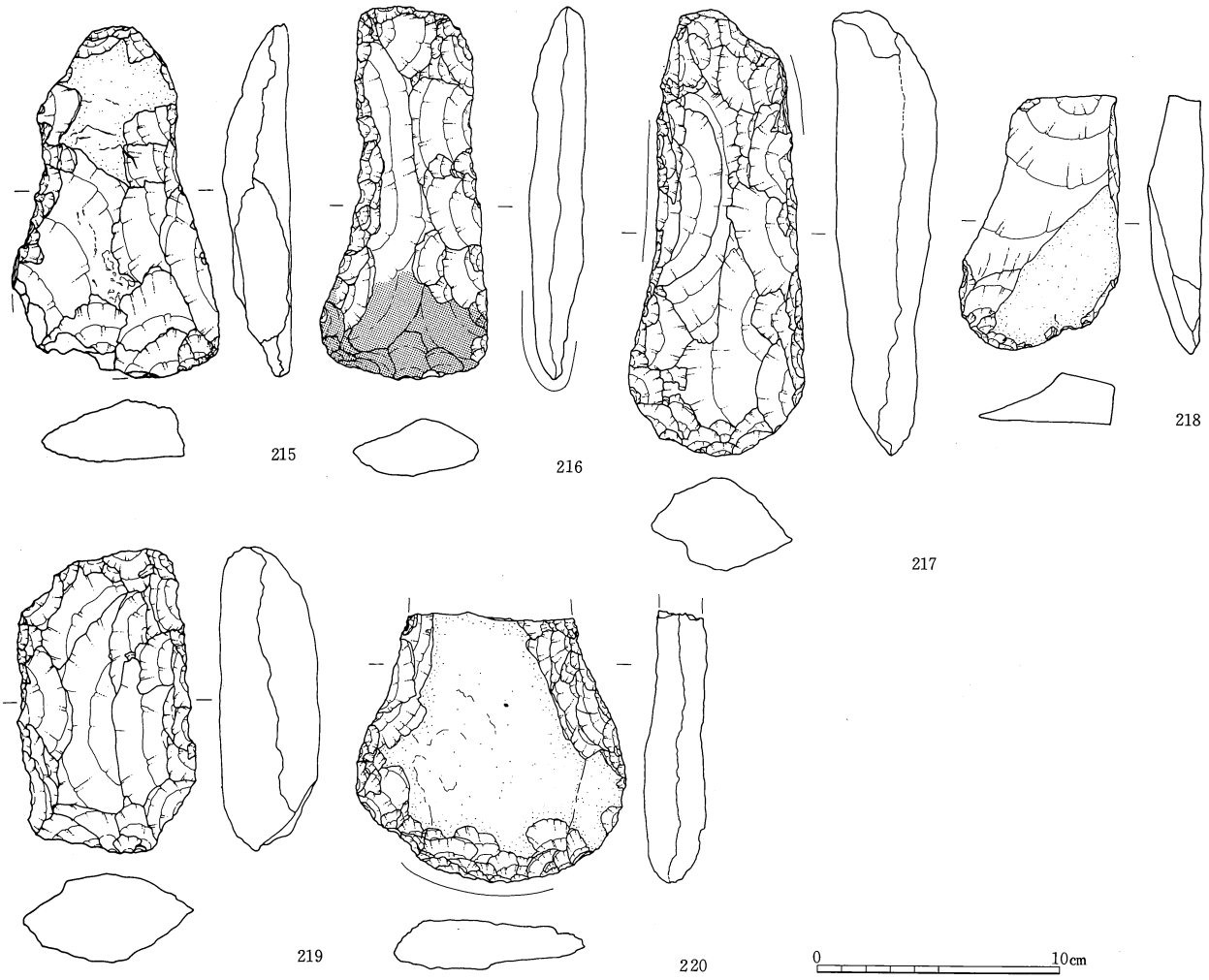


図81　遺構外出土石器（7）

②　製作手法

まず、板状礫を求める打製石斧の形状を想定し打ち割っていき一定の大きさの素材を得る。次に、周縁からの調整加工に入る。この段階で、調整が簡便なものと、剝離調整が多いものが認められる。刃部については、素材の縁辺を残すものと、そうでないものがみられる。また素材が板状であるため、身の反りは極端なものがないことになる。このように製作手法は全体として簡単なものであるが、調整加工の施し方に差異が認められる。

③　形態分類

製作手法から知れるように、素材の板状礫を生かすような調整加工が指摘できる。その簡便さや刃部のあり方は、素材選択段階に製作者の意図が反映されていることは明らかであろう。このうち、特に素材の縁辺を刃部に利用している点に注目すれば、素材縁辺を利用しようとする製作者の意図は、必然的に素材の厚さを選択せざるを得ない。また再加工による平面形の変化は充分考えられるのに比べれば、調整加工の簡便なあり方は、平面形を整えることにその主眼があり、素材の厚みを減少させるといった意図が想像できない。

そういうことであれば打製石斧の「厚み」は、製作者の必要とするものをほとんど変化なく提示することになる。このような視点から、厚さを基準に打製石斧の分類を試みた。図79に長厚比を示した。

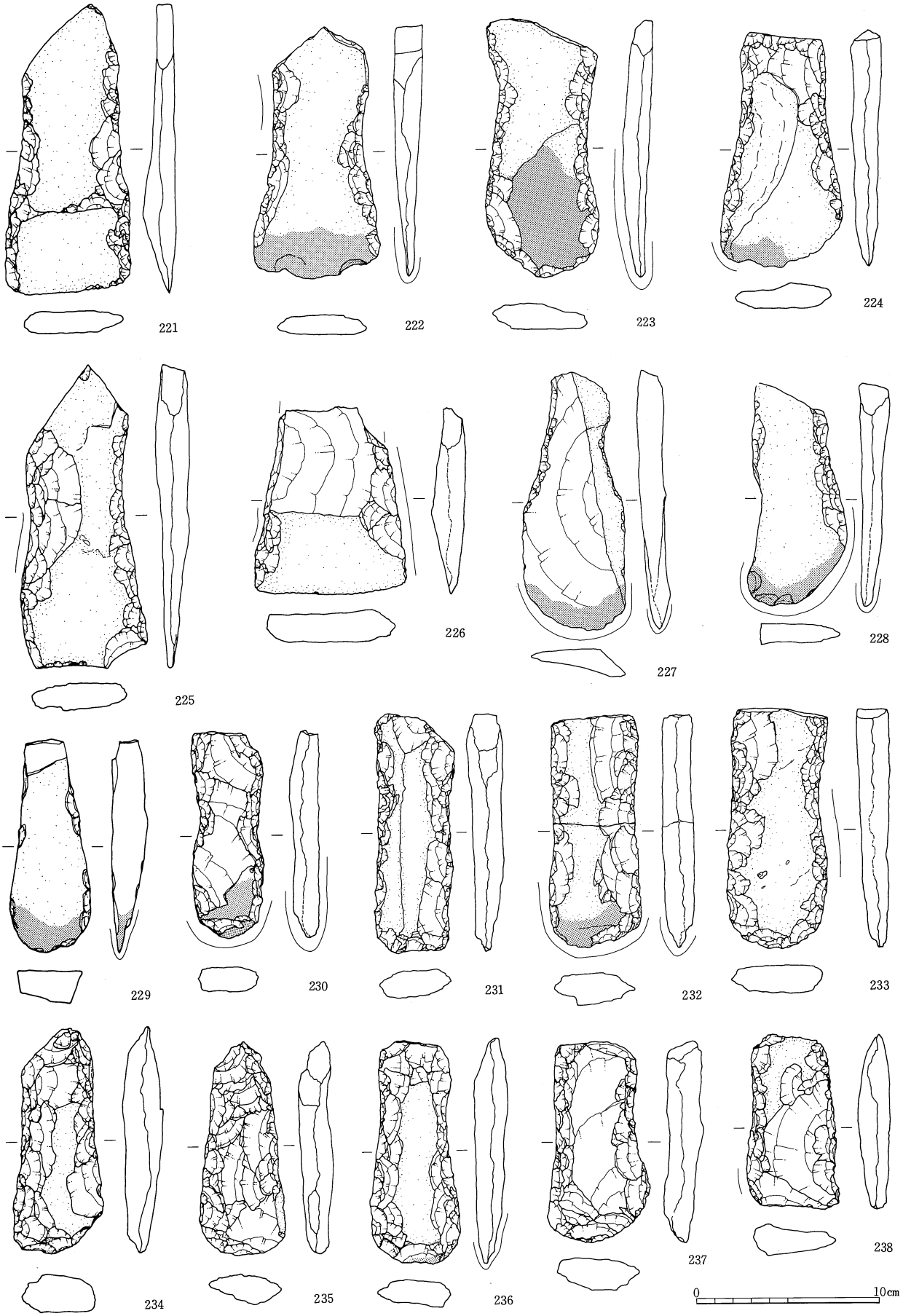


図82　遺構外出土石器（8）

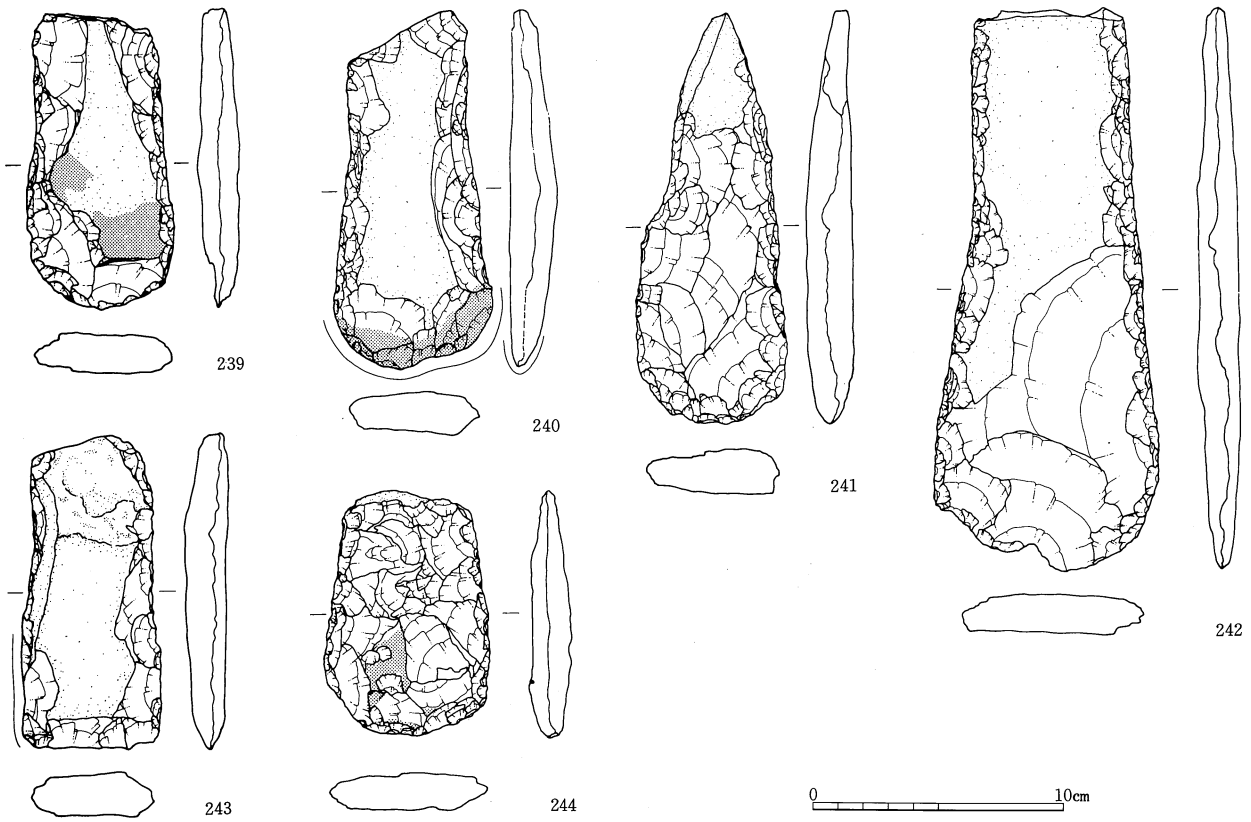


図83　遺構外出土石器（9）

長さは、12 cm 前後に集中し、厚さは1～3 cm に集中する。厚さについては特に1～2 cm 内により多く分布し、2 cm 以上になると散見するようになる。また薄いものでは、1 cm 未満のものもみられる。このような結果から、分類は以下のようにされる。

Ⅰ類a：厚さ2 cm 以上のもので、刃部に素材縁辺を利用したもの (199～206)

b：　　〃　　刃部に調整加工がみられるもの (207～217)

c：　　〃　　形状が特異なもの (218～220)

	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	欠損
	3	5	6	12
	6	3	6	23
			2	4
				2

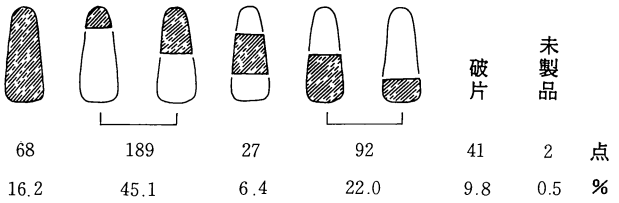


図84　打製石斧摩耗・欠損

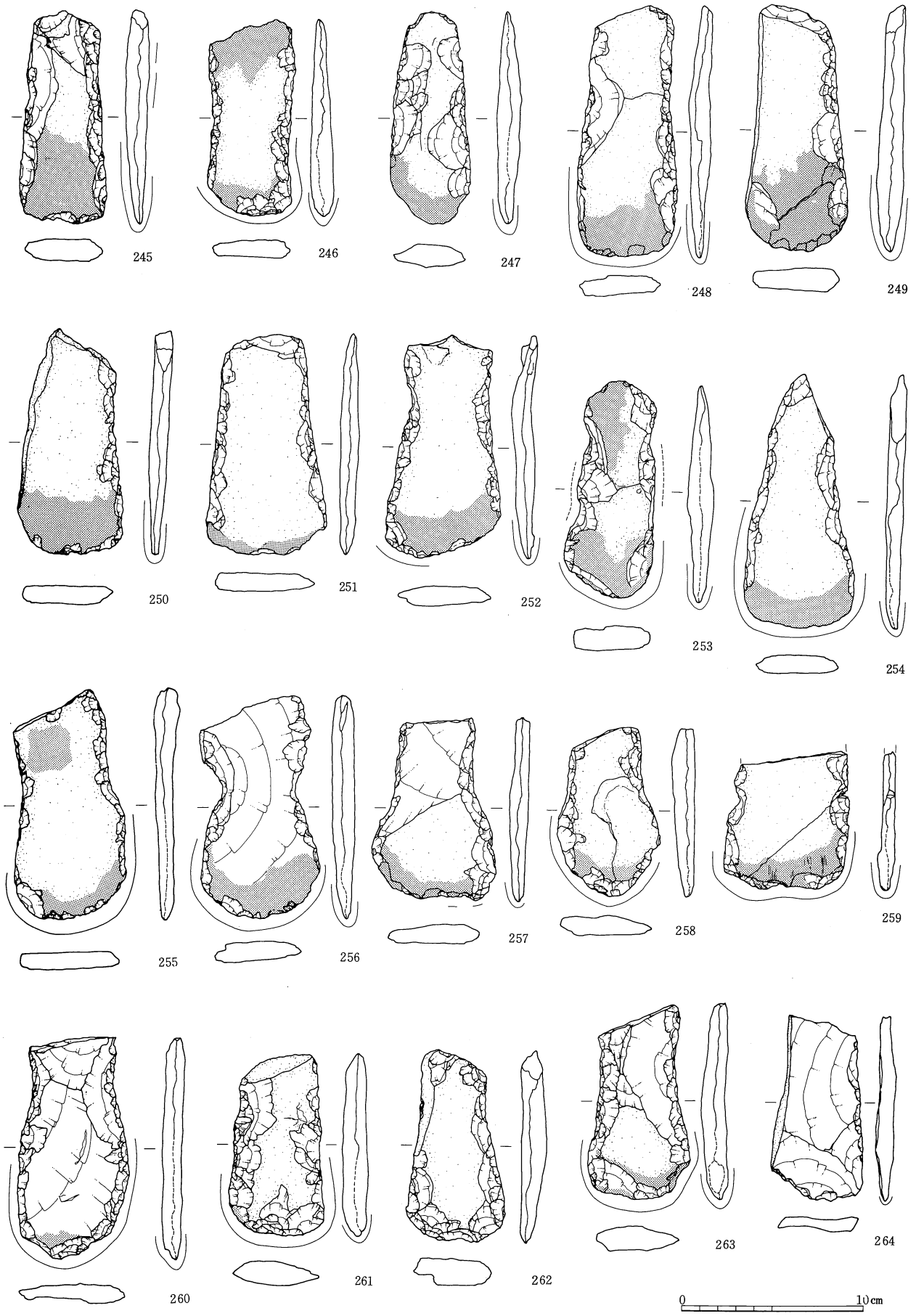


図85　遺構外出土石器（10）

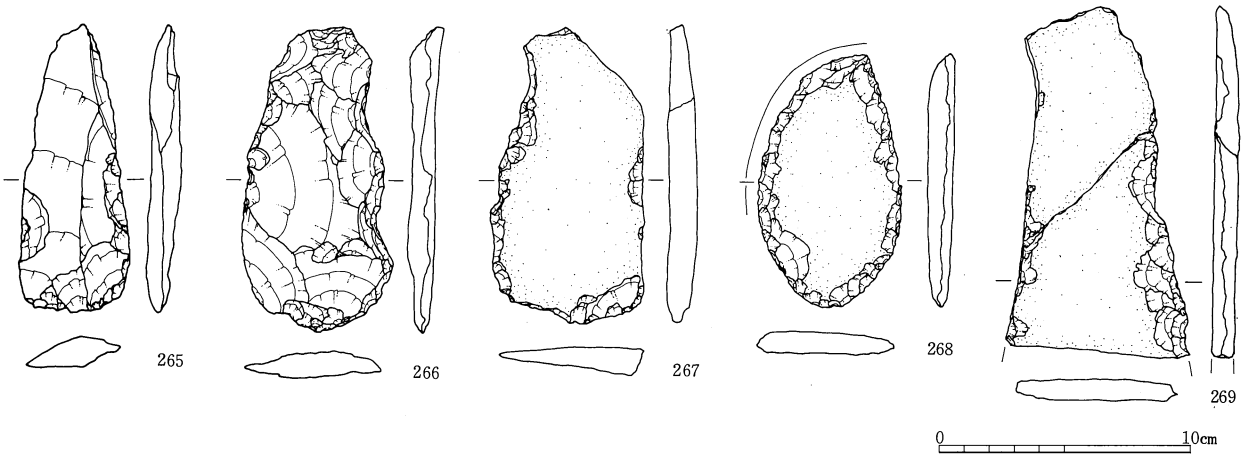


図86　遺構外出土石器（11）

II類ａ：厚さ1.5 cm 以上～19 cm 以下のもので、刃部に素材縁辺を利用したもの（221～229）
　　ｂ：　　〃　　刃部に調整加工がみられるもの（230～244）
III類ａ：厚さ1.4 cm以下のもので、刃部に素材縁辺を利用したもの（245～258）
　　ｂ：　　〃　　刃部に調整加工がみられるもの（263～269）
　　ｃ：　　〃　　形状が特異なもの（263～267）

以上の大別３類の後に長幅の比を図に示した。全体に２：１の線上を中心に広がりをみせる。こまかく見れば、Ｉ類は13 cm 前後に横広がりに分布するのにくらべ、III類は幅が一定で長さが上下するような分布を示す。各分類の特徴を以下述べる。

Ｉ類ａは、刃部が鋭く、刃こぼれ状の欠損が認められるものが多く、素材の自然面を多く残す。周縁の調整は刃部付近に少なく、基部に至って顕著である。とくに基部先端は、素材が基部で細身にならないもの（199～201･204）について著しい。着柄に関係するものなのであろうか。また、側縁部のタタキ痕が認められるものが半数ある。

Ｉ類ｂは、全体に側縁からの剝離調整が著しく、内面におよぶものが多い。器体が厚いために、一定の厚みを目指した結果であろう。素材縁辺を選択しない場合、全体に調整剝離が施されることが推察される。また明瞭な揆形といえるもの（214・215）が存在するのも特徴的である。212は接合資料で、基部・刃部・面部・欠損面の縁に摩耗痕がみられる。欠損後の転用である。213は、裏面に磨耗がみられるが表面になく、刃部稜の磨耗が認められないことから、刃部の再加工品であることがわかる。また、側縁部にタタキ痕がみられるものが半数ある。217は肉厚で大きな優品であるが、刃部に磨耗痕などの使用痕は認められない。

Ｉ類ｃとしたものの中には、安山岩Ｃ製の肉厚で未成品とも思えるもの(219)、揆形を呈すると推測される欠損品（220）などがある。

Ｉ類全体を一般的な平面形状から分類すれば、揆形が３点みられるほかは、すべて短冊形といえる。さらに短冊形のうちでも棒状のもの（208・209）が細分、指摘できようか。

II類ａは、刃部が直状を呈するものには磨耗痕は観察されない。また228にみられる斜状の磨耗は、22・50・60などに認められ、着柄を含めた使用法の点で注目される。周縁の調整は側縁のみのものが多く、簡便であり、素材の自然面を多く残す。Ｉ類に比べ、側縁のカーブは緩やかに抉れたものが多い。224は、Ｉ類ａにみられたと同様に基部調整が顕著で、基部の偏平を求めた結果と思われる。

II類ｂは、周縁の調整はＩ類ｂのように深くなく、素材の自然面を残すものが多い。平面形状では全体

に長方形を呈するものが多いのが特徴であろうか。242は長大なもので刃部は使用による刃こぼれが認められる。

II類は、基部に調整加工を施すものが少く、折損したような突状や、平坦状を呈するものが多い。中には欠損によるものがあろうが、241にみられる素材面の残り方は、基部の形状に一定の形状を求めていなかったことを示唆している。平面形状については、II類aがやや刃部の広がる短冊形・撥形の中間形状を示し、II類bは短冊形を呈するといえる。また、I類と同じく短冊形のうちでも棒状のもの(229･230)が指摘される。

III類aは素材の形状を生かし、周縁の調整加工が簡単にすまされる。薄い素材を利用するために、これ以上の調整は必要なかったのであろう。さらに片側縁のみ調整加工が施されるもの(248･249)などもみられる。また、一様に磨耗痕が認められるのが特徴である。

III類bは、調整がややIII類aより深い程度で、素材の形状を生かしているといえよう。磨耗痕が認められない。その他、III類cとしたものは、268が欠損部を片面からの剝離によって、スクレイパー状に刃部を作出したもの。269は接合資料で基部の形状が特異である。III類は、II類に認められると同様に基部が折損したような形状を呈す。平面形状は、撥形(253)、分銅形(255)、しゃもじ形(256･257)などのほかは、短冊形と捉えてよいと思われる。

I～III類を通じていくつかの特徴があげられる。

1　刃部が素材縁辺であるものは、各類において、側縁部の調整加工が簡便である。

2　刃部が素材縁辺であるものは、多く磨耗痕が認められる。

3　刃部に調整があるものは、側縁部の調整加工の頻度が高い。

4　側面のタタキ痕は、I類(厚手)に顕著に認められる。

5　I類aの刃部には、刃こぼれ状の剝離痕が認められる。

6　素材に板状礫を使用するため、全体に身が反るものがない。

7　基部は、I類aにみられるように一定の厚みを整えるために施される。

8　基部形状は、折損状を呈するものが多いが、269に認められるように余り意識されていない。

これらのことからわかることは、打製石斧は薄手で身が反らなくても、刃部が鋭いものであればよく、側縁部の調整が簡便であっても充分使用可能であり、実際摩耗痕に認められるように使用頻度は高いものであるということである。そして、基部形状に認められるように形状については極端な規制はないということであろう。そしてそのような素材を選択しているのである。また、刃部との側縁部の調整加工の関係は、もともと素材縁辺を利用していた。それによってある程度納得した形状を呈していたものが、欠損し再加工により形状が整えられた結果とも考えられる点が指摘される。

さて、これを受け、I類aにみられる厚手の刃部が刃こぼれ状を呈する一群についても考えてみたい。

打製石斧は一般にその製作が簡便で、使用頻度が高く、大量消費されたものとされている。本遺跡で出土したものをみるに、調整加工がより簡素なII・III類が量的に占める割合が高い。これに比してI類にみられる、厚手のものは、調整加工がより面倒である。素材となる安山岩cは入手が困難なものでないことを考慮すれば、簡便･大量生産を求めるならば合理的ではないものとなる。それでも厚手のものを求めた、素材の選択を行っていたことになる。このような背景と刃部の刃こぼれ状を考えると、単に土堀り具などの単一的な機能以外に、樹木などの伐採具的な機能分化も充分考えうるのではなかろうか。より簡便に加工可能な素材とは別に厚手の一群を選択する理由は、機能差に求められる可能性がある。

現時点ではその具体的な機能差を指摘しえないが、打製石斧の機能が単一ではないという点を示唆していると考えたい。打製石斧の一部が伐採具としてあった可能性も充分にある。

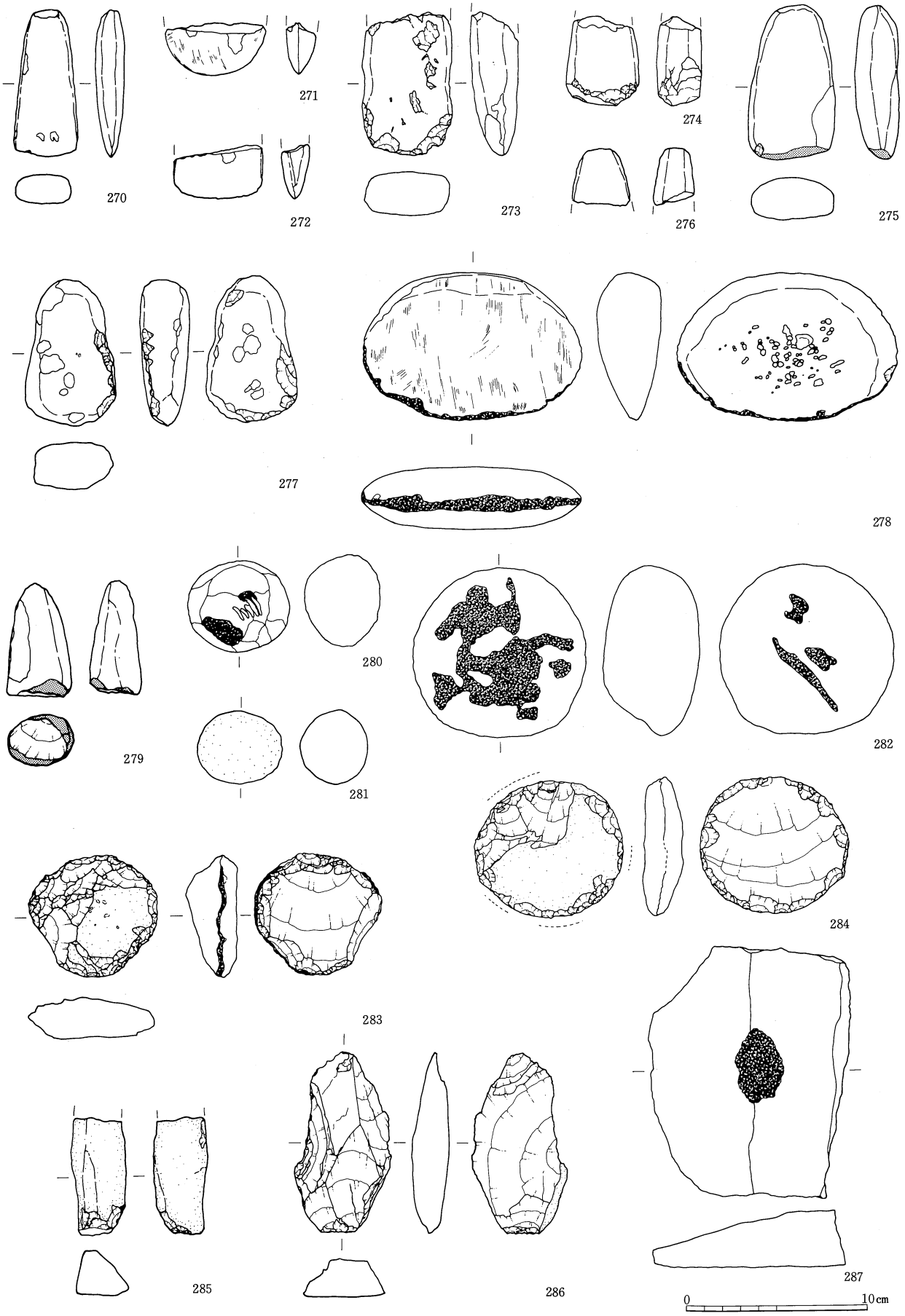


図87　遺構外出土石器（12）

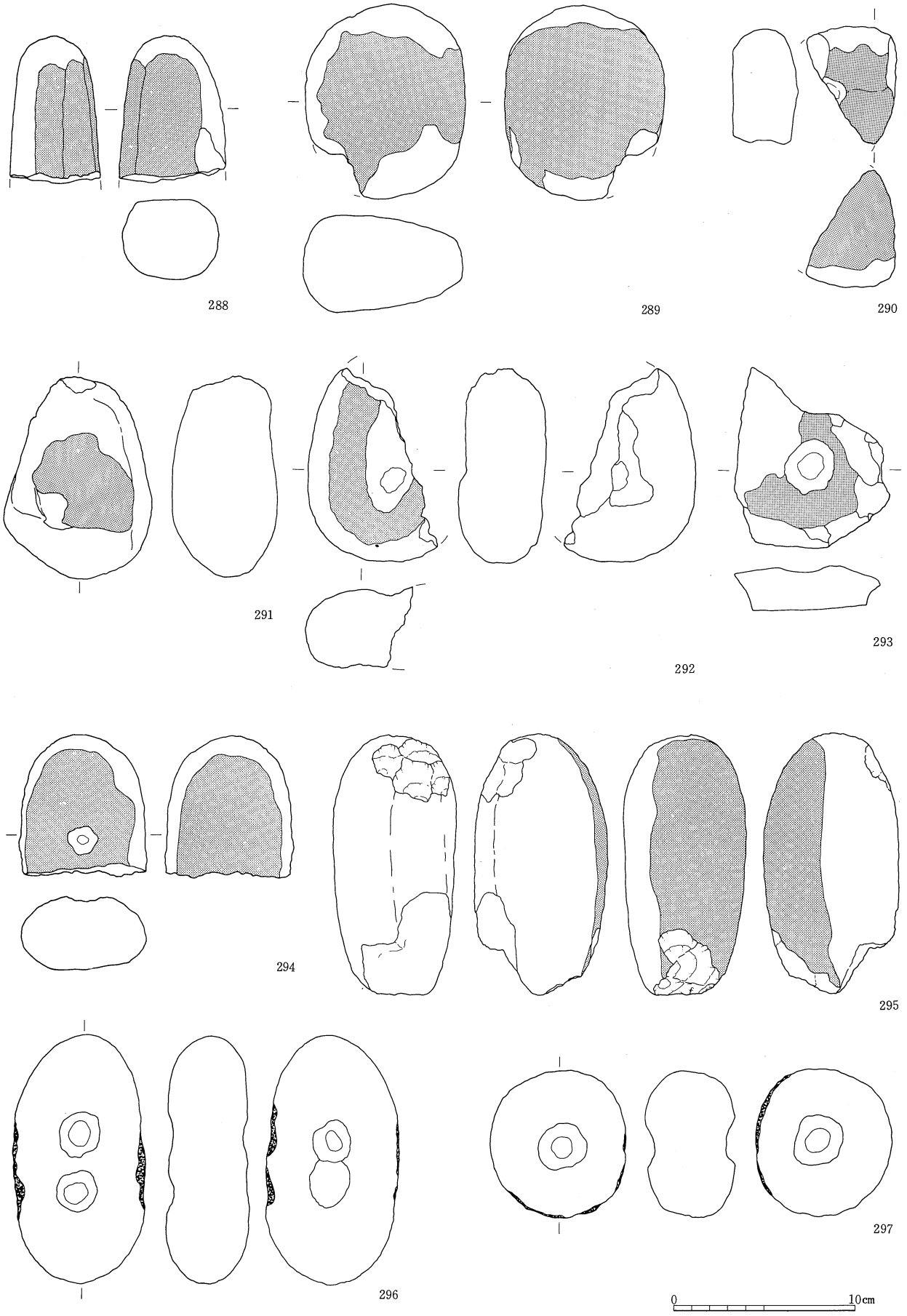


図88　遺構外出土石器（13）

④　摩耗・欠損

表裏の磨耗状況を図84に示した。各類・欠損品も含め、表裏の磨耗が均等であるものがやや多いが、不均等のものもかなりある。また点数は少ないものの磨耗痕が斜状を呈する一群（228など）が存在する点は注目すべき点である。刃部に素材縁辺を利用したものに多いことも挙げられる。ただし磨耗痕は、石質による要因が多分に有り使用頻度の差異と速断しがたいと思われる。今後の課題である。

欠損品については図84に示した。刃部を欠損したものが多い傾向である。折れ口リング表（裏）からの横折れを呈するものがほとんどで、縦折れを示すものは数点、節理面によるもの、本体から剝れた（もしくは剝れる）ようなものも数点みられたにすぎない。折れ方の平面形状は斜めのもの、平らなものを主体として、屈折するものなどもみられる。

以上、本遺跡における打製石斧のあり方を素材選択という観点から分類してみた。その結果、本遺跡においては素材選択（厚さと縁辺利用を意図した選択）によって規定された素材形状を生かす中で、形態の差異が生み出されることが指摘できた。さらに、薄手のもので充分に打製石斧の機能は果たされ、その簡便さを避けて厚手の一群が存在することも指摘できたと思う。

なお、未製品と思われるものが２点出土している。図示しなかったが、写真掲載をした。また、「横刃型石器」と速断してしまうこともあろう。このようなことから、欠損品についてはそのほとんどを打製石斧の欠損品として扱ったことを留意されたい。

磨製石斧（図６－287－270～279、PL39・46）

磨製石斧（270～279）は、すべて輝緑岩製である。転用品も含め総数は13点出土した。272は使用による欠損が刃部に認められ、側縁が一部やや抉れるところがある。このような抉れは、2・277にも認められ、2では敲打整形段階に抉れが形成されていることを示差している。275は光沢痕を残すほどの研磨が全体に及ばず刃部に研磨が顕著であり、未成品とも考えられる。279は欠損面の縁に磨痕がみられるもの。278は全面に光沢痕を見せるが、刃部の作出がなく、未成品である。278は特異な横長の形状を呈す。全体に研磨され、研磨以前の敲打痕が面部に残る。刃部は先鋭化していたと思われるが、現品は敲打痕が刃部縁に認められる。刃部付近には線条痕が随所に残る。磨製石斧と同じく石質が輝緑岩であること、製作手法が磨製石斧と同様であることから、磨製石斧として扱った。その他、定角式の完形品（270）、欠損品（279など）が検出されている。

敲石（図87－280～287、PL46）

敲石（280～286）は、安山岩Ｃ製（283～284）、安山岩Ａ製（280～282）、安山岩Ｂ製（285～286）である。円礫の面に敲打痕のみられるもの（280・281）、円形のハンマー状のもの（283・284）のほかに、棒状のもの（285）、クサビ状のもの（25・26・286）、板状礫中央に敲打痕の認められるもの（287）がある。280は、全面に研磨による細かな面取りがみられる。283は周縁に敲打によるツブレが認められる。286は下端部の稜にツブレが認められる。287は形状から台石の方が適当かもしれない。なお、116は断面三角形状の角礫を整形加工したもので、稜の中央に集中的に剝離が施される。下端は、側面観Ｖ字状を呈し、縁は刃こぼれ状の剝離が認められる。下端部の厚さから、石斧的利用よりも、敲石として扱った。

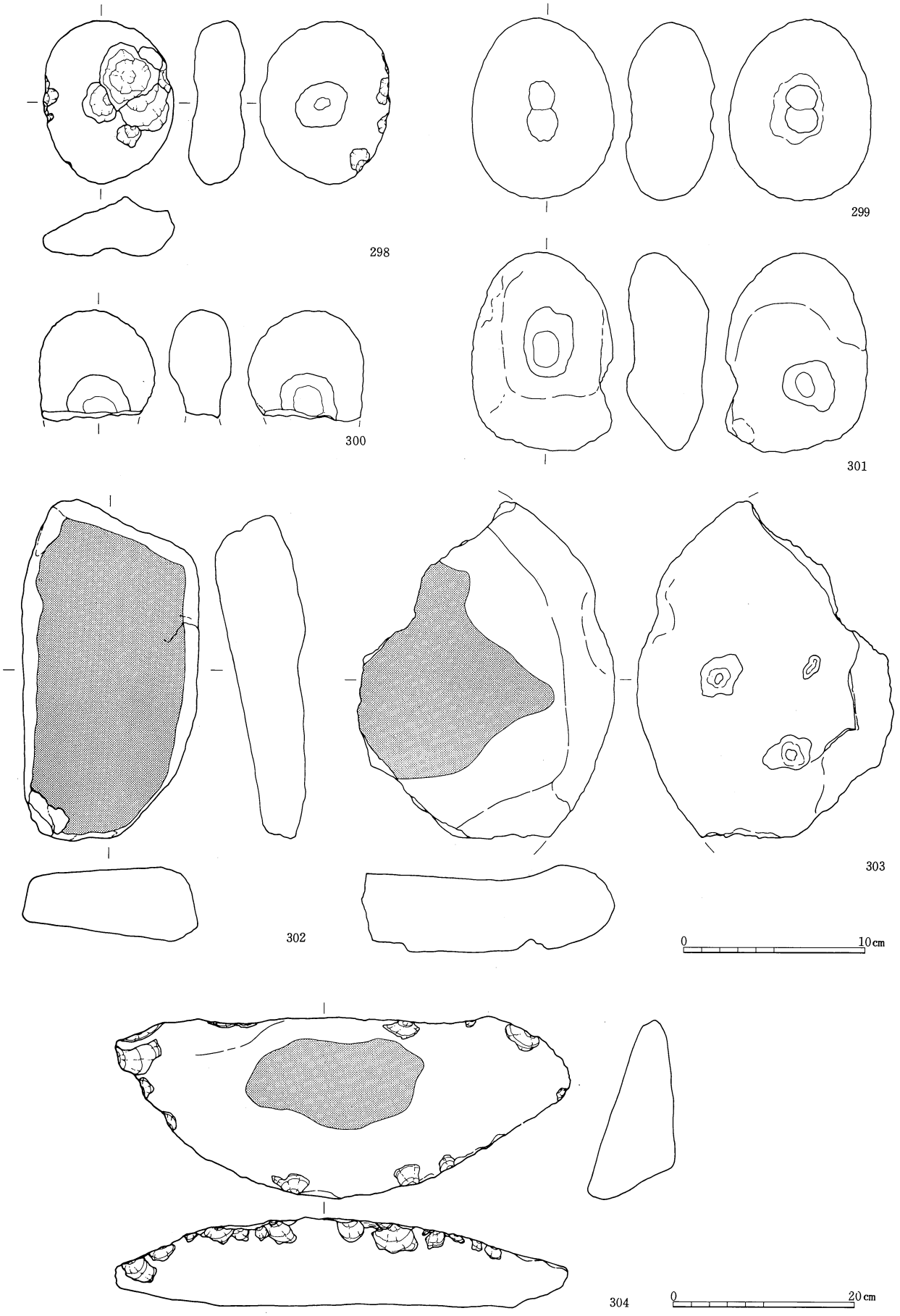


図89　遺構外出土石器（14）

図90　遺構外出土石器（15）

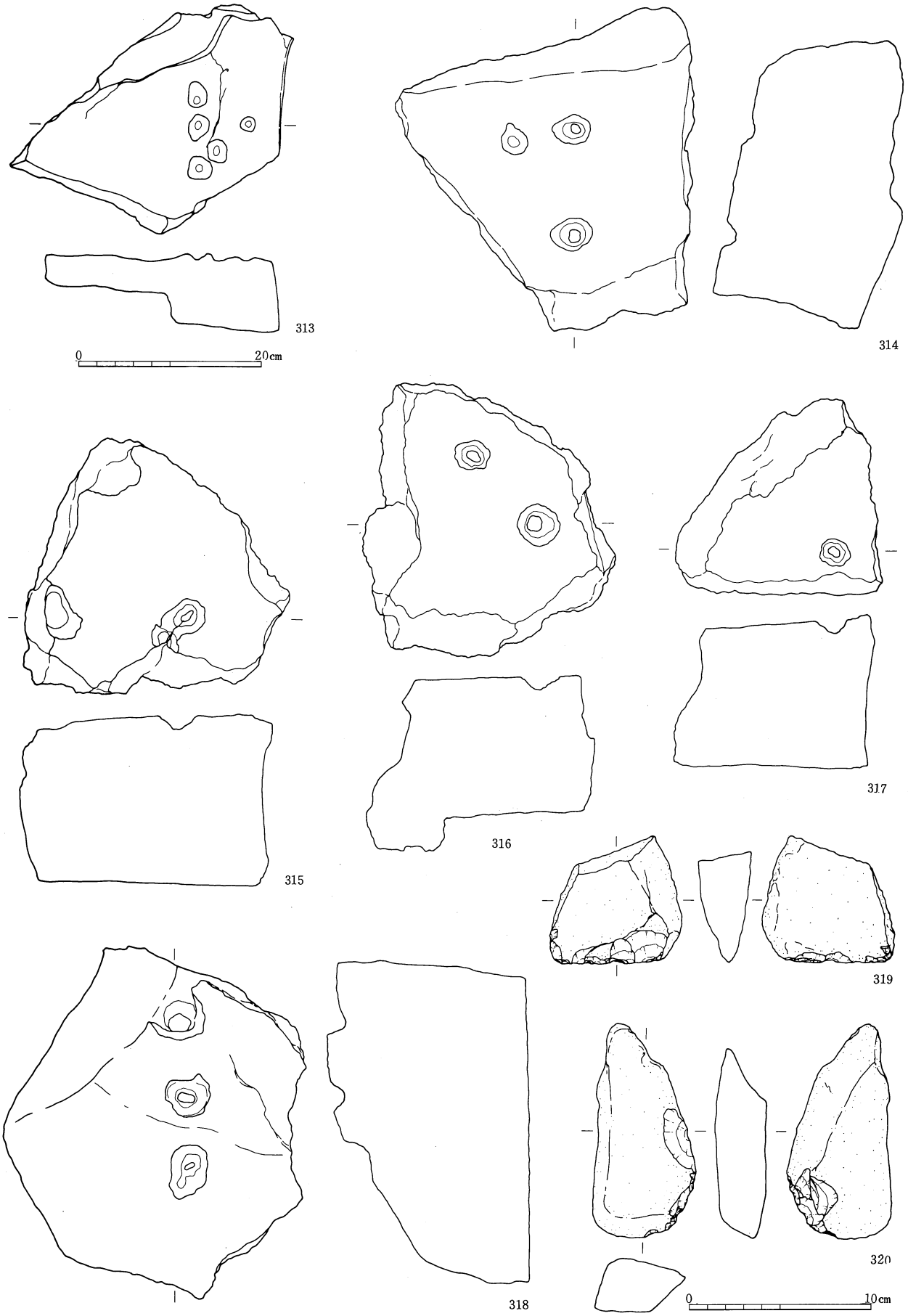


図91　遺構外出土石器（16）

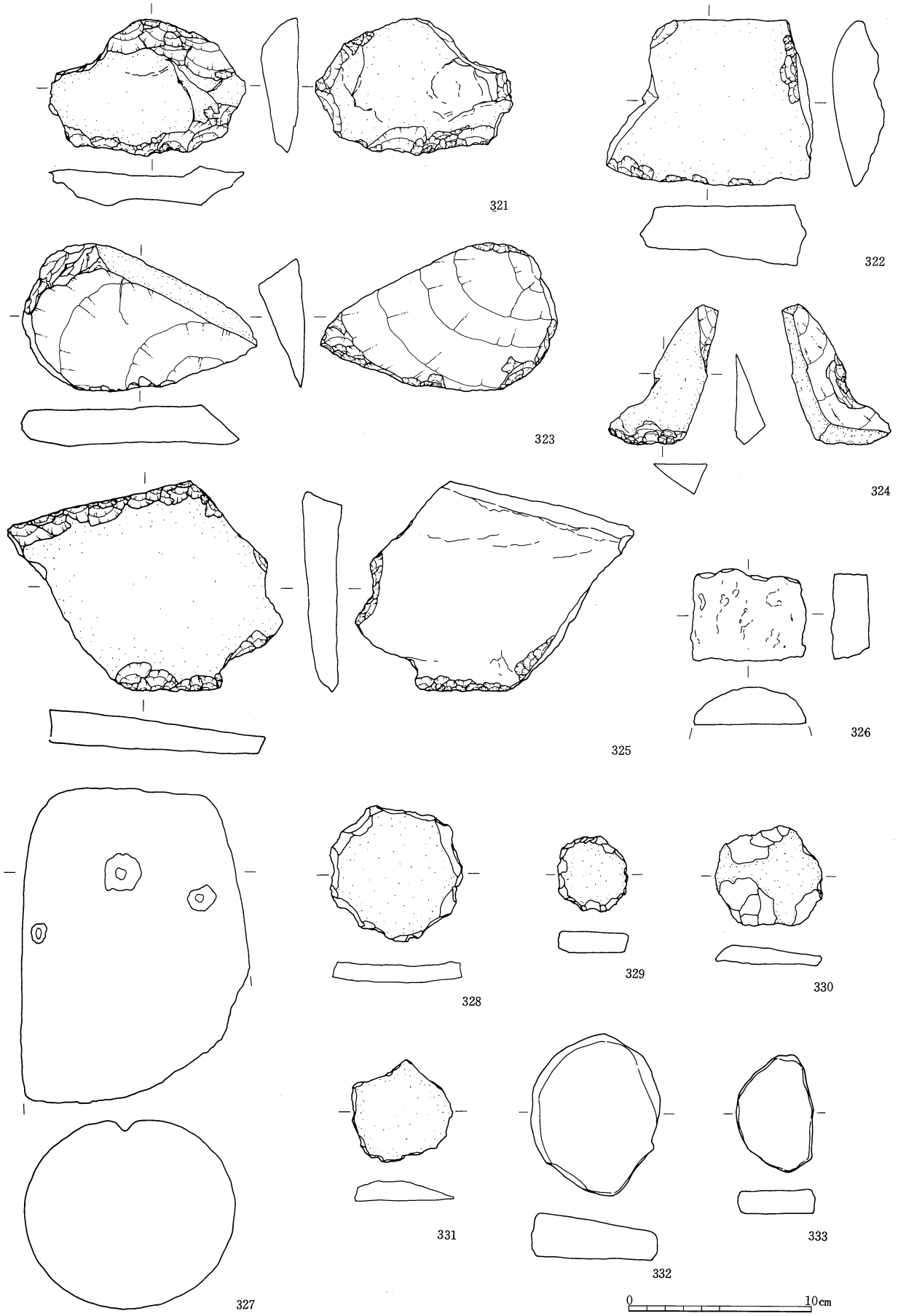


図92　遺構外出土石器（17）

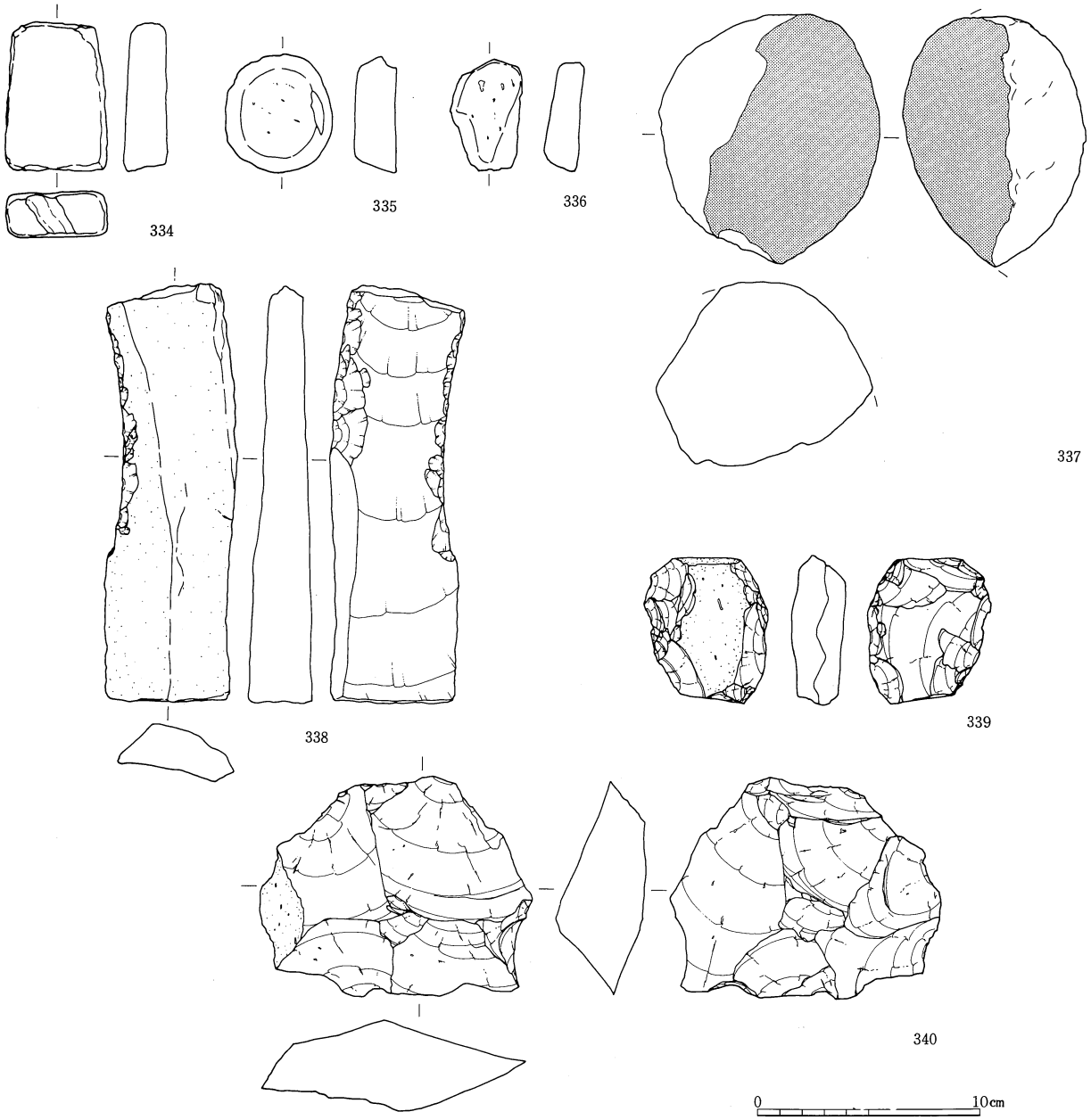


図93　遺構外出土石器（18）

磨石類（図88・89—288～301、PL46）

磨石（288～301）は、安山岩Ａ製の円礫・長亜円礫をおもな素材とし、かつ、磨り面・凹み面を有するものを一括した。このため敲打痕のみの円礫などは、敲石として区分した。凹みについては、面部にみられる集中敲打痕と捉える。

Ⅰ類：磨り面のみを有するもの５点（28・102・288・289・291）

Ⅱ類：磨り面・凹み面を有するもの５点（83・290・292・293・294）

Ⅲ類：磨り面・敲打痕（敲打による剝離痕も含む）を有するもの１点（295）

Ⅳ類：凹み面・敲打痕を有するもの３点（296～298）

Ⅴ類：凹み面のみを有するもの５点（69・84・299～301）

Ⅵ類：磨り面・凹み面・敲打痕を有するもの２点（68・85）

凹み面の形状は、浅いものがほとんどで、深めのものについても集中敲打によるものである。多孔石にみられる逆円錐状のものはない。磨り面は縦長のもの（288・295）のほか、礫面中央部に広がっているものが

多い。磨り面の状況は、102か光沢痕状を呈するほかは、ザラザラした磨り面を持つものが多い。凹みの深いもの（84・300）については、集中敲打によるとしても、ほかのものとくらべ深い。凹みが使用痕であるのか、整形痕であるのかの違いはこのあたりにありそうである。素材となる手頃な円礫は、採取するのにそれほどの困難はなかったであろう。そう考えると、凹みの深いものを単なる使用頻度の相違とは一概にいえない。浅い敲打痕状のものから集中敲打によって形成された凹みや、多孔石にみられる逆円錐状の凹みとは異った一群が存在することを指摘しておきたい。

石皿・台石（図13―30・32・89・90―302～307、PL40・46・47）

石皿（302～309）は作業面がくぼんでいるもの（30・32）、平坦なものに２分される。30・32ともに背面に逆円錐状の凹みが残されている。304は据え置きに適した礫の中央部を作業面としている。外周部は、大きな剥離を施し、装飾を兼ねた整形が施されている特異なものである。306は、作業面がツルツルしており、置き砥石とすべきかもしれない。304は大形のもので作業面は広い台石状の石皿である。304・305などの大形のものは、その場に放置された可能性が高いのに比べ、30・302の石皿は欠損品が廃棄されている点が指摘されよう。すべて安山岩製である。

多孔石（図90・91―308～318、PL47）

多孔石（308～318）は、安山岩製である。偏平礫面に逆円錐状の凹みが多数みられるもの（308など）、凹みが３つ前後と少ないもの（310など）に２分される。凹みが多面に及ぶものもある。

砥石（図28―86、PL41）

１点出土した(86)。このほか、石皿・台石に分類した内にも、砥石として利用されたものがあろう。安山岩製である。

礫器（図14―35・36、91・92―319～324、PL47）

礫器（319～324）は、岩塊状の礫の一部に粗雑な剥離が認められるもの（35・36・318・319）、板状節理の礫を利用し、粗雑だが鋭い刃部を作出するもの（320）など、さまざまである。すべて安山岩製である。

石棒（図92―326・327、PL48）

石棒（326・327）は４点出土し、うち２点が接合するため、個体数は３点となった。326は逆円錐状の凹みが施される。安山岩製である。

円盤状石器（図92―328～333、PL48）

円盤状石器（328～333）は安山岩製である。片面からの粗雑な剥離調整で成形されるもの（328～330）は、東北地方から新潟県にかけて縄文時代中期以降出現し、県内では南信地方によくみられるという（大竹1988）、いわゆる「石製円盤」であろう。このうち、330・331は不整形で人為的なものと仕難いが掲載した。磨製のもの（332・333）は平面半円形、断面盤状を呈する。打製・磨製の両者は本来なら分類されるものかもしれない。

軽石製品（図93―334～336、PL48）

方形（47・72・334）、円形（335）、不整形（336）がある。334は下端に帯状の削り痕らしきものが認められる。

軽石は、浅間山麓で産出されるものであろう。

その他の石器（図93—337～338）

336は、円礫片の表皮面が摩耗したようにも自然面状とも判断し難いもので、丸石の可能性も捨て難いため、取り上げた。337は、棒状の板状剥片の側縁部に連続する剥離調整が入る。下端は欠損したものか、平端である。338は厚手の安山岩Ｃの剥片を素材として、側辺部に粗雑な両面からの剥離調整が施される。稜は波状を呈し、使用痕はみられない。実際の使用に適したものか判断し難い。同様なものがほかに２点みられる。一様に剥離痕が不連続・不揃いである。

石核（図93—339・340、PL48）

339は安山岩Ｃによる石核である。剥離面は大きく、かなり大きめな剥片を取ったものと推測できる。

得られた剥片は、大形剥片石器の素材剥片として利用されたというより、本遺跡では出土をみなかった石鏃、石錐などの素材剥片を得た可能性が高い。

黒曜石製の石核は、ネガティブな剥離痕で構成される残核状のものが７点みられる。いずれも、剥片を得るには、本体が小さく不定形であり、狭雑物を含むものが多く、剥片を得るには不適当なものである。原石・石片類黒曜石の原石が２点出土している。図示しなかったが写真図版 PL に掲載したので参照されたい。いずれも石目が、本体中を横断し、剥片生産には適さないものである。このような原石を手にしたということは、黒曜石製の石器生産に日頃から余り比重を置かなかったことによるのであろうか。確かに黒曜石製の石器の絶対量が少ないのは本遺跡の特徴である。それに比して、安山岩Ｃの原石・石片類は多量に出土した。かといって、黒曜石製の石器類の完全な代わりを成した石材というわけでもない。

なお、黒曜石の石片は砕片状のものを主体とするか、なんらかの石器破片と思えるようなものもあることを記しておきたい。

ク　平安時代以降の遺物

平安時代以降の遺構は検出されていないが若干の遺物が出土した。

土器類は平安時代では９世紀頃と推測される土師器甕・内面黒色の坏または碗の小片が出土してた。中世においては13～14世紀前半の中国から輸入された龍泉窯系の蓮弁文碗片（1）が1点出土した。

金属器は刀子片（2・3）・火打金（4）・釘（5・6）、銭は寛永通宝（7～9）・文久永宝（10）が出土した。４の火打金は山型を呈し中央頂上部には小孔をもつが両端の突出部を欠損している。刃部中央には抉りが認められる。刀子・火打金・釘の時期は不明である。

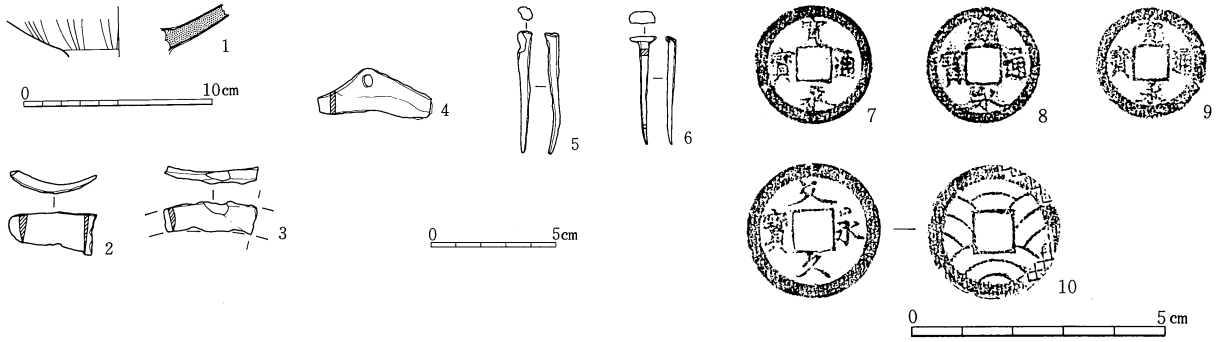


図94　古代以降の遺構外出土遺物

ii　第二地点の調査 (PL26)

第二地点は前記した第一地点から支谷を隔てて西に位置する。トレンチ調査の結果、南に向かって張り出す支尾根の東斜面に縄文時代の遺物包含層が確認され、その部分を拡張して平面的な調査を行った。谷底に設定したトレンチ内からも数片の縄文土器が出土したが、量的に少なくまた摩滅の著しい微細破片のみであったことから、周辺からの流れ込みと判断した。

拡張した尾根の斜面には尾根と同方向に凹地状の浅い低まりがあり、そのテラス状部分から斜面下方にかけて縄文時代中期末葉から後期前葉にかけての遺物が多数遺存していた。層位的にはⅣ1層を主とし、Ⅲ層およびⅣ2層中にかけて遺物の包含が認められた。また分布的にはその９割以上がＩＪ—09・14・19・24・25グリッドから出土した。検出された遺構と遺物の総数は、焼土址１基、配石状遺構１基、縄文土器1,045片・34,870ｇ、石器類19点であった。

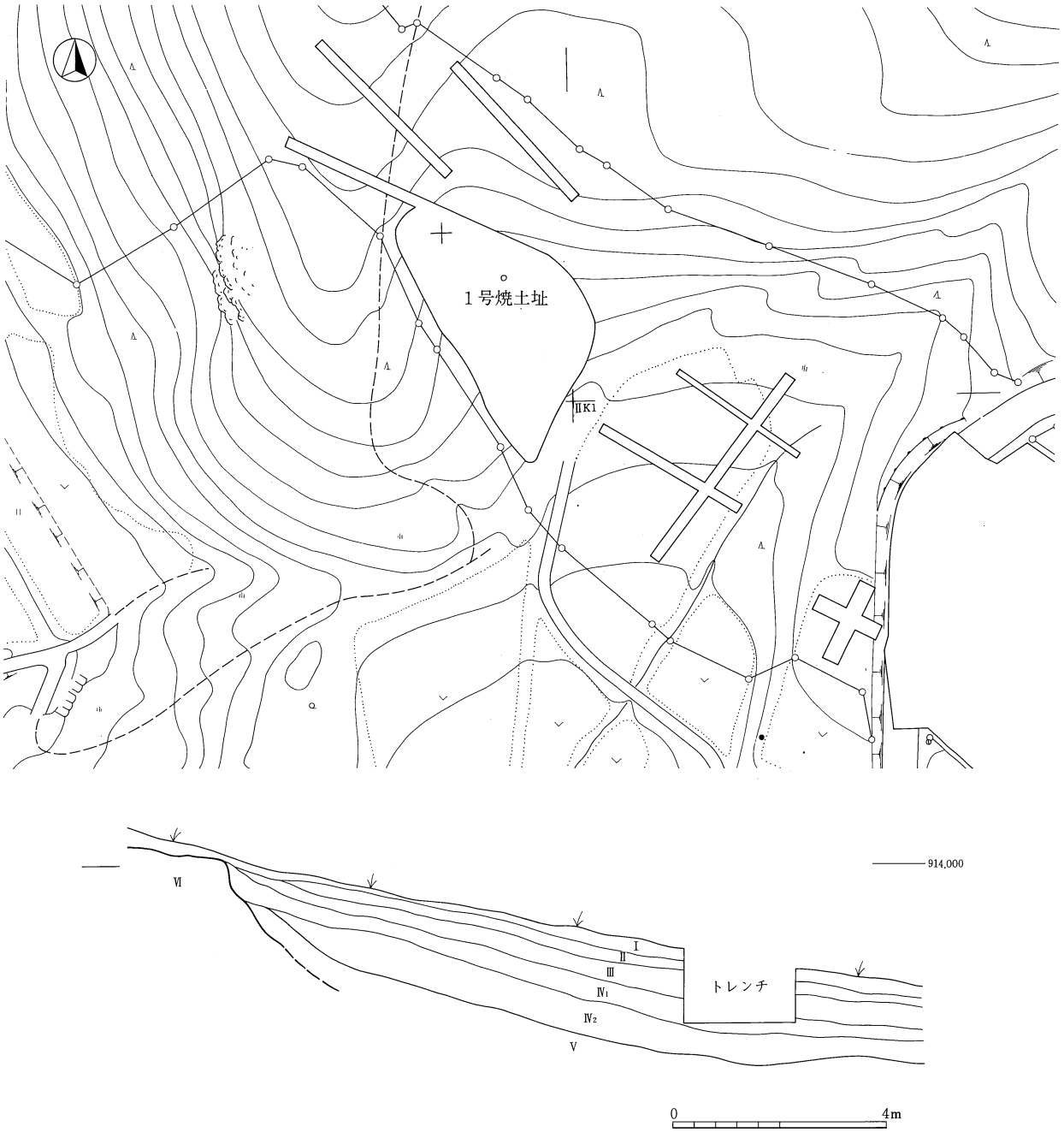


図95　基本土層

(1)　遺構

ア　焼土址

1号焼土址（図96、PL26）

拡張範囲の中央北寄り、ＩＪ—Ｏ09グリッドに位置する。Ⅳ１層を若干掘り下げた段階で検出された。しかし、調査時の不手際からⅣ２層上面での記録しか残されていない。

径100 cmほどの不整円形の範囲に焼土の広がりが確認された。平面・断面ともに掘り方をもたず、被熱により地山が直接焼土化した遺構と考えられる。とりわけ北側半分に著しい焼土化が認められた。焼土化した厚さは15 cmほどであり、その上部ほど赤燈色に変化していた。

遺物　本址に伴出する遺物はないが、周辺には縄文時代後期前葉、堀之内Ｉ式土器の破片が多数遺存していた。

時期　検出層位および周辺出土遺物から、本址は縄文時代後期前葉、堀之内Ｉ式期に火を焚いた跡と考えられる。

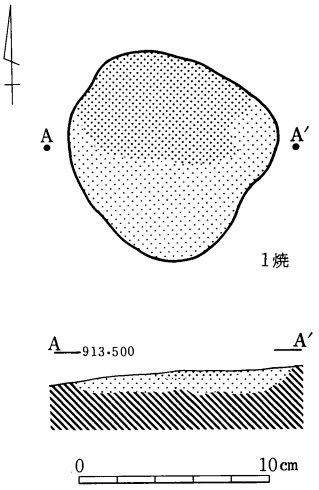


図96　焼土址

イ　配石状遺構

IJ—M12・13グリッドを中心に位置し、１号焼土址の南西に５ｍ余り離れて存在した。検出層位はⅣ2層上面である。調査時点では配石址との認定がまったくなされず、実測図など詳細な記録は残されていない。しかし、整理の段階で写真や土層堆積状況を含む立地環境を詳細に検討した結果、人為的な遺構である可能性が高まったため、配石状遺構としてその存在を報告することにした。

遠景写真および調査担当者からの聞き取り以外資料を持ち合わせていないが、斜面に形成された狭小なテラス状部に扁平な大型礫を10個程度敷き並べてあった。平面的な形状や規模は不明のままとなったものの、おおよそ３～４ｍの範囲にやや傾斜をもって遺存していた。配石状部分の周囲が落ち込み状を呈していたとの所見もあり、その性格については即断できない。いずれにしても、本址が人為的な遺構であった可能性はきわめて高く、周辺から出土した遺物量の多さや１号焼土址の存在を考慮すると、これらの所在したテラス状部分は生活痕を強く示す箇所として注意される。

(2)　遺構外出土遺物

ア　土器

総重量1,045片・34,870ｇの縄文土器が出土した。すべて破片の状態で出土し、復原または図化できた個体はきわめて少ない。時期的には中期末葉（吹付遺跡第Ⅲ期）から後期前葉までの土器を含む。そのほとんどは後期前葉の土器によって占められ、数量的な内分けは、中期末葉６片・200ｇ、後期初頭67片・2,810ｇ、後期前葉972片・31,860ｇである。以下、時期別に図示・概説を行うが、第一地点の記述と同様、分類による記号化を避け個別的な説明にとどめておく。

中期末葉の土器（図99—21～25、PL30・37）

21は平縁の口縁部破片。口縁下に無文帯を残し、以下隆帯を狭んで縄文が施文される。22は口縁下に大小の円形文をめぐらす深鉢形土器。胴部文様ばはっきりとしないものの、縄文を地文として沈線による渦巻状のモチーフが描かれていたとみられる。23は「く」の字状に内傾する波状の口縁部破片である。内傾

する部分に沈線と円形文によって区画された縄文帯がめぐる。

24・25は指頭状の圧痕を伴う紐帯文が施される。胎土に粗砂などを多く含み、調整が粗いため器面はザラザラする。胎土や調整の特徴から、県北部から新潟県下にかけて分布する中期末葉の土器と判断した。しかし、縄文施文が認められないことなどの相違点もあり、後期初頭もしくは同後葉の粗製土器である可能性を残す。

後期初頭の土器（図97―1、99―26～43、PL37）

26～32は平行する沈線文間に充塡された縄文帯により、曲線的な文様が描かれるもの。モチーフはおおむね縦位方向に展開し、一部「J」字状、「スペード」状となる。1・33～41は平行する沈線区画内に列点状の刺突文を充塡する。

1は推定口径31.5cmをはかる深鉢形土器。28などに比べて胴部の屈曲が弱く、直立する口縁から外反ぎみに胴部へ至る。文様構成にも退嬰化・粗雑化が顕著に認められ、明確なモチーフを形成していない。33～41は1と同様な個体。おおむね明褐色ないしくすんだ褐色を呈し、胎土に砂粒などを含む。ていねいな器面調整が加えられて平滑な仕上がりをみせ、全体に硬質なつくりの土器である。

42・43は歯数3本の櫛歯状もしくは束の工具による条線文が引かれるもの。縦位方向に間隔を置いて施文される。図示した2点のみの出土であり、両者は同一個体の可能性が高い。

後期前葉の土器（図97・98―2～20、99～101―44～104、PL30・37・38）

2・44～57は主として沈線文のみ施される一群。これらのうち2・44～47は文様構成上33～41など前段階の土器と親縁性をもち、系統上それらに連なる土器と考えられる。弱々しい沈線によって崩れた区画文状の文様が施されており、とりわけ42・45はそうした傾向が著しい。48～57は器面が研磨されるなどていねいな調整が行われ、44～47とは趣きを異にする。平行沈線文による弧状や渦巻状のモチーフを組み合わせて施文し、49や52・53などの頸部や胴部には「8」の字状・「ボタン」状の貼り付け文が付加される。

58～61は細い隆線文が施される一群。58は内湾する口縁上部に隆線による区画文が施され、一部で胴部文様と連結する。60・61は平行する2条の隆線文により渦巻状などのモチーフを構成する。口縁上部が大きく開く器形の61は、渦巻状のモチーフを横位に連ね、渦巻の端部には「ボタン」状の貼り付け文をつける。薄手・堅微なつくりで、ていねいな調整により器面は平滑。

3・8・62～71は沈線文とともに縄文施文が加わる一群。球胴状の丸い体部に「ラッパ状に開く口縁部がつく小形の甕形土器。4単位の山形状把手を有し、把手基部からは「8」字状にに変化する隆線文が頸部まで垂下する。64は3と同類の口縁部破片とみられ、口縁下にも文様が施文される。また、把手上部および裏面には「8」の字状の貼り付け文や「C」字状の沈線文などがつく。8は脚を有する小形の土器。鉢形を呈する体部に渦巻状・「スペード」状のモチーフが描かれるとともに、「C」字状文を伴う隆線文がつく。4～6・72～77は種々の口縁部・頸部破片。4と72～74は深鉢形土器、ほかは甕形土器であろう。4は「く」の字状に内傾する口縁部に4単位の大形把手がつき、それぞれを沈線でつなぐ。把手下の1か所には「8」の字状をなす貼り付け文と同化するように「注口」が作り出されている。口縁下の最大径は27.5cm。

7・9・78は無文土器。内面口縁下に沈線がめぐる9は後出的である。10～14・79～96は口縁下に紐帯文や隆帯文をめぐらす一群。直立する口縁から極端な屈曲をもたずに底部へ移行する単純な器形の深鉢形土器である。一般に粗製土器と総称される一群であるが、ナデ調整など総じてていねいな器面調整が加えられている。10～12・79～93は指頭状の圧痕やキザミのつけられた紐帯文が施されるもの。そのうち12と79は紐帯文の一部が途切れて口縁上部に収束する。口縁下に隆帯文がめぐる13・14・94～96は10～12などに

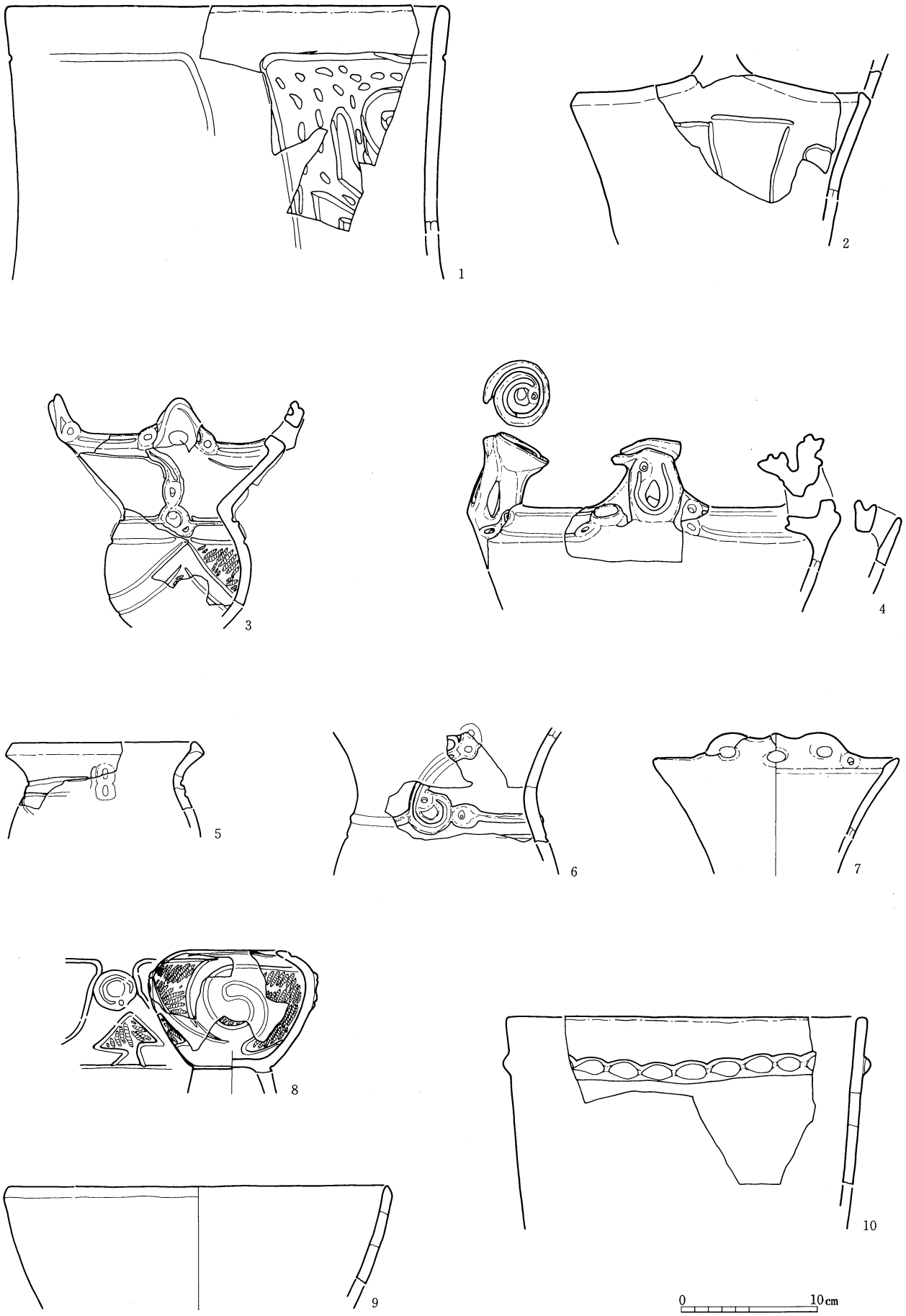


図97　遺構外出土土器（1）

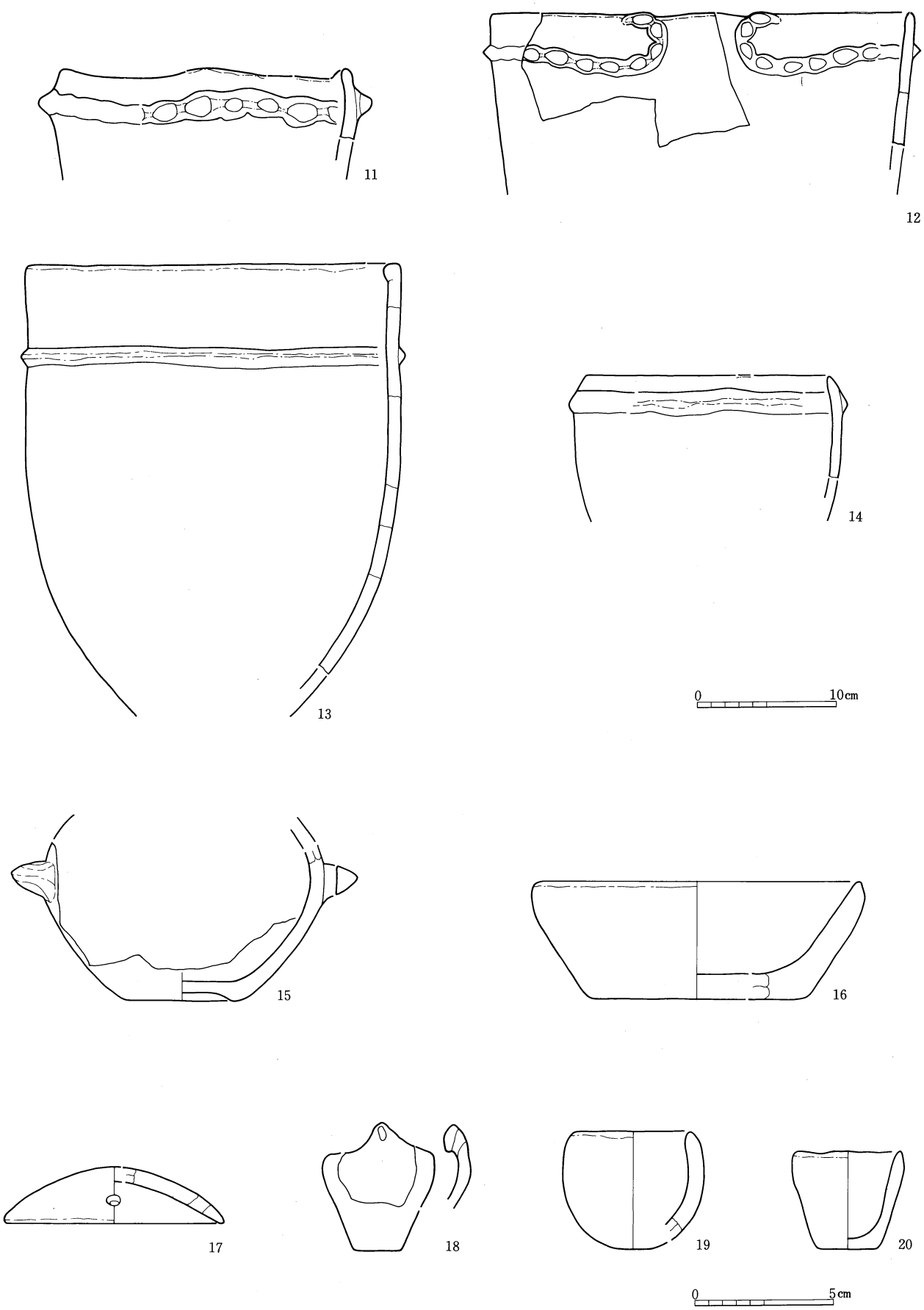


図98　遺構外出土土器（２）

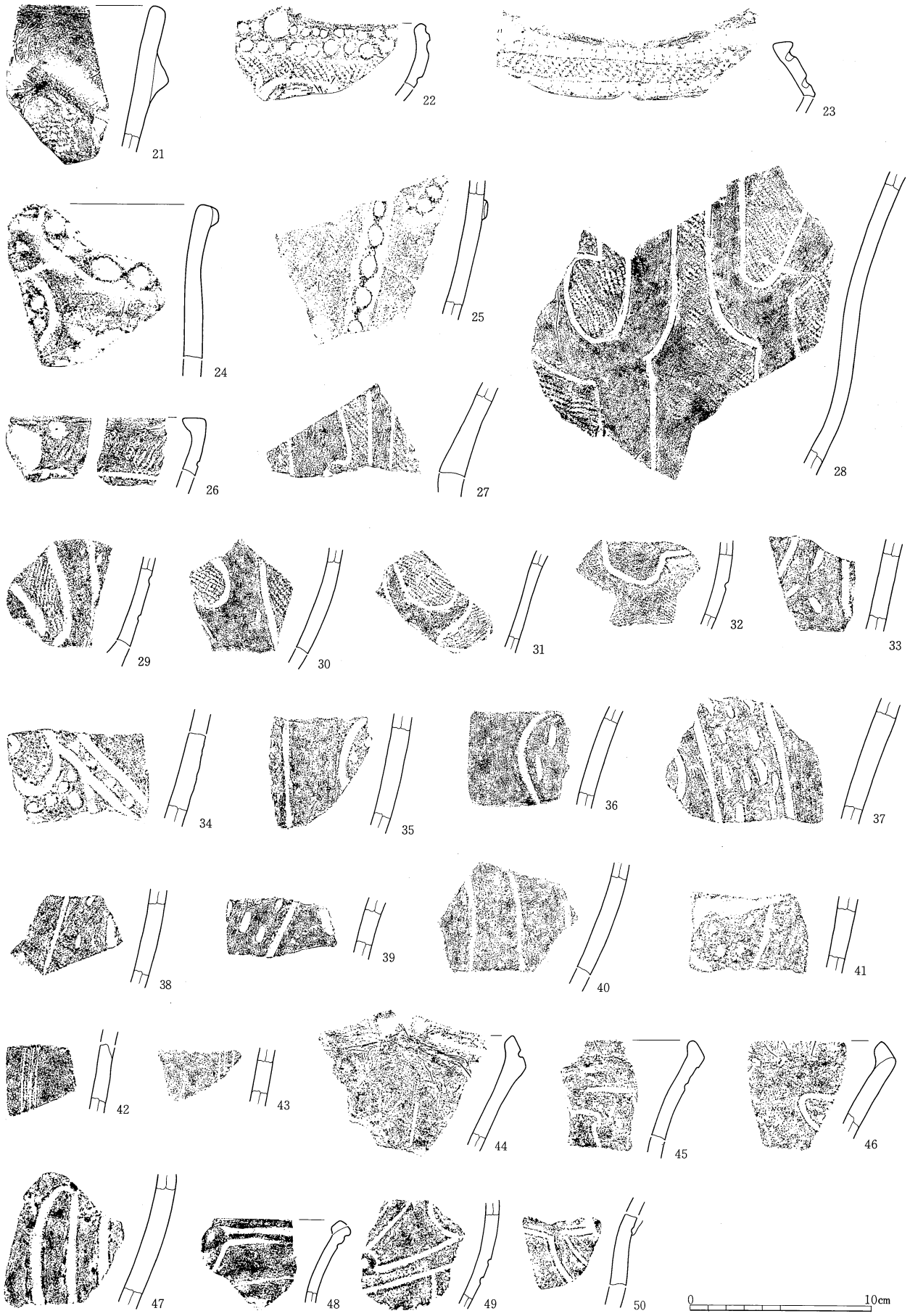


図99　遺構外出土土器（3）

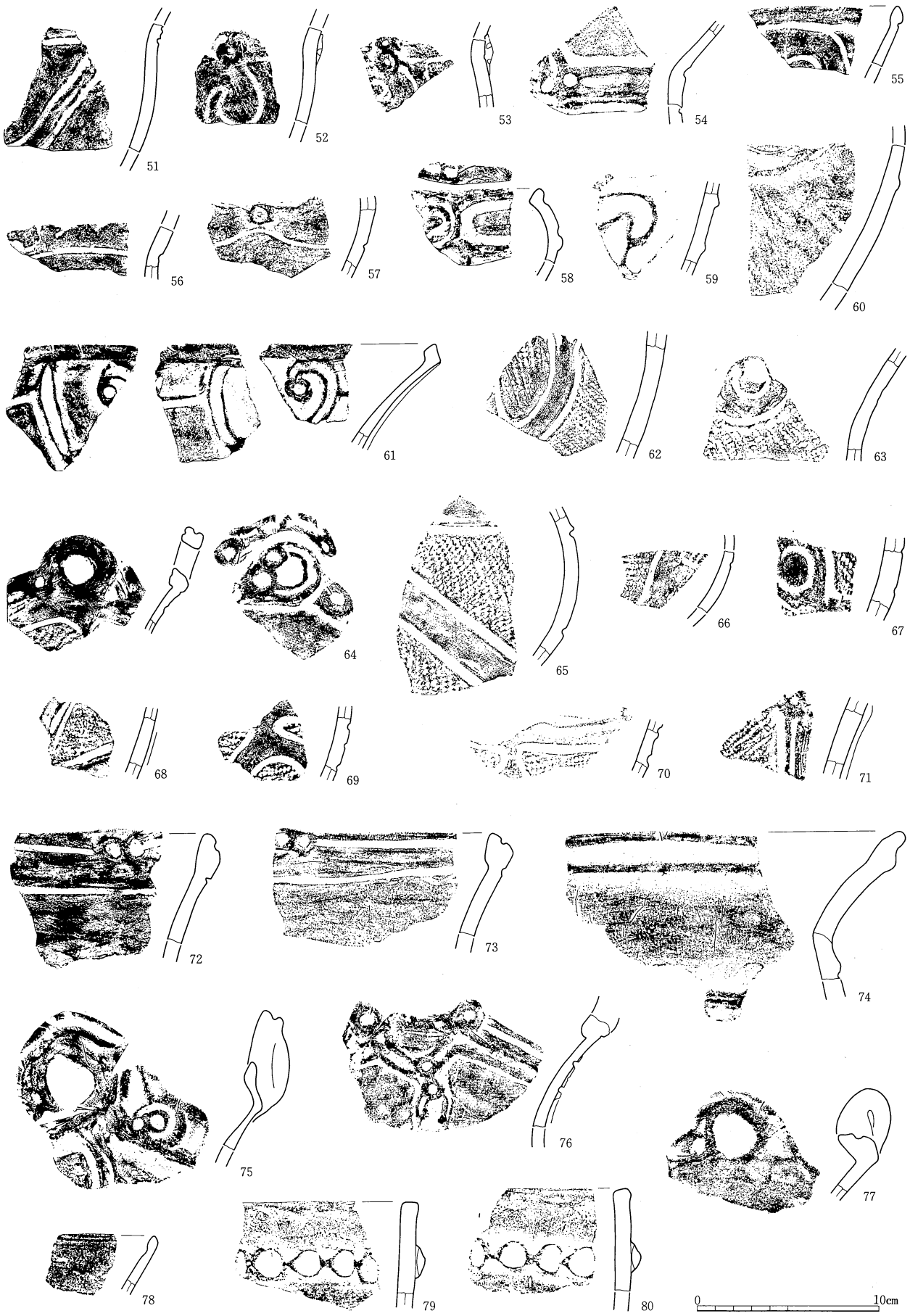


図100　遺構外出土土器（４）

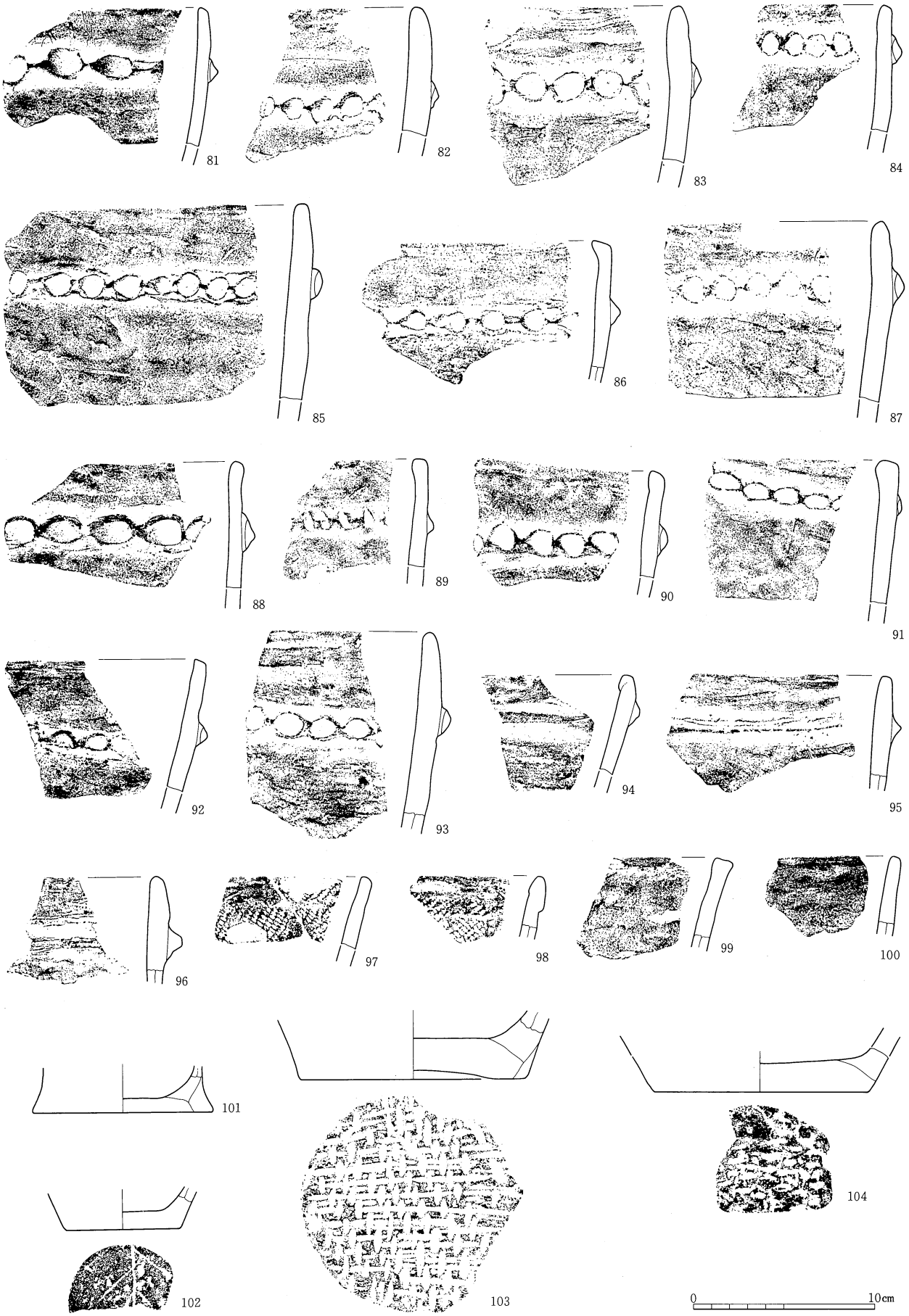


図101　遺構外出土土器（5）

比べ、整形や調整が粗雑である。隆帯文の施文位置が低い14は、胎土に砂粒を多く含む点や全体のつくりなどから後期初頭に帰属する可能性もあろう。

97・98は縄文施文、99・100は無文の口縁部破片。101～104は底部破片。102は木葉痕を、103・104は網代痕をそれぞれ底面にとどめる。

15～20には小形土器・ミニチュア土器を一括した。15は丸みのある体部に橋状の小把手がつく。16は皿状を呈し、口径推定11.5 cm，器高4.2 cm をはかる。底面には網代痕が認められる。17は蓋形をなし径８cm ほどをはかる。全体の２分の１程度しか残っておらず、機能・用途の判断は難しい。一か所に補修孔と考えられる直径５ mm の小孔が貫通する。器厚５～６ mm と薄手のつくりであり、焼成は不良。18～20は器高3.5～4.5 cm のミニチュア土器。18の突起下に刺突文が施されるほかは文様は認められない。すべて手捏ねによって作られている。

イ　土製品（図102）

土製品としては土製円板１点が出土したのみである。１は径4.2×4.2 cm の不整円形を呈し、厚さ0.9 cm・重量22.1 g をはかる。縄文時代中期後葉の土器片を用い、周縁を打ち欠いて製作している。ＩＪ―N10グリッドのⅣ1層中から出土した。

遺構外出土土器の主体をなす時期（後期前葉）と使用された土器片の時期とが異なり、製作時期を断定することは困難である。ここでは、中期後葉の土製円板と考えられる第１地点出土のものと大きさの点でほぼ一致することのみを指摘しておきたい。

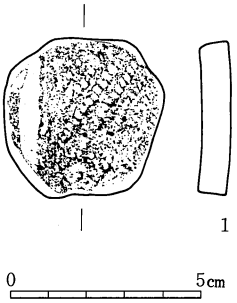


図102　土製品

ウ　石器（図103―341～352、PL48）

第二地点で検出された石器・石片類は、表５に示した。このうち分類可能な石器は総数19点と少量である。出土層位は、縄文時代後期前葉の土器片の包含層にあたり、出土した石器も該期に属するものとして扱ってよかろう。

総数19点のうち、欠損した打製石斧６点を除いてすべて図示した。

341はチャート製の石錐で、片面調整加工により錐部を作出した不定形なものである。使用痕は認められない。342はチャート製のスクレイパーである。片面からの急角度剥離により刃部を作出する。343はチャート製のスクレイパーである。剥片の突端部に樋状の剥離痕がみられ、縁辺部に刃こぼれがみられる。上辺２辺には片面からの剥離調整が施される。彫器的な使用も考えられる。344はチャート製の小剥離痕を有する剥片で、剥片の下端部に連続する微細な剥離痕が認められる。

345は大形剥片石器Ｖ類に相当し、基部に刃潰し状の剥離調整が施される。刃部はほぼ直上で刃こぼれが認められる。346は大形剥片石器Ⅵ類に相当し、不定形な砕片の突部に急角度の剥離調整が施されている。347は扁平な角礫の中央に敲打痕が認められる敲石で、台石にもなる。石質は安山岩製である。348は安山岩製の敲石で、下端に敲打痕がみとめられる。350・351は砥石で安山岩製である。351は器面に線状痕が著しい。349は安山岩製の多孔石で、３つ逆円錐形状の凹みを持つ。そのほか、352は安山岩の縦長石片を素材とし、側縁に粗い剥離調整が認められる。

未掲載の打製石斧については、出土した６点のうち胴部残存１・基～胴部残存が５点と、すべて刃部を持たないものであった。

これらの石器の分布状況は、トレンチ出土の打製石斧を除いて、土器の分布と同様なあり方を示す。前

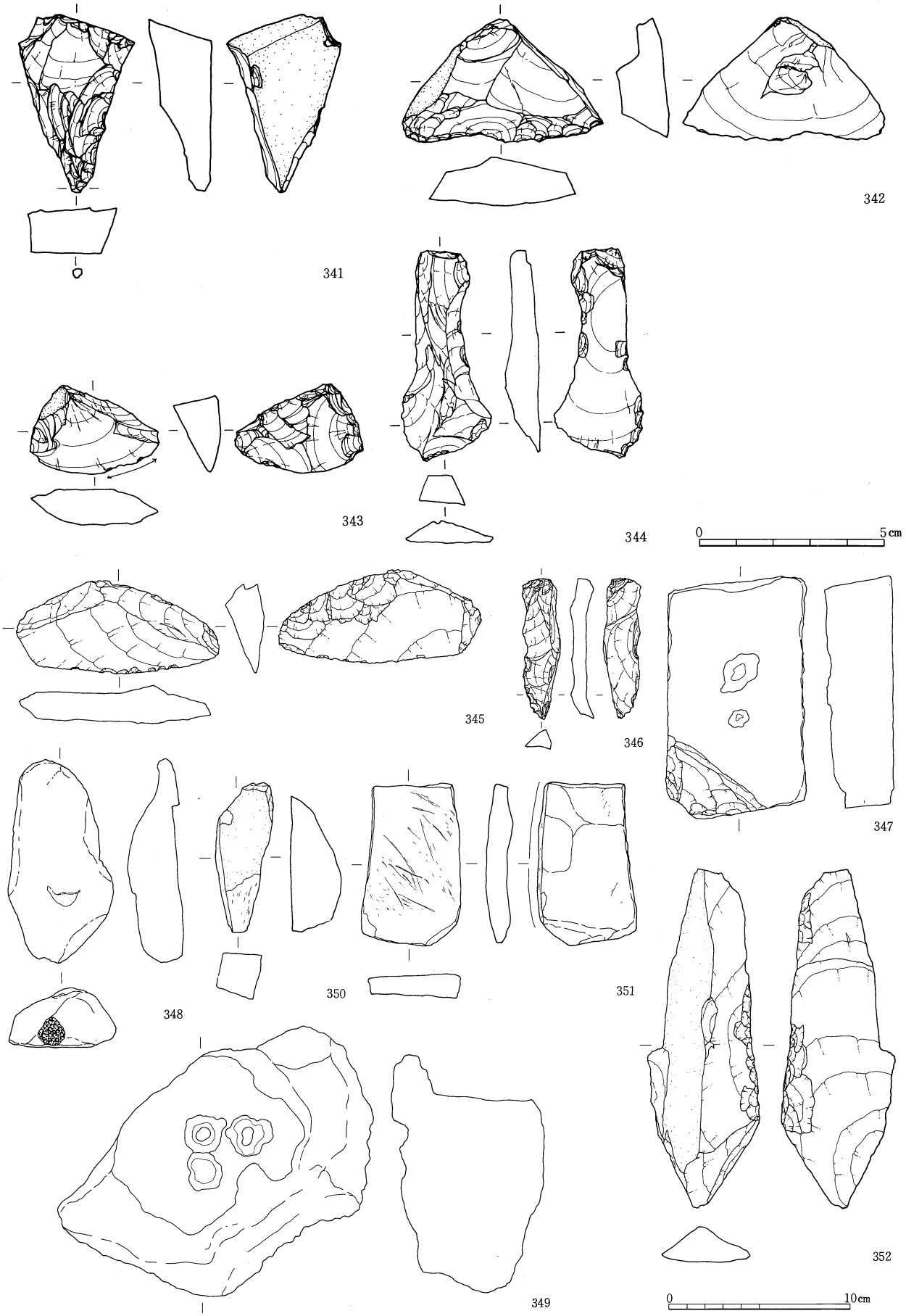


図103　遺構外出土石器

述した配石状遺構の周辺では、多孔石・砥石が検出されている。多孔石は、配石遺構など祭儀に伴う石器という指摘がある(菊地1990)。本遺跡第一地点についても、多孔石の出土量の多い地点に配石状遺構が認められており、配石土坑に伴う多孔石は多いようだ。このような点を考慮すれば、調査段階で認知できなかったのは残念ではあるものの、この配石状遺構としたものを遺構として捉えうる可能性が高いといえる。

出土した石器量は少ないとはいえ、一定の分布範囲をもちながら、出土したことにその意味があるはずである石器組成からみれば、6点の打製石斧、1点の多孔石を除いて、ほとんどが加工具として捉えられるものである。このうち、「切る」・「削る」という機能をもち得るものが、大形剝片石器も含め6点と全体の⅓を占める。このようにしてみれば、石器群は、前述した配石状遺構のことも含め、およそ3種に区分されよう。石錐・スクレイパーなどの小形石器加工具を中心とした一群と、生産活動に伴う打製石斧と、多孔石という3種である。このうち、多孔石は配石状遺構に関係する可能性を持ち、小形石器加工具は作業場の痕跡としての焼土址を位置づけうる可能性を持つ。さらに欠損した打製石斧が示すように、植物質食糧生産の場としての活動の痕跡をも示している。

第二地点における場の利用の具体像は、出土した石器からは以上のようなことが指摘されよう。この場の変遷の同時性、差異性は明確に指摘し得ないものの、少なくとも3つの縄文時代の人々の生活の場面が推定されるのではなかろうか。

表5　出土石器・石片類一覧

器種／数量	石鏃	石錐	石匙	スクレ	ピエス	小剥離	打石斧	大剥片	磨石斧	磨石類	石皿等	多孔石	石製品	その他	黒曜石 点／g	チャート類 (g)	安山岩C (g)
遺構外		1		2		2	6	3		1		1	3				
総重量 (g)		6		49		15	596	337		800		2180	387		2／3	2	3516

エ　小結

第二地点の調査では、焼土址と配石状遺構とがそれぞれ1基づつ検出されたのみであるが、狭小な区域にもかかわらず、縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式期の一段階を画す土器を多数出土するという予想外の結果を得た。やせ尾根の南東斜面に形成されたわずかなテラス状部分に焼土址と配石状遺構が存在し、遺物はそのテラス状部から斜面下方にかけて集中していた。焼土址と配石状遺構については充分な調査記録が残されておらず、それぞれの性格を明らかにすることができないが、石器類の分析を通して植物食生産活動などの生活場面が推定できたことから、これらの遺構がそうした生活場面を保障する機能を担っていたと考えることができよう。

また、土器の時間的位置づけに照らし合わせてみると、本地点での生活もしくは生産活動がきわめて短期のうちに生起し消滅していったことがうかがわれる。

結論的に述べるならば、本地点は縄文時代後期前葉、堀之内Ⅰ式期を中心とした短期間の生産活動の場であり、一過的な生活地であったといえる。このような短期的・一過的な生活のあり方は、一定の時間と空間を占有した中期後葉段階の集落構成と対比されるとともに、後期初頭段階も含めた該期における時代性や地域性を反映した事象として注目される。

5　まとめ

上信越自動車道建設に伴う事前の記録保存を目的とした今回の発掘では、吹付遺跡の全範囲(第一地点)を調査するとともに、従来遺跡として捉えられていなかった西側尾根(第二地点)にも遺構・遺物の分布を確認

し、調査の手を加えることができた。検出された遺構と遺物の詳細は、すでに記したとおりであり繰り返さないが、本遺跡の時期および性格は、縄文時代早期後葉と考えられる「陥し穴」群と同中期後葉～後期前葉の集落址・生活址とに規定できる。前者については木戸平A遺跡の報告（第1節）に際して整理を試みたように、早期後葉段階における両遺跡の一体性が明らかになり、後者については種々の遺構群が住居址を中心として有機的なまとまりを形成していることが確認された。以下、本遺跡の時間的な変遷を基軸として、検出された遺構と遺物をめぐる集落復原的な作業を行い、まとめとする。なお、早期後葉の「陥し穴」については木戸平A遺跡のまとめにゆずり、ここではおもに縄文時代中期後葉から同後期前葉の遺構と遺物に焦点を当てる。

(1) 縄文時代中期後葉の土器群とその変遷

中期後葉の土器群が本遺跡出土土器の主体を占めることは既に述べた。そして、住居址をはじめ集落的規模で検出された遺構の多くがそれら中期後葉の土器を伴う時期のものであった。吹付遺跡に残された遺構の変化・変遷や集落構造を明らかにするための作業として、まず同土器群の段階細分を行う。

本遺跡より出土した中期後葉の土器は、縄文を地文とする加曽利E式（系）および同系土器（以下、加曽利E式（系）土器とする）、鱗状短沈線文を地文とする佐久地方に主体的分布をみせる土器（以下、佐久系土器と仮称する）、「ハ」の字状文などを地文とする曽利式および同系土器（以下、曽利式（系）土器とする）の3者に大別できる。これら土器群の中で常に主要な位置を占めるのは加曽利E式（系）土器であり、これを時間軸の縦糸として用い段階設定の基準とする。加曽利E式土器については従来よりすぐれた型式観・変遷観が示めされており、ここでもそれら学史的な成果をふまえつつ、遺跡のあり方に即して分類・区分した（図104）。

中期後葉第Ⅰ期の土器

1号・3号・5号の各住居址に帰属する土器によって設定される。出土数量は少ない。加曽利E式（系）土器、佐久系土器、曽利系土器の3者が認められる。

加曽利E式（系）土器は明確な口縁部文様帯を有する。佐久系土器は沈線による4単位の縦位懸垂文と蛇行懸垂文が施される。胎土に雲母などを多く含み、調整そのほか、加曽利E式（系）土器とは一線を画す。口縁部文様帯については明らかにしえる資料を欠く。加曽利E式（系）土器との併行関係は、5号住居址において生活面を共有する出入口部埋甕（32）と炉内設置土器（33）とから導かれる。この佐久系土器は松本平から上伊那地方にかけて分布する唐草文系土器の影響を受けて成立した土器と考えられ、本期に先行する段階のものを含む良好な資料が北佐久郡望月町内の諸遺跡から出土している。成立段階に近いほど唐草文系土器の要素が強く、その影響は文様要素のみならず雲母を多く含む胎土や器面調整などにも色濃く反映している。本遺跡の資料からそうした成立期の状況を明らかにすることはできないが、唐草文系土器もしくはその製作集団からの影響のもとに成立した後は、加曽利E式土器の要素を強めながら佐久地方において独自の変化・変遷をたどったことが考えられる。曽利系土器の存在はきわめて稀薄であり、唯一1号住居址の出入口部埋甕に用いられていた土器（1）が挙げられるのみである。

中期後葉第Ⅱ期の土器

5号住居址の覆土中から出土した土器や2号・6号・11号の各住居址出土土器によって設定され、特徴の類似性を基に遺構外出土土器の一部もこれに加えた。文様・モチーフの相違や出土状況から、a～cの3小期に区分される。ただし、この小期は土器変化の方向性を主眼として分類したものであり、これのみで遺構の同時性や時間差を保証するものとはなりえていない。とりわけ、b・c期にはきわめて強い親縁

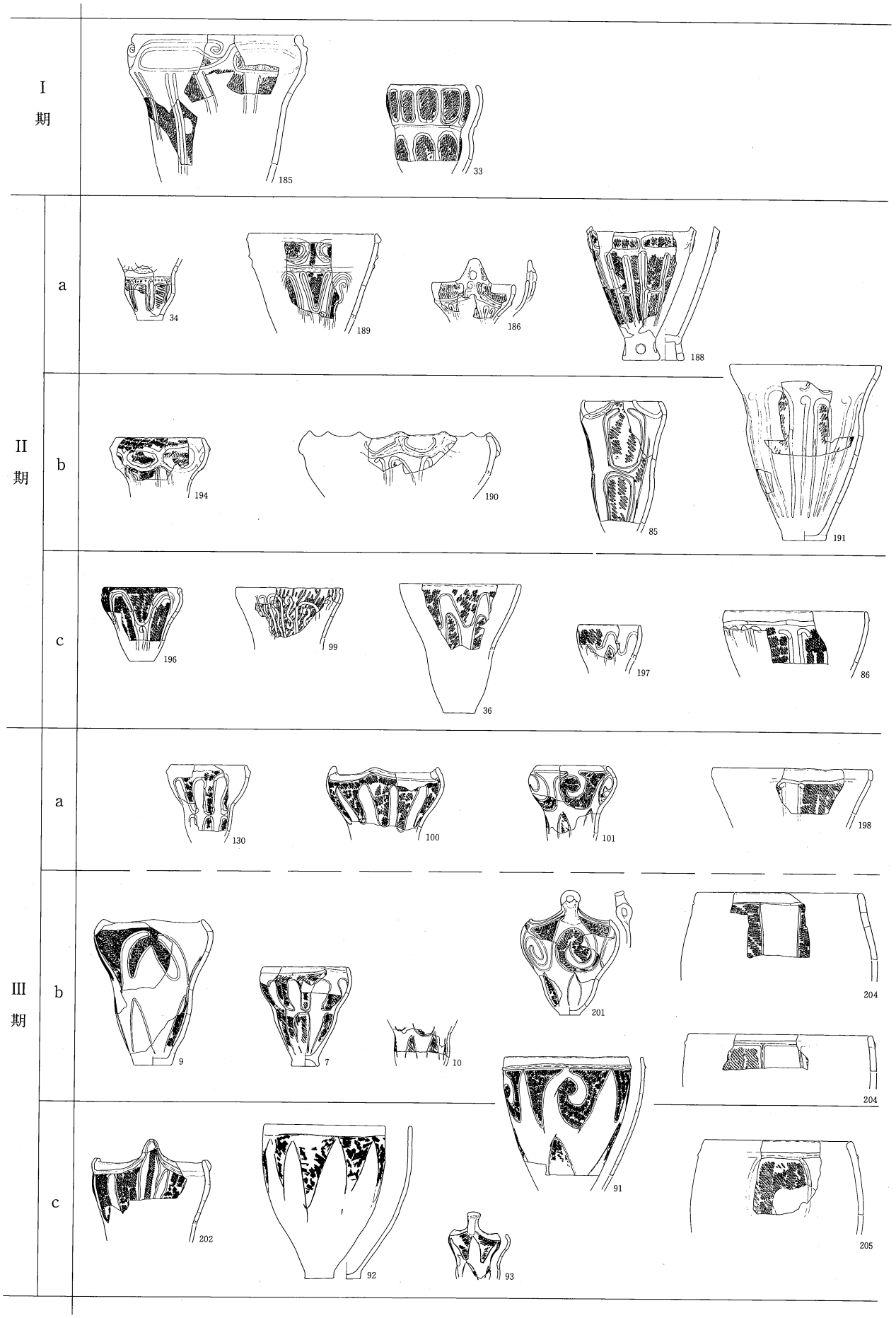
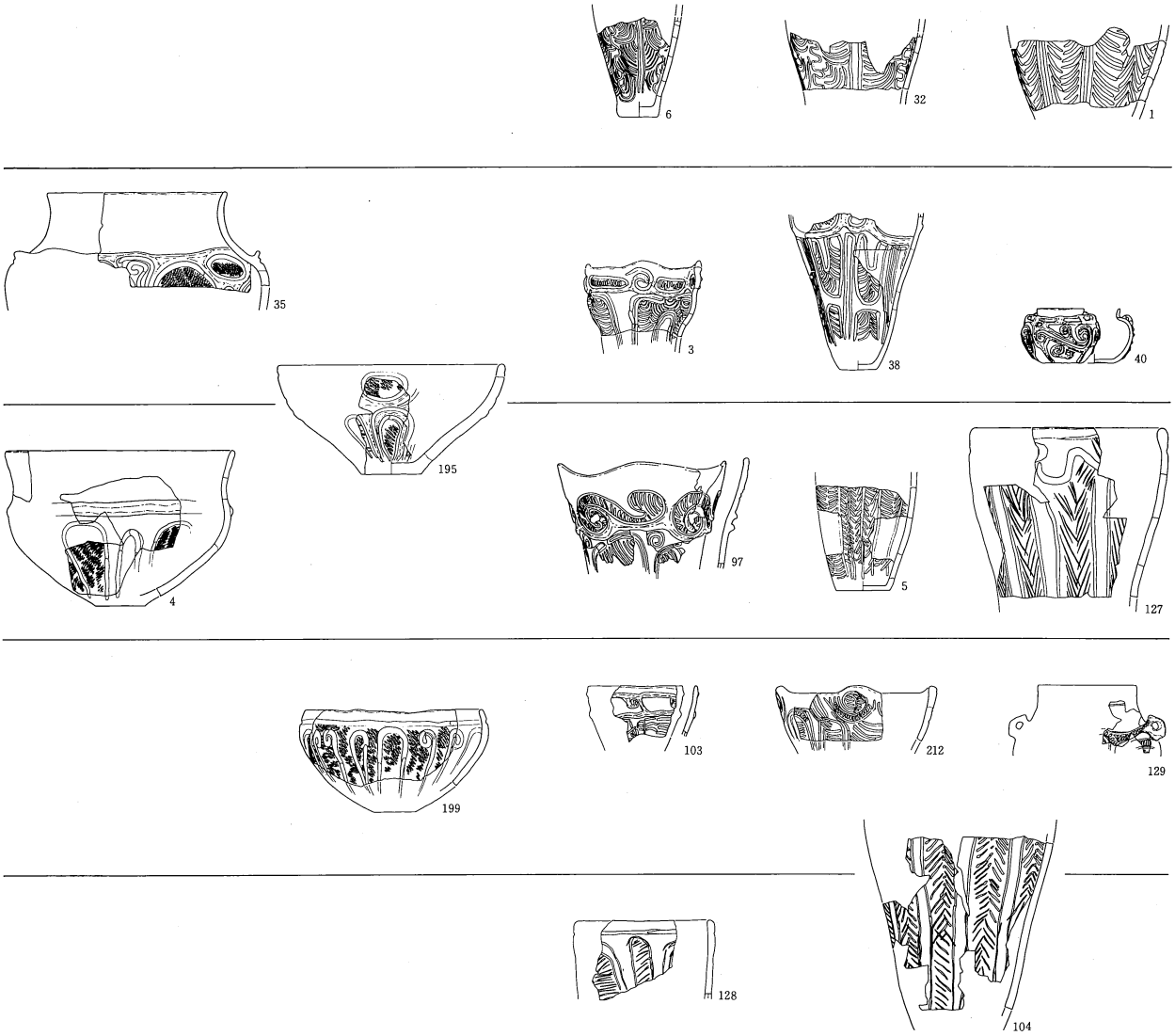


図104　縄文時代中期後葉の土器変遷


6
32
1
35
3
38
40
195
4
97
5
127
199
103
212
129
128
104
207
120
209
87
15
96
14
214

性が認められる。

ａ期　加曽利Ｅ式（系）土器は口縁部文様帯が崩れ、明確な渦巻状・楕円状の区画文が退化する。胴部文様帯も縦位懸垂文が横位に連結し、「Ｈ」状や「Ｙ」字状のモチーフへと変化する。また、「蕨手」状の懸垂文も胴部文様の重要な要素として取り入れられる。佐久系土器は大きく変化し、鱗状短沈線による地文を前代から継承しつつも、胴部文様は加曽利Ｅ式（系）土器とも共通する独特なモチーフとなる。また、胎土や調整に残存していた唐草文系土器の要素も消失する。この段階には加曽利Ｅ式（系）土器が多数を占めるようになり、その影響は胴部文様における同土器との共通性にも現れてくる。こうした点からすれば、佐久系土器の成立基盤となった唐草文系土器の要素を消失し、加曽利Ｅ式（系）土器との親密性を強める本段階が佐久系土器衰退への画期といえよう。

ｂ期　本段階に入ると加曽利Ｅ式（系）土器は、口縁文様帯の喪失化傾向が一層顕著となる。６号住居址の埋甕に用いられていた85に認められるように、口縁部文様帯が形骸化して上部へせり上がる。また、胴部文様は逆「Ｕ」字状モチーフへ収束する方向が現れる。

佐久系土器にも口縁部文様帯の退化傾向が現われ、それとともに胴部モチーフの規則性が崩れ始める。遺構外出土の354･355もこの段階の土器であろう。曽利式（系）土器としては５や127が列挙される。いずれも綾杉状の短沈線文を地文としつつも文様・モチーフは加曽利Ｅ式土器の影響を強く受けており、正しくは加曽利Ｅ式土器圏に取り込まれた曽利系土器の移入と見るべきであろう。各土器群の量的な問題については段階区分可能な個体が少なく、明示しえない。

ｃ期　加曽利Ｅ式（系）土器の多くは口縁部文様帯を完全に喪失し、波状文と逆「Ｕ」字状文との組み合わせへと変化する。また、６号住居址出土の86に代表される単純な器形の深鉢形土器を伴う。例外的な個体も認められるが、文様は幅の広い凹線様の沈線によって描かれ、口唇部は総じて角頭状を呈す。胎土に粗砂を多く含み、ナデ調整される。口縁部文様帯の名残りをとどめる328～340の一部も本段階に帰属しよう。

佐久系土器もまた口縁部における文様帯としての意識が薄れ、それに合わせて胴部モチーフの簡略化も進む。103や212に特徴的な口縁部文様帯は矮小化し、加曽利Ｅ式土器に現れた逆「Ｕ」字状文が主要モチーフとして定着する。こうした加曽利Ｅ式（系）土器の影響は質的な面のみならず量的な面にもおよび、同土器の占有率は大幅に高まる。

曽利系土器としては、11号住居址出土の104や遺構外出土の369～380の一部が含まれよう。

中期後葉第Ⅲ期の土器

11号住居址の覆土出土土器や４号および９号柄鏡形敷石住居址出土土器などにより設定される。口縁部文様帯の消失によって上部へせり上がった体部文様が上下２段に分れ、おもに「Ｗ」字状や「Ｖ」字状のモチーフが施される。ａ～ｃの３小期に区分される。ただし、その区分は明確に捉えられるものではなく、図示したように漸移的な変化をたどる。

ａ期　加曽利Ｅ式土器は体部文様が２段に分離するとともに、口縁下を無文帯として表現するようになる。本段階と次段階との間には文様構成上大きな差異は認められない。しかし、前段に特徴的であった幅広の浅い沈線文が用いられる個体（130）や表現の稚拙さを残す個体（101）を含むほか、胎土・調整など土器自体のつくりにもⅡｃ期との共通性が認められる。

佐久系土器については明確な共伴関係を指摘できないが、83号土坑出土の128や遺構外出土の357～367などの伴出が考えられる。ただし、佐久系土器としての独自性は失われ、形骸化する。

b期　本段階からは加曽利E式土器と同土器の影響を受けた曽利系土器の2者によって構成され、実質的には加曽利E式（系）土器のみとなる。また、198などに系譜をもつ幅広の縄文帯と無文帯とが交互に器面を縦位分割する大形の土器や207のような両耳壺も確立する。このほか、隆起線により曲線的な文様が構成される146や310～319などの多くもこの段階に伴うと考えられる。曽利系土器は遺物集中箇所Ⅰから出土した120にみられるように、モチーフを加曽利E式土器と共有するなど同土器の強い影響を受けている。本段階における両者の量的な関係について明らかにしえる具体的な資料を提示できないが、曽利系土器の占める割合はきわめて少ない。また、本段階には209や210に代表される条線文を地文とする一群もわずかながら認められる。

c期　加曽利E式土器の終末段階に相当する。本遺跡では事例を見ないが、地域によっては後期初頭称名寺式土器との共伴も想定される。前段階において特徴的に用いられた体部文様の上下分割施文が崩れ、下段文様の上段文様への連結や消失、あるいは文様全体の退化などが顕著となる。こうした退化傾向は文様のみならず、土器の整形や調整にもおよぶ。

曽利系土器のあり方については明らかでないが、遺構外出土の214のような区画文・地文ともに規格性のない弱々しい文様の個体が残存する可能性が考えられる。

以上、中期後葉の土器群を3期7段階に区分したが、最後に段階設定の指標とした加曽利E式土器の型式細分との対比を行うならば、第Ⅰ期～第Ⅱ期が加曽利EⅢ式の中～新段階に、第Ⅲ期が加曽利EⅣ式および同直後に相当しよう。また、第二地点の西に尾根を隔てて位置する鶉ヲネ遺跡からは、本遺跡第Ⅲ期に後続する良好な資料が出土している（翠川1988）。

(2) 縄文時代遺物の時期別出土分布

本遺跡からは第一地点を中心として、総重量14,452片・355,710gに達する縄文土器と総数575点の石器類が出土したことは前記したとおりである。これら出土遺物は何の意味もなく遺跡内に存在していたのではなく、遺構や遺物を残した人々の行為の結果として遺存していたと考えられる。そして、遺物の分布や遺存状況はそうした行為の帰結を反映したものと言える。とりわけ、上述したように段階的な変遷をたどったことが知られる第一地点でのあり方は、集落内部での〝場〟の使われ方やその変遷、ひいては集落構造を解明する上できわめて重要な意味を持っていよう。

そこで、遺跡の復原へ向けての第2の作業として、第一地点における出土遺物の時期別分布や出土状況を検討し、〝場〟変遷を抽出してみる。ただし、石器類については次項にゆずり、ここでは時期的な細分が可能な土器のみを対象として分布傾向を把握する。

総量分布と全体の傾向（図105）

遺構外出土土器は調査区内に広く分布が認められるが、量的な多寡からみれば調査区の中央付近に集中する傾向を示す。この調査区中央部には小さな谷頭が入り込み、縄文時代においても若干の凹地状を呈していたと推測される。また、住居址をはじめほかの遺構の多くは凹地部分の外縁からその周辺にかけて分布し、遺物の主要分布域とほぼ一致する。ただし、微視的に見ると中央の凹地全体に集中的な分布が認められるのではなく、凹地部分の東側に片寄って分布する。こうした分布の偏在性は以下に記す時期別分布において一層明瞭に捉えられ、特定の場の存在や場の使われ方の差異を示す傍証のひとつと考えられる。

早期後葉の土器分布（図106上）

量的にはきわめて少ないものの、調査区のほぼ中央付近、先に述べた凹地部分を中心とした分布が確認